
ネギま～鬼の力を持って～

ミズヒジキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま〜鬼の力を持つて〜

【Nコード】

N4884T

【作者名】

ミズヒジキ

【あらすじ】

兄貴によつて転落死し、死んでしまった俺。しかしよくある転生によつて、ネギま世界に行くことに。しかし、そこには2人の転生者がおり、一人は……。

原作知識は3巻までな主人公こと斉藤正治は、手にした力でこの世界をどう生きていくのか。

オリ主がネギま世界でいろいろと巻き込まれる作品。原作と展開が違ったり、キャラの性格が違ったりするので、こんなの違う!!な方は、見ないほうがいいかも。

また、オリ主は強い部類に入るけど、最強ではありません。むしろこの人の師匠がおかしいので、生暖かい目で見てください。あと、不定期更新です。

この作品はタグがよく変わりますので、ご注意ください。

第0話　転生する俺と転生仕事人のなんともないお話（前書き）

ミズヒジキと申します。

転生オリ主ものです。

第0話　転生する俺と転生仕事人のなんともないお話

「そういうわけで、死んだ君には転生してもらいます」

「いきなりすぎます」

どうもこんにちは。齊藤正治さいとうせいやと言います。17歳です。

身長178cm、体重63キロで、日本人なんですけど、アルビノってやつで、髪と肌が白く、目も赤いんです。なんでこうなったか知らないけど。

さて、いきなりな始まり方で申し訳ございません。これじゃ事情わかりませんよね。

簡単に言えば、俺は死んだようです。

いや、どうして死んだかと言われても、どうしてかそれが思い出せないんだ。少なくとも誰かを助けたとかそんなんじゃない。

なんか、落ちていくような感覚は思い出せるんだけど……、わからん。

んで、一番最初のセリフを言ったのは、【転生仕事人番号13番】と呼ばれるお方です。

なんでもここは、世界中の宗教のお偉い方々や、それに使える存在、および多くの生命体が住まう世界だそうです。

名称としては【ぜんかい全界】というらしく、それこそ悪魔と呼ばれるものもいるらしい。世の中は広いな大きいなあ。なんて。

それで、どうして俺がそんなところにいるかというと、基本的に

死んだ人間の魂は全界に来る。そしてランダムで、天国、地獄、この世界で働く——ただし長い期間下働き——、転生の道を選ばれるというそうだ。

俺はどうやら転生の道を選ばれたらしい。……普通、自由に選択させない？でも人間ごときがそんなこと言っているのか不安に思う。というか3番目はなんかいろんな意味で地獄見そうだけど。

まあそういった事情をこの転生仕事人番号13番さん、長いから13番さんが説明してくれて、そして俺が死んだということを教えてくれたのだ。

さらに言えば、今いる場所は、市役所とかそういったところでありそうな、ちょっとした個室で、13番と向かい合っている。

「……………とまあ、少々状況説明をしておこう」

「誰に言っている、君は馬鹿なのか」

口が悪いなこいつ。それとも俺が人間だからだろうか。
とりあえずそれは置いておこう。なんで俺が死んだかを知らない
と。

「ええと、俺、死んだってことですけど、原因はなんですか？」

「ああ、転落死だよ。学校の人通りの少ない階段で、お兄さんが君が怪我して使い物にならないようにしようとしてね」

……………まじか。あのくそ兄貴……………。

言い忘れてたが、俺には双子の兄貴がいる。俺と違ってまさに日

本人って見た目のいたって普通な人だ。

ただ、俺が兄貴よりできることが多かったんで、俺に敵対心むき出したけど。……できるといっても油断しようもんなら、すぐに追い抜かれる程度だけ。

それでも兄貴には気に食わないらしく、何かと俺を馬鹿にした態度で接してきたり、威張り散らしたり。そのせいで両親も愛想尽かしてるけど。

だから、今回のことは多分、俺を階段から突き落として、あわよくば普通の生活ができないようにしようと考えたんだろう。

そうまでして俺のことが憎いのかと思うと、ものすごくムカつく。天罰下んねえかな。

「とりあえず、馬鹿野郎への怒りはおいといて、転生ということなんですけど、一体どこに転生させられるんですか」

「そうだな、人間界にはもう転生することはできなので、架空の世界、つまり漫画やゲームの世界をモチーフにした空想界へ行ってもらう。」

場所は魔法先生ネギマ……だったか。そこへ君が望んだ能力を持つて転生させることとなる。転生者はどういうわけか厄介ごとに絡まれやすいしね」

うん、よくある展開ですね。というか空想界とかそういう呼び方するのか。……もう出てこない呼称だろうけど。

しかし、ネギまねえ。確か3巻までなら読んだけど、その後ぜんぜんだったな。確か最新刊だともものすごいバトル物になってるって誰か言ってたな。

「ちなみに能力に関してはどんな感じなんでしょうか」

「基本は5つまでだが、魔力無限だとかあまりにもとんでもないものは無し、ある物のマイナス効果を消したりも願いの1つにはいる」

ふむ、つまり最強のほにやらら、とかはあまり期待しないほうがいいな……。

となると、俺としてはよくやっていたゲームの武器とか能力がほしいな……、厄介ごとはどうあがいても巻き込まれるだろうからそれなりに戦えるようにしたいし。

とりあえず頼んでみて、あとはあちらさんに合わせるか。

「じゃあ、鬼武者シリーズの武器を全部と、鬼武者化を自由にできるようにと、鬼の籠手を自由に取り外しできて尚且つ魔法や気を吸収できてそれを自分の糧にできること、そこそこ強力な再生能力、魔力とか気は上級クラス。……でどうでしょう」

俺としてはぜひ採用がいいな。うかつに死になんてのは、まっぴらごめんだからな。

ちなみになぜ鬼武者かというと、俺が好きだったからだ。パチンコもやったし。えっ？ 未成年がパチンコするなって？ 興味があったんでつい。

と、いかんいかん、話がずれた。さて、判定は……。

「そうだな……、武器に関しては鬼武者3で使われた主人公2人の武器と、遠距離は弓だけだ。武器に関しては、鬼力の代わりに魔力や気を使えるようにしたいからな。

鬼武者化は別にかまわん。鬼の籠手も設定はそれでかまわんが、魔法は放出系のみ吸収可能。それを自身の魔力および気に変換可能。再生能力はそれなりにしておくが、胴を真つ二つに斬られたり首を跳ね飛ばされたりしたら発動せず、心臓を貫かれてもしばらくは

もつが時間がたてばアウト。最後の願いは、鬼の籠手が2つ分の願いということ却下だ」

うゝん、以外といけたけど、最後の願いは聞き入れられず、か。まあここまで叶えてくれたんだからありがたいとするか。

「ではこれで終了だ。後ろの扉を開ければ、次の人生が待っている」
「そうですか。ちなみに俺の記憶とかどうなるんでしょうか。あと、向こうの人生をはじめるときの年齢とか。それと原作は壊れたりしても大丈夫でしょうか」

「記憶は受け継がれる。年齢は5歳くらいだ。あと、今から行く場所、数多ある原作世界のうちのひとつであるから、別に世界がどうなるかが影響はない」

「それはよかった」

さて、それじゃあ、次の人生を楽しめますか。できればよい人生を……。

齊藤正治は私にお辞儀をしたあと、扉の中に入っていた。これで彼は転生者としての人生を歩むことだろう。

……そういえば、ほかに転生者がいるかもしれない、ということ忘れてたな。私もボケがきたか。まだ1000年近くしか生きていないのに。

それともう1つ伝え忘れていたことがあるが……、これを言ったところでどうしようもないしな。

「さて、『彼のお兄さん』はこの世界にいったのやら」

第0話　転生する俺と転生仕事人のなんともないお話（後書き）

どうだったでしょうか。もし何かあればご感想ください。

といっても、感想に対しての返事を書く時間があるかどうかはわかりませんが。

それでは。

第1話〱戦闘と出会いは突然に 〱（前書き）

原作開始前に飛ばされた主人公のお話その1です。

原作キャラが出てくるけど、さっそく独自設定が入ってます。

好みに合わないかもしてませんが、見てくれるとありがたいです。

あと、方言がおかしなことになってますが、それは目をつぶってください。

第1話　戦闘と出会いは突然に　？

「どうしてこの子たちを襲ってるかは知らん」

手にした青白く透明な刃を持った西洋剣を肩ほどの高さに持つてきて、その刃を目の前にいる、ローブを着た4人の男と4メートルほどの悪魔に向ける一人の男。その背には、白い髪をした、男の子と女の子がいた。

「だが、むやみやたらな正義を抱いて、というなら……、容赦せぬよ」

この世界において、1つの出会いが生まれた瞬間であった。

side 正治

やあどうも皆さんこんにちは、転生者こと、斉藤正治と申す者でございます。……いきなりこんな挨拶してすみません。一人だとうしても心細いんですよ。

13番さんのおっしゃったように扉を開けて進んだら、なんだか

頭がくらつとして、意識を失ったんだ。そして、次に目が覚めたときには、何故か生い茂った森の中だったのさ。ハハハ。

いやなんでさ。開始早々森の中って何ですか。あれか、試してるのか？

しかも視線が妙に低いから姿を確認してみると、明らかに子供の格好なのよ。しかも何故か赤いジャージ姿。

意味がわかりません。年に関しては13番さんが5歳くらいから始まるとか言ってたからまだわかる。何故森から？そして何故ジャージ？

さらに肌とか髪とかを確認してみると、どっちも日本人とは思えない白さでございます。まさかこっちでもアルビノとは思わなかったぜい。

そんなことは今はどうでもいいか。とりあえずここがどういうところか、近くに人はいるのか、いろいろしなければいけない。

……しかし、この状況で案外慌てていないのはなんでだ？転生したことによる影響か？おかげで無駄な体力は消費しなさそうだけど。

とにかく、こんなことを考えてる間に、さっさと行動を起こそう。ついでに能力の検証もやっときたいしな。

そういうわけで、思いついた方向に突き進むことにしたのであった……。

と、言うことを考えていたときからのくらい時間が経ったろうか……？結構歩いたのにいまだに森を彷徨ってる俺。

能力に関しては、言われた通り、鬼武者3の主人公2人の武器は毘沙門剣と鬼無双、集魂の矢以外は全部出せた。……全部じゃないところはご愛嬌ってやつ？違うか。武器の大きさが俺に体格に合わせであつたのは驚いたけど。

鬼の籠手は左手と右手に赤い腕輪があり、装備しようと念じることでこれが鬼の籠手に変わるようだ。ちなみに左が左馬介の、右がジャックのとなる。

鬼武者化も一応試してみたら、身体がかなり軽くなって、まるで自分じゃないような感じがした。まだ慣れてないからなのか、それともこんなものなのかは知らないが、害は無いのは判るので、大丈夫だろう。見た目は全身見れるわけじゃないから判断できないけど、とりあえず肌の色がほんの少し濃くなった。

また、このときは武器が真の鬼武者でもないのに、鬼武者真剣になることが判明。ただし戦術殻・鬼（だったよな？）は使えないが、代わりにほかの戦術殻や戦術輪は使えるのがなかなかだ。

あとは鬼の籠手に付けてもらった魔力吸収と、俺の再生能力だけど、前者は魔法なんてわからんのでどうしようもなく、後者はやろうと思えばできるが、痛いので嫌なので却下だこんちくしょう。この2つは後々調べるしかないな。

……しかし、いつになったら、人に出会えるんだ？というか森から脱出できるんでしょうか？そろそろ寂しくて泣けてくるんだが、こういつときって、よくあるパターンとしては、どっからともなく悲鳴が聞こえてきて、何事かとそこに行くと人が……、って感じなんだが、早々都合よく――。

「きゃああああー!!」

ありました!!!ご都合主義バンザイ!!!

って、なに喜んでんだ!?明らかに女性、おそらく子供と思われる悲鳴だつてのに!?とにかく今は悲鳴の聞こえた方向に全速力で向かわねば……!

声がしたほうに走ってしばらくすると、俺よりも1つ下ぐらいの女の子がロープを着た4人組の集団に追いかけているのが目に入った。女の子は足取りがかなりふらふらだ。

時折追いかけるやつらから光線のようなものが女の子目掛けて飛んでいく。おそらくあれが魔法なんだろう。

しかし、俺としては、そんなことよりも、女の子の姿のほうに気になった。服装としては、江戸時代の日本人が着ていたような動きやすそうな格好なんだが……。

髪の毛が俺と同じで真っ白だった。肌は普通の見た目なんだが、とにかく肩にまで届くストレートの長い白い髪が目立つ。

あの子も俺と同じアルビノなんだろうか。しかしそれにしたって、何故追われてるんだ?魔法使いと思わしき集団は何を思ってるんだと、のんきに考えていると、光線の1発が女の子の背中に当たっ

て、数メートルほど地面を転がって、木にぶつかって止まった。
それをやつらは笑いながら見ていた。その笑いはなんとというか、
優越感にしたって、相手を見下した感じのもので……、『兄貴』を
思い出させるよまったく。

とりあえず、俺のやることは決まった。それでは皆さん。せうの。

「くたばれやクソボケエ!!」

side 白い髪の少女

後ろから『まほう』がたくさん飛んでくる。うちはそれをなんとか
避けて、身体に擦り傷ができるのもかまわず森の中を走る。

「まてや化け物！」

「逃がすなっ！正義の名の下に、あれは討たねばならん！」

何か後ろでゆうつとるけど、聞いとるひまなんかない。とにかく逃げ
なあ、ひどい目にあってまう。でも、ずっと走ってて、つかれて、

前がようみえへん。

どうしてうちが、こんな目に合うん？里じゃみんなからひどいこと言われて、父上も母上も死んでもうて、それで里から出たのに、外でもこんなんで……。

「【魔法の射手！】」

背中に痛みを感じたのとおんなじぐらいに、浮くような感覚がしたと思ったら地面を転がって、そのまま木にぶつかった。

ものすごい痛みが身体全部を襲って、でも、小さくうめくぐらいしかできなくて……。追っかけとった人たちは、笑いながらこっちに近づいてくる。……このまま死ぬんかな？そしたら2人に会えるかも……？

そうしたら、きつと幸せやろうなと思って。こっちに向けてくる杖を見つめて……。

「くたばれやクソボケエ！！」

そんな声とともに、杖は真っ二つに叩き斬られた。

目の前には、うちとおんなじぐらいの、白い髪した男の子が、身長とおんなじ大きさの刀を持って立っていた。

そして、うちはそのまま……。

鬼の籠手を装備し、女の子を今まさに手をかけんとしていた男の60センチほどの木の杖を【空牙刀】を使って叩き斬る。

まさかこんなことが起きると思っていなかった男は、突然のことに啞然としていた。が、それは攻撃してくださいと言ってるもんだろ。

空牙刀を相手の右肩に上から叩きつけるように（もちろん背の部分）振り下ろす。さすがにあっちも慌てて後方に回避しようとするが、いかんせん反応が遅すぎる。そのまま相手の右肩に直撃する。なんか骨が折れるような割れたような音がしたが気にしない。

男はその痛みからか、顔が苦痛の表情となるものの、それでも我慢してるのか、少し呻くぐらいだ。根性あるな。俺なら泣く。

「小僧、何者だ!？」

「タダの一般人だこんちくしょう!！」

リーダーっぽい人に（男1としよう）なんか尋ねられたので、誠意（?）をもって答える。

ものすごい文句を言いたそうな顔をしているが、とりあえずは無視して、女の子の状態を確認する。地面に横になるように倒れており、体中傷だらけだが、わずかに肩を動いてるところから、生きてはいるみたいだ。気絶してるけど。

「小僧、そいつがどういった存在かわかっているのか!？そいつは妖怪の血を受け継いだ化け物だぞ!？」

「そうなの？俺はてつきり幼女趣味なやつらが性欲を満たすために行動してるのかと」

傍から見れば幼女虐待、もしくはそういう性癖をもった集団に見えんけど。しかしほんとに漫画の世界に来たんだな。妖怪とはこれはまた。

……俺はこんな挑発するような男だったけ？まあ気にしないほうがいいな。あちらさんは顔真っ赤だけど。

「いや待て、こいつも髪の毛が白いぞ……。てことはこいつも……」

「……確かにそうだな。なるほど、だからかばうのか。ならば、まとめて消すまで！」

男1がなにやら不適な笑みを浮かべると、こっちに向けて背丈ほどある鉄で出来た杖を構えて、そしてそこから魔法みたいなものがたくさんって、嘘おっ！？

俺は咄嗟に鬼の箒手を体の前に出して、魔法を吸収するイメージをする。すると放たれた魔法がすべて鬼の箒手の戦術殻のある部分にすべて吸い取られた。そしてその分の魔力が俺の中に流れるのを感じる。これは便利だな。

まさかの事態にやつらは驚愕の色を隠せないでいる。そりやそうだ、俺も驚いてるし。でもこれで鬼の箒手の能力は実証されたわけで、後はもう1つの能力を使うのみ！

空牙刀の切っ先を地面につくつかつかないかの感じで構え、斬撃が飛んでいくイメージをする。そして男の杖目掛けて、一気に振り上げる！

振るうと同時に魔力を帯びた斬撃【戦術殻・空】が杖に向かって一直線に飛んでいき、杖に当たったと同時に衝撃を辺りを襲う。といても少しゆれる程度だったけど。

それが収まったと同時に鉄の杖はもち手を残してすべて粉々に吹き飛んでいた。こりやすげえ。おそらく今はまだこんなんだけど、ちゃんと特訓したらもっと威力あがるだろうな。

「キ、キサマキサマ、よくもやってくれたなツツッ!!」

「どうすんの？まだ続ける？」

男1は今にも噴火しそうな顔をして俺をにらんでくるが、俺はそれを受け流して、相手に戦闘を続行するかを問う。

挑発してるようだけど、実際、ここまだよく戦えたなって感じなのである。今はまだ何とかなるし、相手も突然のことばかりでどう対処すべきか迷っているだろうと思う。

しかし、さっきの戦術殻を使ったせいなのか、身体に疲れみたいなのが生じた。よく考えれば俺まだ5歳の体なんだから無茶しすぎるとやばいんじゃないだろうか。あと後ろの女の子のことも考えると、庇いながらは戦闘経験が不良との喧嘩程度の俺にはよけい重荷だ。でも見捨てたくないし。

頼むから、退いてくれないかな。と思考にふけっていると、相手はまたなにやら唱えていた。

また攻撃魔法かと思ったが、地面に何か魔方陣のようなものが浮かび上がり、それが光ったかと思うと、『何か』が飛び出してきた。

4メートルはあるかという身長。鉋物を思わせるような真っ黒な肌で。

腕は6本、足は2本で、その爪はナイフのように鋭利で。

狼に近い頭には角が1つあり、ギラギラと光る牙がむき出しになっている。

それはまさに、『悪魔』と呼ばれる存在だった――。

第1話〜戦闘と出会いは突然に　　？　　（後書き）

戦闘描写は少しでも難しいですね。ほかのかたの作品を見て勉強したんですけど、自分でやると変なことになりますね。

さて、途中で出てきたキャラはすぐにわかるでしょう。そして一番最初のセリフを言った人は次以降なんです。

本当はこの回で出したかったけど、どうにもそこまで書ける自信がなかったので、次にしてしまいました。

ご感想、また誤字脱字がありましたら、もしよろしければお伝えください。お願いします。
では。

第2話〱戦闘と出会いは突然に 〱（前書き）

前の話の続き。

オリジナルキャラさんが出てきます。

そして戦闘描写が微妙。というか悪魔って……。

第2話　戦闘と出会いは突然に　？

「確かにこの辺だと思ったんだがな。勘が鈍ったか」

森の中、長さが膝あたりまである黒いコートと、その下には白い半袖ワイシャツと黒の長ズボンを身につけており、年の程は20代後半ぐらいで、短く刈り上げた銀髪といった出で立ちの男がつぶやいた。

何かを探していたらしく、あごに手を当てたまま、あたりを見回す。しかしそこにあるのは木や草、小さな虫だけである。

ふと、コートのポケットが震えた。ポケットに手をつ込み、無造作に振動の正体である携帯を持ち上げて、通話ボタンを押す。

「ルーカス、結界に侵入したものと、鬼らしきものの気配の正体は、わかりましたか」

「そんなすぐにわかれば苦労せんよ詠春。しいて言うなら、遠くで戦闘の気配がするぐらいだ」

「それは一大事じゃ！？」

同年代ぐらいと思われる男——日本は関西呪術協会の長である詠春が、銀髪の男——ルーカスに問う。

ルーカスがここににいる目的は、関西呪術協会の総本山より少し離れた場所にあるこの山の結界に人と思わしき反応があったので、それを調査するためにここに来ているのである。

この山は、妖怪や悪魔、悪霊といった存在が集まりやすいため、一般人が誤って立ち入らないように人払いの結界を使用していたのだが、つい先ほど、何者かがそれを破って侵入してきたのだ。

さらに、それに合わせるかのように突然、鬼の気配と思わしき、強力でありながら敵意を感じないという、妙なものまで出現したのだ。そのために、詠春の元に身を寄せていたルーカスが調査しにきたのだ。

「とにかく、一般人ではなさそうだから、ちゃっちゃと終わらせてくるぞ」

『お願いします。すみませんね、あなたにこんなことをしてもらって』

「気にするな。どうやら悪魔も召喚されたようだしな。久々に運動とでもしてくるよ」

『いや悪魔って、なんでそういうことをもつと早くに言わな……！』

あまりのことに大声で叫び、今にも説教を始めそうな詠春を無視し、通話を終了する。そして懷から一枚のカードをだし、『アデアット』とつぶやく。

カードは刃渡りが50センチほど、刀身が青白く、それでいて向こう側まで透き通るような透明さをもったまっすぐな両刃の西洋剣へと変化する。

そして、戦闘の気配がするほうへと、急ぐ。何かの予感が胸をよぎりながら――。

キン、キンという、鉄と鉄がぶつかる音が、俺の耳の近くで何度も響く。細かく言えば、空牙刀と悪魔の爪がぶつかり合う音だ。悪魔との距離は大体1メートルほどと思われる。

悪魔は6本の腕で休みなく、俺をその鋭い爪で貫かんと突きを放ってくる。一応かろうじて目で追える速さであるのが幸いではあるが、それでも完全には防ぎきれない。

そもそも空牙刀は、俺と同じぐらいの大きさを持った刀であり、それを使ってやつの攻撃をすべて防ごうとしても、反応できても身体が遅れてしまう。防げなかった分は、肩や頬、胴体を切り刻んでいく。

普通ならそれでやられるんだろうけど、ここで能力の1つである再生が発動し、傷は瞬時に治っていく。ただし痛みは伴う。それでもそのおかげでいまだに俺は戦えているのだ。後はあいつらが悪魔に戦闘を任せて、後ろでニヤニヤと笑っているのと、悪魔自身が俺だけを相手にしているので、女の子のほうはなんとかなっているものもある。

おそらく、今の俺でも粘れることを考えれば、この悪魔は大して強くない。このまま鬼武者化ができればいいが残念ながらそれはできない。

何故なら、武器を出す、技を出す、鬼武者化するには、俺が頭にイメージを描き、集中することで初めて成功する。だがまだその感覚を完全にものにしていない俺は、それらに大体5秒かそこらしか

る。しかも戦闘中ではその作業もままならない。

なので、今の俺は悪魔との距離からしても立ち回りづらい刀で、6つの刃というべき爪から逃れなければならないのだ。

だが、何回も攻撃を防ぎ、そのために刀を振り回し、防げなかったら身体に痛みが襲うということが続くと、疲労がどんどんたまっていき、刀を持つのがだるくなってくる。そうして動きが鈍くなつて攻撃が防げず、また痛みが襲う。

はつきり言つて、限界です。いや本当ならここまでではやれないんだろう。きつと意地とかが働いてんだな。

そんなことを考えている間にも、疲れを知らないかのごとく、悪魔の攻撃は熾烈になっていく。限界がきてるせいでそうみえるだけかもしれないけど。

歯を食いしばって攻撃を防ぐ。攻撃に転じればひょっとしたらと思わないこともないが、それをする暇がない。防ぐしかできないなんて、情けないな。

だが、ついに耐えられなくなったのか、右ストレート3つを防いだ瞬間、空牙刀が俺の手から離れ、吹っ飛ばされていく。

やばいと思つたが、それよりも速く、左の2つの爪で俺の右の肩とわき腹を貫き、残った拳で鳩尾に強烈な一撃を与えられ、身体が浮いたような感覚があったと思つたら、女の子が近くにゐる木に勢いよくぶつかり、少し跳ね、女の子の前に倒れる。

傷は治つたが、あまりの痛みに起き上がることができない。

「小僧、よくぞ戦つたが、もう少し力量を考えてから挑むことだつたな」

なんか男1が偉そうなことを言っている気がする。杖を壊されて、後ろで高みの見物してたくせに。

「我らの正義を邪魔するからこうなるんだ。恨むなら、自分の運命を恨めよ」

何が正義だこんちくしょう。子供をいたぶつといて。悪魔使役してることを考えると、てめえらのほうがよっぽど悪っぽいぞ。だけど、そんなことを言っただって、今の俺はもはや戦う力がない。

せつかく転生させてもらって、能力もらったのに。これじゃあ13番さん、いや、あのシステム考えた人か？どっちかわかんないけど、とにかく申し訳ない。女の子も守れないし。…… かつこ悪。

そんなことを考えていたときだった。

「ずいぶんなことだな。最近の魔法使いの正義とやらは」

目の前に、黒いコートを羽織った男が現れた。

side ルーカス

戦闘の気配をたどって森を進み、いざその場所に来てみると、そ

ここでは少年が悪魔と戦っていた。

赤いジャージを着た、まだ5歳ぐらいだろう、髪の毛と肌が白い少年が、自分の背丈とさほど変わらない不思議な力を感じる刀をつかって、6本腕の悪魔の攻撃をしのいでいた。長時間戦闘があったのか、少年の服はボロボロであるが、少年自体に傷は見当たらない。……何故だ？

少年の後ろには、同じように白い髪の毛の少女がおり、そして悪魔の近くにはローブを羽織った、おそらくは西洋魔術師と思われる4人組がなにやら優越に浸った笑みを浮かべていた。

なぜ西洋魔術師がこの関西にいるのか、なぜあの子供たちは奴らに襲われているのか。様々な疑問が浮かんでくる。

そんな思案をしていると、少年の持っていた刀が吹き飛ばされ、少年自身も悪魔のパンチによって飛ばされ、少女が近くにいた木にぶつけられ倒れる。

だが、そのときワタシが目にしたのは、爪によって貫かれたはずの右肩。傍から見ても深い傷であったはずなのに、それがものの数秒で、塞がっていき、まるで傷など最初からついてなかったかのような状態になったのだ。

あれほどの再生能力は『ハイ・デイルイトウォーカー吸血鬼の真祖』か、もしくはそれに近い存在といったものでなければ持ち得ないものだ。となると彼は真祖なのか。だがそれならなぜこつも押される――。

……いや、もう1つ可能性があったな。

だが、今はそんなことはどうでもいい。たとえ『アレ』がどのような存在だろうと関係ない。この状況から考えても、ワタシが戦うべきはあちらだな。

「我らの正義を邪魔するからこうなるんだ。恨むなら、自分の運命を恨めよ」

「ずいぶんなことだな。最近の魔法使いの正義とやらは」

子供たちをかばうように、悪魔と男たちとの間に割ってはいいる。しかし、これで正義とはまたとんでもないな。『あれ以降』こういうのが多くてひどい。

「どうしてこの子たちを襲ってるかは知らん。だが、むやみやたらな正義を抱いて、というなら……、容赦せんよ」

突然のことで、困惑する奴らをよそに、右手に持ったアーティファクト『ミミングスの剣』を構え、やつらに宣戦布告する。

男たちは、最初こそ意味がわからなかったのだろうが、時間が経つにつれ、何を言われたかを理解し、顔を真っ赤にする。

それもそうか、自分たちの『正義』を否定されたのだからな。

「キサマツ！？どこの誰か知らんが、我らの正義を愚弄し、さらにはそのような化け物を庇う気か！？」

「そういうが、そもそもここは関西呪術協会が管理する場所であり、貴様らがいて良い場所ではないし、化け物と罵り、このような子供をいたぶることが貴様らの正義か？そして……、このワタシを知らないのか？西洋魔術師のくせに」

関西呪術協会に属する人々、長である詠春やその他の人間以外、特に下にいる人間の多くは西洋魔術師を快く思っていない。憎んでいる者、奴らを追い出そうと考える者なんかがいる。

だというのに、こいつらとききたら人様の庭に、許可もくそも無く

堂々と『正義』のため侵入してきたのだ。こいつらは正義のためとかほざくのだろうが、世の中そんなもので済むわけがない。特に今は何とか西と東——関東魔法協会との間でそういつたいざこざを無くそうとしている時なのだ。これが知れたらたまったもんじゃない。

ならば、やることはただひとつ。詠春に知れたら、1日説教でつぶれるだろうが。

「そ、その姿……、それにその剣は、ま、まさかあんた……!!」

「おいどうした？なにをそんなに恐れている？こんな男に」

どうやらやつらの一人はワタシがどういった存在か知っているようだ。結構結構。

「本当はこういうことはしたくなかったんだが……、こちら側である以上は覚悟しとかないとな」

——瞬間、やつらの背後に回りこみ、悪魔の胴を切断する。

2つに分かれた悪魔は、切断部分から血を噴出させて、上半分は宙を舞い、下半分はそのまま地面に倒れる。

本来、召喚された悪魔は受肉されておらず、倒されればただ消えさるだけである。しかし倒されたはずの悪魔の死体はいまだにその場に残っている。

あまりにも一瞬で、そして常識ではありえない光景に、男たちは目を疑った。

それはほんの数秒ほどであった。そして悪魔の上半分が地面に落ちた時、男たちはそれとまったく同じことを経験することとなる。

「あ……アカキ、ツバ………サ——」

そのつぶやきを残して。

第2話〜戦闘と出会いは突然に　　（後書き）

防御一辺倒な主人公でした。そして悪魔は最後まで呻き声やら吠えたりやらできずに退場。なんということだ。

ルーカスはこの話を見ればある程度どういった存在かはわかります。むちゃくちゃな感じはこれからで。

そしてアーティファクトを出してみました。『ミミングスの剣』という、伝説上の武器が彼の主流武器です。性能は後ほどに。

過去編はもうしばらく続きます。

おかしいと思ったところ、戦闘描写でここはだめだろってところがあつたらご報告ください。

読んでいただきありがとうございます。

第3話〜総本山にて 鬼と強者とハーフ、そして京都美人〜（前書き）

題名がいいのが思いつかない今日この頃。

今、これから先の話の構想練ってるんですけど、明らかに原作開始前の話が多くなるんですよ。どうしようかと思ってます。

そんなこんなで、第3話更新です。話の長さとか、書き方が安定しないです。

今回、原作キャラが1人追加されます。
ではどうぞ。

第3話　総本山にて　鬼と強者とハーフ、そして京都美人

「やっと総本山か。途中の邪魔さえなければもっと早くついたのにな」

太陽が沈み、あたりがすっかりと暗くなり、現在は午後10時、ルーカスは2人を連れて関西呪術協会の総本山入り口前に戻ってきた。

本当はもっと早く帰れたが、気絶した男の子を背中に薦を使った手製ロープでくくりつけ背負い、女の子は腕にお姫様抱っこの要領で抱えて運び、その途中、妖怪だったり、悪霊だったり邪魔が入ったので戦い、少々帰りが遅くなったのだ。そのようなことは彼にはなんてことはないのだが。

「しかし、この子たちをどうするかね。布団は用意するにしても、服は汚れてるしな……」

目下の悩みとしては、このことがある。

誰かを呼び出せばいいのだろうが、自分は本来よそ者であり、今回のこととて、長である詠春が命令したからこそ動けたのであり、そんな自分が果たして呼び出ししていいのか迷ってしまう。

それに、この子達ををほんの少し調べたが、どちらからも妖怪の気配がするのだ。受け入れられるかどうか怪しい。

ちなみに、帰ってくる途中で、詠春に連絡をすればよかったのではという思考は残念ながら浮かんでこなかった。

「あら、ルーはん、なにしよるんですか？」

「いやどうしたもんかと考え中で……、って、千草じゃないか。ど

うしたこんな時間に」

何気なく会話をしていたが、それに気づいて横を向くと、肩がはだけるように露出させた着物を着た眼鏡をかけた十代後半の女性――千草がいた。

「ちょっと修練をしにな。それより、その子らはどないしたん、服ぼろぼろやし……、まさか誘拐？」

「んなわけあるか。詠春に頼まれた仕事の途中で拾ってきたんだ。千草、ちようどいいから替えの服とか布団とか用意してくれないか」

「仕事ね……。訳ありそうやけど、ルーはんの頼みやし、まかしと
き」

「すまん」

そして彼らは総本山へと入っていく。

意識が覚醒する。外からは小鳥のさえずりが聞こえ、太陽の光が障子越しから目に入る。上体を起こして、辺りを見回すと、人が5人住んでちょうどいいくらいの大きさの和室なのを確認できる。

「どこ、どこ？」

まさにそれである。

だって俺の記憶では悪魔と激闘（防戦一方だったけど）していて、吹っ飛ばされたところまでしかないんだぜ。さらにあそこは森の中だし。

何故にこんな和室にいるのか。服がいつの間に浴衣らしきものになっっているのか、そして女の子は無事なのか。いろいろと頭の中に浮かんでは消えていく。

……まあなんだ。とりあえずこういうときは、お約束のセリフを言おう。そしたら落ち着くかもしれないしね。

それでは！！せーの！！

「知らな「レダラレサア」……ハッ？」

お約束のセリフを言える事ができず、邪魔をしたらどう奇妙な言葉をついた声の方へ顔を向ける。

そこにはあの時現れた黒いコートを羽織った、短く刈り上げた銀髪 of 外国人の男が立っていた。

い、いかん。予想外だ。この部屋から考えても確実に日本人だと考えていたのに……。

「チイダトホカエセミサオムイセメ、サヌテサンガ。アンキタキノモ、ルホダチ」

なに言ってるんですかあなたは！？さっぱりわかりません！！これは何語ですか！？スペイン？ドイツ？もしかどっかの原住民の言葉ですか！？

まずいぞ。このままじゃ会話が成立しないぞ！せっかく命が助かった（んだよね？）に、言葉が通じないせいで状況がわからず。このままじゃこれから先の生活が危ぶまれる。

というか言葉が通じないのをいいことに、変な書類（人身売買とか臓器提供系の何か）を出されたりしないよな！？いやだよそんな人生！？

とにかく、会話だ会話！拙い英語でも話せば分かってもらえるかもしれない……！！

「うえ、うえあ あー ゆう ふろむ？」

「・・・」

……あれ、なんか違うな？文法ってこんなんであつたけ？というかこれは出身地を聞くやつだったけか？緊張してどうもうまくいかない……。

「…………、ククツ」

な、なんだ一体？何故だか体が小刻みに震えているんですけど。

ひよつとして、馬鹿にされたと思ったのでしょうか？…死亡フラグ、やっちまったか？こ、これは覚悟を決めるしかないのか！？壮絶なる死闘の幕開けか！？

「ハアハツハツハツ！！なんだその馬鹿みたいな面と英語は、お前、実は馬鹿の類だな！？まったく、この程度でうろたえよってからに、

昨日の勇姿はどこへやらつとな！！アルベド語はいいな！ハハハハ！！」

「……いきなり物凄く流暢な日本語で話してきたんですけど。そして馬鹿にしたような高笑いをしてきている。

これが、これが初対面の人間にすることなのか？この男は礼儀とか知らんのか。俺よりずっと年上の癖して。

だが、ここは我慢しなければならない。たとえあまりの怒りに鬼武者化して戦術殻・輪を連発したくなくとも、現在の状況を知るほうが大切だ。たとえ今なら怒りのあまり極限鬼武者になれそうであつてもだ。つまりそれだけ怒っているのだ。

一応（実に、真に、不本意だが）敬語も使っておこう。

「笑つてるところ失礼しますが、ここはどこでしょうか。あと何故俺はここにいるのでしょうか、教えてくださいと嬉しいんですけどね」

「ハハハ——つと、すまんすまん。そんなに怒るな少年。嫁の貰い手がこな——、睨むなよ。そうだな……、ここは京都にある関西呪術協会という場所さ。お前は悪魔と戦つて、その後気絶してな、だからここまで運んだんだよ」

なんかあほなことを言っているので、できる限りの殺気をもって男を睨む。

しかし、関西呪術協会……、ってなんだ？呪術って言ってるし、確かここは『ネギま』の世界のはずだから、おそらく魔法関係なんだろうけど、聞いたことないな。

京都つてことは日本てことだよな。世界観としては生前の頃と大差なかったはずだから、確実に俺の良く知る京都なんだろう。外国

でなかった分安心できるな。

そういえば、悪魔といえば――。

「あの、すみませんが、俺と一緒に白い髪の女の子がいたはずなんですけど、その子はどうなったんでしょうか……？」

そう、俺はあの女の子を助けるためにあの馬鹿どもに戦いを挑んだんだ。結果としては、悪魔呼び出されて、それにボッコボコにされて負けたけど。

俺が生きているということは、おそらく目の前の男が倒してくれたんだと思う（あの時はかつこよくみえたのにな）。ならあの子も助かってると思う。

それでも、もしかしてということもあるので、尋ねなければならぬ。実はもう――、なんざあごめんこうむる。

「あの少女か。あの子も無事だよ。今は別の部屋で寝ているはずだが……、確認するか？」

それは実に嬉しい申し出だ。やっぱり自分の目で確認したいしね。

「そうですね。それじゃすみませんが案内をお願いします。ええつと――」

「ルーカスだ。ルーカス・クランケット」

「ルーカスですね。それじゃルーカスさん、頼みました」

「ああ、ついて来い少年。ゆっくりじっくり焦らず、しかし素早く行こうではないか」

・・・。
・・・。

・・・、さっきから思ってたが、この人、ひょっとしてポケキャラのつもりなのか？

そういうわけで、俺は女の子に会いにルーカスさんの後ろについて歩く。その間に俺の自己紹介もしておいた。

しかし、部屋の外に出てまず思うことは、ここがとても広いことであつた。

俺はてっきり呪術協会の支部かどこかだと思っていたが、一目見ても分かる屋敷の広さと、時々会う巫女服をきた女性たちやお世話係を務めているであろうと思われる人たちの多さ。

ルーカスさんに確認を取ると、どうやらここは総本山、つまり本部であることが判明。俺はその中の休憩室のような場所で寝ていたのだという。

あれで休憩用か。生前の俺の家の客人を迎える部屋があのかくらいの大さだったからな。それを考えると、ちょっと切なくなるというか、ホームシックになつてしまった。今更だが、兄貴は本当にやってくれたよ。

「そつえばだ正治。何故お前は、あんなところであいつらと戦っていたのだ」

ふと、ルーカスさんが昨日の件について聞いてくる。そういやまだそこまで話してないな。

とりあえず、実は僕転生者でえ〜、と言うのは止めよう。絶対厨二病を見るような目で見られるに決まっている。特にボケキャラであろうこいつには絶対にな。

魔法がある世界でそう思うのはどうかとは思っけど。ここは嘘を交えないとな。

「実は、あそこで遊んでいたときに、偶然悲鳴が聞こえて、それで行って見たら女の子が襲われていて、だから近くに落ちていた刀でなんとかしようとしたんです」

「…………それはまた」

明らかに怪しむ目でこっちを見てくる。

そりゃそうか。あの戦闘は途中から見えていたらしいから、最初のほうは知らないんだろっけど、それでもおかしい状況だったしな。

こっぴどく時って、簡単に相手を騙せたりできる能力が欲しいよな。俺は確実に詐欺師になる可能性が高いけど。

「…………あの森、いや、あの山はな」

「はい？」

「昔から、妖怪とか悪霊、それにたまにだが悪魔といった類がどういっわけか集まりやすいようだな。故に一般人は近づけないように人払いの結界やら監視やらをしているのだ。だから『ただの子供』が、あの山に入ることなどありえんのだ。…………『ただの子供』ならな。ちなみに君が使っていた刀は見つかってないぞ」

う、うわあ……。これはまずい。よりもよって、そんな場所にいたのかよ。

普通じゃ絶対入れないような場所に、俺のような見た目は5歳（頭脳は17歳）な子供がいるとなると、そりゃ怪しまれるわけだ。それに、よく考えれば、さっきから悪魔だの結界だの言ってるが、『この世界』では確かそういうのは一般人は秘匿のはずである。それに違和感を一切感じずに話している時点で、俺は魔法関係者になるわけで……。

刀にしたって、元々は俺が出したものであり、手から離れると、しばらくしてから消えるというのは、最初のほうで検証済みだしな。素直に説明したほうが良かったのだろうか？でも厨二病と思われたくは——。

「そしてもう1つ」

「ま、まだあんの！？」

今度は何！？実はワタシは幽霊で、一般人には見えない存在なのだぁー！とか！？

「あの山で、妙な気配が現れてな。かなり強力な鬼の気配で、しかし悪意や敵意といった感情がないという、実に不思議な気配があったんだが……。ほんの数秒で消えたがな」

……、なんじゃそりゃ？

鬼って、日本が誇る妖怪の代表格みたいなものじゃないか。イメージとしては赤い肌の虎のぱんつを穿いたやつね。さっきの説明からして、あの山には妖怪が集まるんだから、別に鬼がいることくらいどうってことはないと思うんだが。

でも、敵意がないってのは気になるね。まあ鬼が全部が全部悪い奴とは限らないしね。それが俺となんの関係——。

「あつ」

あつた。

そうだよ。俺が授かった能力を考えれば、簡単なことじゃないか。あの時、能力確かめていたときに、鬼武者化したじゃないか。俺自身はほんの少しのことだし、どんなものが自覚なかったけど、どうやら鬼として、結構強力な気配であつたらしい。

「どうやら心当たりがあるらしいな。そういうわけで単刀直入に聞こう——」

空気が変わったような気がした。そして間をおいてから、『男』は俺に、静かに問う。

——お前は、なんだ？

単純で、分かりやすい問いかけ。だが、その言葉には、今までのボケをかましてきた人物とは思えないぐらいの、俺がやったものとは比べ物にならない、静かな殺気をこもっていた。

ただそこいるだけなのに、何か魔法のようなものを使ったわけじゃないのに、俺は動くことも、『男』から目をそらすこともできず

にいた。

確かに俺は決して強くはない。それは戦いをしたときに分かっていた。それでもあの状況で戦えていたのだから、これから何があっても大丈夫だろうと心の中で思っていた。

でも、そんな自信すらも、破片さえ残さないかのような圧力によって、すべてが潰されていくような、そんな感覚が俺を飲み込む。

「……………、着いたぞ。この中に女の子はいるからな、変なことはするなよ」

ふと、殺気がなりを潜め、『男』はさきほどまでの、部屋で会ったときの感じに戻った。いつの間にか、目的地に来ていたようだ。だが今は、それよりも、先ほどまでの感覚から逃れられたことに對しての安堵のほうに圧倒的に強い。

長いようで、短かったような、そんな気分を味わった。目の前が妙にくらくらしているように思える。息遣いも荒く、心臓が普段よりも速く脈打っている。

……………なんなんだよ、この男。あの悪魔が可愛く見えるぐらいだったぞ。人間が、あんな殺気とか出せるものなのかよ……………。

「どうした、入らんのか。それともどっかで休むか？」

そんな俺の気を知ってか知らずか、多分知ってるだろうけど、ルーカーが尋ねてくる。俺は、震える心を抑えて、部屋の中に入っていくことにした。

中の大きさは、俺がいたところと同じぐらいの大きさの和室で、その中央にあの白い髪の子がいた。

布団に入ったままであったが、上体を起こして、お盆に上にある食事（一汁一菜って感じのやつ）を食べていた。……そっぴゃさっきのことで忘れていたが、俺の飯は？あとで頼めばいいのか。

その横では、なにやら肩を大胆に露出させた着物（あんな風にしていいものだっけか？）を着た、なんというのか、眼鏡をかけた京都美人な女性が、女の子の口元についているご飯を取ったりとお世話をしていた。…いいな、この光景。

「ははは、千草、ずいぶんと甲斐甲斐しく世話をしてるじゃないか。惚れたのか？」

……。これ、本当にあの殺気ぶつけてきた人？明らかに違う生き物にしか見えない。というかそういうこと言っているのか？

「あらルーはん、なにアホ言いよりますん。うちにそういう趣味はありまへんし、第一、伴侶はルーはんとはんと決めとりますから」

のろけかよ！！のろけんじゃねえよ！！子供しかいないと思つてのろけんじゃねえ！！俺はこれでも（精神年齢が）１７歳だぞ！！

「いやだから、ワタシのような人間より、もっといい男がいるだろ。そんなことより、その子の様子はどうだ？」

「いけずどすな……。この子は見たとおり元気「あつ、お兄ちゃん！！」あつ、こら食べながら喋ったらあかんやろ！！」

そんな女性——千草さんのお怒りを幼さゆえに華麗に受け流し、俺を見て笑顔で手を振る少女。

しかし、お兄ちゃんか……。うん、なごむし、可愛いね。……精神年齢17歳だからって、別にロリコンじゃねえぞ。ホントダヨ？

「よお、えっと、元気か？」

「うん！お兄ちゃんに助けてもらったから！」

「ああ、助けたのは俺じゃないんだけどな。やられちゃったし」

実際に助けたのは、俺の真横にいる男だしね。俺はぼこられていたし。いくらなんでも、誰かの手柄まで横取りしようとは思えない。なんかそれじゃ、俺の嫌いな兄貴みたいだしな。

「でも、ひどい目におおったのを助けてくれたんはほんとやから。ありがとうね、お兄ちゃん！」

そう言っつて、まだまだあどけなさの残る顔で、にこやかな笑顔で笑いかけてくる女の子。

その姿は、花が咲いたような笑みで、少女の容姿も合わさることで、物凄く惹きこまれるものであり——。

「惚れたのか？」

「やかましい！！黙ってる！！今、俺はこの笑顔に癒されてるんだから！！！！」

せつかくの気分が台無しじゃないか！そもそもお前が放ってきた殺気のせいで、こっちは心が痛いんだよ！

なので、今この目の前にある、とてつもなく可愛らしい癒し成分のある女の子で、心にオアシス作りたいんだよ！！

・・・・・・・・。。。

いやいやいやいや！！どうした俺！？こんな性格だったか！？さっきの殺気に脳をやられてしまったんじゃない？

「さっきの殺気……、基本的なシャレだな」

「心をあつさりと読むな！！あんたの相手は物凄い精神的に疲れるんだよ！」

「そんなことはおいといて——」

「てめえがふっかけてきたんだろうが！？」

ほんといやだよこの人！？

「さて、それでは少女、名前は？」

「あつ、えつと、桜咲刹那です」

「刹那か。良い名前だな。では刹那、何故お前はあの男たちに襲わ

れていたんだ。奴らは化け物だとか言ってたが、そのあたりはどうなんだ？」

こ、こいつ、普通はそうそう聞けないことを聞きやがった。確かに俺だって、どうして化け物だとか言われているのか気にはなるけど、さすがにこんな小さい子に直接は聞けないぞ。

現に、今女の子——刹那は、さっきまでの笑顔から、とてもつらい顔に変わってしまった。布団を掴む手が強く握り締められ、千草さんは背中をさすり、落ち着かせようとしている。

「……まあ、大体的見当はついているがな」

「ッ!？」

だが、ルーカスさんは、事情を知っているのか、それとも勘なのか知らないが、明らかに追い討ちをかけるようなことを言う。

それを聞いた刹那は、さっきよりも怯えた顔をしてしまう。よほど知られたくないことなのか、布団から這い出して、外へ逃げ出すとしている。だが、昨日のことが原因なのか、うまく動けずにいる場にうずくまってしまう。

「ちょっとルーはん、いくらなんでも言いすぎとちやいますか。こんな小さい子に対して、それはちとあかんやろ」

「そうだぞ！あの状況から考えても、もう少し言い方があるんじゃないのか!？」

「ならほかにどう言えと?どうせこのままここに匿ったとしても、ずっと後になって『妖怪とのハーフ』ということが露見するより、ここできちつと正体が明かせば、詠春なら事情を分かって、対応し

てくれると思うぞ？ワタシはオブラートに包む、というのが苦手だな」

「そういう問題じゃ……、『妖怪とのハーフ』？」

聞き捨てならない言葉があつたので、確認してみると、ルーカスさんは縦に頭を振る。

「ワタシはな、気配とかそういうのを探るのがなかなか得意だな。だから彼女から妖怪の気配を感じることが出来たんだよ。お前たちが戦闘をしていた場所を探し当てるよりは難しいがな」

確かに、時々気配がどうこう言ってたけど、そんなことまでできるのかよ。

「刹那、お前から感じた気配なんだが……、お前は烏族とのハーフだろ？それにも関わらずその白い髪……、ということは、『禁忌』とされた存在か」

(……コクッ)

ルーカスさんの問いに、刹那はもはや泣きそうな顔をしながらも頷いた。

烏族って、確かカラス天狗のようなものだっけ。おそらくこの世界だと見た目は違うんだろうけど。でもなんで、白い髪が『禁忌』なんだ？それなら俺だって、白い髪なんだが。

「あ、あの……、うち……その……」

「とりあえず落ち着け」

今まで原因を作ってたのあんただろ。

「ワタシもな、お前がどういった存在か、確認がしたかったただけだからな。とって食おうってわけではない。とりあえず、千草、それから正治、すまんが刹那の面倒みてやってくれ。俺は詠春と話さなきゃならんからな」

「……分かったよ。どうせ俺はやることないしな」

「うちもや。今のこの子を放っておけんしな」

今の刹那は、もはや最初の頃を感じがなくなっている。

本来なら、部外者の俺がこういうのやっていいのか迷うけど、こんな刹那はほっとけないしな。千草さんもいるから、どうにかなると思う。

「それじゃあ頼む。……すまんかったな、刹那」

最後に謝罪の言葉を残していき、ルーカスさんは部屋を後にした。

……これから、どうなってくんだ？

第3話　総本山にて　鬼と強者とハーフ、そして京都美人（後書き）

ルーカスの殺気の描写、もっとやれたらよかったんですけど、あんなものしか出来ませんでした。

そもそも、殺気なんて、普通じゃ浴びせられる経験ありませんしね。おかげで表現の難しさが半端ないです。

そして、原作キャラからは、桜咲刹那と天ヶ崎千草が登場です。

まあ、原作から大きく外れるキャラの一人でもあるんですけどね。

活躍ところは少ないけど、これから先、よく出てきます。千草がルーカスに好意をもってる理由は、後々話が進んだときにでも。

ルーカスがアルベド語を使っている理由ですが、それも後に。こればかりですけどご了承ください。

今回はギャグとシリアスをある程度混ぜてみましたが、もし見てておかしければ、話を書き換えるかもしれない。

それではまた。

第4話〈禁忌の理由 転生者たちの会話〉（前書き）

第4話更新です。原作開始前の話はいろいろ考えて、多くともあと6話ぐらいでまとめようと躍起になってます。

今回は短めかと思っています。そして刹那の設定はこれでいいのかと悩む。

ではどうぞ。

第4話〈禁忌の理由 転生者たちの会話〉

「保護……ですか」

「ワタシはそうしたいと思う。いずれまた、あの子たちを襲う馬鹿共が出てくるだろうからな。ならば、保護して、ちゃんとした教育と身を守るだけの手段を持たせれば、大丈夫だと信じているがな」

関西呪術協会の長である詠春の書斎にて、ルーカスは正治と刹那の今後のことを相談していた。

鬼の気配を放ち、幼いながらも悪魔と戦うことのできる特殊な再生能力を持った正治。烏族とのハーフであり、なおかつ『禁忌』の存在である刹那。

このどうしようもなく異質な2人の素性が、何かの拍子に多くの人間にばれれば、一般人からは化け物と罵られ、身勝手な『正義』を振りかざす者には命を狙われることになるのは確実である。

だからこそ、ルーカスはこの2人の身柄をこの総本山で保護し、できるなら、これから生きていくための教育を施していきたいと思ひ、こうして願いでたのだ。

「確かに事情が事情ですし、できるなら私もそうしたいですが……」

詠春自身としては、そういうことなら、2人を保護してやりたいとは思っている。だがそれでも、組織のトップとして、他の幹部たちとも話し合わなければならぬ内容でもある。

過去に、何回か半妖の子をこちらで引き取ったという話しは聞いたことがあるが、その際は、組織内でかなり揉めたらしい。

確かに、本来なら、退治すべき存在である妖怪の血を受け継いだ存在なのだ。どうしても対立が起きてしまうのは致し方ないことだ

ろう。

だが、陰陽師達は、その妖怪を使役することで戦闘を行うのだし、何より、子供は生まれてくるときの自分の境遇を選ぶことはできないのだ。

それを切り捨てるようなことは、少なくとも、父親として子供を育てる者である自分にできるわけがない。

「今すぐというわけには参りませんが、幹部連中を集めて、このことをきちんと話さなければなりません。ですので、手間をかけますが、その子たちの世話と護衛をお願いできますか」

「構わん。そもそも拾ったのはワタシだしな。なのに世話を誰かにまかせっきりというのは、いささか無責任だろう」

とりあえず、今後の方針が決まり、詠春に対して頭を下げる。

ルーカスは、どうなるかはわからないが、それでもこのまま見過ごすようなことはない信じ、詠春とその他に期待することとした。昔に比べたらずいぶん甘い考えだと思いながら。

そして、もし彼らを引き取るようになった場合のことを聞いてみた。

「もし、あの子たちを保護するということになったら、そのときは神鳴流を習わせてみたいんだが、どうだろうか？」

「神鳴流ですか。確かに、烏族とのハーフであるなら刹那という子なら、かなりの腕前になるでしょうが、もう一人の子も育てるんですか？」

烏族は基本的に身体能力が高く、その多くは剣技を得意としているので、そのハーフである刹那なら、達人クラスまで上り詰めるこ

とは可能であると思われる。

だが、もう1人の正治という子は、報告では刀を使って戦闘をしていたというが、詠春は彼の腕を見てないので、どれほどのものか分からない。ただルーカスが育てたいというので、おそらく見込みはあるんだろうが、それでも一応彼に尋ねてみた。

「もちろん。何せ、ワタシの殺気、少なくとも大戦期に出していたものに近いのを間近で受けてな、最初こそ蛇に睨まれた蛙のようだったが、ほんの少ししたら調子が回復していたからな。徹底的に鍛えれば、きつといい男になれるぞ」

「……あの殺気はやはりあなたでしたか。頼むからやめてくれませんか。その子にも悪影響だろうし」

「ハッハッハ、気にするなよ詠春」

なんともないように笑う男に、はあーっと、ため息をついてしまう。

これから、いろいろと忙しくなりそうである。ひとまずは、幹部達には連絡を伝えなければならぬので、手伝うことのできないルーカスは書斎を後にした。

あれから、疲れたのだろうか、刹那は布団のなかでぐっすりと眠っている。

俺と千草さんは、その刹那の横に2人並んで座り、これからのことを話しにいったルーカスさんを待っていた。

正直、俺と刹那がどうなってしまうのかは分からない。もし、刹那が原作キャラであつたとしたら、彼女はこの時点では、死んだりとかはないと思う。『ネギま』というか、赤松作品は『表面上』死者は少ないからな。

だがイレギュラーである俺は、そういうのが当てはまるとは思わない。ひょっとすると転生者は生き残りやすいのかもしれないが、だからって樂觀視はできない。ここを追い出されるということなんてことぐらいありそうだしな。そうなったらどう生きていけばいいか、残念ながら俺は思いつかない。

そういえば、ルーカスさんは刹那のことを『禁忌』とかどうとか言っていたが、どういう意味なんだろうか？

鳥族と人のハーフだつてのは分かったけど、どういうわけで『禁忌』ということなのか。白い髪だからそう判断したらしいんだろうけど、それなら俺も白い髪だから、俺も『禁忌』ってやつなんだろうか？

……こういうのって、聞いちゃ駄目なことなんだろうけど、訳を知らないのに、慰めてもなんか悪い気分になるしな。

刹那が寝ている今なら、千草さんに聞いてみることもできる。教えてくれなかったらそれまでだけど、それでも聞いてみることにした。

「あの、千草さん」

「ん、どないしたんや？」

「ルーカスさんが、刹那のこと『禁忌』がどうこう言っていましたけど、それってどういう意味ですか？」

「……ああ、それな。ほんまならむやみに喋るもんとちゃうけど……、あんたは歳のわりにしっかりしよるし、口を滑らさんかったら教えるえ？」

ああ、そういえば俺って、容姿は5歳児なんだよな。なのに、どう考えても5歳とは思えない喋り方とか態度とかしてるから、変な違和感感じるんだろうな。おかげで教えてもらえることになったのはありがたいが。

千草さんの問いには首を縦にふって答える。千草さんは「喋ったらかかんよ」ともう一度釘を刺しながら、喋り始めた。

「刹那は鳥族と人間との間に生まれた半妖というべき存在、ちゅうのは理解できとるやろ。せやからこの子は今は隠しとるけど、背中に翼があるはずなんよ」

翼、か。それは鳥族の血を引き継いだからなんだろうな。ということは空とか飛べるのか。

「でも、それが何の関係があるんですか？」

「そやな、この子に生えとる翼がただの翼ならええんやろうけど、髪の色から考えてもこの子は白子、つまり翼の色も白いんやと思う。今回はそれが問題なんや」

ああ、刹那ってやっぱり白子、つまり俺と同じアルビノだったんだ。しかも背中中の翼は白いらしい。なんか平和の象徴とか言われて

る白いハトとか天使を思い浮かべるな。

でも、なんで白い翼だと問題なんだ？どっちかって言うと、綺麗な印象だと思うんだが。

「烏族つちゅうのはな、簡単に言うたらカラス人間みたいなもんやからな、基本的には黒い翼を持つてるんよ。せやから普通なら刹那も黒い翼に黒い髪で生まれてくるんやつたはずなんや。

せやけど、この子は白子として生まれてしもうたから、翼も白うなつてしもうた。そして白い翼は烏族では忌み嫌われるもの、タブーとされるもんや。そうなると、同族からは確実にひどい目に遭うてしまふんよ。特にこの子は半妖やから、うちらが考えるよりひどい仕打ちがあつたかもしれんな。

そして、何かの理由で親を亡くし、里を追い出されて、そんで襲われたんやろうな……」

語っていくうちに、千草さんはどこからそうな顔になっていた。その説明を聞いていた俺は、聞いたことを後悔してしまった。

明らかに、部外者である俺がどうこう言っただけいいような問題じゃない。事情を知られば慰められるかと思つたが、俺が想像してたより、ずっと重い。

前世じゃ、兄貴のことを除けば、俺は家庭や学校でよくある悩み以外での問題はほとんどなかった。だから、そんな俺が知っていい事情でも無く、何かを言える立場でないような気がした。

「よう待たせたな——、どうした、なんか暗いな」

そんな時に、ルーカスさんが戻ってきた。どうやら相談が終わったようだ。

ただ如何せん、入ってくるタイミングが悪いように思う。なぜこんな時に帰ってくるんだ。

それでも、多少は空気が変わったので、千草さんがルーカスさんに尋ねる。

「ルーはん、詠春はんはなんやと」

「とりあえず、幹部連中と話し合いということになった。まだ確実じゃないが、あいつはこの2人を保護するつもりだから、あいつの頑張り次第だな。ワタシは2人の世話兼護衛ということになった。ちなみに、2人には同じ部屋で生活してもらうことになるからな」

どうやら、まだ俺達の処遇は決まらないらしい。保護してもらうのが一番だけど、もしそうならなかったらどうすればいいんだろうか。今考えても仕方ないけどな。

刹那と同じ部屋つてのは、監視しやすいようにということではないだろうか。俺らがどういった存在か考えれば妥当かもしれないけど。

しかし、刹那と一緒にということは、自然刹那といることが多くなるはずだ。……あの話を聞いた後だから、この子を傷つけないように接することができるのか、不安になってくるな。

「まあとにかく、これから変な行動を起こさないように、気をつけろよ。さて、それじゃ飯でも食うか。ついて来い正治、朝から何も食っていないだろ」

「……そう、ですね。それじゃあいただきます」

言われてみれば、こっちに來てから何も口にしていないな。これからのことは、食事をしてからでも、なんとかなるかな……。

そういうことで、俺はルーカスさんの後を追っていった。後ろ髪を引かれるような感じをしながら――。

食事を終えた後、特にやることも無く、刹那の近くに座り、ただぼうつとしていた。そうしていたら、いつの間にか夜になっていたらしく、外には半月が暗闇を照らすように昇っていた。

もう就寝の時間だからか、一部の世話役さんや、見回りであろう人たちの動く音以外、とても静かな夜に思える。俺は、部屋の外に出て、縁側に座り、月を眺めることにした。

「月は、どんな場所でも変わらないものなのか……」

前世とまったく違っていいほど、違いのない月に向かって、呟いてみる。

別段詩人になったつもりはないんだが、なぜだか呟いてみたくなった。こっちに來てからのことで、いろいろと溜まっているせいだろうか。

「月にはウサギ、もといハミングウェイがいるぞ、少年。あとは月の民かな」

気分が沈みそうになった時に、なにやら、あほなことを言いながらルーカスさんがやってきた。最初あったときの姿でなく、緑色の浴衣である。そのまま俺の横に座る。

しかし、この人の時々の発言、前々から思っていたが……、なん
でファイナルファンタジーに関連した発言なんだ。

「ルーカスさん、ちょっと前から思ってたんですけど、ひょっとし
てFFが好きなんですか？」

「ああそうだ。前世ではよくやっていてな。13は訳ありでやり損
ねたが、こちらでも発売されると信じているよ」

ああ、やっぱり好きなのか。前世とかそんな発言するくらい好き
なのか。だからアルベド語なんていつていたのか……、あれ？

ちよつとまてよ。確か、途中で確認していたんだが、今の年代は
1994年で、原作開始から約10年前であるはず。

そしてこの時点だと、FFは5か6ぐらいまでしか発売されてい
ないはずだ。だから10だとか13だとかが出るなんて事知ってい
るはずはないんじゃない？……！！まさか、この人……！！？

「あなた、まさか、転生者ですか……？」

「フツ、やっと気づいたのか。ワタシはいつ気づくかと思っていた
のにな」

マジかよ……！俺と同じ存在が今まで近くにいたのか！？いや、
それより――。

「俺が転生者だって、気づいていたんですか？」

「確証はなかったんだがな。ただ、お前の異常な再生能力を見てな。
妖怪の気配を感じる者といえ、あれはおかしいと思つてな、だから
ワタシと同じ存在だと思つたんだよ。すまなかつたな。いろいろと

ひどいことをして。馬鹿にしたり、殺気放ったり……」

そうか。あの戦闘を見てたんだから、俺の傷がないのを不審がつて当たり前だ。で、俺の再生能力を目の当たりにして、ひよっとしてと思ったから、あんなことをして……。

それだけのために、あんな殺気をくらったの俺？もうちょっと穏便にいけないのかこの人？というか最初会った時点で力ミングアウトすりゃいいんじゃない、いや、これは俺が怪しんでしまうな。

だが、他に方法は無かったのか？

「てか、他に転生者っているもんなんですか？」

そっぴや、そんなこと一言も言ってなかったぞ13番さん。

「なんだ、仕事人に聞いてないのか？基本は転生者はかぶらないようにしているんだが、それでもどうしても何人か、かぶるらしいぞ」

なんだよそれ！？13番さん、なんでそのような大事なことをしてくれないの！？だったら、もうちょっと早く気づけたかもしれないのに！？

はあ……、と盛大にため息をつく。そんな俺の姿を見てなのか、ルーカスさんはなにやらクスクス笑っている。

「何ですか？そんなにおかしいですか」

「いやなに、どうもいろいろと悩んでいたようだからな。だから最初のような雰囲気になくなったから、多少気分が軽くなったかと思ってな」

……どうも、俺のことを心配してくれていたようだ。

そういや、刹那の事情を聞いてから、気分が落ちてたからな。それが今まで続いてたんだろう。

この人に慰められるのは、なんとなく負けた気がしないこともないが、人の気分を読むのは、やはり人生俺より長いからなんだろうか。

「刹那のことで悩んでいるんだろう？」

「……ええ。彼女のことを聞いてしまつて。慰めようかと思つてたんですけど、俺が慰めても、それってただの偽善というか、なんら意味のないような気がして……」

俺は、前世では、人並みに幸せだった。

アルビノだったので、周りから浮いおり、そのことで馬鹿にされたりもしたが、それでも、いい奴の方が多くて、俺は楽しく生活していた。

でも、刹那は俺と同じアルビノでも、生まれた一族の関係で、『禁忌』と言われて、味方はいなかっただろうし、親もいないということは、天涯孤独ということ。その上、化け物として襲われてしまう。

どう考えても、俺なんかが、簡単に慰めていいものじゃない。同じような境遇をもった者同士なら、きっとなんとかできるんだろう。だけど、俺には出来ない。いや、やつちやいけないんじゃないかと、そう思ってしまう。

「——またずいぶんとどうでもいいことで悩んでいるな」

……、はい？

「どうでもいいことって、でも、俺なんかがどうこういえる立場じゃ——」

「うるさい。なんやかんやと頭で考えるな馬鹿者」

あ、頭で考えるなって、そんな無茶なこと言うなよ……。

「ワタシもはつきり言えば、どうこう言える立場じゃないんだがな。決して時間が解決してくれるわけでもないが、それでも、これからゆっくりと彼女のことを癒してやればいいんじゃないか。

偽善がどうだの、意味がないだの、そんなことは頭から捨てる。そんな馬鹿げたことを考えてる暇があるなら、あの子の心が折れないように支えていけばいいだけだろうが」

なんか、ずいぶんとむちゃくちゃなことを言っているような気がします。

「それって、正しい行動なんですか…？」

「だから、正しいとかそういうのはこの際一切捨てる。別に境遇が違うからって、何もしちゃいけないなんてことはないんだからな。お前は、自分の思ったとおりに行動すればいいじゃないか。それで、救えるものだってあるんだからな」

そういつて、月を見上げながら、笑うルーカスさん。

彼の言っている言葉が、本当に正しいかどうか、俺には分からない。だが、それでも肩が軽くなったような気がした。

……ひよっとすると、誰かに、自分のやろうとしていることは正しいことだって、言ってもらいたかったのか？

「そうだとしたら……、逃げてるような気がするな、俺……」

情けないな、俺。

「そういうことを言うな。お前はまだ若い……、そういえばお前、前世じゃ何年生きてた？」

「…17年です」

「ならワタシよりずっと若いな。まあとにかく、お前はまだ若いんだから、悩むことなんていくらでもある。だが、人間は悩む生き物だとされているからな、だから、今のうちにたくさん悩んで、それで自分の出来る最善の行動を選べばいいんだからな。いずれ、悩むこともできなくなるかもしれんのだから」

「ずいぶんと豪快な考え方で。でも、実際そんなものかもしれないな、と思えてしまうか。」

「なんか、すみませんね。俺なんかに気を使わせて」

「謝るな。同胞に出会えたんだから、ワタシなりに出来ることをやるうとしたただけだよ。それじゃあワタシはいく。風邪をひかんようにしろよ」

よっ、という掛け声ともに立ち上がり、手をひらひらと振りながら去っていく。

俺はそれをしばらく眺めて、完全に見えなくなってから部屋に入り、刹那の隣に置かれている布団に入って、寝ることにした。

明日は、俺に出来る限りでいいから、刹那になにかしてやろうと
誓って……。

第4話〈禁忌の理由 転生者たちの会話〉（後書き）

主人公の後悔と、お悩み相談の回でした。

しかし、なんとというか、こんなアドバイスでいいのか？もつといいのはいんだろつか？と思いつながら、結局思いつかない作者。よくあるタイプの回答だと思いたいです。

刹那の翼のことは、原作見ても、作者の頭が完全に理解できていないのか、あんなふうになってしまいました。

これで納得してもらえると幸いなのですが……。

そして、転生者ルークさんは、FF好きという設定になっています。なので、これからもちよくFFのセリフや単語が出てきます。

それではまた。

第5話　赤の衝撃？　意外と平和の日々（前書き）

第5話目です。原作キャラがまた出てきます。

今回半分はギャグです。正治もルーカスも羽目はずしします。FF
ネタが2つほどです。

あと、主人公はノーマルです。
それではどうぞ。

第5話　赤の衝撃？　意外と平和の日々

あれから時間は経ち、その次の朝7時頃。

今まで寝ていた刹那だが、何かごそごそと音がするのが聞こえるような気がし、その音により目を覚ます。

上体を起こし、周りを見渡すと、そこでは正治が木の箱やダンボール箱から和服や小物のようなものを鼻歌を歌いながら出していた。いったい何故そんなことをしているかわからない刹那だが、昨日話したことを思い出して、どうしても話しかけれずにいた。

どうしようかと考えていると、正治が後ろを振り返った。それについびくつと驚いてしまうが、正治はそれを気にしてないかのように話しかけてきた。

「よお、おはようさん。よく眠ってたな。ちょっと待ってろ、今貸してもらった荷物整理してっから。後、横に替えの着物あるから、着替えるときは言ってくれ。外で待つとくから」

それだけだったのか、そのまま荷物の整理を始めた。

とはいえ、彼もルーカスとの会話をした次の日なので、これでもいいのかと内心想っていたりする。それでも自分に出来ることをやるために、こうして話しかけてみたのだ。

だが、刹那にとっては、それだけでも驚かずにはいられないことであつた。

「あ、あの……」

「んっ、どうした。なんかあつたか？」

おどおどと、怯えるような目をしながら話しかけようとする刹那

を待つ。

多分、昨日のことのせいで、いろいろと思うところがあるのだろうと考えるが、とにかく今は刹那が次の言葉を言うのを待つことにする。

「う、うちのこと……、いじめんの？」

そして出た言葉にたまらずっこけてしまう。できればおはようと言って貰いたかったと心で泣く。

「いやいやちよい持てお嬢さん。何故そのような発想を？いじめつつもりなら、こんなことなんざしないから」

「だって…、皆うちのこと知ったら、忌み子とかばけもんとか言うて、いって……………」

喋ってる間に、今までの生活を思い出したためか、俯き、目に涙をためてしまう。

それを見て、明らかに失敗してしまったと後悔してしまうが、今は自分を責めるより、この子をどうにかしなければならぬ。

「確かにお前がどういう存在かは聞いたけどさ、だからってお前をいじめたりはしないよ。そんなことでぎゃあぎゃあ喚く奴がいたらさ、俺が止めるからさ」

「……ほんと？」

「おうよ、こんな俺だが、可愛い女の子に嘘をつこうとか考えたりしないから」

なんというか、あまりいい言葉ではないかもしれないが、それでも刹那の顔がほんの少しだが笑顔になったことを思えば、頑張ったほうだと思う。

「つと、そういや、そろそろ飯の時間だからさ、食べに行こうぜ。刹那もずっと寝てたから、腹減ってるだろうし。ほら行くぞ」

「えっ、わ、ちょ……」

朝食は別の部屋で食べることになっているので、ちょうどいいということでそれを理由に、刹那の手を握って部屋を出て、廊下を歩く。

いきなりのことであり、なおかつ手を繋がれるという、刹那にとっては親以外ではほとんど経験ことに戸惑ってしまうが、それを振り払おうとせず、そのまま正治に先導される形でついて行く。

白く、ひんやりとした手が、とても暖かく思えた…。

ちなみに、この時とある銀髪の男が「あいつロリコン、いやペドだったのか!？」と叫んでいたそう。そしてそれを冷ややかな目で見る眼鏡をかけた女性がいたそう。

現在の時刻は朝9時頃。俺は刹那と手を繋いで、部屋に戻る途中である。

だが、今の俺はすごぶる機嫌が悪い。一緒にいる刹那がものすごく怯えた目でこっちを見てる。きっと今の俺は般若のような顔だろう。

「あ、あああああの、正治お兄ちゃん、あ、あんまり怒ったらあかんよ。あ、味付けは、ひ、人、それぞれ、やし……」

「……刹那。お前はあの光景を許容できるというのか？俺にとって、あの和食を侮辱した光景を？」

とりあえず、刹那がこれ以上怯えたら困るので、『笑顔』で返す。なのに、どういうわけか悲鳴を上げて縮こまってしまふ。なんでだろうな？でも、俺は本気であれだけは許せそうにない。

……なんでおれがこんなに怒ってるって？H A H A H A、だってさ、今日の朝食のメニューは白米に焼き魚に味噌汁、たくあんという、すばらしいくらいの日本食だぜ？

だが、だというのに！！あの銀髪野郎は……！！！！

「ケチャップは必需品だろ？」

真顔で言ってきたんだぞ！？日本食をなめてると思いませんか！？

この際、本当はお断りしたいが、白米にかける分にはまだいい！
だというのに、あの男は『全部』だ！『全部の料理』にぶっかけや
がった！！

塩加減がなんともいい焼き魚に！歯ごたえのあるたくあんに！！
あまつさえ、どこかお袋の味のする味噌汁に！！赤いどろどろと
した液体を混ぜたんだぞ！？俺が死神なら死刑確定だぞ！？

それが気に入らなかったので、全力で抗議したが、あいつはのら
りくらりと「そんな説教、興味ないね」なんてほざきながら、ケチ
ヤップ付き料理を実に『おいしそう』に食っていた。

現実のあまりの理不尽さに、ついつい鬼武者化して襲い掛かった
が、一瞬にして頭を掴まれて、そのままアイアンクローであっさり
やられた。

なんか周りが物凄く騒いでいたが、俺は世の理不尽を越えれなか
ったことがショックで、部屋の隅での字を書いていじけていた。
刹那はやさしくしてくれていたのは覚えています。

そうして立ち直れてから、気分を一新して朝食を食おうとしたら
……。

【それでも食って元気だせ、byルーカー】

なんて置手紙とともに、『真っ赤に染まった』、俺が食うはずだ
った朝食があった。

——その瞬間、俺は鬼武者さえ超えた存在になれた気がした。

……とまあこんなことがあったわけだ。というか、昨日はいい人とか思っていたが、どうやら人をいじりまくるのが好きみたいだ。おかげで俺の好感度は急降下中である。ちなみに朝食は気合で食った。魚が意外とうまかったのが気に食わない。

何故あんな男が、関西呪術協会の総本山とかいう場所に普通にいるんだ？ 関西の長の詠春って人と仲が良いらしいが、昔の親友か何か？ 今度聞いとくか。そして奴への復讐法も。

なんて感じのこと考えながら、隣でいまだに震えている刹那と歩き、ふと庭を見る。それに合わせて刹那もその方向を見る。

そこには、綺麗な黒い髪を肩まで伸ばした女の子がいた。年齢で言えば刹那と同じくらいだが、遠くからでもどこか気品な雰囲気を感じられるので、きつと良いところのお嬢さんだろう。だけど、寂しそうに見えるのは何でだろう。誰か親しい人がここにいないからとかか？

なんて風にその子を見てると、その子を目があった。

最初はきょとんとした顔だったが、だんだんと、じつに可愛らしい笑顔になり、何を思ったか動きにくいはずの着物でこっちに走ってきたのだ。

何回かこけそうになりながらも、俺たちのいるところまでなんとかたどり着いた。俺も刹那もどうしたのかと思うが、おもむろにその子は俺の手をがっしりと掴み、

「一緒に遊ばー！」

って言うてきました。

いや、いきなりで訳が分かりません。一応刹那に目線で知ってる子か？と送るも、首を横に振られた。まあ刹那に関してはしょうがないけど。

しかし、なんかこの子、どっかで見たことあるんだよね？なんだっけ？

まあ、とりあえず自己紹介とか、なんでそんなことを？というのをしておかないとな。

「えっと、悪いんだけど、君は一体……」

「あ、ごめんないきなり。うち、近衛木乃香って言いますう。よろしゅうな」

近衛木乃香って……ああ思い出した。確か原作で主人公のネギと同室になった女の子か。それで麻帆良のぬらりひょん、もとい学園長の孫だっけか。

……あれ？なんでそんな子がここにいるんだ？麻帆良は関東のほうにあるはずなんだが。ここは京都だし。……この際細かいことはいいか。

「じゃあ木乃香ちゃん。なんで突然遊ぼうって話になったんだ？」

「うちな、うちな、今まで同い年の子と遊んだことあらへんの。せやからお兄ちゃんたち見て、ついな……」

なるほどね。そりゃここは山奥、しかも関西呪術協会の総本山だから、普通の子はきそうにないしな。

しかし……、なんていうのか、可愛い女の子の純粹無垢な瞳で上目遣いされるというのが、ここまでいいものとはな。眼福ってやつだね。隣から不機嫌な気配を感じるが気にしない。

本来なら、俺たちの立場を考えたら、この子と遊ぶのはあまり好ましくないかもしれないが、このぐらい大目に見てくれるよな。

「よし分かった。遊んでやるよ。っで、何して遊ぶんだ？」

「ほんま！？じゃあ蹴鞠に、鬼ごっこに、それから——」

「いやいや、まだ時間もあるんだし、そんなあせんなよ。とにかく庭に行こうや。刹那も一緒に遊ぶだろう？」

「えっ、いいの？」

「あつたりまえだろ。遠慮しないのが子供の美德さ、なんて。それじゃ、元気よく遊ぶぞー！！」

「お〜〜！！」

「お、おお」

side
ルーカス

「精神が肉体に引っ張られてるのかね。あいつ、中身17歳だったはずだが……」

「なんの話ですか」

「いや気にするな、こっちの話だ」

庭で元気よくはしゃぎながら遊ぶ正治、刹那、木乃香の3人をワタシと千草は縁側でくつろぎながら眺めていた。というか、正治は本当に17歳か？確かに刹那のことで悩んでいたから出来ることをしてみたが、あれがその影響か？分からん。

しかし、木乃香の奴はずいぶんといい笑顔で遊んでいるな。長の娘で、『あの親友^{バカ}』と同等の魔力を持つてしまった子だから、同年代の子供と遊ぶこともほとんどなかったから、仕方ないといえば仕方がないがな。

そういえば詠春は、木乃香に『裏』のことは教えないと言っていたが、明らかに無理だろう。今度話し合っておいたほうがいいか？

「このまま保護が決まったら、あの2人を木乃香の遊び相手にするのもありだな」

「そうですな。お嬢様、いつも寂しそうにしましたからな。あの2人ならきつとええお友達になつてくるやろうな」

「……そうだな」

これはいい考えであると思う。木乃香は寂しい想いをしなくて済むし、刹那もこういう安らかな日々が必要だしな。正治は……、あいつはなんとかなるか。ケチャップを馬鹿にしたことは許さんが。

しかし、それもあいつらの保護が決まったらの話だしな。今も詠春率いる保護賛成派は数が多いが、反対派は勢いはすさまじいからな。できるならワタシも賛成派に参加して、反対派を威圧したいが、

部外者にはそれが出来ない。歯がゆい。

まあどうせ賛成派が勝つだろうと。そうしたらあの2人は関西呪術協会自らが保護した存在になるので、勝手な『正義』に現を抜かすような輩はうかつに手を出せなくなる。それにあの2人には神鳴流を習わせるから防衛手段もばっちりだろう。

烏族とのハーフの刹那と、あの鬼のような姿になれる正治（かなり強力なものには驚いた）。あの2人をワタシ自らの手で鍛えあげれば、それは素晴らしい強さになるだろう。

出来ることなら、我が右腕左腕見たいな感じに育て上げたい。そして歯向かうものは容赦しねえ！ちぎっては投げちぎっては投げをやってみたいもんだ。

いやいや、ここはあの2人を魔法世界に連れて、メガ口の腐れ野郎どもをぶっ潰すのも悪くないな。

戦慄するメガ口！！恐怖の3人衆！！紅き翼の一員とその従者がメガ口の馬鹿どもを捻り潰す！！！！

…………、たまらんなこれは。その光景が鮮明に映し出されてしま
うほどではないか。これはぜひとも実践してみたいものだな…。

見ていてくださいよ、^{マスター}師匠……、クッククク……、ハハハハッハッハ！！！！！！」

「……ルーはん。言うところこと駄々漏れやで？」

……………。なんだと？

「ど、どこから声にだしていた？」

「出来ることなら我が右腕左腕、ってところからやな。ちとテンシ

「ヨンあがりすぎやで……」

「……………。うつ！頭がいたい！記憶そうしつじゃ！」

「都合のええ記憶喪失やなあ」

「反応が薄い！？た、頼む！そういう冷めた目で見ないでくれ！！
お願いだ~~~~~！！！！」

この日から数日後、正治と刹那の正式な保護が決定した。

それと同時に2人には、神鳴流への入門と、木乃香の遊び相手をしてもらう旨を伝える。木乃香が詠春の娘と知ったときは大層驚いていた。

刹那はやはり自分の白い髪が好きになれそうにないらしいので、黒く染めることにした。ただ正治が「俺も染めたほうが良い？」と聞くと、そのままいいと否定した。……理解できん。

そしてワタシはしばらく千草から冷めた目で見られることとなった。

——心が折れそうになった。

第5話　赤の衝撃？　意外と平和の日々（後書き）

明らかにテンションがおかしい2人組の回でした。

原作からは木乃香お嬢様登場です。ここにいれば出くわすだろうけど。原作とは出会いが違いますので、ご了承ください。

ケチャップを味噌汁の中にいれたことがあるんですけど、あれは合わないと作者は思います。私が味オンチなだけかもしれませんが、ルーカスさんをケチャップ大好き人間にしたのは、父がいろんなものにケチャップかけてたからです。いや、和食にはかけてませんよ。

それでは、読んでくれてありがとうございます。

第6話　説明回　またの名を引き伸ばし回　（前書き）

ただの説明回となってしまうました。

本来もつと時間をかけるべきところをこんな形で済ませてしまつて
申し訳ございません。

第6話　説明回　またの名を引き伸ばし回

ある晴れた日。関西呪術協会の総本山より離れた山にて、ちょっとした対決が行われていた。

剣道着を着た正治が上段に構えていた日本刀――打刀・明智拵を振り下ろし、ルーカスに斬りかかるが、右手に持つ刃渡り20cmほどのサバイバルナイフで受け流されてしまう。

それによりルーカスの右側に前のめりに倒れてしまうも、すぐさま体勢を低く立て直し、足に狙いをさだめて振るうも、それを予見していたかのように、垂直に飛び避ける。

この程度、避けられることがわかっていたのか、あわてることもなく刀を中段に構え、相手と5mほど距離をとって攻撃の機会を窺う。

それでも険しい顔をし、張り詰めた空気を放つ正治に対し、ルーカスはいたって涼しい顔でナイフをクルクルと回しながら余裕の表情でいる。だが、ルーカスは攻撃をする気配を見せない。

実はこの勝負、ルーカスは自ら攻撃を仕掛けずに、正治が仕掛けてきた時のみ対処するというルールが決められているのだ。ただし、正治も、使用する武器は明智拵のみ、鬼の武器は一度だけ使用可能という条件下の元で戦っている。

正治は最初こそは、これなら一撃くらい与えられるかなと思っていたが、元々の実力差が大きい相手に戦いの素人が突っ込んでも、そんなあっさりとダメージを与えられるわけがなく、何回も攻撃をかわされている。

(……このままじゃ、一撃どころか掠りさえしないよな。あつちは防御だけ集中すればいいから、俺が攻撃した瞬間にそれに合わせて

受け止めるなりいなすなりすればいい。しかも経験の違いがそれを簡単に実行させちゃうからな。

まあ、ガキが大人にあっさり勝とうなんてのが、そもその間違いか。……あきらめる気は一切ないけどな)

このまま、なんの力もない明智掙で攻撃し続けるより、鬼の武器を用いて、ほんの僅かな隙を突くしかないと考え、すぐさま右手に鬼の籠手を装備し、武器をイメージする。

そして現れたのは、柄頭と呼ばれる部分が球状で、棘のようなものがついている、モーニングスターのような武器、【氷砕球】であった。

意外な武器の登場にルーカスは驚くも、それから凍て付くような気配を感じ取り、腰を落として、相手の一挙一動を観察する。そして氷砕球をおもむろに上に持ち上げ、まだ一気に振り落とす。

あの距離ではあたらないはずではと思ったのも束の間、持ち手に鎖があつたらしく、そこから伸びるようにこちらに向かってくる。

さすがにナイフでは受け止めることができそうにないので、その場から僅かばかり動いて回避しようとする。が、武器から凍てつく波動氷を纏った気を感じし、とつさに上空に飛ぶ。そして、柄頭が地面にぶつかった瞬間、10 m 範囲を、鋭い氷柱が襲った。

氷柱の高さは7 m はあるうかというほどだが、ルーカスは浮遊術を使っていたので、あれに巻き込まれることはなかったが、予想外の威力に冷や汗をかいていた。

「あの氷の力、ずいぶんとんでもないな。しかもまだ完全に力を使いこなせてないって感じだったことを考えると、あれの3倍か4倍はいけるかもな。……無茶苦茶な能力をもらったもんだ」

氷砕球の威力と、気の力の不安定さに呆れてしまうものの、そういえばあいつはどうしたんだと、下を見渡そうとする。

だがそれより先に、自身の背後より気配を感じたので振り返ると、
どうやってか、ここまで跳躍した正治が1mほどの距離で、今まさに
刀を振り下ろそうとしている時だった。

さすがにこれは対処できないだろうと思っていたが、

「【プロテス】」

たった一言の言葉とともに、透明な壁のようなものが出現して、
その攻撃をいとも簡単に跳ね返してしまった。

そして正治は、その反動のせいで、地面まで勢いよく落下して
いった……。

side 正治

どうもこんにちは。斉藤正治でございます。

あの後、地面にぶつかり気絶してしまった俺は、そのまま部屋で
寝ていました。おそらく再生能力がなかったら、あれで死んでたね。
しかし、本当にルーカスさんは強い。俺と刹那が神鳴流に入門
した後、ルーカスさんも俺たちの稽古をしてくれることになった。
といっても、簡単な手合わせ程度だけ。

でも、あの人に一撃どころか、服に掠りさえすることが出来ない
のだ。まるでこっちの動きを全部予見してるかの如く回避するから、
予知能力かと疑ったくらいだが、曰く『実戦』を経験してきたから

こそ、出来るらしい。まじかよと思いました。

ああそうそう。言い忘れてたけど、実はあれからもう1年経ってるんだよね。月日は経つのは早いものだよ。

その間、俺と刹那は、基礎的な訓練（主に剣道の作法とか、気の扱いとか）を中心として、その合間に木乃香と遊ぶ、といった日々を送っている。……ただ木乃香が『裏』のことを知らないってことを聞いた時は、長の娘でそれやっても意味無いだろと思ってしまった。これにはルーカスさんも同意見だった。（何度も注意はしたらしい。）

それは置いといて、後は俺が最低でも10歳になるまでは、鬼の武器は特殊な訓練以外でむやみに使わせないという方針になってしまった。何でもそればかりに頼っていると、いつか痛い目見るということらしい。（ルーカスさんの実話らしい。何があった？）

まあそういうわけで、俺は今後のため、といっても、刹那とか木乃香とか守ってやれるようにするために、頑張って修行しているわけだよ。でも、本当にいろいろとあったな、この1年は。

まず、ルーカスさんの能力のことが判明した。

お分かりの皆さんもいるでしょうが、彼の能力は【FF4で使われた白魔法を使用可能】というモノだ。本人は【FFシリーズの魔法を6割ほどいいから使用可能】と願ったらしいのだが、どういうわけか白魔法のみ、しかもFF4で使用されたモノだけということになっていたそうだ。

それでも、魔法の全体化はきっちり出来るので、呪文詠唱のみに頼る西洋魔術師には【サイレス】を使うだけで、あつという間に無効化が可能という、イジメをすることが出来てしまうのだ。……

第2次ケチャップ戦争の際に使われたので、その恐ろしさは痛いほどわかる。

てか、どんだけFF好きなんですか、あなたは？

それからもう1つ、【鉱物を宝石に変換できる能力】という、こちらの石とかをいろんな宝石にさせちまう、お金に困ることの無い、貧乏知らずな能力も持っている。これは食いつばぐれたくないという実に現実的な理由から選んだらしい。

ただしこれは、一級品ではなく半透明で、どちらかといえばランクの低い宝石しか出来ないらしいので、本当に少しのお金しか手に入らないらしい。それでも十分だと思うが。

ちなみに、俺と刹那もそれによって作られた、お守りと称したペンダントを貰った。俺がルビー、刹那がガーネットだ。元は石ころだろうけど、こういうのは気持ちだと思ってありがたく貰いました。

ただ、俺は能力を5つ与えられたのに、どうして2つしか与えられなかったかと聞いてみたが、いつか話すよと言って聞けてない。ただ、何か話しぶらい雰囲気なのは感じ取れたので、そのいつかを待っておこう。

また、アーティファクトを所持しており、『ミミングスの剣』と呼ばれる、不死者でさえ殺すことができるという、とんでもなく恐ろしい剣だそうだ。

このカードは、なんでもまだ幼いころに、自身に戦闘の手ほどきをしてくれた師匠マスターと仮契約をした際のものらしいが、その師匠とやらは不死者らしく、この剣を使って訓練して誤って殺しそうになっってしまったそうだ。……ほんと危なっかしい剣だな。この剣のおかげで命拾いしたんだろうけど。

とまあ、こんな風に、アーティファクトは強力で、他が地味な感

じが否めないんだけど……。

この人、俗に言われる『バグキャラ』なのだ。

例えば、京都神鳴流の奥義は、宗家青山家ゆかりのものしか伝承されないといわれる【斬魔剣 弐の太刀】を簡単にやってのけ、一部を除いた奥義でも【弐の太刀】をやってしまう（【百烈桜華斬 弐の太刀】とか【百花繚乱 弐の太刀】とか）。

これを見た詠春さんは、「うちの流派をちゃんと習ったわけでもないのに……、これだからバグキャラは……」と、頭とお腹を押さえて苦悩していました。

それで、本来、初心者用の呪文の発動キーである【プラクテ・ビギ・ナル】で、広域殲滅呪文とされる【千の雷】を使っていた。普通なら専用の発動キーを作ってでないと発動したりとかしないらしいので、ほんと、無茶苦茶だなと思う。

この際、呪文とある山の結界に当たって、それにより結界が破壊されてしまって、妖怪があふれ出てきたそうだ。そして怒りによって暴走した詠春さんと、さながらバトル漫画の最終決戦のような光景を繰り広げていた。（もちろんどちらもこつてりと説教された）他にも無駄に頑丈だったり、気合で物事を解決しちゃったり……、言い出したらきりが無い。同じ転生者とは到底思えないよ。

そんなぶつとんだ人がいる総本山だが、俺はなかなか充実した生活を送っていた。

最初こそ遠慮がちだった刹那が、しばらく木乃香と一緒にいたおかげが、元気な笑顔でいることが多くなった。やはり可愛い子は笑顔がいい。

木乃香も遊び相手が出来たおかげで、なかなか活発的な女の子へ

となつていった。元気出すぎるといったほうが正しいかな。前なんか川に落ちそうになって、それを助けようとして逆に俺が落ちて……。冷たかったです。

俺はそんな2人のお守りってポジションになっている。でも2人とも俺のこと「兄ちゃん」とか「兄さま」で、あの純粋な目で見つめながら呼んでくれるので、とっても役得です。……ロリコンじゃないからな。

ただ、木乃香はもうしばらくすると、麻帆良学園都市にある学校で勉強をすることになっているので、ここからいなくなってしまう。出来るなら俺も刹那も一緒に行きたいのだが、神鳴流の稽古があるため、同行することは叶わない。

……第一、なんでわざわざ関東の、しかも聞いた話だと関東魔法協会の本拠地とも言える麻帆良に行く必要があるんだ？ 長が近衛同士だから、なにか密約でもあったのか？

と、いろいろと言いたいことがあるのだが、俺は関西においては下っ端の人間、しかも半妖（一応そういうことになっている）なので、意見が通ることが絶対にはないだろう。

「セイ兄ちゃん、お見舞いに来たで〜！」

「失礼します、兄さま」

元気な声とともに、部屋の中に上から木乃香、刹那の順番で挨拶してから入ってくる。

ちなみに、さっきも言ったが、俺は刹那には「兄さま」、木乃香には「セイ兄ちゃん」って呼ばれてる。刹那は最近敬語を覚えてしまったので、俺のことを昔みたいに「お兄ちゃん」って呼ばないし、木乃香は「お嬢様」言っし、京弁をあんまし使わなくなった。……兄ちゃん許さんぞ。

なんてことは言わずに、笑顔で迎える。しかし、お見舞いと言う割には、手には遊び道具がたくさんあるな。

「それはお見舞いの品なのか？どう見ても遊び道具にしか見えないんだが？」

「いややな、これはついでも、おみやげはうちらやがな」

……世の中素晴らしいね。木乃香がこういう冗談を言えるなんてね。いやあ、あははははは。

「にいさま、顔がゆるみきってますよ……」

つと、いけないいけない。嬉しさが顔にまで出ていたようだ。でもしょうがないじゃない。男の子だもの。

……、なんで不機嫌そうな顔でこっちを見るの刹那？まだ顔緩んでる？

「まあ、それを持ってきたら、せつかくだし遊ぶか？」

「了解や！ほなランプやろう。ええかな？」

「お嬢様がそうおっしゃるなら」

「ああん、お嬢様言わんって約束したのにい……！」

はは、そんな約束したのか。でも今の刹那はお堅いからな。あと何年か経たないと元に戻らないかもしれないな。とりあえず、木乃香のプリプリって擬音がつきそうな怒った顔を記録しておこう。

……だから刹那、なぜそんな不機嫌な顔してるの？そんなに「このちゃん」っていうの恥ずかしいのか？

第6話〈説明回 またの名を引き伸ばし回〉（後書き）

まだ6話目ですけど、作品がうまくかけない。

原作の話の構成は思いついたのに、その前の話がかけない。でも前の話はある程度書いておきたいという願望が……。

そろそろ表現がマンネリしてきましたね。これからこんな感じとは言いませんが、これのようなものになる可能性があるかもしれません。

それでは、すみませんでした。

第7話〜原作開始約2年前 再会と恋愛感情と試合〜（前書き）

始まり方はいつもと違いますが、そこまでのものではありません。
今回は長めなのと、戦闘がある程度あります。表現はあんまりす
けど。

それでは、どうぞ。

第7話 原作開始約2年前 再会と恋愛感情と試合

side 正治

ガタンゴトン、ガタンゴトンという音とともにゆれる電車内で、俺は座席に座って、ヨーロッパのような町並みが窓を通り過ぎるの眺めていた。

電車の中からこんにちは。斉藤正治、14歳です。あれから随分と時が経ちまして、早8年でございます。

……月日が経ちすぎ？だってこの間、特筆するようなことってなかったんだもの。

強いて言うなら、木乃香が小学生になるぐらいに麻帆良へ行ったことが1つ。このことは関西呪術協会内では、関西の長の娘を関東に人質として出したようなものと言われ、協会内での対立が深まる結果となった。

どうも詠春さんの独断に近いようなものらしく、ルーカスさんは馬鹿なことをと嘆いていた。いくら関東魔法協会のトップが自分の義父である近衛近右衛門だからといえ、『裏』の事情も関西と関東の関係を知らない木乃香をはいはい送るものではないだろう。その点では詠春さんは武人としては素晴らしくても、上に立つものとしては微妙な存在だろう。

とにかく、まあそういうことで、木乃香は麻帆良に行った訳だが、当然いつまでも一人関東にいさせるわけではない。なので、俺は8年経った今、関西から正式に木乃香と護衛として、麻帆良学園都市こと関東魔法協会に向かっているわけなのだ。木乃香の護衛のためとはいえ、関西を出るとなると裏切り者扱いされるかもなんて思っ

ていたりもしたが、そのあたりはどうもルーカスさんがいろんな場所に根回しして、今回の護衛の正当性を訴えてくれたらしい。ほんとあの人は、いざという時はやるよ。

つで、そうして護衛として麻帆良に向けて電車に乗ってるわけですよ。ちなみに俺の隣には、同じように護衛として来ることになった刹那がどうも緊張した面持ちで座っている。その傍には詠春さんより譲り受けた野太刀【夕凧】が置いてある。

あれから8年も経ったので、背も150cm近くまで伸びて、黒い髪をサイドテールにしているので、デコが目立つが、それもまた良い。決してグラマラスとは言わないが、稽古のおかげで無駄な肉がついてないスレンダーで色白の肌が、美人度を上げているから、本当に可愛い。

さすが我が妹だ、鼻が高いよ。血は繋がってないけど。俺の勝手な考えだけど。服は麻帆良の規定の制服を着ている。…気が早いだろう。

ちなみに俺も、身長174cmとそこそこ高く、体系もこれまた稽古のおかげで俗に言う細マッチョな感じだ。まあ、髪の毛と肌がとても白くて目も赤いので、たまに体調を心配されますけど。偏見だと思います。服は赤いジャンパーに黒いジーンズだ。

また、向かい側の席には、俺たちの保護者としてついていくことになったルーカスさん（38歳）と千草さん（25歳）が座っている。ルーカスさんはいつもの黒いコート姿、千草さんは肩露出着物（俺命名）ではなく普通の和服を着ている。電車じゃそれでも十分目立つけど。

言い忘れてたけどこの二人、なんと結婚しました。長い間千草さんがアタック仕掛けて、ルーカスさんはいろいろと理由をつけて断ってたけど、3年前ほどに折れて、それで結婚って流れです。正直、なんで断り続けてきたんだと思うが、なんでも、昔ルーカ

スさんが魔法世界つてところで起きた戦争中に、瀕死状態の千草さんの両親を助けて、その縁で千草さんを紹介されたらしい。

なのでルーカスさんは、親を助けたということでの感情を恋愛感情と勘違いしていると思って断っていたらしい。千草さんも最初はそういう理由だったらしいけど、

「いつもはふざけよるけど、それでもしばらく接しよったらな、この人いろいろ抱え込んだるのが見えてな。せやから、それを支えたいと思うようになってな……」

なんて風なことを感じて、それであの人のそばにいたいと心の底から思うようになったとか。確かに、時々胸にあるペンダントを見ては、なんというか寂しそうな顔してたりするからな。大切な人かなんだろうか。

まあ、そんな感じで結ばれましたのだ。……しばらく恐ろしいくらい甘ったるい空気を出してたけど。

そうしてしばらく昔のことを思い出したりしていると、電車が駅に着いたらしく、動きが止まった。荷物を持って、改札を出て、長い間座っていて固まった体を伸ばす。

「さてと、確か迎えが来る手はずになってるんだが……。まだいないのか？」

麻帆良側が送るといっていた迎えの姿が見えないので、それらしき人間を探す。

確か30代前半のスーツを着た眼鏡の渋いおっさ——男性だったけ。……人がこんだけいる中で、それを見つけると？無理だろうよ。

なんて思っていると、前からその特徴に当てはまる男性が手を振っ

てこっちに歩み寄ってくる。

「ほう、まさか迎えがお前とはな、タカミチ。随分と老けたな」

「ハハ、それは言わないでくださいよルーカスさん。それでも気にしてるんですから」

言ってる割には、案外気にしてなさそうに頭を掻きながら笑う男性——タカミチさん。どうやら知り合いなようだ。

「こつちの人たちが、ルーカスさんの奥さんと、お弟子さんでいいんですよね」

「ああ、和服を着たのが千草、白い髪のが正治、サイドテールが刹那だ。実力はワタシが保障するから、安心しろ」

「それは楽しみですね。タカミチ・Ｔ・高畑です。よろしく」

「天ヶ崎千草言います。名前に関しては、どう呼んでもかまいません」

「斉藤正治です。京都神鳴流剣士で、中学２年生です」

「桜咲刹那です。同じく神鳴流剣士で、今年で中学１年になります」

それぞれ、自己紹介と握手をする。

それからは簡単な世間話とか、麻帆良のこととか、話しながら、これから俺とルーカス夫妻が住む場所へと向かう。そこで和菓子店とアクセサリー店を兼ねた店を経営するらしい。和菓子が千草さん、アクセサリーがルーカスね。……アクセサリーの宝石の経費はぼた

ダだけどね。

刹那は女子寮のほうで生活することになってるよ。近くで木乃香を護衛するということで、そうなった。

寮といえば、木乃香と同室になるのって、やっぱり原作通り、神楽坂明日菜なのか？あの子って確か主人公のネギが魔法使いって知って、いろいろあつて仮契約するんじゃないかなかったっけ？

……それだけは確認しておいたほうがいいな。こっちだって、あいつを変なことに巻き込みたくないし。

「なあルーカスさん。悪いんだけど、俺と刹那、木乃香に会いに行つて来ていいか？」

「えっ！？先にお店のほうにいくのではないんですか！？」

いや、これから先のこと抜きにしても気になるじゃんか。最後に会ったの7歳のころだし。きっと大和撫子になってるんだろうな。あいつのほんわかオーラは現代の究極の癒しだろ。

「そうやな、お嬢様が元気やつとるか分かるし、感動の再会なんてのもええんとちゃうの」

「一理ある。友達は大切にしないとな」

「お、お二人とも！！」

よくし許可は取った。それじゃあいきますぐ行こう。ゆっくりじっくり焦らず、しかしきびきびと行こうじゃないか。

「に、にいさま、そんな引つ張らないでください！手を繋ぐのは嬉しいですけど……、じゃなくて！！にいさま聞いてますか～～！！？」

s i d e 刹那

兄さまに連れられて、女子寮に来た。その間、ほかの女子生徒の視線がなぜか微笑ましかつたような嫉妬が混じっているような、そんな視線だった。

そんな視線をしないほしい。正直、手を繋がれてとても恥ずかしいんだ。別に、嫌だとかそういうわけではなく、年の割りに大きな手がとても心地よく……、いやいやいや、何を言ってるんだ私は！？

「どうした刹那？ 難しい顔して。木乃香のいる場所に来たんだから、笑顔にしとけよ」

私の氣を知らないで、不思議そうな顔をしてこっちを見る。

って、もう着いたの！？ 顔をあげて、目の前を確認すると、寮の部屋のドアがあった。準備中なのか、まだ表札があるわけではないが、この前にいるということは、悶々としている間に確認までしていたのか。なんという行動力。

し、しかし、この部屋の中にお嬢様が……。ずっと会ってなかったが、覚えてくださってるだろうか？ もし覚えてくれなかったらどうしよう……。うし……。

だ、だめだ。心の準備がまったくできな――。

「すみませ〜ん、近衛木乃香さんいますか〜？桜咲刹那と斉藤正治をお届けに来ました〜」

兄さま！？なんですかその軽いノリは！？こっちは不安やら覚悟やらいろいろとグルグルしてるのに！？最近ルーカスさんに似てきてませんか！？

しばらく、静粛が続いたが、ドタドタとドアに近づく足音が聞こえてくる。……まさか。

そして、勢いよくドアが開き、それに兄さまが顔をぶつけて、鼻を押さえて悶絶してしまう。だが、そんなことよりも、ドアを開けた人物に目がいつてしまう。

腰まで伸ばされた、透き通るような艶のある黒い髪。張りのある染みひとつない白い肌。

まだあどけなさの残る顔に、安らぎを与えてくれるような、やりわりとした雰囲気。

幼少時代と比べても、とてもお美しくなったその姿は、間違うこととはない。

「お、お久しぶりです……、このかお嬢様」

「ひょっとして、せつちゃん？そんでうずくまってるのは……、セイ兄ちゃん？」

お、覚えてくださってくれた……！これはなんという幸せ……。い、い、い、鼻血出そうだ……。

「せ、せつちゃん！？なんや鼻血出とるで！？明日菜、ティッシュ取

ってっ！！」

今、お嬢様のはからいで、部屋の中に入れてもらい、テーブルを挟んで、私たちの今後のことを説明している。

お嬢様は、私や兄さまがこちらで生活することになったと聞いた時は嬉しそうな顔をして抱きついてきた。また鼻血が出そうになったのは内緒だ。

今まではお嬢様のお隣にいる同室の明日菜さんというお方が一緒にいてくれたそうだが、それでもやはり昔の知り合いが一緒というのは、とても嬉しいらしい。それにしても、明日菜さんには感謝するべきですね。お嬢様のお友達でいてくれたのですから。ただ、何故か兄さまが「こりやいつかバレるかな」と小さく呟いていた。何の話だろうか？

「まあ、とにかくうちの木乃香がお世話になりました。っで、これからは刹那も一緒に行動することも多くなると思うのですが、よければお友達になってももらえないでしょうか？」

「いやいや、そんな畏まらないでくださいよ。私なんかでよければいくらでも請け負いますから」

「そうですか。それじゃあよろしく願います。……ああ、もし何かあればこのチラシにある『パンタシア』っていう店にお越しください。ついでにこのチラシを配ってくれたらいいんですけど」

兄さまなにさりげなく店の宣伝してるんですか！？というかここにチラシ100枚持ってたんですか、明日葉さん苦笑いしてますよ！？本当ルーカスさんに似てきてませんか！？

「セイ兄ちゃん随分とおもろうなったなあ。昔は冗談言ったら噛み付くように突っ込みようなのにな」

「ハハハ、突っ込みなんかしてるよね、疲れるって悟ってしまったからな。ホントなんでさっさと気づかなかったんだろうか？」

か、悲しいこと言わないでくださいよ。確かになにかあればボケるルーカスさん突っ込むのは疲れるでしょうけど、あそこまで突っ込むの兄さましかいないんですから。

「そつかあ。そらしょうがないわな。……あつ、そや。せつちゃんせつちゃん、ちよつと」

なにやら思い出したのか、少し離れた場所に移動して、こちらに手招きするお嬢様。他の二人には聞かれたくないことなのだろうか？……まさか、『裏』のことがばれたとかか？

お嬢様は『裏』のことはなるべく教えないという長のお考えのもとで育ったのだ。もしばれて、あまつさえ西洋魔術を覚えていれば、関東の人間にあらぬ疑いがかかってしまう。そうなれば関西の対立は免れなくなる。

できればそのようなことではないと思いつつ、お嬢様のもとへと近寄る。手で顔近づけてという仕草をされたので、顔を近づける。

そして、お嬢様の口が耳元まできて、一言。

「セイ兄ちゃんにもう告白したん？」

「こ、ここここ、このちゃああああん!？」

な、なななな、なにになにいきなり言うてるん!？

「やって、別れ際に、セイ兄ちゃんへの告白がんばってなあ、って言うたやん。忘れたん？」

えっ?そんなこと………。ああ、確かにそのような会話をした。言われて鮮明に思い出した。

あの時、お嬢様に兄さまのことが好きかも、っと愚痴ったんだ。それで次に会うときまでには、告白しとこうって言われたんだ。ああ、お嬢様は覚えていたのに、肝心の私が忘れてるなどとは……。でもそもそも、兄さまは私のことを完全に妹として扱ってるのだ。一度だけ告白まがいのようなことを口に出してみたが、拳骨食らって「そういうのは本当に好きな奴が出来てからだがあ!！兄に告白する妹がいるかああ!！」と一時間説教されたんだ。あなたはどこのラブコメ主人公ですか?と全力で叫びたかった。

「む、無理です。私は一生兄さまの妹ポジションから抜け出せないの……」

「あ……、ま、まあ、いつか振り向いてくれるって。うちは応援してるえ?」

ああ……、お嬢様のやさしさが、今の私の心にはまさに究極の回復魔法です……。

ちなみに兄さまは、明日菜さんと世間話をしていた。

side 正冶

木乃香たちといろいろと思い出話をして、明日菜に『パンタシア』の宣伝をお願いして（ちなみに『パンタシア』はラテン語で『幻想』という意味らしい）、何故か落ち込む刹那を励まして（恨みがましい目で見られた。なぜ？）、店に帰って、準備を手伝っていたら時間はずっと夜。

そして俺たち4人は、タカミチさんから学園長の【世界樹前広場に深夜0時に来てほしい】という伝言を受けて、広場に向かっていく途中だった。

「一体、なんの用なんだろうな？なんでこんな時間に呼び出すんだ？」

これは当たり前前の疑問だと思う。わざわざこんな遅い時間に呼び出す必要があるんだ？

「大方、今回新しく入った魔法関係者の顔合わせだろう。集まるとしても、新入りの魔法生徒や古参の魔法先生たちだけだろうがな。」

……ワタシはあまり注目を浴びたくないのだがな」

「普段の修行で、一般人に魔法がバレるかもしれない状況を作って、関西を騒がせた男のいうセリフじゃないね」

「やかましい」

しかし、それならこんな時間に集合をかけるのも納得だな。『裏』のことは一般人に秘匿である以上、こういう人の少なくなる時間帯が一番なんだろう。女子には、寝不足とかで、お肌が荒れたりするかもしれないけどな。

なんて考えていると、どうやら広場に着いたらしく、見積もっても十数人ほどの人がいる。

タカミチさんを始め、ギターケースを背負った大人の雰囲気醸し出す褐色の肌の女性、修道服を着た女の子、サングラスにヒゲなVシネに出てそうな男性、小太りでなぜか肉まんを頬張ってる男性、スーツに眼鏡といかにもデキル女みたいな女性、明らかに見た目10歳な金髪幼女などと彩り豊富だ。

何より、そんな集団と比べても異彩を放っているのは、どういう成長の仕方をすればああなるのか分からない、異様に伸びた後頭部を持った、大妖怪ぬらりひょんを髯髯とさせる老人。

彼こそが、この麻帆良学園理事長にして、関東魔法協会のトップであり、なおかつ西の長である詠春さんの義父である、近衛近右衛門である。

「おお、お待ちしておりましたぞ。ルーカス・克蘭ケット殿。このたびはこのような呼び出しに応じてくれて、まことに感謝をします」

「構わんよ。第一、応じなければ、何をされるかわからんのでな」

この学園の最高権力者相手でも、いつもの態度を崩さないとは、さすがだな。

しかし、ルーカスさんの名前がでたら、場の空気が変わったな。なんというのか、羨望とか憧れとか、興味とかそういったのが入り混じってるな。それでも気配読みを習ってるから、そこそこは感じ取れるのだ。

ルーカスさんが紅き翼って集団の一員で『英雄』（本人はものすごく嫌ってる）だったのは有名人なのは知ってるけど、ここまで興味を引くものなのか？

そんな中でも、二人は平然と話をしてるけどね。さすがにこういったのには慣れているのか。

「でだ、一体これからなにをするんだ？まさかただ挨拶のために呼んだわけではあるまい？」

「その通りですな。これから、新しく入った魔法関係者の今現在の実力を調べるために、ちよつとしたテストをしようと思ひましてな。お手数かけますが、あなたのお弟子さんたちにも……」

ほお、テストか。実力を調べるってことは、魔法先生か、機械とか下級悪魔とかと戦うってことになるのか？

……よくよく考えてみれば、ルーカスさんとの特訓と、修行と称した妖怪退治以外では、初の戦闘か？こりゃ気を引き締めなきゃな。

「おいじじい。いつまで話し込んでいる。いいかげん私と代われ」

と、そこに、先ほどの金髪少女が可愛らしい声、だがドスの聞いた声で、学園長に暴言を吐きながら押しのける。

その行動に、他の魔法先生たちは他の生徒が怯えるのに関係なく、

突然高笑いをはじめ。あまりにも突然過ぎて、そして何故笑い合ってるのか分からず、困惑するしかない。

ちなみに、俺は金髪幼女——エヴァンジェリンのことは3巻までしかない貴重な原作知識のおかげで知っていた。600年生きる吸血鬼の真祖で、600万ドルの賞金首で、主人公ネギの父のナギによつて登校地獄という呪いをかけられた、とても『いじりがいる』幼女だ。

……。あれ、なんかルーカスさんと同じ思考をしたような気が？気のせいかな？

そんな俺の思考中でも二人は高笑いを続けていた。……よく息が続くな。

「ハッハ……！まさか、お前がここに来るとは思わなかったぞ。ガキの頃はあんなにひ弱だったのにな。じじいから聞いた時は驚いたもんだよ。お前は『こういう場所』は好きではないだろう？」

「いえ、今回は少々訳ありですからね、『こういう場所』に来るのも厭わないですよ。ワタシとしてはあなたがここにすることが驚きですよ、【^{マスター}師匠】」

「それなら、ナギの奴に言え。あいつが私にふざけた呪いをかけたから、こんな場所で、ガキと混じってお勉強せねばならんのだからな」

なにやら、昔話に興じてるんですけど……。というか、【^{マスター}師匠】って、まさか、昔言ってた不死者の師匠って、エヴァンジェリンだったの？世の中狭いな。

というか、他の人たちどうにかしろよ。さつきから展開がいろいろと変わって、対応できてないんだけど。

「あゝ、こほん。お二人さん。そろそろ、テストを始めたいんじゃないか……、ええかの？」

「むっ、それは失礼。つい昔話に花が咲いてな」

なんとか状況を変えようと、学園長が二人に声をかけて、なんとか中断させた。そして他の人が集まってる場所に移動する。

この時、エヴァンジェリンが、「じじいの奴……、後頭部切断してやろうか……」と言ってたけど気にしないでおいた。

そんなグタグタ(?)な感じでテストは始まった。魔法先生が下級悪魔を20体ほど召喚して、それを倒すという、シンプルな内容だ。

褐色の女性(なんと13歳らしい)は銃を華麗に使って悪魔の眉間に確実に命中させ駆逐したと思えば、修道服の女の子(13歳)は逃げてばかりだったり、箒を構えた女の子(12歳くらい)は無詠唱の魔法を使って堅実に倒して……、さつきから女の子しか紹介してないような……。

まあそんな感じでテストは進んでいき、いざ俺たちの番だ、というときに、ルーカスさんがあることを提案したのだ。

「こいつら相手に下級悪魔は意味ないから、魔法先生の誰か相手してくれないか？」

なんで余計なことするんだよあんたは！？普通に下級悪魔で十分だろう！？なんか先生がたの目つきが変わったし！？

「気にしたら負けだぞ？それ千草、さくつと勝ってこい」

「毎度むちゃくちゃやな……。今に始まったことやないけど。まあさくつと勝ってきますわ」

千草さん軽いな！ちよつと諦めの境地にいつてないよね！？
そんな俺の心配をよそに、広場中央に立つ千草さん（肩出し着物装備）。対峙するはガンドルフィーニと呼ばれた色黒な男性。ナイフと銃を持つてることから、魔法詠唱より格闘戦を得意とするタイプかな？

「いいかの、これはあくまで試合じゃからな。大事のないようにな。それでは……始め！」

学園長の掛け声とともに、千草さんは札を一枚、ガンドルフィーニ先生は銃口を千草さんに向け、ナイフをグリップに合わせるように逆手に構えて、戦闘体勢に入る。が。

「キイエエエー！」

透き通った大声で奇声を張り上げる。あまりの大声と気迫に相手はつい足を止めてしまう。

だが、それが千草さんの狙いであり、止まった相手に札を一枚相手に投げつける。ガンドルフィーニ先生はそれを見て行動を開始、引き金をひいて札を撃つ。効果が発動する前に潰してしまおうという魂胆なのだろう。

狙い違わず、弾は札にあたるが、それと同時に札が爆発。あたりに煙幕を撒き散らす。それにより二人の姿が見えなくなってしまう。これは、ルーカスさんや俺のような気配を感じ取れる人間にはどこにいるのか分かるので、あまり効果はないが、そうでない者には効果靨面だ。そしてなにより、

「クウ！煙幕なんて卑怯な手を……！」

あんな風に、黙ればいいのについてい独り言を呟いてしまえば、居場所を教えているようなものである。というか、戦いに卑怯もくそもないだろ？

そんなガンドルフィーニ先生に、十数体ほどの小さな物体が、一斉に飛び掛る。

それは、30cmほどのデフォルメされた小猿であった。なんとも愛嬌ある姿に躊躇するも、一体に狙いをつけ撃つが、それを小猿は難なくかわしてしまう。そして相手の顔目掛けてとび蹴りをかまそうとする。

が、そこは魔法先生。とつさにナイフで切り裂き、小猿の本来の姿である紙に戻す。だが、まだ数がいるため、なんとか回避と反撃を繰り返しながら、一体ずつ確実に潰していく。

しかし、彼は式紙を相手にするのに集中し、術者である千草の存在を忘れていた。ふと、上から『魔力』のようなものを感じ、視線を上に向ける。

そこには、小猿と同じようにデフォルメされた、しかし6mはあろうかという圧倒的に巨大な猿が、猛スピードで降ってきていた。しかも中には千草さんが入ってる。

「なっ……!？」

あまりに光景にガンドルフィーニ先生は驚きの声をあげるが、回

避するまもなく、猿の右ストレートパンチを体に打ち込まれ、鈍い音をたてて地面にうつぶせにぶつかる。千草さんは倒れた背中に足を乗せて力を込める。起き上がれないようにするためだ。

しばらくその体勢が続くが、ガンダルフィーニ先生は、両手をフラフラとあげて、降参の意思表示をした。

「はい、じゃあ次は刹那だ。しっかりやってこいよ」

「承知しました！」

あれから5分後、今度は刹那が夕風を片手に、広場中央に立つ。今度の相手は、なんかいかにもナルシスト野郎って感じのイケメン男だ。刹那を値踏みするようないやらしい目で見ている気がする。……変なことしたらぶっ殺していいかな？まあ、こういう男はたいてい使い捨てだからいいか。

「やお嬢さん、本当は女性を傷つけるような真似はしたくないんですけど、テストだからね、覚悟してもらっよう」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

いかにも、なセリフを吐くナルシストに律儀にお辞儀をする刹那。そんなのに頭下げるな。

そして、試合開始の合図が響き渡った。

それに合わせるかのように、ナルシストは瞬動を用いて刹那の右

側に接近、手刀を首に叩き込もうとする。どうやら気絶させる戦法をとることにしたらしい。

しかし、刹那はその動きに察知し、その手をつかみ、がら空きになっっている腹部に『氣』を纏わせた鋭い蹴りを放つ。

すると、面白いぐらいにナルシストは回転しながら地面に何度も頭をぶつけ、20m以上進んだぐらいで停止する。

状態を確かめると、頭から血が出て、口からは泡を吹き出した、元の顔の形が分からない残念な男がいた。どうやら、防御力がなくなっているようだ。

「……こ、これは…勝ちで……いいんでしょうか？」

刹那の困惑する声は、ほとんどの人に聞いてもらえなかった。

「そういうわけで、正治の番だ。2対1だが、せめて引き分けに持つていけよ」

「なんで俺だけ2対1なんだよ！」

あれからさらに5分後。今度は俺の番だが、どういうわけか、俺だけ相手が二人なのだ。大方この野郎のせいだろう。

広場中央には、眼鏡にスーツな神鳴流剣士——葛葉刀子先生（30代？）とグラサンとダンディーなおひげな男性——神多羅木先生（通称グラヒゲ先生というらしい）が立っている。気配から感じて

も、さっきのナルシストやガンドルフィー二先生よりずっと強いのが二人って、これは新手のいじめですか？

しかし、そんな俺の思いは無常にも届くわけがない。

「大丈夫ですよ。兄さまならなんとかあります」

「……お前だけが俺の味方だよ、刹那よ……!!」

嬉しさのあまり、ついつい抱きしめてしまう。なんか顔を赤くしてあたふた慌てているが、それがまたいい。さすが自慢の『妹』だ!!

刹那にパワーをもらった俺は、気合を入れて広場中央に立つ。今回は鬼の武器の使用は禁止されてないから、それと神鳴流の奥義を存分に使おう。

とにかく、こういうのは自分のペースで試合を進めるのが大事なわけだ。

「では、試合……、開始!!」

学園長の合図とともに、即座に鬼の箆手を両方装備し、青い刀身をした雷の力を宿す【雷斬刀】を装備する。

二人ともどこからともなく武器を出したことに、一瞬不思議に思っていたが、即座に戦闘用の顔つきへと変えて、こちらに攻撃を仕掛けてくる。

グラヒゲ先生が無詠唱による小さな鎌鼬をこちらの動きを封じるように大量に射出してくる。それを雷斬刀で打ち落としながら、敵に接近する。

しかし、それを刀子先生が神鳴流の奥義の一つ【斬岩剣】を使って遮ろうとする。すかさずそれを回避し、神鳴流奥義【斬空閃】を放つが、あちらも後ろに下がって回避する。

そこに、今度は三十本の【魔法の射手】がこちらに向かってくる。グラヒゲ先生の属性から考えて、確実に捕縛系統の魔法なはずなので、あたると厄介この上ない。ならば！！

「【戦術殻・雷！！】」

雷斬刀を地面にたたきつけると同時に戦術殻を使用する。雷斬刀から強力な雷が放出され、広場全体（観察してる人には被害がこないよう境界が張ってある）を青い雷が襲う。

その衝撃により、【魔法の射手】はすべて消し飛ばされ、刀子先生とグラヒゲ先生は障壁を展開して雷を防いでいる。それでも余波はすさまじいので立っているのもやっとといった感じだ。

そこを、【鬼の鞭】を出現させて、刀子先生の持つ刀に絡ませる。あちらはまずいと思って慌てて力を込めるも、それより先に刀を奪い、遠くに放り投げる。

そして、瞬動を用いて、刀子先生に接近。雷斬刀の柄で腹部に一撃与えようとするが、右から殺気を感じ、鬼の鞭をその方向に振るう。そこではグラヒゲ先生が無詠唱を撃とうとしていた瞬間だったらしいが、それよりも速く、鞭が足に当たり、横転させる。

だが、そのことにより、刀子先生のほうがおろそかになってしまい、接近を許してしまう。雷斬刀ですぐさま対抗しようと振るう。そして、『気』を纏った拳が俺の顔の目の前で止まり、雷斬刀は刀子先生の首の近くで動きを止めていた。

一見すると相打ちのように見えるが、グラヒゲ先生がまだ残っている。ということとは。

「……これは、明らかに俺の負けですね」

もし、このまま拳が止まらなかったら、俺の頭は最悪トマトみた

いにグチャってなってたかもしれない。

しかも二人とも、全力じゃなかっただろうし。

「そんなことはないわよ。正直あの雷は【真・雷光剣】に比べて範囲は狭いけど、同等の威力は持ってたし、鞭だって、やろうと思えば、私の意識を奪えたでしょうしね」

「そうだな。おそらく1対1なら、勝敗は変わってただろうな」

そういつてもらえるのはありがたいです。でも、ルーカスさんにあとで愚痴られるのは確定です。という旨を伝えると苦笑いされた。

そうして、テストは終了した。ちなみに、俺は負けはしたが、あの二人に善戦したということで、周りから認められることとなった。……俺は納得いかないところがあるけど。

また、俺と刹那に学園長から、この学園の夜の警護に当たってもらえないかと依頼を受け、力をつけるにはちょうどいいので、OKした。

そんなこんなで、俺の麻帆良の生活はスタートした。

第7話〜原作開始約2年前 再会と恋愛感情と試合〜（後書き）

はい、いつもより長くなりました今回のお話。

とりあえず、前半は簡単な説明と日常、それから【がんばれ刹那】を掲げる会。後半は戦闘（下手糞描写）となりました。

ルーカスさんの師匠はエヴァンジェリン……、やっぱりこういうかたちでエヴァを絡めたいと思っていたのです。彼らの昔話はいつかやるかもしれません。

戦闘は、なんか見づらい感じがしますね。それに単調だし。文字で臨場感を伝えようとするのって、難しいですね。

ちなみに、ナルシストは完全なオリキャラですが、転生者じゃありません。もしかすると出番があったりなかったり。（結果はひどい目だけどね）

主人公は鈍感。これはラブコメでは必須だと作者は思います。といつかこれじゃないとだめでしょ。

それでは、ここまで読んでくださり、ありがとうございます。
次回もどうぞお願いします。

第8話　焦りと不安　そして悪魔ふたたび（前書き）

またまた年月が一年ほど経っています。なんという急ぎ足。今回、また戦闘が入ります。描写は目をつぶってくださいとうれしいです。

第8話　焦りと不安　そして悪魔ふたたび

麻帆良学園都市に存在する、とある森。明るいうちでさえ人があまり来ない場所で、夜になるとどこか不気味な雰囲気を出すので、余計に人がよらない場所だ。そんな深夜の森の中から、発砲音と、爆発するような音が聞こえてくる。

「おーいタツミーちゃん、相手どんだけいんのよ？」

「後二十体ほどだから頑張ってくれたまえ。弾代を浮かせたいんでね」

「二人ともお喋りはいいから、手を動かしてください！！」

軽い感じで喋る白髪の少年——斉藤正治とそれに答える褐色肌の女性——龍宮真名、そしてせかすように怒鳴る黒髪の少女——桜咲刹那。

普通に聞いてもどこか変な会話だが、彼らはそれぞれ刀や銃を持っており、目の前には、人とは違う姿をした存在がいる。鋭い爪や大きく裂けた口は悪魔と呼ぶにふさわしいものであり、見るものを恐怖させるには十分だろう。

だが3人は、そんな悪魔たちをもともせず、刀で切り裂き、銃で狙い撃ちながら倒していく。

「神鳴流……、【百花繚乱！！】」

正治が明智掬を上段の構えから振り下ろすと、花びらが舞うと同時に『氣』が直線状に飛んでいき、前方にいた悪魔を七体ほど消し飛ばす。

「【百烈桜華斬！！】」

刹那は敵の中央に瞬動で移動し、背丈ほどある夕風を円を描くように振るい、周囲十体ほどの悪魔を切り刻んでいく。

残った悪魔たちは危機感を覚えたのか、背を向けてこの場から離れようとスピードを上げる。しかし、そこをスナイパーライフルで狙いをつけていた真名に撃たれて、消滅してしまう。

この場にいた悪魔たちを倒した3人だが、増援がいるかもしれないので警戒を解かず、あたりを探る。しかし、そこに正治の携帯が鳴り、通話ボタンを押す。

しばらく話した後、電話を切った正治の顔は、先ほどの警戒心の張り詰めた顔から、緊張感の抜けた顔へ変わっていた。

「さっき、侵入者確保したってさ。だから俺たちは終わっていいぞうだ」

「そうですか。なら一安心ってことでいいですね」

「そうだな。私としてはこれ以上戦闘があると、弾代で小遣いが減ってしまうからありがたいよ」

俟約スナイパーの愚痴に軽く笑いながら、3人は森をあとにする。これは学園の警護を任されている3人にとっては今や日常とも言える光景であった。

昨日の深夜の戦闘から次の日の放課後。私はお嬢様とアスナさんと一緒に、ルーカスさんと千草さんが経営しているお店、パンタシアに向かっていた。

このパンタシアだが、始めた当初こそはお客はまばらに来るくらいであったが、和菓子が安い値段のわりにおいしいことと、純度は低いがルビーやダイヤといった宝石をたくさんあしらったアクセサリーが一つ2000円ほどで買えるということが、口コミで広がり、なかなか盛況を見せている。

私の所属している麻帆良女子中学の生徒たちもここで和菓子をよく購入している（アスナさんがあのチラシを他の皆に配ったからだ）。ただ、アクセサリーに使う宝石に関してはどこで手に入れているのか教えてもらえず、兄さまは「詐欺まがいだろ……」と頭を抱えていた。どういう意味だろうか？

また、客の中には店の手伝いとして入っている兄さまを狙っている人もいる。白い髪に白い肌は珍しいとはいえ、兄さまは顔立ちはかなりいいので、だから狙う人がいるのだろぅということだ（麻帆良のパパタッチ談）。実際、私も女性に言い寄られる兄さまを目撃してますし。

何やらいろいろと言いたいこともあるけれど、そのようにパンタシアは麻帆良の人気店の1つとなっている。もちろん私やお嬢様たちも常連だ。

そうして、いつもの道を通っていくと、目印である字を軽く崩し

た『パンタシア』と書かれた青い看板が見えてきた。洋風にあしらわれた小さめの店舗と、外にはその場で食べるお客様の木で出来た和風のテーブルと椅子が8個ほど並べてある。ただ、いつも少なくとも3つは埋まっている席が、今日はなぜか開いていた。

「あれ、珍しいわね、お客さんがいないって」

「ほんまやな。今日って休業日とちゃうはずやけど？」

アスナさんとお嬢様ががめつたに見ない光景に不思議そうな顔をする。確かに、いつも誰かいるし、本来なら営業している時間帯だからそうなるのはしょうがない。

かくいう私も、何故こんなに人がいないのか気になったが、何やら店からルーカスさんの魔力のようなものが感じ取れる。そして店の周りに結界のようなものも使用されている。

普段、ルーカスさんは修行や緊急時以外は魔力を極力抑えているのに、今その魔力を使っているということは、なにか問題が起きているのかもしれない。

「お嬢様、私が確認してきますので、ここでお待ちください」

「そお？じゃあ悪いけど頼むなせつちゃん」

お二人には万が一危険が及ばないようにここで待機してもらい、慎重に店に近づいていく。袋に入れていつも肌身離さず所持している夕風をいつでも取り出せるようにしておく

店の入り口はカーテンを閉め切っており、外から中の様子を伺うことはできない。だが、中では少なくとも4人の人間が動いているのがわかる。敵意などは感じないので、一安心する

だがそれでも、もしもを考えて、入り口に手をかける。ゆっくり

と音を立てないように入り口を開けて、気づかれないようにカーテンをどけて中を確認すると――。

「だああああ！――貴様そこ動くな！今すぐ八つ裂きにして、一生人前に出れないようにしてくれる――！！」

「お、落ち着けエヴァンジェリンさん！こんなことで切れてたら神経持たないぞ！？」

「そつだぞ、ちょっとは落ち着きたまえよ、金髪ロリババアのキチイちゃん？」

「うがあああ！――！！」

「ルーはん、おちよくつたら意味ないやろ？……てか、これほんまに600年生きた吸血鬼なん？」

「録画中……、録画中……」

……。……。なにをやってるでしょうかこの人たちは？
中では、あのエヴァンジェリンさんが、顔を真っ赤にしてルーカスさんに飛びかかるうとし、それを兄さまが押さえ込んでいる。その近くでは、呆れた様子の千草さんと、同じ2-Aのクラスメイトの明らかにロボットな絡繰さんがなにやら呟きながら遠巻きに眺めていた。

……。警戒して損した。

「千草さん」

「ん、なんや刹那いきなり。どないしたん？」

「いえ、魔力や結界を感知したので何かあったのかと思ひまして。それより、この状況は一体……？」

とりあえず中に入って、千草さんに尋ねる。今あの3人に何か言っても、聞いてくれそうにないので、冷静な人に聞くのが一番だ。

「ああこれな。あの吸血鬼が静かにしたいから他の客寄せんようにせえって師匠命令とか無茶言うてな。一応応じたんだけど、ルーはん癩に障つとつたらしくてな、ずっといじりまくつとたんよ」

……それは確かに起こるのはわかるな。

エヴァンジェリンさんはルーカスさんの師匠だから、多分そのぐらいの融通は利くんじやないだろうかと思つたのかもしれないが、あの人は普段ふざけているが仕事はきちんとこなす人だ。

だから店の仕事を邪魔することを、師匠といえど我慢できなかったんだろう。……多分。とても楽しそうに、妙に生き生きしていじくつているけど、きつとそうなんだと思いたい。

「あれ、エヴァンジェリンちゃんじゃない。どうしたのそんなに騒いで」

「珍しい光景やな」

いつの間にか来ていたのか、お嬢様とアスナさんが入り口の所で物珍しそうにエヴァンジェリンさんを見ていた。まあ実際他の人と

行動することがなく、クラスでは外見と中身が合っていないと言われる方だから、仕方ないだろう。というかお二人とも、結界が張ってあったのにどうして近づけたのですか。

その声にエヴァンジェリンさんが二人のほうを見て、不覚に思ったのか苦虫を噛み潰したような表情になる。そしてフンと不機嫌そうに鼻を鳴らして店を出て行った。絡繰さんも軽くお辞儀をしてその後についていく。

兄さまは、今まで押さえ込んでいた疲れか、ふうと一息入れた後、椅子にもたれかかる。ルーカスさんはまだ遊び足りないといった表情をしつつ、店の奥に入っていく。おそらく結界の解除をしにいったのだろう。

「お二人ともいらっしゃい。何か御用？」

「えっと、千草さん。今お店って大丈夫ですか？」

「大丈夫やえ。いつものようにお店で食べてく？」

「はい、お願いします。とりあえず餡蜜と、お茶を3つほど」

今まで傍観者の立場になっていた千草さんが、お二人に問いかけて、場の空気をかえて、お二人から注文を受けたので準備をしに店に入っていく。二人が店から出て席に向かう間に、私は兄さまの所へいく。

「兄さま、大丈夫でしたか」

「刹那、お前いたんだったら止めてくれよ。あの偽少女、怒りのせいか妙に力強かったんだぞ？」

ぐてえ〜っという効果音が聞こえてきそうな疲れた不満そうな顔で私をにらみ付ける。私はそれに苦笑いをしておく。

でも兄さま、偽幼女って言うのはどうかと思いますよ。たとえ600年生きたお方であっても、一応女性ですし、なによりプライド高いんですから。それに、そういう発言が出るあたり、やっぱりルーカスさんに似てきてませんか？

「まあんなことはいいさ。それより刹那。今日もまた仕事だったさ」

「……分かりました。今回もまたいつものメンバーですか？」

「いや、今日は俺ら二人だけ。タツミーは今回別のやつらとだとき。敵探すのめんどくさくなるけど、がんばろうや」

肩をすくめながら、薄く笑う。

龍宮は索敵がうまく、また得意な銃を使って、相手を仕留めつつ援護をこなすことに長けているので、彼女がいるいないで仕事のかどりようが違う。私たちは基本的に一緒に行動することが多いので、つい頼りつきりにしてしまったりもする（それがバレるとルーカスさんに叱られる）。

だがそれだけ、龍宮の実力は高く、三人の中では頭と言える存在だ。そんな彼女がいらないとなると、厳しくなるかもしれないな。

「刹那、そんな難しい顔をするな。そんな表情で仕事をすればいいのだぞ？」

その時、結界の解除を終えたのか、奥から現れたルーカスさんがそんなことを言ってきた。

「そうは言いまして、仕事では龍宮に助けられている部分も多い

ので、果たしてうまくやれるかどうか……」

これは今の素直な気持ちだ。私はかつてに比べたら、確実に強くなっているが、それでも単純な実力では兄さまに負け、どのような過去があつたかは知らないが戦闘経験で圧倒的に龍宮に負けている。

なので、ひよつとすると、今回の仕事でいさまの足を引つ張ってしまうのではないのかと不安になってしまうのだ。

けれどルーカスさんは、やれやれ、と首を振る。

「そうやって自信を無くせば、余計に出来るものも出来なくなるぞ。それに、俺だつて紅き翼にいたころは親友達はかともに助けられたりしながら仕事をしたんだ。

持ちつ持たれつ。それが人間の基本なんだ。一人でなんでもこなそうとして失敗するより、協力して成功させるほうが何倍も得なんだ。特に、いくらこの学園内とはいえ、下手をすれば命を落とすこの仕事は、協力することが必要不可欠だ。だからお前は、いつもどおりに構えていけばいい」

「……そう、ですね」

確かにルーカスさんの言うとおり、たった一人の人間に出来ることなど所詮は高が知れている。だからこそ協力をすることが大切なのだろう。

しかし、私は今まで、兄さまと会ったあの時から、ずっと誰かに助けられてばかりいるんだ。助けられても助けることをやれていない。

「変な意地張ったりするなよ。それで自分に迷惑がかかるならまだしも、他人に迷惑かけたら元も子もないんだからな。……ほら、そ

ろそろ餡蜜できるから、いいかげん木乃香たちのところにいったれ。」

そういわれて、お嬢様たちの方を見ると、お嬢様がこっちこっちと手をジェスチャーをしている。私は急いでお二人のところへ向かった。

その後ろで、ルーカスさんが厳しい表情をしているのに気づくとなく……。

side 正治

その夜、俺と刹那は二人でいつものように警備をして、発見した侵入者と戦闘を繰り広げた。といっても、今回の侵入者はたいした実力はなく、あっさりと片付けることができた。その後は、何事もなく見回りをして、警備終了の時間となった。

「今日は何事ありませんでしたね」

「そうだけとさあ、できればもうちつと出てきてほしいな。訓練的な意味で」

俺は軽いジョークを言いながら、刹那と会話しつつ帰ろうとする。まあ、訓練つてのはある意味では本音だけど。この1年の修行で、やっと刀子先生とグラヒゲ先生のコンビに本気を出させつつも、対応できるようになってきたのだ。鬼武者化すればおそらくは勝てるかもしれないけど。

だけど、俺としては、鬼武者化無しで刹那や木乃香に傷一つつけることなく、確実に守れる強さが欲しいから、やはりもっと敵との戦闘経験は必要だと思う。ルーカスさんに言わせれば、「無理に高望みするな」って言うのだろうけど。

刹那を送るということで、女子寮前までやってくるが、その時、なにかの気配を近くの森から感じた。敵意とか殺意といったものはないけど……。

「どうしました、にいさま」

「いや、なんかの気配がしたんでな。……気になるからちょっと見てくるわ」

「私もついていきましょうか？」

「別にそこまでのものじゃなさそうだし、それに女の子が遅くまで起きるの健康に悪いだろ。お前は戻ってていいぞ」

心配そうな表情でこちらを見る刹那の頭をなでてから、森のほうへと足を運ぶ。……そこまでのものじゃないって言ったけど、実際はどうかかわかんないからな。というか、刹那も一応気配の感知をルーカスさんに習ってるはずだけど……。しかも俺よりうまいし。……なんでだ？

しばらく気配をたどり、森を進んでいくと、遠くに人と思わしきモノがいるのが見える。自信の気配を押し殺しながら近づき、木に隠れて様子を伺う。

見た感じ、70歳は超えており、なぜか燕尾服のじいさんだ。口には白いひげがたくわえられており、高貴な雰囲気醸し出している。年の割りには背もまっすぐで、随分と元気そうだ。

だが、俺はこのじいさんの姿を見た瞬間、得体の知れない不安がこみ上げてきた。そして、そのじいさんからは人間の気配を感じることができない。

……ひょっとして、俺、まずいのを見つけちゃった？

「その少年、隠れてないで出てきなさい」

ッ！！バレたのかよ！？隠れるの、結構自信あるんだぞ！？……このまま白を切るか？

しかしじいさんから、そんな俺の考えを読んだかのように、強烈な敵意が、確かに俺に向けられた。この学園にいるほとんどに人間に勝るものだ。

さすがにこれ以上は無理だと判断し、おとなしく姿を現す。

「……………」

「……………」

お互い、黙ったまま、睨み合う。俺は額に汗をかきながら、あつちは余裕な表情でだが。そんな状況が続くが、じいさんが先に口を開く。

「いいかげん、喋ってはくれぬかな。黙りっぱなしはどうも苦手だな」

「……なら、あんたが何者なのか教えてくれるならいいぜ」

このぐらいは言っておいたほうがいいな。このままあちらさんのペースってのはいやだし。

「おや、それは失礼した。わしはネメシス・アリーウス・ド・ロウディアスという。元侯爵のしがない没落貴族さ」

律儀に会釈をしながら、自己紹介をするじいさん——ネメシス。没落したとはいえ貴族だった故か、かなりさまになっている。

「そりやどうも。俺は斉藤正治だ。中学3年ね。……で、その元貴族さまが、一体なんでこんなところに？」

「なに、簡単な任務だよ。この麻帆良の調査さ。どのくらいの魔法関係者がいるかとか、結界の状態を調べにね」

俺も自己紹介をして、ネメシスにたずねると、意外にも目的を教えてくれた。偽の情報っていう線もあるけど。

それにしても、なんで麻帆良を調べる必要が？……まあ『ここ』を潰したい奴らとかならいくらでもいるから、そういう奴らが依頼

したのかもしれないな。

ただ、なんでこんなあつさり教えるんだ……って、こういうときは、答えって一つだよな。

「…なんで、そんなあつさりと教えてくれるんでしょうか、侯爵様？ ひょっとして、冥土の土産にっつてやつですか？」

「それ以外なにあるかな？」

やっぱりかよ、と思ったのもつかの間。まさに俊足とも言つべき速さで俺に接近してきて、殴りかかってくる。それをとっさにしゃがんで回避する。拳は俺の後ろにあった木に当たり、へし折つてしまふ。

俺はすぐさま【天双刃】を装備して、相手と距離を取る。ネメシスはボクシングのファイティングポーズのような構えをしてこつちの様子を伺つように見てくる。

「【二刀連撃・斬空閃！！】」

天双刃を振るい、【斬空閃】を二つ飛ばす。しかしネメシスはそれをあつさりと回避すると、距離があるにもかかわらず拳を振るう。何をと思つたが、すぐさま危機感を覚えて横に飛ぶと、周りの木に凹みが出る。

ちくしょう、あいつ遠当てとか使えるのかよ！？ いや、これは拳圧つてやつか！？

ネメシスはまた拳を連続で振るい、俺に拳圧の雨をお見舞いしてくる。それを避けきれないものは天双刃で防ぎつつ、なんとか避ける。だが、圧倒的に拳圧の数が多く、近づくこともできず、技を出すこともできない。

しばらくは拳圧をなんとか避けていると、突然相手の攻撃の手が

やんだ。

「なるほど、そこそこは出来るようだな。……ならば、少々本気を
出すかな？」

そう言つて、右腕を後ろに引き、力を込め始める。かなりの量の
魔力がそこにたまっているのがわかり、それを止めようと接近する
も、残った左腕の攻撃が襲ってくる。数が減ったとはいえ、一発の
威力が高く、何より正確なのだ。どうしても回避に専念してしまう。

「それではいこうか……。【悪魔パンチ！！】」
デーモンツシエア・シュラーク

技が叫ばれると同時に振るわれた拳から放たれたのは、10mは
あろつかという光線ともいっても過言ではないものだった。

side ネメシス

わしが放った攻撃が少年を飲み込み、そのまま後ろの木々を文字
通り消し飛ばしていく。当たりには、砂埃が舞い、状況を確認する
のが難しいと言える。

「これはこれは、やりすぎたかな」

ついついそんなことを零してしまう。

今回、この麻帆良の調査のために召喚され、しばらく潜伏して調査し終えた時に、出くわしてしまった白い髪の少年。

結界の影響ゆえに全力を出せないとはいえ、わしの攻撃を避けることのできる少年について関心が沸いて、現時点で出せる力の半分をこめた攻撃を放ってしまった。

ただでさえ戦闘を行ったのに、このようなことをしたのだ。魔法使いたちにバレた可能性は十分高い。少年がどうなってしまったかは気になるが、ここは急いで脱出をしたほうが――。

「なめるなよ、くそジジイがああ――！」

叫び声が聞こえると同時に、今までとは違う質の力が出現する。

この感覚は……、鬼と呼ばれるものか？その発生源であろう存在が、こちらに向かって猛スピードで突っ込んでくる。

そして現れた姿は、短かった白い髪が腰まで伸び、肌は黒くなつた、異形と言える姿をした『鬼』だった。手には一本の強靱な力を放つ刀を持っている。

『鬼』はそれをまっすぐに構えてわしを貫こうとするが、そんな直線的なものにあたるわけもなく、右に飛んで避ける。しかし、『鬼』はわしの予想を超える速度で刀をこちらに振るってきた。

わしは力を込めた拳でそれと激突させる。ぶつかった瞬間、互いの力が爆発し、辺りを衝撃が襲う。そのあまりの力に体が硬直してしまう。

そこを『鬼』は連続で刀を斬りつけてくる。先ほどまでとは打って変わって、わしが防戦一方となっている。

だが、わしはそれに喜びを感じていた。なにせ力が弱まっているとはいえ、このわしをまがりなりにも追い詰めようとしているのだから。

『鬼』が叩きつけてきた攻撃を、大きく後ろに下がって回避するが、刀身から炎が出現し、それが蛇のようにわしを焼かんと向かってくる。それを威力を抑えた【悪魔パンチ】で防ぐ。お互いに拳と刀を構えなして、距離を保ちつつゆっくりと動いていく。

「くく、まさかここまでやるとは思わなかったぞ。まあ、妖怪だとは思わなかったがね」

「うるせえよ。こつちだって、悪魔だなんて思わなかったよ。俺は悪魔に縁があるのかもしれないよ」

そう言って、くつくつと笑いあう。なかなかに愉快な少年だ。わしは拳に、少年は刀に力をためていく。それにあてられたか、地面が揺れているかのように見える。

そして、互いに殺気を放ちながら、攻撃のタイミングを見つけようとしているときだった。

「兄さま！」

若い少女の声が聞こえてそちらを向けば、黒い髪をサイドポニーにした、野太刀を持った少女がわしに斬りかかろうとしていた。お

そらく戦闘の気配を感じて駆けつけたのだろう。

「なっ、刹那!？」

『鬼』は予期せぬ者の出現にあわてているようだ。態度からしてもどうやら兄妹なのだろう。

……ほんとうはこんなことはしたくなかったのだが、このままやられるわけにはいかないし、なによりせっかくの勝負に水を差したのだ。覚悟してもらわないとな。

少女が振るう野太刀を受け止め、がら空きになった鳩尾に軽く殴りつける。少女は苦悶の表情をして飛んでいくが、空中で体勢を立て直して着地する。

わしはそれと同時に少女に接近し、さっきのものより威力を上げた、確実に命を奪える一撃を見舞おうとする。

少女はこちらの速さに驚いて、体が硬直してしまっている。そしてわしの拳は少女に――。

――届くことはなかった。わしの拳を『鬼』は体で受け止めたのだ。いや、正確には貫いたというべきだろう。わしの一撃は、『鬼』の胸に大きめの穴をあけることとなった。

「い、いつてえな……こん……にやる……………」

このような状態でありながら文句を言うも、口から血を噴き出して地面に倒れる。いくら鬼でもこれでは生きていないだろう。

「に、にいさま……?」

少女は目の前で起きたことが理解できてないのか、倒れた『鬼』をただ呆然と眺める。わしはそんな少女に歩み寄り、拳を振り上げてその命を奪おうとするが、遠くから5つほどの気配を感じて止める。どうやら気づかれたようだ。

「……命拾いしたな、少女よ。もっとも、お前がこなければよかったのだがな」

実際、この少女が来なければ、ひょっとすると倒れていたのはわしかもしれないのだ。……ある意味では感謝したほうがよいのかな。そしてわしは、少女達に背を向けて、この場から立ち去った。

——まさか、この『鬼』が死んでおらんかったなど、露とも思わず。

第8話　焦りと不安　そして悪魔ふたたび（後書き）

なぜだろう、主人公がまともな勝利を得ていないような……。

まあそんなこんなで悪魔ネメシスさんとの戦闘でした。ちなみに彼はまた後で再戦します。

あと、刹那はヒロインです。だからあんなポジションなんです。だめな子っていわないでね。

それでは、また。

第9話　ちよつとした会議と鈍感馬鹿　そして原作直前へ……（前書き）

今回、書き方を少しだけ変えました。といってもセリフの間を一行空けただけですけど。

時間があれば他の話もそのように変える予定です。

今回のお話は時間が飛ぶところや話がとんとん拍子だったりします。あと、木乃香が原作とキャラ違うかもしれませんが、目を瞑ってね？なんて。

作者なりの下手なアンチ成分も含まれてますので、不快と思ったら飛ばしてください。

それではどうぞ。

第9話　ちよつとした会議と鈍感馬鹿　そして原作直前へ…

side　ルーカス

ワタシは今、麻帆良学園にある、一つの建物の中におり、その廊下を歩いている。

ここは、麻帆良内にて厄介な事態が起きた場合に対しての会議及び対処のために設けられた場所である。人払いの結界や盗聴対策などの対策をばっちりしているので、一般人が偶然近くに来たり、機械による探索も出来ないのも、安心して会議が出来るようになっている。

ところで、何故ワタシがそんな建物にいるかというと、それはつい三日前に起きた事件が原因だ。

三日前、麻帆良の警備の時間が終わりを迎えたそのときに、ある一角にて、戦闘が行われている気配（その時のワタシの感では悪魔の気配がした）を察知し、ワタシや近くにいた葛葉、そのた幾人かの魔法関係者がその場所に急行。

到着した時には、戦闘はすでに終わっていたが、周辺の木々は折れていたり根こそぎ無くなっていたりし、地面も衝撃によるものなのか、クレーターのようなものが出来ていたり、派手に戦闘をしていたのが丸分かりの状態になっていた。

そして、その近くでは、血溜の中に倒れ伏した正治と、全身に血を浴びた刹那があり、刹那は一心不乱に回復呪文を唱えていた。

ワタシたちはすぐ、正治と刹那の容態を確認、気絶していた正治（服の胸のあたりは大きく破けていたが、あいつの再生能力で傷は一切なかった）をワタシが預かり、刹那は葛葉に任せ、あたりの調査を行った。ただ、その時は何も出てこなかったので、正治と刹那

の回復が済み次第に、事情を聞くということになった。

その後、二日後に目を覚ました正治から事情を聞き、侯爵を名乗る悪魔と戦闘を行ったということが判明し、そのために学園内の魔法関係者を集めて急遽会議を開くということになった。

……あと、何故気絶していたかについては、刹那をかばってということだったが……。やはり、刹那のやつは焦っていたかな。どうも自分が役に立ってないと思っている節があったからな。

まあ正直、ワタシとしては悪魔がこの学園にいたということは由々しいとはいえ、それだけなら別段警備の強化などといったことで済むことだからいいのだが……。

あの時、正治は悪魔との戦闘のために鬼武者化していたらしいのだが、現場に駆けつけたとき、正治の鬼武者化が解除される最中であつたため、他の魔法関係者に正治の秘密がばれてしまった。

おまけに、あれだけの血が現場にあつたにも関わらず、正治に傷が一切ついてなかったことが、より化け物疑惑を持たせる結果となつてしまった。

おそらくだが、あの時現場にいたやつらは、今回の会議で正治のことも言及するだろう。あの小僧は化け物であることを隠して、この学園の者を騙して生活していたのだ……とね。もちろん、あくまで予想だが。

そうこう考えているうちに、人二人分はある扉の前に立って、その扉を開ける。その時にちゃんと挨拶も忘れないでしておく。

「ルーカスだ。来てやったぞじいさん」

「……普通、もっと畏まったセリフをいうところじゃろ？」

学園長の呟きを無視して、軽く100人は収容できるであろう部屋の中を見回す。

長机を四角形を作るように配置し、そこに魔法関係者——基本的には大人の魔法関係者のみ——がずらりと座っていた。

学園長、タカミチ、葛葉、神多羅木、ガンドルフィーニといった顔なじみから、ほとんど会うこともないような者まで、実に60人ほどが静かに座っている。ただし、名も知らない魔法関係者からはワタシに対して疑念や軽蔑の視線が向けられているが。

おそらく、『英雄』と謳われているワタシが、どうしてあのような『化け物』と一緒にいるのだろうか、という疑念がこのような視線となって現れているのだろう。だが、少しは隠すという気はないのだろうか？……あるわけないか。

もっとも、ワタシはあまり魔法関係者（顔なじみ以外）からは、あまり好かれていなかったがな。何せ師が『あの』エヴァンジェリンであること、彼らが大好きな『正義』に大してよい感情を持っていなかったりするせいで、受けは悪いのだ。

タカミチが手招きをして隣の空いている席を指差す。それに従い、その席に座る。ちなみに学園長とは比較的近い距離だ。

「さて、大方の者は集まったようじゃから、今回の件を話すとしてよいかの。……葛葉くん、頼めるかの？」

「はい」

学園長の声が静かな部屋の中に響き、呼ばれた葛葉が片手に資料

を持って、学園長の隣に移動し、説明を始める。

「つい三日ほど前、我が学園の生徒の一人がとある森にて、悪魔と戦闘を行いました。その後、生徒の話によりますと、その悪魔は自らを侯爵と名乗り、この麻帆良のことを調査していたと語ったそうです。接触した時にはすでに調査は終えていたらしいとのことだから……」

侯爵級の悪魔と聞き、その場にいる者たちに緊張が走る。

悪魔たちにも、ランク付けのようなものがあり、人間に呼び出すことができるのは下級悪魔と呼ばれる大した力を持たないものたちだ。

爵位を持っている悪魔というのは、そういった下級悪魔たちとは一線を画する存在であり、強さとしてはもつとも下の男爵でもただの魔法使いでは倒すことは不可能である。それらを呼び出すのにはそれ相応の力を持っているか、生贄を差し出す必要がある。

そして侯爵級は、その強さがあまりにも桁違いなことでは有名であり、たとえ悪魔たちを弱らせる結果の中であつたとしても、言つちや悪いが刹那程度の強さでは殺されるのがオチだ。

なので、侯爵級はめつたに呼び出されることはない、いわゆるレアモンスターみたいな存在であり、それが麻帆良のことを調べていたとなると、事件の裏にはよほど強力な組織がいるのではないかと推測されるわけだ。

……ワタシは、ぜひとも侯爵級とやらと死合^{たたかって}つてみたいがな。

「このことは、この数年の麻帆良においてはまさに大問題といえる事じゃ。この学園にいれば安心だという過信が招いたと言ってもよい。なので今回の会議ではこの悪魔を召喚した者たちについての調査や今後の対応に関してを——」

「学園長、申し訳ないですが、この場をお借りしてお伝えしたいことがございます」

学園長がこれからのことを話そうとしている途中で、一人の若い男の魔法先生が言葉をさえぎった。この男——今回は仮に男Aとする——はあの時の現場に居合わせた人物だ。

「……一体なんじゃ。この件よりもよっぽど大事なことのなの？」

そんな男Aの発言に、ゆったりとしながらも僅かに苛立ちを孕んだ声を出して睨み付ける学園長。この学園の最高責任者の言葉を途中で遮ったことからなのか、それとも悪魔の件を蔑ろにしていることなのかは定かではないが、それでも不満を隠そうともしないあたり、プチツときたようだ。

……おそらくは、正治のことに持つていくための質問をするんだろうな。『正義の活動』をやりたいがために

「その報告に関してですが、もし本当にその悪魔が侯爵ならば、ただの一生徒がどうして生き残ることができたのですか」

その一言に、部屋の中はざわつき始める。

確かに、『普通』の魔法生徒では、侯爵級と戦闘になれば抵抗も出来ずに殺されるだろう。その侯爵が遊び好きだとしてもだ。

だが、正治は侯爵級と戦闘を行い、生き延び、あまつさえたった二日で目を覚ましてしまったのだ。ワタシは何故そういう結果になったか理由は知っているが、知らない者からしたら、不可解極まりないだろう。

正治と刹那のこと（正治は能力のこと、刹那は半妖であること）を話していた数少ない存在である学園長とタカミチは、その言葉に苦い顔をする。

「『普通』の魔法生徒では、侯爵級に殺されるだけです。しかし彼、
齊藤正治は生きているのです。骨折どころか切り傷の一つ無くです。
一体、何故なのでしょう？」

「……つまり、なにが言いたいわけじゃ？」

「あの時、私は現場に居合わせましたが、偶然にも目撃したのです。
齊藤正治が鬼のような異形の姿から人の姿に戻るのを」

そして、男Aはワタシを睨みつけながら、正治のことを暴露する。
先ほどよりも騒ぎは大きくなり、学園長とタカミチは今その話題
を言うことかという顔を、同じく現場にいた葛葉や顔なじみは苦々
しげな顔をする。

名も知らない魔法関係者、特に若い奴らは怒りに沸いたような顔
で、「なんといいことだ!!」や「化け物が我らと一緒にいたのか
!？」と罵声を飛ばしてくる。

「……………いらつくな。」

「それで？そんなことがどうしたというのだ。……まさかと思うが、
正治を排除しろ、とか言うんじゃないだろうな？」

「当たり前ではないですか！あなたは何を仰います！？我々魔法使
いは『立派な魔法使い』^{マギステル・マギ}を目指し、『正義』のために魔法を使うも
のです！

だというのに、あのような『化け物』をこの学園に放置しておけ
と？冗談ではない！！人ではない存在を？ただでさえ『吸血鬼の真
祖』<sup>ハイ・デライトウォー
ーカー</sup>なんて『悪』の代名詞ともいえる存在がいるのですよ！？これ
以上の厄介事を学園に背負い込めと!？

そして、我々に『悪』をほうつておけと！？そんなことは認められない！！『悪』を滅するのが我々『正義』なのですよ！？『正義』こそ絶対なのですよ！？曲がりなりにも『英雄』と呼ばれるあなたがなぜそのようなことがわからな——！？？」

……ああ、本当にこいつらは！！

「正義正義と……！少し……静かにしろ！」

あまりにもうるさいので、『ほんの少し』殺気を部屋全体に放出させる。すると面白いように騒いでいた魔法使い^{クズども}たちがみな恐怖に身をすくめ、口を閉ざし、何人かは情けないことに気絶している。葛葉たちも顔を強張らせびくりとも動かない。多少余裕があるのは学園長とタカミチだけだ。

……黙って聞いていれば、ギヤアギヤアギヤアギヤア。正義正義正義正義正義と馬鹿の一つ覚えみたいに言いやがって……。

「な、なにを、おお、仰います……？わ、私の申したことは、決して、ま、ま、間違いでは……」

どもりながらも男Aは気丈にもワタシに反論してくる。

「貴様らの言葉を聞いてるとな、ただ『正義』を免罪符に自分たちの行動を正当化しようとしてるだけのよう^{マスタ}に聞こえてな。それに、ワタシの師匠^{マスタ}や正治のことを『悪』というが……、貴様らはただ、あいつらが自分たち人間と違うだけだから、排除しようとしているだけだろ？あいつら自身のことも考えずにな」

『正義』なんていうが、そんなもの、本当にあるかどうかなんて分らない。

歴史においては勝者こそが『正義』とされてきた。しかし、『正義』なんてものは人によっていくつもの顔を持っている。悪の組織が掲げる目標のほう^{マスタ}がよっぽど『正義』のように見えることなんていくらでもある。だから、決して『正義』を否定したいわけではない。

だが自分たちの『正義』こそ絶対だ。その『正義』を掲げる自分たちは絶対に正しい。そう思い、それを相手の事情に関係なく押し付けてくるような奴は大嫌いだ。そういう奴ほど、面倒^{マスタ}ごとを巻き起こすし、どこか狂ってるからだ。

こいつらの場合は、その『正義』に固執し、そして学園を守ることよりも、『化け物』である正治を排除するという手近に実感できる『正義』を得ようとしている。はつきりいつて胸糞悪い。

『悪』の定義にしたって、人と違う。ただそれだけで排除しようなんて、傲慢にもほどがある。

実際に悪い行動をしたわけでもないのに、自分たちと違うだけという理由で殺しにくる。そして自己防衛のために反撃すれば、それが余計に『悪』を助長してしまう。なんとも鬱陶しい連鎖だ。

そのせいで、『化け物』として生まれた存在は、一生を人から正

体を隠し、おびえながら生活をするはめになるのだ。

そして『正義』を名乗る者は、そんなことを気にかけてやらない目の前の男Aや他の魔法使いたちなんて、まさにその典型だ。さらに言えば、吠えることしか出来らず、自分より立場の弱いものにしか手を出さない弱い犬が『正義』という栄養分を欲しているだけにすぎない。

これをいらつかずにどうしろと？このような輩には釘どころか十字架でも突き刺して黙らせておかないと名。

「もし、これ以上正治や師匠のことを言及したり、あまつさえ手を出してみる。その時は、容赦しないと思え」

静かに相手の目を見ながら、しかし容赦無しに殺意という名の圧力^{プレッシャー}をかけて脅しをかける。これはすべての魔法関係者への脅しだ。男Aの顔は青を通り越して、正治も驚きの真っ白さになりながら（髪の毛も少し白くなってるように見えるが気のせいだろう）こくこくとうなづく。

ワタシにとって師匠^{マスター}はもちろんのこと、正治は同じ転生者とはいえ、10年も一緒にいる家族同然みたいなものだからな。……これで襲おうものなら、本気で殺しにかかるか。

「それでは学園長、どうも用件は済んだようですので、どうぞ会議の続きをお願いします」

「う、うむ。……………肝が冷えたわい……………」

なにやら汗を大量にかいた学園長が妙なことをつぶやいたが気の

せいだろう。

そうして、全員がなんとか動けるようになり、会議は再開された。

……そういえば、正治と刹那の奴、どうするかな。どうも正治が目覚めてから、刹那が妙にぎこちない感じがするんだよな。おそろくは自分のせいであいつがやられたことになが原因なんだろうが…。

さて、どうしたもんかね？

side 正治

毎度の事ながらこんにちは。斉藤正治です。今は現在の自宅とも言えるパンタシアの自分の部屋のベッドで寝ています。

悪魔ことネメシスとの戦闘において、俺は刹那をかばい胸を貫かれた。ただ、あの時は鬼武者化をしていたので防御力や精神力なんかが上がっていたおかげで、二日間気絶するというだけで済んだ。胸を貫かれたときに、肺はもちろん、心臓も一部やられかけたよ。うな気はしたんだけどね。本当に能力様様って感じだよ。……これが無かったら、死んでいたことを考えると、俺も未熟だなと思う。

っで、そんな俺だが、今はもしものことを考えて安静ということになり、それで今は木乃香が見舞いに来てくれてるんだけど……、
だけど……。

「セイ兄ちゃん。せつちゃんとなにがあつたん？なんか……、いけないことでもあつたん？せつちゃんなんかおかしいんよ。……もしセイ兄ちゃんが泣かすようなことやつたんなら……、なあ？」

ものすごく怖いです！！なんで神鳴流特有の白黒反転目になつてるの！？そしてその手にある金槌はなんですか！？というか妙に魔力を感じるのですが、ひょっとして無意識ですか！？素晴らしい才能です！……じゃなくて！？

「ナ、ナナナナナナニモゴザイマセンヨ？ワタシハナニモ、ヤヤヤッテマセンヨ？ホントダヨ？」

「……ほな、なんでどもるん？なんでカタコトなん？」

オチツケ！カナツチヲフリアゲルナ！！オレハアト1000ネンハイキタイノダ！！……はっ！？ここまでカタコトに！？

や、やばい。俺は普通に喋ってるはずなんだが？ていうかそんな

こと言われても、本当に心当たりないんですけど？

俺が目覚めたときには俺のそばにいてくれてたし、目覚めたことに対してなのか、「良かった……」って言いながら涙流してたし……、でも、その後に妙に怯えた顔で何度も謝られて、俺は気にしてないって言っても謝って、最後に、

「私なんかが兄さまというわけには……」

とかなんとか呟いて部屋から出て行っただんだよな……。

……。

……。

……あれ？俺が悪いところあるかな？……いや、あるかもしれないけど……、なにがどうダメなのか分からん。でもなあ、少なくとも悪魔のことが原因であつたとしたら、魔法関係だから木乃香には言えないしなあ。どうしろと？

「……仮にセイ兄ちゃんがなんもやってないとしても、せつちゃんを泣かすようなことやったんなら、ちゃんと謝ってな？」

いや、謝罪はしたんですよ？でもそれじゃだめだったんだけどな……ちゃんと落ち着いて話し合ったほうがいいのかな？あとで刹那の住んでる寮室にでも行けばいいかな。

「わあつたよ。刹那のことはちゃんと解決しとくからよ。とりあえず……金槌は下ろしてくれ。殺す気か？」

「ほんまやな？ほんまやな？もしちゃーんと、仲直り出来へんかったら……。わかつとるやろな？」

実に『にこやか』な顔をこちらに向けてくる木乃香。だけど手には金槌（いつの間にか両手に持っている）を見せ付けるように振り回す。……お父ちゃんこんな子に育てた覚えはありません！……じやなくて。

てか、いつの間に俺と刹那が仲悪くなったことになってんのよ？俺が『妹』と仲違いになろうなんて考えるわけないだろう。

まあ、これから思春期とかでいろいろと問題は出てくるだろうけどね。俺としては、恋のひとつでもしてほしいけどね。誰かい人いないのかね？

「……セイ兄ちゃん。なんやアホなこと考えとらん？」

あ、アホなことって。木乃香もずいぶん失敬なことをいうな。

「そんなわけあるか。ちよつと『妹』の将来のことを心配——」

「フンッ!!」

ガンツ！！

グフッ！？……のか……？　なんでかな？　づちでなく――？

まったく！！セイ兄ちゃんただアホなん！？あそこでどうや
ったああいう言葉が出るん！？

そりゃあ、兄ちゃんが昔からせつちゃんの『兄』として接してき
たのは分かるけど、最近のせつちゃんの言動を見て、なんで気づか
へんの？

「おかしい思わへん、千草さん！？兄ちゃんの鈍感具合は！？」

お店の一席で千草さんに愚痴りながら、たまった怒りを放出させ
るように叫ぶ。千草さんには悪いけど、これが一番なんよ。

でも、ほんまありえへんわ！？兄ちゃんって、ひよつとしてラブ
コメの主人公が漫画から飛び出てきたんと思うくらいの鈍感やし！？

「落ち着きいやお嬢様。確かに正治の鈍感をこの目で見てきたうち
も言いたいことはようけえあるけど……」

昔のことを思い出したんか、千草さんが遠い目をして空を見上げ
る。そう、兄ちゃんの鈍感は今に始まったことやない。

まだ京都の実家のお屋敷に居った頃、うちらより2歳ほど年上の
神鳴流の門下生の女の子が、顔真っ赤にして兄ちゃんに手作りのお
菓子（結構気合がはいつとった）を渡したのに、「最近のお菓子っ
て出来いいな。どこで売ってたの？」と、とんでもないこと言つて
女の子泣かしたり。

似たようなことで、店に来とる女性（おそらく脈ありやった）がプレゼントで渡した大きなホールケーキ（所々不恰好やったから多分これも手作り）を、なんや店に対してのものと勘違いして、それを切って皆に配りよったり。

これ以外にもいろいろとあるけど、とにかく全部のイベントを勘違いとか思い違いとかでスルーしよる。……こう考えると、兄ちゃんって女性関係、結構ひどいな。わざとちゃうのが余計に。

「なんで兄ちゃんって、こんなアホみたいに鈍感なんやろうな？」

「さあ？もしかすると、神様とかそれに近いお人がなんか頭いじくつたんとでもちやいます？」

「ああ……。なんやそう言われると、妙に納得してまうなあ」

ほんまにそうやってたりしてな。てか、そうやないとおかしいにもほどがあるしな。……まさかなあ？

……でも、なんでせつちゃんあんなおかしいんやろう？多分兄ちゃんとなんかあったんやろうけど……、よう考えたらうち、何があったんか知らんのよな。ルーカスさんも千草さんも「面倒事があっただけ」言っし……。

うちには言えへんことなんやろうか？前々から、皆がなんや隠しとるんは知つとったけど……、いったいなんなんやろ。いつか言ってくれる日が来るかな……？

それから、兄ちゃんはせつちゃんと関係修復をしようとは回も頑張ったんやけど……、せつちゃん、稽古を理由にして避けとるみたい。最近やとうちらといえることも少なくなってきたもつたし……。

結局、せつちゃんのことを解決せえへんまま、冬が来て、三学期が始まって……。

side ???

……久々にこっちに帰ってきたな。やっぱり故郷……ではないが、自分がしばらく育った場所だと思つと、感慨深いな。

なんて、思い出に慕つてゐる場合じゃないな。早くしないと卒業式が始まるな。

終わりであり、そして始まりである卒業式が。『あいつ』にとっては『物語』が始まる日ともいえるわけだ。

まあ、今から行くであろう場所やこれから起きることを考えると、面倒事のオンパレードというべきだけだな。……『英雄』を育てたいとか思ってるぬらりひょんのせいに思えない気もしないことはないが。しかし、『この世界』はオレの知っているのとは違うからな。

「だが……、それがどうした。オレには関係ない……」

オレはただ……、償いたただけだ……。

第9話くちよつとした会議と鈍感馬鹿 そして原作直前へ……（後書き）

はい、そういうわけでたいした話でもなかった第9話でした。

『正義』に対してのアンチとしては、それを理由に好き勝手する連中には容赦ないですが、それ以外には甘かったです。所詮はミズビジキクオリティ。

正治は鈍感。これは絶対です。絶対です。絶対なんです！！ネギまは一応ラブコメですしね！？

ルーカスさんはいい人。ふざけてるけどいい人。これも絶対です！

このかは……、気にしないでください？

正治と刹那の関係に関しては、詳しくは今度の話の正治視点で。あとがきこんなのしか書いてない気がします。

最後の???さんは、ようやく登場あの人です。そして原作最重要キャラに深いかかわりのある人です。……出番がひよっとすると多くなる存在です。

それでは、次回ついに原作突入！！……するはずなので、よろしく願います。

ここまでお付き合いしてくださり、ありがとうございます。では。

第10話　スプリングフィールド　兄と二人の弟？（前書き）

遅くなりました。やっと更新です。話はあんまり進んでないけど！！

PVが60000越え、ユニークが8000近くまで達しました。

……正直、驚いた。こんな作品でもここまで見てくれる人がいるんだなど。

これを読んでも読者の皆様には、『ありがとう』という言葉しかいえませんが、本当に感謝です。

こんな作品ですが、これからも見守ってください。それではどうぞ。

第10話　スプリングフィールド　兄と二人の弟？

「卒業証書授与——、この七年間よくがんばってきた。だがこれからの修行が本番だ、気を抜く出来ないぞ。……ネギ・スプリングフィールド君！」

「ハイ！」

イギリスのとある山奥。そこにあるメルディアナと呼ばれる学校にて、卒業式が行われていた。ただ、ここにいるものはみな、ローブやマントを羽織り、手に杖を持っている者もあり、『普通』の卒業式でないのが伺える。

そう、何せ今ここで行われている式は、魔法使いの見習いともいうべき子供たちの卒業式なのだ。普通と違うのは当たり前だ。

そんな式の中で、ネギと呼ばれたショートヘアの赤い髪の後ろを纏めた、鼻眼鏡をかけた少年が壇上に上がり、立派な長いひげを蓄えた校長から卒業証書を手渡される。そうして次々と生徒たちの名が呼ばれていき、しばらくの後卒業式は幕を下ろした……。

「ふいふ、やっと終わったわね……。さつてと、私の修行はどんなのかな？」

学校の廊下で、ネギと赤毛のロングヘアの少女——アーニヤ、金髪のロングヘアのネギの親戚の女性——ネカネが並びながら歩き、アーニヤは伸びをして手に持った卒業証書を覗き込む。すると紙に

ポウツ…と僅かに明かりが点ったと思えば、文字が浮かび上がった。
きた。

「ロンドンで占い師か……。思ったより普通の内容ね」

「普通はそんなものだよ。あんまり無茶な修行は見習い程度には危険だと思っし…」

「でも占い師って結構いいんじゃない？アーニヤちゃん昔から得意だったから」

「ふふん、やっぱりネカネお姉ちゃんもそう思う？さすが私よね、なんて」

ネカネの言葉にアーニヤは気分を良くし、腰に手を当て胸に沿ってどこからえらそうにする。自分の得意分野を誉められることがとても嬉しかったのだろう。ネギとネカネはどこか苦笑いをしながらも微笑ましく見ている。

「……よく言うよ。オレのこと占ったときは、どれもこれも外してたくせによ？」

そんな時、3人の後ろから少し低めの『女性』の声が聞こえてきた。

「ナツ…！？だ、誰よそんな失礼なことを言うのは！？」

3人とも一斉に、特にアーニヤは凄まじい剣幕で後ろを振り返る。そこには、身長180cmほどの、太ももまで届きそうなクセひとつない金髪のポニーテールに青い瞳の、10人中10人が美人と

答えるであろう『女性』が腕を組んで立っていた。

その人物を目にした3人は、一様に驚いた表情をする。『女性』その反応に満足しているのか、ウンウンと頷きながら右手が上に向くようにシユタつと伸ばす。

「ようネギ、アーニヤ。二人とも卒業おめでとう」

「『ユーリ兄さん（君）！？』『』」

ネギとアーニヤはオーバーリアクションをしながら、ネカネは口
に手を当てて、同時に相手の名前を叫ぶ。それを見た『女性』…改
めて男性、ユーリはハハハと笑う。

「まったく。お前ら相変わらず元気してんな。オレにもぜひともわ
けてほしいもんだよ」

「いやそれよりも兄さん！いつこっちに帰ってきたの！？連絡一切
なかったけど！？」

軽い感じで話をするユーリを無視し、大きな声で質問をするネギ。

「そんなの驚かせるため以外に何があるよ？サプライズってやつだ
よ」

「そ、そういうものの…？」

大げさに手を広げて無邪気な笑顔で答えるユーリ。見た目がすご
く美人なだけに、男であることが大変悔やまれる光景である。

「…フフツ。ユーリ君もあんまり変わってないわね。いつも元気で

うらやましいわ」

「まあオレだからね。……しかし本当に月日つてのは早いもんだねネカネさん。もう二人が卒業する日になるなんてな。新たな門出って感じでとっても嬉しいよ。……そういうわけでネカネ姉さん」

「んっ、どうかした……キャッ!？」

お互い昔を懐かしみ、どこか遠い目になるが、ユーリは唐突にネカネの腰に手を回し、自身に引き寄せる。突然のことで驚くも、身動きが取れないようにガツチリと体を抱きしめられてしまい、さらに顔を首筋付近まで持つてきて匂いをかいでくるので、体がビクツと反応してしまい、余計に混乱してしまふ。ネギやアーニヤは目の前で繰り広げられている光景に顔を真っ赤にしながらも目を逸らせずにいた。そして首筋に埋めていた顔を耳元まで近づけて囁く。

「どうだろう、今日という素晴らしい日を祝して、オレと二人っきりで食事しないかい?……もちろん『夜』のほうも、バツチリとね……」

「ヘッ?……!?!だ、ただただダダ駄目よユーリ君!? 私たちは夫婦でも恋人でもなくって、そもそも親戚だし第一ユーリ君はまだ16歳だしそれから——!」

「血縁関係も年も関係ない。オレはただ、姉さんがこの上なくほしだけさ」

あまりにも突拍子もないことに、顔を茹で上がっているかの如く真っ赤にして否定をするも、それをさらりと受け流されて、そして唇を近づけ——。

「アーニヤフレイムキ~~~~ック!!!」

「モゲロツ!？」

——る前にアーニヤが炎を纏ったとび蹴りが見事にユーリの顔面に直撃し、コマのように派手に回転しながら廊下を転がっていき、数十メートルほどのところで動きが止まった。

ネギとネカネは啞然としながら、アーニヤは顔を真つ赤にしながらユーリを見つめる。しばらくすると頭から血を流しながらも片膝をついて拳を頭上に突き出すが、それから動こうとしない。

何事かと思っていると、小さいながらもはつきりとした声でぽつりとつぶやく。

「我が人生……、一片の悔いは……、数え切れないくらいありました冗談やってごめんなさい……。グフツ。」

「兄iiiiiiiiさああああん!!!!!!」

「何かにマチガイではないのですか？10歳で先生など無理です!」

「そうよ、ネギったらただでさえチビでボケで間抜けで……!」

「アーニヤ言い過ぎじゃない!？」

「いや、大体あつてる」

「ひ、ひどいよ兄さん!？」

あの後、臨死体験をしてきたユーリを加えた一行は現在、校長に抗議をしている最中であつた。若干一名ほど自身の言われ様にへこんでいるが。

なぜこのような抗議をしているかというと、ネギの卒業証書に浮かび上がった修行内容が、『日本で先生でやること』という、今まで事例のない内容だつたからだ。

いくら卒業証書に書かれたこととはいえ、まだ10歳であるネギが異国の地で先生をやるなど、あらゆる点から考えても無茶なことである。だからこそ抗議をしたのだから。

「しかし卒業証書にはそう書いてあるのなら、決まったことじゃ。立派な魔法使いになるためには、頑張つて修行してくるしかないのう」

そんな抗議も、校長は卒業証書が決めたからと、やんわりと却下する。それを聞いたネカネは顔を青くし、頭を抑えながら倒れそうになるが、その前にユーリによつて受けて止められる。その光景を見ながらもネギは、意を決した表情になり、力強い目で校長を見る。

「……わかりました!必ず無事に修行をこなしてみせます!!」

「うむ、大変じゃと思うが頑張るのじゃぞ。修行先の学園長はわしの友人じゃから少しは安心していいぞ」

元気よく修行を了承することにしたネギに、校長は満足げに微笑

む。

「……なら、オレも準備しないとな」

そこへネカネに肩を貸しているユーリが神妙な面持ちで話に入ってくる。

「えっ、準備って…、兄さん何の話？」

「なについて、オレもその修行先に一緒に行くんだよ。だからその準備」

またもやオーバーなリアクションをしながら、ネギは本日二度目の叫びを上げる。学校中に響くかと思われるほどの大声である。あまりのリアクションに顔をしかめるユーリ。

「なんだよ？ひょっとしてオレが一緒じゃ嫌か？」

「別にそういうわけじゃないんだけど、でもやっぱり不思議に思うじゃない？兄さんなら『このぐらいの試練を乗り越えず何が男だああ！』とか言ってくるかと思ってたから」

「……お前の中のオレはどういう人間になってるんだ？まあ、さすがに１０歳に先生なんて無茶苦茶だからな、サポートぐらいしてやるうかと思ってるね」

「本当！？ありがとうさん！」

よほど嬉しかったのか、ピョンピョンとユーリの周りを跳ねながら無邪気に笑うネギを小動物でも見るような目で見やるユーリ。

「さ〜て、そういうわけだから早速……、ネカネ姉さんを看病しないとな」

「……あつ」

今まで自分の姉のことを忘れていたことに気づき、顔を青ざめる。

「そ、そうだった！お姉ちゃんをベッドで休ませて上げないと……
！！」

「それが先決だな。それじゃあ今すぐホテルの個室を取って――」

「なんでホテルなの！？あんた何かする気満々でしょ！？」

「H A H A H A。別に何もしないよ。……ナニかはするかもしれないけど」

「私のこの手が真っ赤に燃える〜〜〜！！！！エロバカ倒せと轟き叫ぶ〜〜〜！！！！」

「ちよつ、アーニヤなんでそのネタ知って……ギャアアアアアアアア……！！！！」

「兄iiiiiiiさああああん！！！！！！！！」

……とっても平和な光景が繰り広げられる今日この頃。

こんな日から月日は過ぎていく……。

side アスナ

「うーん、時間は合ってるんだけど……、まだ着いてないのかな。もう少し待つかもしれないけどいいかな？」

「わ、私は全然大丈夫です！3日間だろうと待てます！！……高畑先生と一緒に……」

「ん？なにか言ったかいアスナ君？」

「い、いえ別に！？」

……はあ……、よかった聞こえてなくて……。聞かれてたら恥ず

かしくて悶死してたかも……。

こんにちは、神楽坂明日菜です。今私は高畑先生と一緒に駅にいます。

何で駅にいるかというと、学校が休みの今日、朝から一人で麻帆良を散歩していたら高畑先生を見かけて話しかけたら、何でも新しい先生を迎えに駅に行く途中だったらしく、それでつい一緒に行きますと言ったからだ。……高畑先生と一緒にいられるし。

それでついさっき駅に着いたのだけど、先の言葉の通り、本来なら午前10時には会う予定だったのだが、どうもあつちはまだ着いてないようなので、しばらく待つことになったのだ。

ただ待つだけなんだけど、私は高畑先生と一緒にいるせいで心臓がバクバクと鳴っている。…別に何か話しているわけでもなくお互い無言なんだけど。

な、なにか話しかけたほうがいいかな？……そうだ、新しい先生がどんな人が聞いてないから、それを聞けばいいんだ。これからお世話になるかもしれないし。べ、別に高畑先生と喋っていたいとかじゃないから！

「あのおう、新しい先生って、一体どんな人なんですか？」

「新しい先生かい？手違いさえなければ英語を教えることになるはずだよ。何せイギリス出身の人だからね。ちなみに赴任するのは二人だよ」

へー、イギリスの人なんだ。てことはタバコの似合う金髪の渋いおじ様だったりするのかな？それとも綺麗な女性の人かな？……でも英語ってことは、私は悪い意味で目立つな。うう。

でも、こんな時期に二人も新任で入るのって、珍しいわね。普通ならもっと早い段階でくるものじゃないの？

「それと、今度からその二人が2 - A、ひいては3 - Aの担任と副担任になる予定だから」

「そうなんですか…… って、高畑先生はどうするんですか!？」

今の2 - Aの担任は高畑先生なのに!？」

「僕は担任って言っても学園の事情で出張することが多いからね、これを機に担任を降りて、そっちの仕事に専念するつもりだよ」

「えっ……?……… でええええええええええ!!!!????」

あまりの事実には恥も外聞もなく大声で叫んでしまった。周りの人はなんだとこっちを見てくるが、今の私にはそんなことどうでもよかった。

た、高畑先生が担任辞めるって……!?!?確かに学園の仕事ってことで出張が多かったけど、それでも中学卒業まではずっと担任だと思ってたのに!!ただでさえ会うことが少ないと思っていたのに余計に少なくなるじゃない……!

クッ…、この苛立ちと悲しみはどうしたらいいの?…… 怨むべくはこの学園?それとも新しい先生たち?

その時、周りの人たちのざわめきが大きくなったような気がした。一体なにかと思い顔を上げてみると、電車からとても長い金髪をポニーテールにした女の人が降りてくるのが目に入った。…… よく見ると、そばには大きなバックと何か背丈ほどある布で包まれた何かを背負った赤毛の眼鏡をかけた男の子もいた。

クセ一つない綺麗な金色の髪を揺らしながら歩くその様は、綺麗でいて、どこか威風堂々とした感じで、どこかの女王様って言われ

ても不思議じゃないくらいだ。同じ金髪でお金持ちのいいんちよなかよりもずっと様になってる。周りの人たちもその姿に見惚れているみたい。

……なんとなく、その姿にデジャブというか、誰か知ってる人を出すような気もするけど……。気のせいかな……？

そんなことを思っていると、その女性と目が合った。

私を見てなんだか驚いたような表情をしたけど、すぐに表情は戻り、次に高畑先生のほうを見て、そしてまた私の顔を見て、威風堂々とした雰囲気は無くなり、どこか意地の悪そうな顔でニヤリと笑う。……あの笑顔にも覚えがあるのはどうしてだろう？そしてこっちに向かって走ってきて……。

「久しぶりタカミチ……!!」

高畑先生に嬉しそうに、顔を赤らめて抱きついてきた。180センチはあるつかという意外と高い身長をいかして体に腕を回して顔を首筋に埋める。

いや、そんなことはどうでもいい……。なんで、高畑先生にあんなふうに、抱きついてるの!?

「あ、あのユー……」

「元気にしてたかしら？まだタバコ吸ってるの？あれは健康に悪いからやめなさいって言ったわよね？私と愛し合ってた頃からなんにも変わってないわね？」

へっ！？あ、愛し合ってた！？

「い、いやいや！？君は何を言ってるんだい！？」

「何をつて何よ！？まさか私との甘い日々を忘れたとか言うんじゃないでしょうね！？こんな子供も生ませておいてそれはあんまりじゃない！？」

「へっ！？い、一体なに言ってるのに…モガッ！？」

困惑している高畑先生をよそに、目から涙を流しながら近くまで来ていた男の子に抱きつく。……口を手で塞いでいるけど。

この光景を見てる人たちは、「マジかよ…」とか「あのおっさん最低だな…」とか「修羅場！？まさかの修羅場！？」とか……、最後絶対楽しんでるわよね！？で、でも、これって本当なのかな！？女性はその後しばらくめそめそと泣いていたが、突然キッと私を睨みじつと身体を眺める。そして高畑先生のほうに憎悪で塗り固めたような顔を向ける。

「まさか……、あなたが若い娘大好きおじさんだとは知っていたけど……、新しい女を作ってるなんて！？私の身体を散々弄んどいて用が済んだら捨てるの！？やっぱ若い娘のほうがいいの！？それとも胸なの？私が巨乳ならぬ虚乳だから！？」

もはや顔の原型をとどめてないんじゃないかと思うくらいの歪んだ表情で胸に手を当てておいおいと泣く女性。

対する高畑先生は、先程までの困惑した表情は消えて、能面を貼り付けたかのような顔で女性を睨みつけている。……目はものすごく怒りに燃えている。そして女性の近くまで歩み寄って――。

ゴン！！

拳骨を食らわせた。手が光ってるような錯覚が見えるほどに鋭い一撃だ。

「ツツツ！！イッダアアアアア！！おいこらタカミチてめえなにすんだよ！？痛えじゃねえか！！」

女性は頭を押さえながら、今までと違う、男のような口調で牙をむき出しにして高畑先生に食って掛かる。赤毛の男の子はオロオロしている。

「それは君に悪ふざけがすぎてるからじゃないかユーリ君？」

「おいおいコレぐらいは大目に見ようやタカミチさんよう？『これがブリテンジョークなのか！？』って感じで返せばいいじゃないか？」

「…………ハア。君は本当に変わらないね。根は案外まともなのにそうやって妙なキャラ作って…………」

「いやいや、何を訊わかんないこと言ってるの？これがオレだぞ？てかお前にどうこう言われる筋合いはねえ」

「…………まあそれもそうだね。今はこんなこと言ってもしょうがないか。…………それじゃあ気を取り直して…………。久しぶりだねネギ君。あ

とごめんね、ずっと無視していて。」

「久しぶりタカミチ！……それと、無視してたのは気にしてないよ。兄さんと話をするとかんな感じになるし……」

あ、あれ？なんだかどんどん話が進んでいつてる？てか兄さんって……、この女の人の事？それと高畑先生と親しくしてるこの男の子はなに？それよりも新任教師2人って……まさか？

「あ、あの……、高畑先生？新しい先生って……まさかこの2人ですか？」

恐る恐るに尋ねてみる。できれば間違いであるといっけてほしい。というかそうじゃないといけないと思う。だって一人はどうみても子供だし、このじよせ……お兄さんも改めて見ると私と年が近いように思えるし……。

「そのとおりだよ。ネギ・スプリングフィールド君とユーリ・スプリングフィールド君。この2人が新しい教師であり、2・Aの担任だよ。ユーリ君が担任でネギ君が副担任をすることになってるよ」

う、嘘でしょ……！！

というより、いつから日本は子供を教師にするようになったの！？確か労働基準法だっけ？あれに違反してない！？外国の人だから？そんな理由にならないでしょ！？こんなふざけた人と子供のために高畑先生、担任やめるの！？

あんまりな事実にも目の前が真っ暗になり、膝と手を地面につけて落ち込んでしまう。

「あ、あの……、どうかしたんですか？」

「……………うるさいはなしかけないで。なんであんなにたまたまなんかが………」

「おいおい、そんな落ち込むなよお嬢さん。………って、もう時間だな。そろそろ学園長に会いに行かないと………、タカミチ。この子連れてくなら担いでいけよ」

「ん、そうだね。君が変なことしなければもっと早くいけたんだけどね……。アスナ君、ちよつと失礼するよ？」

あゝ、なんだか高畑先生に肩に担がれている気がする……。幸せだけど、これからのことを考えると不幸だ……。幸

side 学園長

麻帆良女子中学にある学園長室にある机で、お茶を飲みながら机の上にある書類を眺める。これからこの学園で教師として働くことになるネギ君とユーリ君に関する書類だ。この書類は2人の母校のメルディアナ魔法学校から送られた学校内での成績表じゃ。ユーリ君は今から数年前のものになるがの。

「ふむ……。ネギ君は成績優秀で主席卒業の将来有望な少年、ユーリ

君は魔法の才は低いものの、その他は優秀な成績を収めておる……か」

ネギ君とユーリ君の2人は、多くの魔法使いたちから『千の呪文
マスター
の男』と呼ばれ、表舞台から姿を消した今でも『英雄』として名高いナギ・スプリングフィールドの实の息子たちじゃ。

ナギは実は覚えておった魔法自体は5、6ぐらいしかなかったが、圧倒的魔力や反則的なまでの強さを持つておったからの。それが遺伝したとを考えても不思議じゃないの。……頭脳に関しては確実に『母親』譲りじゃがな。

次にあちらの教師たちによる素行に関してのことが書かれている欄には、ネギ君は真面目な優等生、ユーリ君は不良な優等生と記されておる。

ネギ君は授業をきちんと受け、同級生たちにも勉強を教えていたり、やって良いこと悪いことはちゃんと判断できているとのこと。……わしの友人であるメルディアナ校長の話によれば無断で禁書庫の本を読んでいたそうじゃがな。

対するユーリ君もネギ君と似たような生活を送っておるのじゃが、先生たちの語る正義や立派な魔法使いの考えを否定することが多かつたらしく、それゆえに不良扱いされ、教師からは受けは悪い。どう考えても教師たちの私情が混じった評価じゃな。

性格に関しては、ネギ君はドジをしたりするも真面目な良い子で、ユーリ君はおちゃらけた感じの女好きの男の娘とのこと。……男の娘とはどういう意味じゃ？ 正反対の性格じゃが、兄弟仲は良好らしく、ボケのユーリ君に突っ込みをいれるネギ君という構図はもはや定番の光景だったとのこと。……それってどうなの？

ただメルディアナ校長の話によれば、『あの事件』が起こる前まではユーリ君はネギ君がどんなに話しかけても相手にせず、あまつさえネギ君を痛めつけるほど仲が悪かったそうじゃ。……いつたい

なにがあつたんじやろうか？

「まあ人は皆何かを抱えておるしの……。余計な詮索はするべきではないの」

一人、窓の外を眺めて呟く。そのとき、コンコンとドアがノックされる。

「学園長、タカミチです。ネギ君とユーリ君を連れてきました」

「分かった。入ってよいぞ」

わしの許可の言葉とともに、タカミチくんが入室し、そのあとに続いてユーリ君、ネギ君の順に入ってくる。なぜかユーリ君の背中にはぶつぶつと小声で呟くアスナ君が背負われておる。

「あゝ、タカミチ君。アスナ君はどうしてユーリ君の背に？」

「えっと、これはですね。僕と一緒に二人を待ってたんですけど、突然こんな風に落ち込んでしまって……。それで最初は僕が運んでいたんですけど……」

そういつてチラリとユーリ君のほうに目をやる。その視線に気づいたユーリ君は照れた表情でははと笑う。

「いやゝ。こうなった原因はオレらにもあるような感じがしたんで、タカミチに運ばせるのは悪いかнаつと思つて変わりにオレが運ぶことにしたんですよ。ついでに、背中越しに感じる胸の感触でも体験しようかなゝゝって思——」

「…………ふつげんじゃないわよ……！！！！」

「アダモツ！？」

どうも不埒なことを考えておったユーリ君は、覚醒したアスナ君の強烈な一撃を脳天に食らって、床を転がりまわっておる。……自業自得というべきかの？まあ、今は彼をほうっておいてもよいじゃろ。

「……始めましてじゃな、ネギ・スプリングフィールド君。わしはこの麻帆良学園の理事長を勤めておる近衛近右衛門じゃ」

「あ、はい始めまして。こちらでお世話になりますネギ・スプリングフィールドです。こちらこそ修行の件でいろいろと迷惑かけると思いますが、兄共々よろしくお願いします」

……ふむ、実に礼儀正しい子じゃな。数え年で10歳とは到底思えないのう。これは将来が楽しみな子じゃな。

「いや、アスナちゃんだったか？胸の感触は実によかったよ。夜のお努めが楽しみなものだったよ……」

「よ、よよよるって……！？あ、あんたなんてこと言ってるのよおおお！！！？？」

「あ、ちょ、落ちて着け冗談だ冗談！！だから殴りかからないで……
……ド……ワ……！！！！」

……とりあえず、彼はもうちつと、自重するということとをわきまえたほうがよいの。

side アスナ

「まったく……、なんで弟は真面目なのに、兄はこんななの？」

「それは兄さんだから、としか言いようがありませんよ。僕には女性に優しくって言うてるのに肝心の自分がセクハラとか変な発言とかいろいろするし……」

「ハッハッハ。そんなほめるなよ、照れるジャマイカ……ごめんすまないゆるして。だから冷めた目でこっちを見ないで？」

学園長室をあとにした私は、アホの兄貴に冷たい視線を送りながら、二人を連れてパンタシアのある場所に向かう。理由は新任教師であるうちの一人のネギって子を私たちの寮室に住ませるどうかを、このかと話すためだ。

学園長曰く、二人の住む場所を決めてなかったんで、せめてネギを私たちの部屋に住ませてもらえないかとのこと。なんで決めてなかったと聞けば、どうも教員寮で開いている場所は無く、他も見つからなかったそう。だからせめてネギだけでもとのことだ。

私としては、ガキと一緒にの部屋に住むってのはあまり気が進まないけど、親のいない私を世話してくれた学園長の頼みだから断りづ

らかったので、せめてこのかと話し合ってからということにした。
今の時間なら多分パンタシアで正治さんと刹那さんのことで話をし
てるはずだろうし。

ちなみにエロバカの兄の方はしばらくホテルに泊まるそうだ。

「しっかし、この麻帆良つてずいぶんと凄いよね。町はめっちゃ
ちや広いし、でっかい木はあるし、そんでもって美人がいっぱいだ
しー!」

「兄さん…、最後のほうで無邪気な笑顔にならないで……。でも、
凄いつてのは分かるなあ。皆元気で賑やかだし。これからここで生
活してくのかって思うと、ドキドキするなあ」

「そういつてもらえると、私のことみたいでなんかうれしくなるわ
ね〜」

うんうん。やっぱり小さい頃から住んでる町が褒められるのは気
分がいいわね。

しっかしあらためて見ると、この二人って兄弟って言う割りには
ぜんぜん似てないわね。お兄さんのユーリってほうは見た目完全の
女性だけど、女の子に変なことする奴で、弟のネギは年の割りにず
いぶんと真面目だけど、どこか背伸びしてるって感じなのよね。
…てか、10歳で教師つて、ホントどうなんだろう?

「ねえねえ、なんであんたらここで教師することになったの? てか、
法律とかの問題とかないの?」

「ああ、ネギはちつとばかり天才でな、これでも大学卒業程度の頭
脳持つてるんだよ。それで、ちょっとした実験で麻帆良で教師をす
ることになったんだよ。オレはその補佐でついてきただけ。だから

「一応大丈夫なんだよ……、多分」

ゲッ、なにそれ？こいつが天才？…世の中って、とんでもないのがあるのね。……内容がどこか違和感あるけど……、気にしすぎかな？…っと、もうそろそろパンタシアにつく頃かな？このかまだいる――。

「セイ兄ちゃんのドアホ〜〜〜〜！！！！」

・・・。
・・・。
・・・。
・・・。
・・・。
・・・。

「な、なに、今の大声？」

「とりあえず、女性の声であるのは分かる。それと何かに怒ってるみたいだ」

突然の大声に困惑気味の二人。ただ私はあまり驚かない。なにせ、探している人物の声で、しかも最近をよくあることだからだ。それでも恐る恐る、パンデシアが見えるところまで移動すると……。

「なんでセイ兄ちゃんそんなこと言うん！？頭おかしいんとちゃう！？」

「どこがだよ！？ありえないって言ったらありえない！いったいどこをどうしたら刹那が俺に惚れる！？あと、このドデカハンマーをどうにかしろ！てかどっから出した！？」

「うつさい！！アホで鈍感な兄ちゃんはこの魔鉄槌で成敗せなアカンって電波がピピピってきたんや！せやから大人しゅう殴られえな！！」

「そんな電波を拾うな！あと誰が鈍感だ、誰が！？ついでにその目になるな！！」

白と黒が反転した目でデッサンハンマー（横に2つつて書いてある）を殴ろうとしているこのかと、それを受け止めている正治さんが必死の形相で対峙していた。端から見るとどこか滑稽だけど。……正治さん、またなにかやらかしたのかな？

「……おいアスナちゃん。あれはなんだ！？それと、あっちの白い髪の毛の男は……？」

この光景に驚いたのだろう。ユーリが指をさしながら尋ねてくる。ただ、どっちかっていうと、正治さんのほうを気にしているようだけど……。やっぱりアルビノが珍しいからかな？

「あれは気にしないほうがいいわよ、最近じゃあ定番の光景になりつつあるから。っで、あっちの白い髪の毛の人は斉藤正治さんって名前、あの店の従業員の一人なの」

そう説明した途端、ユーリは突然このか達のほうへ駆け出していた。……どうしたのかしら？

「——斉藤正治!!」

近くに行くなり、正治さんの名前を大声で叫ぶ。それに反応して正治さんもユーリのほうを向くが、知らない人物だからか、きょとんとした表情をしている。

「えっと……、すみませんが、どこかでお会いしましたっ!」ちよつと来い!」——って、なによりいきなり!」?

質問しようとする正治さんを無視し、その首根っこをつかんで凄じ速さでどこかに走っていくユーリ……って、なにやってんのアイツ!」?

「ちよ、ちよつと!」どうしたのアイツ!」?」なんで正治さん連れてったの!」?

「えっ、そんなこと言われたって、僕が聞きたいくらいですよ!」?」兄さんがあんな突拍子も無いことするなんて思わなかったですし!」?

むう……、いったいなんだっていうのよ!」?」どうして正治さんを連れ行ったのかしら?」正治さんは知らないみたいだったようだ——。

「アスナ」

「んっ?」ああこのか。ごめんねいきな……り………」

いつの間にか近くに来ていたこのかに話しかけようとするが、こ

のかのほうを見た瞬間に体全体が凍りつく。

いつもとなんら変わらない笑顔を向けているはずのこのかだけど、目はさっきまでと変わらず白黒反転した目で、人一人殺してしまいそうな空気を纏っていた。その空気のアマリの重たさに身動きひとつ取れず、ネギなんか涙を流してガタガタと震えている。

ま、まずい。このかがとつても不機嫌だ。さっきまで正治さんとやり取りしていた以上に不機嫌だ。な、なんとかしなきゃ……！

「ど、どどどうしたのこのか？また、せ、正治さんが、その……、なんかやったの？」

いやなに言ってるの私！？今これ聞いたら駄目じゃない！？余計に不機嫌になるじゃない！？

「……なあアスナ。さっき兄ちゃんを連れてった『女の人』……、誰なん？」

「……ハッ？女の人？なにいつてんのこのか、今の男の人だけど？」

今さっき正治さんを連れて行ったのはユーリであって、女の人じゃないんだけど……？

「嘘はあかんよアスナ？あれはどっからどう見ても女の人やったやん？……あの人、兄ちゃんの知り合い？」

……そうだった。ユーリの見た目って完全に女性なんだっけ。私も最初はそう思ったし。って、まずい！？このままじゃこのかが変な誤解をして、正治さんとユーリに危険が迫る可能性が……！

「こ、このか！？実はさっきの女の人だね——！？」

「そっか……。兄ちゃん、あの女の人があるからせつちゃんの事、無視しとったんかなあ？普段の鈍感っぷりは演技やったんかな？そやったら……。腕の一本は覚悟してもらわへんとな？せつちゃんを弄んだ罪は重いでえ、兄ちゃん？フフツ、フフフフ」

だ、駄目だ……。完全に自分の世界に入っちゃった……。目や口が三日月のようになって、狂気のような歪んだ表情で笑い続けるのか。手にはどこからだしたのか、左手に金槌、右手に包丁が握られていた。なんだかこのかの周りが歪んで見えるように思うのは気のせいだと思いたい。

「あ、あああのあの、ア、アスナさん……」

「……とりあえず、和菓子でも食べよう。ちょっと気持ちを落ち着かせたい……」

ここは親友としては止めるべきなんだろうけど……。今のこのかに近づいたら私まで殺されそうな気がする。比喻とかじゃなくて大真面目に。今は、恐怖で顔がぐしゃぐしゃになったネギを安全圏に避難させるべきだろう。これは子供にはきつ過ぎる。

そついうわけだから、ごめん正治さん、ユーリ。二人のことは忘れない……。

side 正治

木乃香と刹那のことで話をしていた、途中なんでか刹那が俺に惚れているとかありえないことを言い始めたので、それに異議を唱えたら魔鉄槌とかいうの振り下ろしてきた。

それから、最近よくある口論に発展していったんだが、途中金髪をポニーテールにした外国人っぽい女性が話しかけてきたかと思ったら首根っこを掴まれて、そのままひこずられながら人の目のつきにくそうな裏路地に連れ込まれた。

うん、意味が分からない。というか、あなたはどちらさまですか？

「おいあんた！いきなり何するんだよ？こんなところに連れてきて！？」

目の前にいる女性に抗議するが、女性は鋭い目つきで睨んでくるだけ。…なんで？俺なにかやったわけでもないのに？

「……もう一度聞くんが、斉藤正治で間違いないな？」

女性は睨みながらも、はつきりとした口調で俺の名前を確認する。

「確かにそうだけどさ……、そういうあんたは誰？悪いけど、俺はあんたを知らないんだが？」

いくら麻帆良に留学生が多いっていつても、こんな背の高くて美人な女性をそう簡単に忘れとは思わないんだが……。

「……そりゃそうだろうな。『この世界』で『オレ』と会うのは初めてだもんな」

……『この世界』、ねえ。ずいぶんと含みのある言い方をするな。……ひょっとして、こいつって転生者か？ルーカスさん以外では会うことなんてなかったし、俺自身そういう存在だったのを忘れる時があるからあれだけど。

こいつはどうも俺のことを知ってるらしいけど……、誰だ？俺の知り合いってのは確かだろうけど。

「『さいとうゆうじ齊藤悠里』……。これを聞いて分からないでは済まさないぞ？」

……ほお。よりもよってその名前が出てくるか。これはあれか？俺に対しての嫌がらせか？ええ、転生仕事人さんよ？

「そりゃもちろん。忘れるわけ無いだろ？俺が『この世界』に来るきっかけになった存在なんだから」

怨みを込めながら目の前の存在に話しかける。

「それもそうだな。むしろ怨まれてないほうがおかしいか」

「ずいぶんな言い方だな?」『この世界』に来て、頭の中がやっとなんかともになったと見えますなあ——」

——なあ、兄貴?

第10話　スプリングフィールド　兄と二人の弟？（後書き）

はいやつとでました正治君のお兄さん、女の子大好きユーリ君です。
…… どんだけかかってんだよ俺！！これでやつと役者がそろいましたので、話は進んでいく…… はずです。

この作品のネギ君は原作と性格が違ったりしますので、ネギアンチをご期待しているかたは、あしからず。アスナも微妙に性格が違います。

そしてこのかがどんどん黒くなっていく……。おかしい。こんなつもりはなかったのに。ただ刹那のために行動するこのかを見たかったのに……。

それは、ここまで読んでくださり、ありがとうございました。次もお楽しみに？

第11話 元兄との邂逅 刹那と恋愛とある結末……? (前書き)

今回は前に比べたら量は少な目。そして内容もチープ!……ごめんなさい。

転生者性格について簡単に触れています。これが原因の場合とそうでない場合がございますので、注意してください。

あと、一部ホラーチック?になってますので。それではどうぞ。

第11話 元兄との邂逅 刹那と恋愛とある結末……？

とある世界の日本という国に、斉藤悠里と斉藤正治という二人の兄弟がいました。

兄は黒髪のいたって普通の日本人の見た目。弟は白髪白肌のアルビノ体質。

どちらも才能自体は同じなのだが、弟の方がわずかにだが兄より才能を上回っていた。それを兄は気に食わず、弟に嫉妬していた。

そしてある日、兄は弟を階段から突き落とし、それが原因で弟は死に、それから2時間もしない内に兄も事故により命を落とす。

「これが、斉藤兄弟のとっても簡単な結末です。しかし、ちょっとしか才能が変わらないのに嫉妬して殺そうとするとか、人間ってアホなんですか？」

「そんなもんだろ？たとえどんなに差が僅かであろうがなんであるうが、憎いものは憎い、ただそれだけだろ？」

全界。人間中心の世界や亜人中心の世界の神々、漫画や映画及びゲームをモチーフとした空想界など、ありとあらゆる『世界』の神々やそれに使える者が住まい、さらに天国や地獄といった場所を含む世界の名称。

その世界のとある一角に存在する、死んだ魂をランダムで選択し転生させるという仕事をする場所にて、転生仕事人と呼ばれる存在が資料を読みながら会話をしていた。

「……ごめんなさい意味がわかりません」

「1007番はまだ300年しか生きてないのだろう？ならまだわからないのは仕方ないさ」

見た目小学生といっても過言ではない女の子——転生仕事人番号1007番は言われた意味が分からず頭を捻り、それを柔らかな笑みをしながら言葉を発する男——転生仕事人番号13番。ちなみにこの二人の寿命は約7000年ほどである。

「つで、この二人のことを聞いて何がしたかったですか？転生した人間のことを知ってもアタシたちにはどうしようもありませんよ？斉藤正治はあなたが受け持った人ですし、斉藤悠里の方はアタシが担当したから何となく情報探しを手伝ったものを」

1007番はこの行動を意味を知りたく、13番に問う。

「いや、たいした意味はないよ。ただの私の趣味だよ。つまり人間観察？なのか？」

「……ハア。そんなことのために……。それだったら別の『世界』にでも渡ればいいじゃないですか？もしくは転生者でも観察すれば？」

13番の趣味発言に呆れてしまい、ならばと提案を出してみる。

「残念ながら仕事があるのでそういうことはできません」

それを仕事を理由にあっさりとは否定する。1007番は「意外と時間あるでしょが……」とぶつくさ呟きながらため息をつく。そして斉藤正治と斉藤悠里の事が書かれた資料を持ち、一礼をしてから場を離れていく。

1007番が去ってしばらくしてから、近くにあるソファーに座って一息ついて、先ほどの資料のことを考察する。

「……ふうむ。しかし、弟を嫌っていた兄とその兄のせいで死んだ弟が一緒に『世界』とはな。これはまた面白いな」

自身が担当した人間と、1007番が担当したその兄。転生者がひとつの『世界』にすることは決して珍しくないが、同じ『世界』の兄弟が共にいるということは今まででもまれなことだ。だから13番は面白いと感じているのだ。

「まあ、転生時にある程度性格が改変される可能性もあるから、自身の知っているものとは違っている場合もあるが……、斉藤兄弟は新しい『世界』でどんな関係を築くかな？」

無機質な天井を見つめながら、フツと口元に笑みを浮かべる。

目の前にいる見た目は完全に女性、しかし感じる気配は男のもの。そんな金髪外国人と俺は睨み合っている。俺は殺気ビンビンで。なんせ目の前にいるのは、俺が転生する原因となった存在なのだから。もつとも、あつちは普通の態度なんだけどな。前はよく敵対心剥きだしだったのに。

「…しかし、ずいぶんと姿が変わったな？女性的すぎて前の面影がまったくありませんな？」

「ならお前はまったく変わってないな。以前と寸分変わらないなんてな。おかげでお前だと分かったが」

……意外だな。少し皮肉を込めて言ってみたのに、こつもあつさりと話しかけてくるとは。……調子狂うな。これ本当にあの兄貴か？俺をいつも馬鹿にしたり、威張り散らしていたあの？

「お前本当に兄貴？違和感がありすぎるんだが……？」

「そりやまたひどいな。……まあ前世のことを考えればそういう反応もしょうがないか」

や、やばい…。本当に調子狂う。あまりにもおかしい……。！兄貴はもっとこつ卑屈で卑劣であくどくて……。ハッ！？

「そつか…。貴様、さては物の怪だな！？」

「ハア!？」

そうだ!そうとしか思えない!!でなきゃ兄貴がこんな普通にいい人ってか常識人ぽいなんてありえないんだ!? 違う!違う!違う!違う!違う!違う!チガイナイチガイナイ……!!

「オ、オ……イ!!どうした、なにぶつぶつ言ってる!？」

「悪霊退散……!!！」

「って、なぜ飛び掛ってくる!? おまつ、落ち着け!!」

キ……エ……!!!!

ネギまの3巻でも読みながらお待ちください……。

Now Loading……

「ま、まさか本当に兄貴だったとは……!？」

「だから最初から言ってるだろうが!？ お前この世界に来てからおかしくなったのか!? こんなのに嫉妬してたかと思うと腹立つてるんだが!？」

つい暴走して兄貴……いや、ここでは兄弟ではないので兄貴のこ

の世界での名前のユーリって言うておこつ。……前世と変わりに
けど。とにかくユーリに飛び掛って小競り合いになって、それか
らユーリの前世のことを質問して、本人だと断定した。

「それはいいだろ別に……。俺としてはあんたの変わりようのほうがおかしいよ。一体何があつたらこうなる？」

これはマジで気になる。何がこいつの性格を変えたのか？……もしかすると、転生時の影響で性格が変わってしまったのかもしれないが、あくまで推測なのでどうとも言えない。ならこいつ自身が変わるきっかけがあるんじゃないんだろうか？

「……悪いが、それについては今は話す気はない」

……どうやら聞かれたくないことなのかな。苦虫噛み潰したかのような表情になってるよ。これは無理に聞かないほうがいいな。

「あゝ、そう。それじゃあ、あんたが転生することになった理由と、今までなにやってたかは聞いてもいいか？」

「……それぐらいならかわらん」

それから、ユーリはなぜ転生をすることになったのかと、今まで自身の行動を簡潔にだが説明してくれた。

——前世で、学校で俺を階段から突き落としたあとすぐにその場から逃げたのだが、それから2時間後ぐらいに、頭上から割れた

ガラスが降ってきてそれが頭に刺さるといって、早々遭わないような事故によって死んでしまったらしい。……天罰か？

で、俺と同じ様に転生仕事人と名乗る幼女？らしき人物に罵倒されつつもこのネギま世界に転生することになったらしい。てか、幼女ってなんだよ幼女って？俺は男だったんだぞ！？そして罵倒ってなんですか！？そういう趣味！？……じゃなくて！

そして転生した先が、なんと主人公のネギ・スプリングフィールドの7歳上の兄であったのだ！なんて多彩な面倒事と死亡フラグを抱えた位置こと！ちなみにネギ少年がこの時点で9歳ね。数えじゃ10歳だけど。

両親とは都合により一緒にいられず村に預けられたらしいが、ちよくちよく村には訪れていたみたいだ。なのである程度記憶にはあるらしい。

それからいろいろとあり（こころ辺の説明省かれた）、今回ネギ少年の修行の補佐としてこの麻帆良で教師をやることになったんだとかで……。

「お前が教師で大丈夫か？」

「馬鹿め。父のナギのほうはまだしも、母はアリカ姫……って、お前は原作3巻までしか読んでないから知らないか。まあとにかく中学生相手に教えるぐらい楽勝だ」

俺の問いに胸を張って誇らしげに語るユーリ。ちなみに今はパンタシアに戻るために街道を歩いているところだ。まあ帰ったらこいつが俺を連れてった理由とか言わなきゃならんだろうけど。何故か

木乃香に包丁で刺されて殺されそうな気がするが……、気のせいだろう。

というかこいつとこんな風に話す日が来るとは、世の中分らないな。しかし、こいつが教師とはイメージつかないな。……性別男だけど見た目女性教師。これなんてギャグ？

「ま、俺は一般人さえむやみに巻き込まなきゃそれでいいんだけどな」

原作は3巻までしか読んでないけど、なんかネギ少年が一般人を多く巻き込むとかそんな感じのことは聞いたことがあるからな。『英雄の息子』の肩書きは厄介事を引き込むものでもあるからな。一般人が危険な目に合うのはさすがにね。

「え、あ、と……、努力はする」

……オイこら。なぜそつぽをむく。なぜ目線が泳いでいる。まさかと思うが、ネギのためとか言って一般人を巻き込むきかこいつ？……まさか、ね？

なんかこいつにネギ少年を任せて大丈夫だろうかと思うものの、俺はネギ少年と関わりを持つてゐるわけではないので、どうしようもない。もし木乃香と仮契約パフティオーなんてしようものなら、西と東の関係のために全力で阻止するが。

「……兄さま？」

ん？この声……？てか、俺のことを兄さまなんて呼ぶのなんて一人ぐらいなだけだね。

後ろを振り返ると、そこには予想通り刹那がいた。いつもの学校指定の制服姿に肩に夕凧を入れた袋を担いでいる。目線はユーリの

ほうを向いている。……なんか愕然とした表情してるけどなんで？
しかし、まさか刹那のほうから話しかけてくるとは。悪魔の一件以来、距離を置かれていてあんまり話をしてないから、とてもうれしいよ。ひょっとして、ついに仲直りができるかも？

「よお刹那。いろんな意味で久しぶり。無茶してないか？」

「……無茶などしていません。むしろ兄さまやお嬢様を守れるほど強くなるには無茶をしなければ……」

「まったく、まだ引きずってたよ。俺は気にしてないって何度も言ってるのに……。頑固にもほどがあるよ。」

「ところで、そちらの方は……」

そういつて恐る恐ると言った感じで隣にいるユーリを指差す。おそらくだが、女性と勘違いしてそうだからちゃんと説明しないとな

「ああ、こいつは——」

「初めましてお嬢さん！オレの名前はユーリ・スプリングフィールドと申します。以後お見知りおきを！ちなみに男です」

説明しようとした俺を押しつけて、刹那の手をとって自己紹介をするユーリ。スプリングフィールドと聞いて刹那は驚いた顔になる。さすがにスプリングフィールドのネームバリューだな。魔法関係者には効果絶大か。

……だが、こいつはいつまで刹那の手を握っているつもりだ？それと、目が妙にやらしいように見えるんだが？

「あ、あなたが『千の呪文の男』の――」

サウザント・マスター

「いや、あなたのような美人さんに出会えるとは幸運ですよ。ひよつとして京都出身ですか？ですよね？確か京都美人っていうのでしょうか、あなたのような人は？これは実に素晴らしい」

刹那の言葉を遮って、まくし立てるように褒め言葉を言いまくるユーリ。その間にも体はどんどん近づいていく。……こいつ、なに狙ってる？

「あ、ありがとうございます……。では、私はこれで……」

「おや、そうですか？それではお近づきの印に」

そろそろ立ち去ろうとする刹那にユーリは残念そうな表情をしつつ、手を顎に持っていつて上に傾けて、しゃがんで顔を近づけ、そして唇を……って！！??

「なにしてるんじゃないやお前は~~~~！！！！」

とんでもないことしようとするユーリの手をつかんでからその横腹に気を込めた蹴りを入れる。蹴られた衝撃で動き少し距離が開いたので、急いで刹那をかばうように抱いてさらに距離を取る。てか、こいつは何をしようとしてんだよ！？うら若き乙女の唇を奪おうなど……！

「ツツ~~~~！！お前なあ、いきなり蹴るのは無しだろ！？」

「やかましいドアホ！！お前のしようとしたこと考えたら当然だろうが！？なに俺の刹那に手を出してんだよ！？」

ホント考えられん！！転生時に女性関係の思考回路がぶっ飛んでんじゃないのか！？まさか今までもこんなことしてたんじゃないんだろうな！？

「おい、大丈夫か刹那！？」

「……………」

？…………どうしたんだ刹那？なんで黙ってんの？ま、まさか奴の行動が衝撃的すぎてトラウマになったんじゃない？

「お、『俺』の、『俺の刹那』…………。ハウ…………」

…………なんで顔赤く体をクネクネとさせてんだよ？俺、至極普通のことを言ったのに？いや、久々に刹那のこういうの見れて大満足なんだけどね？

「…………ほお？なるほどね…………？へえ？」

なんであの野郎はニヤニヤしてやがるんだよ？めっちゃウゼエ。…………やっぱし兄貴とは仲良くなれることはなさそうだ。とにかく、刹那を元に戻さねば。

「おゝい、刹那…………。カ…………ムバツ…………ク」

愛のチョップ！で感じてズガンと一発！

「俺の、俺の……………（ゴンッ！）ハッ！？私は何を……………、って、兄さま！？あ、あわわ……………！し、失礼しましゅ……………！！」

チヨップを入れて目を覚まさせると、一瞬惚けるも俺の顔を見ると途端に顔を真っ赤にして慌て始め、最後に言葉を噛みながら目にも留まらぬ速さで走り去っていった。……俺たちから避けるために稽古って言ってたのかと思ってたけど、本当に稽古したのか、前よりずっと速い。

まあそれよりも、あいつとまともに話せたのは実に良かったな。ひよっとするとこの調子なら最低でも4月が5月には昔みたいに戻ってるかな？

「いやあ、まさかお前が桜咲刹那に兄さまなんて呼ばれているとはな」

そんなことを思っていると、刹那にセクハラかまそうとしたドアホが笑いながらこっちに来了。

「血はつながってないけどな。でもそのどこが悪いよ。てかお前よくも刹那にキスしようとしやがったな？」

「あれは冗談みたいなものだって。オレは本当に好きになった奴にしかそういうことはしないよ」

……信用ならねえ。

「そんな目で見るなよ。照れるじゃ——いや冗談だよ？それよりも！お前ずいぶんと刹那にご執心だね？」

口に手をあてオホホと笑いながら、オモチャを見つけた子供のような笑顔をするユーリ。正直見た目が美人さんだけに、非常に残念だよ。

「当たり前だろうが。あいつは俺にとって『妹』のような存在だぞ？大切に思うのは当然だろ？」

妹を思わぬ兄はいない。シスコンとか言われるだろうけど、目の中に入れても痛くないような存在なら守りたくなったりするのは当たり前だろうよ？……なんか忘れてる気がするけど。

なんて思っていると、ユーリは額に手をおいてまるで哀れな子羊、否、アホの子を見るような目をしてくる。

「んだよ。なんでそんな目で見てくるんだよ？」

「……いやさ。さっきの態度を見ていればさ、刹那がお前を兄としてよりは『男』として見てるってのが丸分かりだろ？」

「？俺はお前と違って『男』の容姿なんだから当たり前だろ？」

……オイ、なんで救いようのないバカがいるとかそういう目でみる？俺何か言ったか？

「お前なあ。オレが言ってるのは、恋愛対象とかそういう意味での『男』だよ。それに気づけないって、どれだけ鈍感なんだよ？」

……。
……。
……。

へッ？恋愛対象？刹那が俺を？まさかそんなありえな——。

『せつちゃん、兄ちゃんのことを好きなんよ!!』

.....。

「ああああ!!!!た、確か木乃香がそんなことを言っていたよ
うな……!!」

そういやついさつき、そんなことを言われたところじゃないか！
？ユーリが現れたせいですっかり忘れてた!!

「言われてたのかよ!？」

「いやだつてさ、お前が現れた衝撃が大きくてつい!」

「ついじゃねえよ!？バカだろお前!？なんでそういう大事なことを
忘れるんだよ!？ギャルゲの鈍感主人公がかわいく思えてくるほど
だぞ!？」

「んなこと言っただってしょうがないだろう!？」

俺は一度に何個もの事柄を覚えられるほど優秀じゃないんだよ!…
…ああ、だから刹那はさっきあんな態度とってたのか!？

「ま、まあ確かに今回はしょうがないが、しかし次回があるからそのときにでも、さ？」

そうアドバイスっぽいのをくれるのは助かるんだけど、俺、刹那を恋愛対象として見れるか自信がないんだが……。何せずっと『妹』として接してきたんだ。それをいまさら断ち切るなんて、まるで今までの絆を断ち切ろうとしてるみたいだし……。

こ、断りをいれるとかは？……これはまずない。しょうものなら、兄妹としての関係にも亀裂が走るし、なにより木乃香が殺人オーラを纏って俺を殺しにくる。これはもはや想像でも妄想でもなく、絶対だ。

どうればいいんだ俺！？誰か俺を救ってく——！！

「——みいつけた」

突然背後から放たれる強烈なプレッシャー。そして殺意。ルーカスの纏うものには及ばないものの、逆らってはいけない何かを纏った『ソレ』。

俺はもちろん、ユーリでさえ身動きひとつせずに固まっている。両者とも額から汗が滝のようにあふれ出ている。

「兄ちゃんこんなところにおったんかあ。ひょっとして、今までその女の人とデートしようたん？」

おっとりとした声。普段なら安心感を抱かせてくれるであろうそれは、今この瞬間は悪魔の囁きに思えてしまう。

『ソレ』の言うことを否定しようとユーリは口を開くも、口がパクパクと動くだけでどうしても言葉が出てこない。

「あかんよなあ？兄ちゃんはせつちゃんとやないと、誰も幸せにならないよ？」

ひとり、ひとりと『ソレ』は近づいてくる。逃げたいと思う頭とは裏腹に、足は石化したかのように動かすことができない。どれだけ念じてもうんともすんとも言わない。

せめてもの抵抗をしようと、顔を『ソレ』のいるほうに向けようとするが、本能が向くなと警告する。だが、俺はそれにもかまわず、弁解のために『ソレ』のいるほうを向いた。……向いてしまった。

「そんな兄ちゃんたちは……お仕置きせな、な」

俺が最後に見たのは、包丁を大きく振りかざした、目や口が三日月のごとく歪んだ、一人の少女だった――。

side
ルーカス

「やあ諸君。ルーカスお兄さんだ。今回は刹那の気持ちに気づいてやれないあまり、木乃香の暴走によりユーリ共々BAD・ENDになっちゃったようだ。最低でもユーリに連れ去られるのを何が何でも止めるべきだったね。一番良いのは悪魔襲撃の際にやられないことだが。」

さて、次はちゃんと木乃香の暴走を抑えつつ、よいエンディングを迎えられるかな？途中のBAD・ENDの多さには辟易するだろ

うけど、頑張れば真のエンディング【俺と刹那の結婚式】のイベントを見れるかもよ？そして嬉し恥ずかしな初夜を覗くことができ――」

「勝手に殺すなああああ……！！！！そして下ネタ禁止……！！！！！！！！」

うるさいバカ兄弟だな。今回ワタシの出番これだけなんだぞ。多めに見ろ。

……あとでしこいてやるか。

第11話 元兄との邂逅 刹那と恋愛とある結末……（後書き）

兄貴がとってもまともな性格になりました。……話を構成していらなげかこうなった。最初はアンチキャラとしてたたかれまくる存在だったのに！

正治と刹那の仲は今回の話でついに進展！？……するかもしれないしそうでないかもしれない。

そして木乃香は暴走少女になっていく。刹那のためなら火の中水の中戦場のど真ん中。……本作でいろんな意味で最強キャラになってきちゃってる……。

ルーカスの出番についてはあえて言及しないでやってください。もとも出番少なめな方ですし。

それでは、ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

番外編？～エヴァンジェリンについて～（前書き）

！番外編の注意点！

この話は第7話から第8話の間の話です。特定の時期はありません。

名前ありの魔法先生はある程度まともですので、アンチ期待される方がいらっしやったら、申し訳ございません。

エヴァンジェリンが原作と比べて性格がちよっと違います。

刹那のことは暖かく見守ってください。

別にこの話見なくても大丈夫だったり。

以上の点を踏まえて、本文をお読みください。ではどうぞ。

番外編？～エヴァンジェリンについて～

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。600年もの年月を
ハイ・デライトウォーカー
生きる吸血鬼の真祖であり、『闇の福音』、『人形使い』、『童姿
ダーク・エヴァンジェル
の闇の魔王』などといった異名を持つ、魔法世界においては悪の代
ドール・マスター
名詞の一つである。

そんな彼女だが、ある時に『千の呪文の男』と呼ばれ、英雄とし
サウザンド・マスター
て名高いナギ・スプリングフィールドにより退治されたという。も
っとも、彼女が死んだとかそういうわけではなく、『登校地獄』と
いう呪いを掛けられて日本は麻帆良にて女子中学生として生活を
しているのだが。

以後15年間近くもの間、彼女は麻帆良の警備員のような役割を
果たし、時に正義を目指す魔法使いたちと対峙しながらも、今まで
では考えられないような平穏な日々を送っていた。

そのことに関して、彼女や周囲の人間はどう思っているのか。そ
れに興味を持った一人の少年がいた……。

「実際のところ、麻帆良の人たちってエヴァンジェリンさんのこと
どう思ってるんだろうな…?」

「突然どうしたんですか兄さま?」

「いや、ちよつとね」

とある日のパンタシアで、俺はふとそんなことを思う。刹那はき
よんとした顔でどうしたのかと伺ってくる。

こんな風に思うのは、今の目の前でうちの人気商品の一つの餡蜜
とあんころもちを幸せそうにパクつく見た目はお人形さんのような
ロリちゃん、中身は600年もののお婆ちゃんなエヴァンジェリン
さんを見たから。

ちなみに、彼女にかかっている【登校地獄】を解こうとルーカス
さんが【デスペル】をかけたんだが、ナギが無茶苦茶な魔力によっ
て行使したせいか、僅かにした呪いが解けず、現在の状況は『3日
に一回学校に行かなければならない』と『一般魔法使いの平均的な
魔力』といったところだ。

……解除が完全にはできなかったのにルーカスさんはものすごくシ
ョックし、ナギへの呪詛を吐きながら3日塞ぎこんだのは別の話…
…。

話は戻すけど、俺はネギま!の原作はちょうどエヴァンジェリン

さんの回のところまでしか見てないので、彼女がこの麻帆良においてどのような立ち位置なのか、魔法使いたちはどう思っているのかとかを詳しく知らない。

だからなのか、ふとそれを知りなくなってしまった。まずは、刹那から聞いてみるかね。

「刹那はさ、エヴァンジェリンさんのことどう思ってるの？」

「そうですね……。私のようなものでは到底追いつけないような高みにいるお方ですかね。あのルーカスさんの師匠でもありますし、600年という年月を生きているということはそれだけ人生経験が豊富ということ。実力も知識も素晴らしいものかと……」

ふむ、我が妹はべた褒めのようだな。まあ、あのルーカスさんに戦いを教えた人だから、そういう評価になるのも肯けるよな。

「ところで兄さま。なぜエヴァンジェリンさんのことをお聞きに……？」

「ん？なんとなくだよなんとなく」

「……そう、ですか……。まさか……。ロリ……。そんな……。だからもう私には見向きも……？」

……。？どうしたんだ刹那？ショックでも受けたような表情しながらエヴァンジェリンさんのことを恨めしそうな目で見て。小声でぶつぶつと呟いてるし。

……。まあいいか。つで、他の魔法関係者には……。警備の時とか

道で会ったときに聞けばいいかな？

【ガンドルフィーニ先生の場合】

「『ダーク・エヴァンジェル闇の福音』について、かね？」

「はい。先生はどう思っていますか？」

ガンドルフィーニ先生と警護をすることになった日に、見回りついでに尋ねてみることにした。

「私としては、いくらサウザント・マスターが連れてきて学園長が許可をしたとはいえ、凶悪犯である彼女をこの学園においておくのはどうかと思う。……家族にもしものことがあつてはたまつたものじゃないからね」

うーん、さすが熱血漢（？）のガンドルフィーニ先生。なんとなくわかつていたけど、やっぱり彼女に対しては厳しいですね。家族のことを思えば当然ともいえるけど。ちなみに前は600万ドルの賞金首だったけど、（表向き）ナギに倒されたということで賞金はなくなっている。

「やっぱり普通はそういう意見ですかね？」

「少なくとも私はね。普通10才の少女が吸血鬼の真祖になろうなんてありえないは分かるが、如何せん彼女は人を殺しすぎてるし、学園の仕事サバることも多いし、たまに妙なこともしてるし、そもそも自ら『悪』を名乗ってるんじゃないかね……」

……それを言われちゃどうしようもないよねえ。

真祖になるには儀式が必要であるが、好き好んで『化け物』なんて呼ばれる存在になろうと考える奴はどうかしていると思う。10歳の女の子ならなおさらだ。エヴァンジェリンさん自身は語らないけど、彼女は無理やり真祖にされた可能性が高いというのが、麻帆良の魔法使い（一部のみ）の見解だ。

しかし、彼女はたとえ自己防衛のためであろうとも何十人何百人と人の命を殺めており、そして自ら悪の魔法使いを名乗っているのだ。これじゃあ悪く言われるのはしょうがないと言える。

「なんで自分から『悪』だなんて名乗る必要があるんでしょうか……」

「それは神のみぞ知る……てことじゃないかい？」

それでいいのかな？

「ところで、どうしてそんなことを？彼女に何か用でも？」

「あ、いえ別に。ただ興味があっただけですよ」

「そ、そうか。……興味って、まさか正治くんは彼女のことが……」

…？刹那くんも大変なのに惚れたな……」

……どうしたんだガンドルフイーニ先生？俺の返事に戸惑い見せて、小声でぶつぶつと……って、前も様子は違えど刹那が似たようなことを……。なんでよ？

【刀子先生の場合】

「エヴァンジェリンさん……ねえ」

ちょっとした買い物をしている途中で同じく買い物中だった刀子先生と出会い、ベンチでお話ついでに尋ねてみた。

「この学園にいる限りでは無闇に手を出そうとは思わないけど……、悪事を働いたら全力で排除するだけね」

ふむ、これはちょっと意外だったな。最近パンタシアで（非常にとてもとんでもなく驚くことに）エヴァンジェリンさんに何故か裁縫を習う姿をたびたび目にするから、もうちょっと友好的かと思っただけだ。

「やっぱり『悪』とは仲良くできないってことですか？裁縫教えてもらってるのに？」

「随分とはつきり言うわね。別にこれは彼女じゃなくても人道に外れるようなことをすれば罰するのは当然でしょ？例え仲が良い相手でも、ね」

うーん、これはまた正論だなあ。道を踏み外した者にちゃんと罰則を与えなければ次も同じことをする可能性がある。実際そうということが現実起きているからその考え方ってところかな。罰することですその人の間違いを正せれるかもしれないしね。……それでもエヴァンジェリンさんは今までの道を行きそうだけだね。

「……すみません。せっかく質問に答えてもらったのに失礼なことを言って」

「そんなこと気にしなくてもいいわよ。このぐらいで怒るほど器量狭くないから」

……良かった、怒ってなくて。刀子先生は良い人だよ。

「……そういえば、どうして刀子先生は裁縫習ってるんですか？」

実は地味に気になっていたことを聞いてみる。刀子先生ってこういうの得意そうなイメージがあるんだけど？

「えっ……。そ、それは……」

俺の問いに刀子先生は戸惑いをみせ、目線をあさつての方向に向ける。……なんか変なこと言ったかな？……あっ、そうか。

「ひょっとして、旦那さんへのプレゼントとかですか？」

その瞬間、晴れであるにも関わらず雷が俺に降ってきた。……後でエヴァンジェリンさんに聞いたんだが、刀子先生どうやら離婚していたようで、裁縫は次の彼を射止めるために覚えているのだとか……。

あと、ついでに千草さんから「このド腐れ鈍感阿呆があああ！！」「という罵声とともに鬼と鬼蜘蛛の団体様に踏まれまくりました。刀子先生はしばらくの間、白黒反転目で俺を睨み付けてきました。……ごめんなさい！！！」

【名前も存在も無に等しい魔法先生の場合】

「なぜ学園長は『闇の福音』^{ダーク・エヴァンジェル}などをこの学園に住まわせておくのか

まったく分からない！！そもそもあれは我ら『正義』を志す魔法使いとは対極の位置に存在する『悪』の権化、化け物、この世に存在する必要の無いものではないか！！だというのにその『悪』を駆逐せずに放置するなど言語道断！！そしてそれに教示された『英雄』もここにいないべきではない！！ここは一度我ら『立派な魔法使い』マジステル・マジを志す者たちによって奴らをこの学園、いや、この世から消し去る必要が――」

「お疲れ様でした〜」

あんまりにもうざかったので警備の、しかも侵入者が悪魔を召喚したところであるにも関わらず、ついつい帰ってしまった。もつとも、あの状況であんなこと言ってる先生もどうかと思うけど……。まあさすがにそのまま帰るのも忍びないので氷砕球の戦術殻を使っておいた。

それによって侵入者は捕らえられたんだが、この時一緒だった先生はどういうわけか俺を見る度ビクビクするようになった。

……ちよつと氷漬けになった程度で、何を震えてるんでしょうねえ？『立派な魔法使い』マジステル・マジを志してるのに……ね？

【ルーカスさんの場合】

「^{マスター}師匠についてか？」

パンタシアの店内の奥にある居間にある椅子に座って、テーブルに置いてあるお茶とたくあん（ケチャップ付き）を味わっているルーカスさんに尋ねる。あの人の弟子だから、ある意味俺らの知らない一面を知ってるかもしれないし。

「そうだな……、ワタシという存在を鍛え上げてくれた方であるし、悪と言われているが根はやさしい人だよ」

おお、さすがに高評価だな。あのルーカスさんが本気で尊敬しますって目になってる。

「もつとも、そう思うのは心の奥底でワタシが彼女に同情しているから、なのかもしれないがな」

「へっ？」

同情……ですか？まあ確かにエヴァンジェリンはいろいろとつらい過去があるって話——俺は良く知らないけど——があるのは知ってるけど……。

「600年もの間たった一人で生きてきた。吸血鬼であることがあれば、例え何もしていなくとも人々からは恐れられ、多くの魔法使いからは襲われる。友ができててもそれが人間であればいずれ死に

別れ、どれだけ苦しもうが自身は簡単に死ねない。そして積み重ねられていく血の数……。それを知ると例え意識せずとも同情してしまうんだよ」

「……それってどうなんだ？ 良いことなのか悪いことなのか」

「さあな。どちらが正しいかはワタシには皆目検討がつかん。……だが、時々こんな感情を抱いて接するのは果たしてよいのだろうかと思うことがあるんだよ。別にワタシがいくら同情しようが何か変わるわけでもないのにな。……良くないのだろうな、こういう考えは」

そう言つて、ちょっと自嘲気味な顔をして、力なく笑う。……圧倒的な強さを持った、おちゃらけた感じであつても俺よりずっと精神的に強いと思つてたこの人でも、こんな風に思うことがあるんだな。

……俺はこの人に何か言えるだろうか？ 所詮たいしたことでもないこんなガキが？……どう考えても無理だな。何もかも圧倒的に不足した俺じゃあ。

「——またずいぶんどうでもいいことで悩んでいたのか、お前は」

そんな時、居間に甲高い声が響き、声のしたほうを向くと、いつもの黒を貴重としたゴスロリ服を着たエヴァンジェリンが腕を組んでまな板同然の胸を張って仁王立ちしていた。

「小僧、今さっき失礼なことを考えなかったか？」

心を読みやがった！？この世界の強者は読心術ができるのか！？

「……まあいい。それよりルーカス」

焦りまくっている俺を一瞥してから、ルーカスの前に来てズズイと顔を近づける。

「お前、そんなくだらないことでグチグチと悩むような男ではないだろうが」

「……そうは言いますが、あなただって同情なんて感情をもたれながら相手をするのは嫌ではないですか？」

「ふん、それがどうした？私が言うのもなんだが、人と人の繋がりなんてものはほんの些細なもので繋がってるんだ。憧れでも畏怖でも、同情でも。そういう感情があって初めて人は誰かと繋がろうとするんだ。私からすれば打算も何かしらの感情も無く誰かと繋がろうとする人間の方が薄気味悪いわ」

腰に手を当てながら、よく通る声で語るエヴァンジェリンさん。
幼児体系であるにも関わらずその姿はまさに600年という人生を
生きたものの貫禄がある。

「……本当に、あなたが言うには似合わないセリフですね」

「うるさいぞ。ただ殺し合いを教えるだけが師匠^{マスター}としての役割ではないとお前との修行時代で知ったんだ。これぐらい言わせろ」

自分の言ったことが恥ずかしかったのか、顔を少しだけ赤くしながら笑顔を向けるエヴァンジェリンさん。それに影響されてかルーカスさんは先ほどのような落ち込んだ雰囲気はもう無く、柔らかな笑みを浮かべる。

「そうですね……。つまりツンデレですねキティちゃん」

「なっ！？ 貴様、人が落ち込んでいるのを元気付けてやったのに、よりにもよってそう呼ぶか！？」

「いえいえ、元気が出たからこそこういう言い方をするんじゃないですか？ まったくあなたは駄目駄目ですな子猫ちゃん？」

「~~~~ツ！！ 貴様今すぐ表でろ！！ その根性叩き直してやる！！」

……せつかく、いい雰囲気だったのに、元気になったルーカスによつてエヴァンジェリンさんは今にも湯気を出しそうなくらい顔を怒りによつて真っ赤にし、ルーカスさんの首根っこをつかんでそのまま引きずっていく。そんな状況であるにも関わらずルーカスさんはただ「ハッハッハ」と笑うだけだった。

その笑いが、心の底からの笑いのように聞こえたのは、さっきのエヴァンジェリンさんの言葉によるものなのかどうかは、俺にはわからない……。

それから数日たったある日。俺は目の前で信じられないものを見ていた。

「せ、刹那？お前……、なにしてんの？」

「これは、その……。エ、エヴァンジェリンさんに習って……、だから……」

そう言っただけで恥ずかしそうに体をクネクネと動かしながら上目遣いで見る刹那。時折こんな風になることがあるから、別にこれはおかしいとは思わない。思わないのだが……。

……最初に出会ったときの5歳時の姿と普段絶対着ないようなゴスロリ服を着ているのはなんでですか……？

えっ？ナニコレ？本気で意味分かりません。……ま、まさか……？
……？

「ど、どうでしょうか、似合い、ますか……？」

「……………せ、」

「せ？」

「刹那がグレたああああ！！！！……？」

「ええっ！？どうしてそうなるんですか！？」

「刹那は中学生なのに幼児になって制服がゴスロリに変わって……！！俺、俺……、兄さま失格だああああ！！！！……」

「な、なんでそういう結論なるんですか！？私は兄さまの期待に答えようと……！！」

「もう駄目だ！！俺は終わった！！刹那をこんな風にしちまった以上、もう生きていくなんて出来ねええええ！！！」

「ちょ、落ち着いてください！？こんな往来で切腹なんてしないで

ください！！兄さま~~~~！！！！」

その後俺はいつたい何をしていたのかまったく記憶にない。ただそれ以後、たまに寝ている時に「ロリコンは犯罪ロリコンは犯罪せっちゃん最高」と耳元で囁く声が聞こえるようになった……。

終われ。

番外編？～エヴァンジェリンについて～（後書き）

結局ルーカスとキティちゃんの仲良し（？）師弟の話で纏まってしまった。……正直読者の反応が怖いです。「こんな理論馬鹿か？」とか「エヴァはこんなやつじゃない」とか「エヴァたんハアハア」とか……。いや、最後冗談ですよ？

最後の正治と刹那の夫婦（？）漫才はきにしないでください。ただ正治が過保護なだけですから。そしてロリコンじゃないよ？

それでは、また。

第12話〽生徒と顔合わせ　そしてバレるんです〽（前書き）

今回主人公の出番が少ない。

あと、原作キャラのしゃべりがおかしくなっていますので、注意してください。

そしてタイトルがネタバレです。

それではどうぞ。

第12話　生徒と顔合わせ　そしてバレるんです

「刹那が俺のことを男として好きだ、と言われました」

パンタシアの休憩室にて、正治は千草にそのことを打ち明けた。千草は一瞬なにを言ったのか分からなかったが、次第にその意味を理解して、笑いがこみ上げ、それとともに顔に満面の笑みを浮かぶ。

「それ本当かい！？やゝゝゝ、刹那もついに告白しようたんやなゝゝゝ！」

刹那の想いと正治の鈍感ぶりを知っている千草にとって、刹那がついに気持ちを伝えてしかもそれを正治が理解したというのは喜ぶべきことであり、今すぐにでもお祝いパーティーを開きたいぐらいのことであつた。

「いや、刹那自身からじゃなくて、木乃香にそう言われて……」

しかし正治の言った一言にピタリと動きを止め、ギギギという効果音がつきそうな速度で正治のほうに顔を向ける。

「……なんでお嬢様がそれを言うん？」

「いや、実はさ——」

そこでこの前、木乃香と刹那のことを相談していた際に刹那が自分のことを好きだと言われ、さらにユーリ・スプリングフィールドにも偶然会った刹那の態度からそう指摘されたことを話す。すると千草が体をプルプルと震わせているのに気づいた。

「どうしたんですか千草さん。……ひょっとして寒いですか？」

時期は冬で、休憩室に暖房をきかせているが、それでも寒いのだろうかと心配する正治だが。

「刹那が告白する前に人に指摘され、しかもそれでも本気と思わへんかった……、この、鈍感がああああ!!!!!!」

「エッ!?!ちよつとまって千草さん、その手のお札はいつた——
!!!」

その日、パンタシアに一筋の光線がきらめき、人が宙を舞う光景が目撃された。

side ユーリ

ついにこの日が来た……。オレは今、麻帆良女子中学の2-Aの

教室前まで来ており、隣ではネギが深呼吸をしながらクラス名簿を眺めていた。オレはそれを微笑ましく見つめる。……頭に包帯を巻いて。

まさか、近衛木乃香にあそこまで大怪我を負わされるとは思わなかった……。あの時にながあったかは詳しくは覚えてないけど、本能が恐怖をあげたのは久々だったからな。正治（再生能力で怪我なし）に確認したら『裏』のことは教えられないはずなんだが……。これが歴史が改変した影響か？

ちなみにこれにより、オレと同じ転生者（なんとなく予想できてたけど）であるルーカス・克蘭ケットと出会うことになった。その際に天ヶ崎千草がいるのには驚いたけど。……修学旅行編はどうなるのが分かんなくなっただじやないか。

閑話休題。

まあそんなこともあって、正治やルーカスと話したり、ネギと授業の進行具合を確かめたり麻帆良を見学しながら時間をすごし、ついに教師として勤める日が来たというわけだ。……怪我を携えてだけどな、ちくしょう。

「二人とも、もういいかしら？」

オレ達に同行してくれた巨にゅげふんげふん……しずな先生が柔らかな笑みを浮かべながら聞いてくる。

「おう、オレはいつでもOKよ？」

「だ、大丈夫だと思います！……多分」

ハハ、ネギのやつガツチガチだなあ。まあ、普通10歳で教師、しかも自分より年上の人たちにものを教えるとなると緊張しないほうがおかしいか。

「そう緊張するなよ？肩の力抜いて、落ち着いていけばいいからな」

「う、うん……。……スー、ハー……。よしっ、やるぞ」

深呼吸をして、こぶしを握り締めてから、ドアに手をかけ開ける。
……あれ？そういえば確か……？

「し、失礼しま——」

そしてそれと同時に黒板消しが頭に落ちてくるがあと数センチのところまでピタッと空中に止まる。……ああ、罨があるんだっけか？それと、ネギって魔法障壁を常に展開してるんだっけ。教師をしている間は消しておけって言ったはずなんだが……。癖で展開していたのか？

ネギもそれに気づいたのか、あわてて魔法障壁を消して、「いやーゲホッ、ひっかかっちゃったなあ」とわざとらしく言いながら教室に入っていく。しかし、足元にはロープが張っており、それに足を引っ掛けてしまう。

『原作』ではこのまま転がって、途中でバケツかぶったり矢が飛んできたりして、最後に教卓にぶつかるんだが……。

「クッ……。！？」

あいにくこのネギはオレがある程度稽古をつけており、身体能力はそこそこ高く、床に手について転がるのを防ぎ、バケツを前方に

勢いよく飛ぶことで回避し、さらに飛んできた矢をすべて手で掴み、そのままスタツと鉄棒の選手が着地するときのような格好で止まる。

あの騒がしい2・Aの生徒達は畏を回避され、しかもそれを子供がこなしてしまったからか、普段は見せないような静けさを見せている。

その中でも、魔法関係者や武芸を嗜む者たちは、目を輝かせたり感心したり、意外だという表情を見せたりしている。特に『闇の福音』ことエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは新しいおもちゃを見つけたようなキラキラとした目をしていた。

……あれ？ひょっとして、なんかやつちまったかな？

side エヴァンジェリン

ネギ・スプリングフィールドにユーリ・スプリングフィールド。この私が中学生として学校生活をするはめとなった原因である『千の呪文の男』の実際の息子で、将来有望な魔法使いといわれている兄弟。

そんな二人のうちのネギと呼ばれるぼうや——なぜ薬味の名をつけた？——が修行としてここで教師をすることになり、兄がその補

助でついてくると聞いたとき、私は願ってもないチャンスだと思った。

なにせ、我が弟子であるルーカスが使う不可思議な解除魔法【デスperl】でさえ、私にかけられている【登校地獄】を完全に解除することができなかったのだ。そうなるに残された方法は、奴の血縁者である二人の血を吸うだけしかない。だからこそチャンスと感じたのだ。

そして、ついにその二人が教師として来る日になり、目の前で起きた意外な光景に、楽しまずにいらなかった。

ナギにそっくりなぼうやが魔法障壁で黒板消しを受け止めた時はバカだと思ったが、その後の罨を難無く対処したことには純粋に関心をした。『英雄の子』として甘やかされた魔法だけの奴かと思っていたが、どうやらそうでもないようだ。

……これはなかなか楽しめそうなのが来たな。クックク……、これからどう甚振ろうか……。

「頼むから、変な気を起こさないでくれよきゅけつきティ？」

「ふっ、それは保障できない——って、きゅうけつきティとはなんだ!？」

誰だ!？私のことをそう呼ぶのは!？魔法関係者か!？

声のしたほうに顔を向けると、そこには頭に包帯を巻いた金髪ポニーテルの女がニヤニヤとした顔で立っていた。その顔を見ていると、似てもないはずなのにナギの奴のバカみたいな笑顔を思い出

させる。

しかし、こいつはなかなか油断ならない存在だと本能が告げる。なにせ私に気づかれることなく近づいており、さらに体からは血のにおいがするのだ。警戒しておいて損はない。

「誰だ貴様は？というよりなぜ私のミドルネームを知っている……！？」

「それに関しては後々。それより、周り見てみな」

周り……？

言われて周囲に目をやると、クラスのガキどもがみな意外そうな顔をして私を見ていた。……しまった！先ほどのぼうやの行動で教室が静かになっていたんだ……！

「クツクツク……。実に恥ずかしいですねキティちゃん？せっかくクールキャラで保ってきたのに」

「う、うるさいぞ貴様！？一体なんだんだ！？」

一般人の目がなければ、今すぐ八つ裂きにしたい！今の私は薬無しでも魔法を使えるから可能なんだぞ……！

「まあまあ落ち着け。それは今から説明するから。……おいネギ！いつまで固まってるんだ？いい加減自己紹介するぞ！」

いまだに声を発することのないぼうやに声をかけ、そのままスタスタと黒板の前にまで移動する女。親しく呼んでいるから、ぼうやの関係者か？

「……ハッ！？いったい何が！？」

「何が、じゃないだろ？ほら、もう授業始まつてるんだからさっさと自己紹介しなきゃな。あと、その矢はこっちに渡せ」

言われてぼうやは無意識に掴み取った矢を女に渡し、教卓の前に立つ。

「きよ、今日からこの学校でまほ……英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけど、よろしく願います」

なにやら言っではならない単語が聞こえたようだが、それ以外はすんなりと挨拶をこなすぼうや。まわりのガキどもは静かにしてはいるように見えるが……。

「……キヤアアア！！！！かわいい！！！！」「……」

次の瞬間には音響兵器顔負けの叫び声が教室内に木霊し、ガキどもがぼうやを取り囲んでもみくちやにし、次々と質問をしていく。チャイナ拳法娘や忍びきれてない忍者は「勝負！！」なんて言っているが。離れた場所では長谷川千雨がしずなに本当がどうかを尋ねている。まあ、あれが普通の反応だろうな。

——ドンッ！ ザワッ……！

そんな時になにやら妙な空気が流れ、どうしたかと目を向けると、神楽坂明日菜がぼうやの胸倉をつかんで教卓に上げて、睨みつけて

いた。

「ねえあんた、さっき黒板消しになにかしなかった？……何かおかしくないあんた？」

……ほう？さっきのあれをおかしいと思うか。麻帆良に張ってある認識阻害結界の効果で一部例外を除いてああいったことは異常と思えないようになっていくはずだが……、なかなか勘が鋭いのか？神楽坂明日菜はさらに問い詰めようと距離を詰めようとし――

「……それ以上はよしてくれないかなアスナちゃん？」

あの女に腕を掴まれて止められた。私と話していた軽い空気とは違い、妙な威圧感をまとわせている。とても同一人物だとは思えない。

その威圧感に神楽坂明日菜は黙ってうなずいて、ほうやから手を離す。ほうやは教卓から降りて少し離れた場所で息をつく。それと同時に女から威圧感も消え去りまた軽い空気を放ち始めた。

「悪いねアスナちゃん。よし、それじゃあネギの紹介も今度はオレの紹介の入るのかな？」

ほうやと同じように教卓の前に立ち、男なら誰もが惚れそうな柔らかな笑みを浮かべて教室を見回す。……しかし女なのに『オレ』などとは、そういうキャラでも目指して――。

「同じく教師をすることになりましたユーリ・スプリングフィールドです。受け持つ教科は英語と数学ですが、基本的に英語はネギの

補佐にということになりますし、数学も担当教師が急用でいなきに代わりをする程度ですが、どうぞよろしく願います。ちなみに勘違いしている人がいては困りますが、オレは男性ですからね」

なっ……！？あ、あいつがユーリ・スプリングフィールドだ！？というかあの容姿で男なのか！？どうみてもただの別嬪さんだろうが！？世の中なかおかしくないか！？

「「「「「エエエエエツ！！！？」「」「」

ほら見る、クラスの連中もあまりのことに驚いてるじゃないか！？

「はい、それでは俺達の紹介は終わったので、質問タイムに移りまゝす。質問ある方はどうぞ」

無視だと！？あの叫びを無視してさっさと進むだと！？これは誉めるべきなのかアホかというべきなのか！？

この女……、いや、男……、油断ならない、いろんな意味で……！！

side アスナ

あれから授業は二人の質問タイムだけで終わった。ちなみにどんな内容かというと……。

Q・二人のご関係と年齢は？（ユエ）

A・兄弟だよ。オレが16歳でネギが数えて10歳。（ユーリ）

Q・どうしてこの麻帆良で教師をすることになったんですか！？
（桜子）

A・大人の事情です。（ユーリ＆ネギ）

Q・いまどこに住んでるの！？

A・アスナさんとこのかさんの寮室でお世話になっています。（ネギ）

今はホテルで、そろそろ教員寮を使うつもり。今ならオレとホテルで燃える夜を過ごせ「瞬殺！！」ホゲツ！？（ユーリ）

Q・どうしてお兄さんはそんなに男の娘なんですか！？（パル）

A・ほっとけ！！（ユーリ）

Q・ご、ご趣味はなんですか？（本屋ちゃん）

A・えっと、読書とかアンティーク収集とかです。（ネギ）

人間（主にお姉さまとか妹とか人妻とか）観察。（ユーリ）

Q・戦うアル！！（くゝふえ）

A・だ、駄目ですよ先生と生徒が戦っちゃ!?(ネギ)

ベッドの上でならいくらで「滅殺!!」ブホッ!?(ユーリ)

Q・このクラスで気になる人はいますか!?(朝倉)

A・今はお世話になってるので、アスナさんとこのかさんです。

(ネギ)

全員気になるけど、あえて言えばアスナちゃんにこのかちゃんに刹那ちゃんにくゝふえちゃんにキティちゃん「キティ言うな!」に千雨ちゃんに「私!」にe t c e t c……。 (ユーリ)

とりあえずユーリがエロバカなのが再確認できたわね。あいついつか女性関係で捕まりそう。つで、それから他の授業も終わって、今はあの二人の歓迎会のための買出しをして教室に向かっているところだったりする。

……でも、あの黒板消しのやつはなんだったのかしら?なんだか宙に浮いていたような気がしたんだけど……。問い詰めようとしたらユーリのやつがすごい剣幕で止めに來たから聞けなかったけど。というか、あの時のあいつすごい怖かった。まるでこのかが正治さんのことで怒ったときみたいね。……いやいや!!別にこのかが怖いとかそういうことを言いたいわけじゃないわよ!?ただの例えよ例え!!それでも友達なんだからそういう目で見るわけ……。ごめんなさい嘘です。怖いものは怖いです。

「……………んっ?あれ、あいつ…………?」

そのとき、ネギが階段のところに座っているのが目の入った。隣にはあのよく分からない細長い布がおいてある。いつも思うけど、

あれってなんなんだろう？そんな風に思っていると、ネギが顔を上に上げてどこか心配そうな目でなにかを見ている。

視線をたどってみると、そこにはクラスメイトの宮崎のどか——私たちは本屋ちゃんって読んでる——がたくさんの本を持って階段を下りていた。本が顔の前まで積まれていて前が見えにくそうで、足元もフラフラしてとても危ない感じた。……大丈夫かな？

「あつ……！？」

そう思っていたら、案の定足を踏み外してしまい、しかも階段の外に落ちてつて、何をのんきに見てるのよ私！？

急いで本屋ちゃんのところまで全力で走るけど、ここからじゃ距離がありすぎて、どう考えても間に合わない……！

しかし、そんなことを思っていた私の隣を何かが通り過ぎたような気配がしたかと思ったら、本屋ちゃんの体を誰かが受け止めていた。

「ふい〜。大丈夫か宮崎？」

金髪のロングヘアを靡かせて、腕にお姫様抱っこの要領で抱いて安否を確認するその正体は、ユーリだった。

「ユ、ユーリ？」

突然の登場に私は戸惑ってしまふ。……というか、かなり距離があつたはずなのに間に合うつて、どういう足してるのよ！？

「よおアスナちゃん。元気してる——」

ユーリは戸惑う私をみて、いつもの笑顔で声をかけようとして…。

——ふわっ。

ほんのすこしだけ宙に浮いた。足が地面から数センチほど離れている。

「「……へっ？」」

お互い、間抜けな声を出しながら浮いた場所を見る。そしてユーリは顔中から汗を流して左をゆっくりと向く。私もそれを追うように向くと、そこには青ざめた顔をしたネギが杖のような棒を構えて呆然としていた。

………とりあえず、一言言ってもいいかな？

「コレどっつなってるのよ……!!??.」

「にゃにやってるんだニエギ……!!?!..」

「いっめん兄ちゃん……!!?!?..」

この日、少年と女性の3人の絶叫が学園に響いたとかいう噂がたつた……。

第12話　生徒と顔合わせ　そしてバレるんです（後書き）

どうあがいても魔法バレ（サイレン風）。……ふるいですかね？

うちのネギくんはそこそこ身体能力が高いです。魔法による強化無しでもそこそこやれます。

でも結局魔法はばれる。だってそれがネギクオリティ。

あとユーリの行動ですが、あれは一応魔法バレ阻止のための行動です。建前のうえではなんとかしなきゃなりませんからね。

ただ、アスナ視点のときって、バカなアスナが知っている単語でやらなきゃいけないのか、それを無視するべきか迷うんですよ。まあ、結局は好きにやりますけど。

最後にひとつ。ユーリは紛うことなき女好きです。それではまた。

第13話 歓迎会 悶々とする優柔不断野郎 (前書き)

今回どうでもいい話だったりします。

原作とはちょっと違う展開があります。

ではござ。

第13話　歓迎会　悶々とする優柔不断野郎

現在、麻帆良学園女子中等部にある2-Aの教室で、2-Aの生徒たちがスプリングフィールド兄弟の赴任を祝う歓迎会の準備をしていた。中には肉まんを売りさばいたりサボっていたりするものもいるが。

「おーい木乃香いるか？言われた通りに持ってきたぞ」

そんな中に赤いジャンパーに黒いジーンズを着た白髪の男、言わずと知れた斉藤正治が両手に紙袋を持って教室に入ってきた。

「あ、セイ兄ちゃんお疲れ」。ごめんな急に呼び出して」

「おおー、正治さんじゃん！こんなところでなにやってんの！？もしかして女の子漁りに来た？」

「それはない。歓迎会用の和菓子を持ってきただけだ。というか女子校に男子一人がどれだけ辛いかわかってる？」

うんざりとした顔をしながら声をかけてきた生徒に答え、木乃香に紙袋を渡して、近くにあった椅子に座って息をつく。ちなみに、2-Aの生徒はパンタシアによく立ち寄るので、正治とも顔見知りであったりする。

それより少し経ってから、今度は宮崎のどかが教室に入ってくる。それに気づいた早乙女ハルナが声をかけようとするが、足取りが妙にふらついていて顔はほんのりと赤く染まっているのどかを見てギョツとする。

「どうしたののどか顔赤くして！？なんかあったの！？」

肩を掴み、心配そうな顔で詰め寄るハルナ。しかしのどかはフルフルと顔を横に振るだけで、何も言わない。

「ホントどうしたの？本返しにいく間になんかあった？」

「べ、べつに……。なんでもないよ……」

それでも何があったかを聞こうとするハルナだが、のどかは顔を赤くして視線をそらし、体をモジモジさせ、一言言うだけで多くを語ろうとしない。

……が、その態度から何か察したのか、ハルナの頭に生えている2本のアホ毛は天に向かって真っ直ぐ伸び、顔が心配から玩具を見つけた子供の笑みへと変わっていく。

「はは〜ん……。のどか、ひょっとして……男となにかあった？」

「へっ！？そ、そそそそんなこと、なななな……！！？」

ハルナの言ったことを大げさなぐらいに首や手を振って否定しようとするが、言葉がどもり顔はさらに赤くなってしまう。さらにこれを聞きつけた生徒たちがこぞって周りに集まってくる。

「なになに！？男性に奥手な本屋について春が！？」

「おお〜！！そりゃビッグニュースだ！一体どんな人が！？」

「本屋ちゃんより先にそういうのできると思ってたのに〜！！いいなあ〜！！！！」

「は、はううー!!」

色恋沙汰というのが大好きなお年頃である彼女たちにとって、こういうことはある種のイベントであるため、困るのどかをよそに次々と質問やらなんやらをしていく。その光景を横目で眺めていた正治は、飲んでいたお茶を机において一言。

「青春してるねえー」

「……兄ちゃんがそれ言う?」

side ユーリ

アスナちゃんに魔法がバレました♪……突然なに言ってるんだという目をしないでくれますか?

いやね、オレは『原作』でネギがアスナちゃんに魔法使いだってバレる原因であり、なおかつ一般人であるのどかちゃんの魔法側に介入する原因のひとつである『宮崎のどかが階段から落ちてネギが魔法使ってアスナにバレちゃった事件』を阻止するために動いてた

のよ。……誰だネーミングセンスねえって言ったの？

一応、極力『原作』で起こることはオレとネギの二人で解決していこうと思ってたから、この事件を阻止するために授業の後のどこかちゃんをつけようとしたんだが、目を放した隙に見失ってしまい、探して見つけた時にはすでに階段から落ちているところだったのだ。ネギとアスナちゃんもちょうど近くにいた。

なのでネギが魔法を使う前にと、【瞬動】を用いてのどこかちゃんを受け止めて、一件落着ということにしようとしたんだが、ネギが使った魔法がオレに作用して、しかもそれを眼前にいたアスナちゃんにバツチリ目撃された。

結局は『原作』の通りに、アスナちゃんがネギに問い詰めてネギがあたふたして、つい「魔法使いだ」とかもう逃げることでできない発言をしてしまつて、魔法のことがバレてしまった。

ん？お前この間なにやってたかつて？のどこかちゃんをやさしくエスコートしてたよ？かわいい女の子を放って置くのはイギリス紳士のすることじゃないからね。……そもそも、アスナちゃんに何時までも魔法のことを隠し通せるとは思えないしね。勘鋭いし。

そして現在、オレたちは3人仲良く2・Aの教室へと向かっているところである。

「しかし魔法なんて漫画のようなものがあるなんて、不思議よね」

「あ、あの。本当にお願いですから、僕が魔法使いだってこと言わないでくださいね……？」

「わかってるわよ。いくら私がバカだからだって、ちょっとは信用しなさいよ」

涙目なネギが必死に懇願しているのを、すこし不機嫌そうに言いながら秘密にするよう約束するアスナちゃん。……案外やさしいなアスナちゃん。これはネギが同居人で今まで問題を起こしてなかったからだろうか？ちなみにこのネギはオレが魔力制御を教えているからくしゃみで服を引剥くなんてことはしないぞ？……実はちよつぱり後悔してるオレがいたりする。

「でもさ、本当に記憶消さなくていいの？もしこのことばれたら、あんたらオコジヨになるんでしょ？」

アスナちゃんは不思議そうな顔をしながらオレに尋ねてくる。まあ、『一般人に魔法のことを知られたら記憶を消すのが普通だ』って言ったのに、消さないのはなんだと思うのは当たり前かな？

「確かにそうだけど、黙ってくれるならオレはそれでいいし、第一魔法が実在しますよなんて言ったところで、普通は嘘つきとか変な人とは思われないだろ？」

だいたい記憶を消すにしたって、相手の了承もなしに無理やり消すのはどうかと思う。他にもいっただいどこまで消せばいいのかが曖昧なこともあるし、記憶消去の副作用で頭がパーになるなんてことも偶にあることを考えると迂闊にできない。というかアスナちゃんはそういうの効かないだろうしね。……魔法無効化って面倒だよな。

「それもそうよね……。まあそんなことはいつか。とにかく、高畑先生が私のことをどう思ってるかちゃんと調べてよね」

……そういやそれと引き換えに魔法のことを黙っておくことにしたんだっけ。いやはや安い対価だね。そしてタカミチのことにすると熱心だね、どうせ結ばれないのに。

そんなことを思っていると、2 - Aの教室前まで着いたようだ。

「そういつわけだから荷物とってさっさと実行するわよ!!」

テンションが妙に高いアスナちゃんが扉を開ける。

パン！パン！パパーン！！

「『『『ようこそ、ネギ先生、ユーリ先生ー!!』』』」

開けたと同時に2 - Aの生徒たちがクラッカーを鳴らしてオレたちを迎える。机には料理がところ狭しと並んでいて、2 - Aの生徒だけでなくタカミチやしずな先生、なぜか正治のやつまでいる。このことにネギとアスナちゃんは呆けた表情をする。ネギは分かるがアスナちゃんが呆けてどうする？今まで持っていたジューズは何のために買ったんだよ？

「そうだ、今日あんたらの歓迎会するんだっけ！忘れてた！」

ホントどうして忘れるの？だからバカレッドなんて不名誉なあだ名つくんだよ。

「ほらほら、主役は真ん中来なきゃ！ユーリ先生もそんなとこ突っ立ってないで早く来なよ！」

っと、御呼ばれしちゃいまいたね。せつかくだから、存分に楽しみますか。

side 正冶

主役であるネギ少年とユーリが来たことで歓迎会は始まる。二人と世間話をするものや、友達同士で会話するもの、輪に混じらず寂しくお茶を飲むロリ（ギロっ！）……女学生などなど、思い思いに楽しんでいる。

そういえば、これより少し前ぐらいにネギ少年に魔法バレイベントがあるはずだけど、どうなったんだろうか？ユーリがいるとはいえ、どこか心配だ。……まあそれは後で確認すればいいか。

（……どうやって話しかけりゃいいんだよ……）

視線を動かして見る先には、いつもの通り夕風を入れた竹刀袋を背負った刹那が木乃香と会話していた。といっても木乃香が一方的に話しかけて刹那がそれに答えるという形だ。……それでもあやって会話しているのを見ると、前よりは良くなってるようだ。

なので俺も話したいんだけど……、やっぱり俺のことが好きだと言われたからか、その勇気が出てこない。というかあれだけ言われても『妹』として見てるんだよな俺。正直こんな状態で話しかけ

ても何を言えはいいのかがわからん。

「あ、あのー、ユーリ先生……」

どうしようかと悩んでいると、何か声が聞こえたのでそちらに目を向ける。そこでは前髪で顔の上半分が隠れた、確か……本屋ちゃんだっけ、がユーリに声をかけていた。

「ん？どうかしたのか宮崎？」

「あのー、さきほどは助けていただいて、その、あの……。これ、お礼です、図書券……」

恥ずかしそうにしながら、図書券をユーリに差し出す。それを見たクラスメイトたちは彼女の性格からあまり見ない光景に驚き、「本屋がもうアタックしてるー！」とか「ワイロか！？」とか言っただけ立てる。……あれ？これって確か『原作』だとネギ少年じゃなかったけ？

ちらりとユーリのほうを見ると、さわやかな笑顔で「ありがとう」とお礼を言っているが、額から僅かに汗を流している。……お前なにやったんだ？

（……まあ俺には関係ないけどな）

別に本屋ちゃんが好意を持つのがネギ少年だろうとユーリだろうと、魔法をバラすなんてことしなきゃいいだけだ。

くくくくくくく

ジャンパーに入っていた携帯がなり始める。一体誰だと取り出し

てディスプレイを見ると、『ルーカスさん』と表示されていた。こんなときになんだと思うが、出なかったら後が怖いので通話ボタンを押す。

『おハロー。世界中にお花畑を届けるSeedガーデン社のルーカスでございます』

「……で、どうしたんです一体？」

『……さすがにスルーはないだろ……。さつき学園長から今日の深夜0時に世界樹前広場に集合だと言われてね、お前も来いってさ』

「そんなの後に伝えておけばいいじゃないですか」

『いいじゃないか！ただ だし』

「……ひょっとして、FFネタを言いたかったただけですか？」

『いいですとも！改め、そうですとも！！』

ブチッ！！ツー、ツー、ツー……。

あんたの頭はそんなことのためについてんのか！？最近出番が少ないって嘆いているのは知ってるけど、こんなことで増やそうとするんじゃない！！

「まったく、大変だなお前も」

いつの間にかユーリが手に飲み物を持ちながら俺の近くにまで来ていた。

「……なに近くに来てるんだよ？俺は今話すことなぞない」

「そんな邪険に扱うなよ。それよりも、刹那と話さなくていいのか？」

そういつて、木乃香に抱きつかれている刹那のほうに顔を向ける。こいつ、心配してるのか？それとも面白がってるのか？……いや、疑ってもしようがないか。

「そういつけどよ、正直どう話しかければいいのかが分からないんだよ……。というか話せるかどうか微妙だしよ……」

今までのことがどうしても足を引つ張ってるんだよなあ……。ここまで優柔不断だったかな、俺。

「んまあ、そんなに考えたってしょうがないんじゃない？恋愛なんてゆっくり時間をかけるものだと思っしね」

「恋愛したことあんのかお前？」

「ないけど」

「即答！？てかそれだめじゃん！」

「おいおいそう言うなよ。オレは親が親だから軽々しく付き合いか「先生」……」つと、それじゃあ呼ばれてるから、またな」

いすから立ち上がって呼んだ生徒のところへ向かうユーリに「お」と返事をして見送る。それからやることのない俺は、刹那に声

をかけようかと思ったが、その勇気もなく、そのまま歓迎会の終わりで過ぎてしまった。

そして、時間は深夜の0時へと移り変わる。

第13話 歓迎会 悶々とする優柔不断野郎（後書き）

本屋ちゃんが魔法に関わるかどうかは、まだ決めてなかったりする。

次回は言ってしまいましたが、正治VSユーリです。やっとこさユーリの能力を紹介できる……。

それではまた。

第14話 兄弟喧嘩 ぶつかり合って (前書き)

戦闘シーンを久々に書いたけど、やっぱり難しいです。あれを上手くかける人って凄いですね。

今回のお話は、長い上に無理矢理感がいっぱい詰まっていますので、見るなら覚悟してください。

ではどうぞ。

2011年7月31日に本文を一部編集。また、以前『タカ派とハト派』と書いていたところを『過激派と穏健派』にしました。

第14話　兄弟喧嘩　ぶつかり合って

日が沈み、あたりが静まり返った深夜。普段なら人々の多くが夢の中にいる時間の、麻帆良の世界樹前広場に麻帆良に所属する魔法使いが40人近く集まっていた。10代半ばの者から年齢80は過ぎていると思われる老人まで、年齢性別人種問わず様々である。

しかしこの集団、よく見ると真ん中あたりでほんのわずかだが隙間があり、そこを基点に約20人ずつに別れており、一方は相手を睨み付けており、もう一方はそれを受け流したりうんざりしていた。そんな集団の中間に立っている学園町は飄々と笑い、その隣にいるタカミチは苦笑いをする。

「まさかここまで対立するとは思わなかったな」

「それはそうだろ。理由はどうあれ、私やそいつみたいなのを受け入れるお前たちは『悪』を放っておけば『正義』の片隅にも置けない連中と思われるのも当たり前だ」

そんな集団のうちの睨まれているほうにいるルーカスとエヴァンジェリンはどこか他人事のように今の現状について話していた。

このような事が起こっている理由としては、15年間悪の魔法使いの代名詞であるエヴァンジェリンの扱いに関して魔法関係者は過激派と穏健派で対立していたのが、さらにここ数年、金のためならどんな事もすると言われる傭兵や、（事実は少し違うが）妖怪のハーフである正治をこの学園に住ませたりといったことが積み重なり、それらを巡って本格的に派閥闘争が起こり、現在のような少々険悪な状態になってしまったのだ。ちなみに睨みつける方が過激派、もう一方が穏健派である。

「……やっぱり、俺がいるとまずいんですかね」

ある意味この状況を生み出した原因のひとつである正治が、浮か
ない顔でつぶやく。

「そんなこと言うな。どこの組織にだって対立などいくらでもある
んだ。いちいち気落ちしていたら身が持たんぞ」

「こいつの言うとおりだ。どうせ奴らなぞグダグダ遠くから叫ぶだ
けで、いざというときには何の役にもたたんのだからな」

そんな正治をルーカスはできる限り落ち着かせ、エヴァンジェリ
ンはタカ派をつまらなそうに一睨みして軽く侮蔑の言葉を吐く。そ
れからしばらくはピリピリした雰囲気相場を包むが、彼らの目の前
に魔方阵が出現する。

魔方阵が一瞬輝くと、そこから太もまで伸ばした金髪を揺らす
スーツ姿の人物が現れる。それにあわせ皆一斉に現れた人物を見て
過激派の人々は「おおっ」と驚きの声をあげ、穏健派の人々からも
「綺麗」といった言葉が発して目を輝かせる。

その人物はしばらくその場にいた人間の顔を眺めるように顔を動
かし、最後に学園町とタカミチの顔を見やると、笑顔を向けて、そ
して口を開く。

「はじめまして皆さん。『千の呪文の男』サウザント・マスターの実際の息子の、ユーリ・
スプリングフィールドです」

今日俺たちがこの麻帆良の世界樹前広場にいる理由、それは目の前に立っているユーリの自己紹介をするためだ。本当なら来日初日に挨拶する予定だったが、あいつが時間に余裕ができてからと申し出たために今日になったのだ。……本当は木乃香に大怪我させられたからなんて口が滑っても言えないけどね。

そのユーリは簡単に自身の名前を告げる。それに伴って皆の目が先ほど以上に輝いている。おそらく多くの人はその胸に期待とか羨望とか抱いてるんだろうなあ。さすがは『英雄の息子』だなというべきかな。

隣に（本人は凄く嫌ってるけど）正真正銘の英雄ことルーカスさんがいるんだけどね。

「ユーリ君がこの学園にいるのは、彼の弟であるネギ・スプリングフィールド君の教師という修行を補佐するために来ておる故、関東魔法協会には所属はしないということになるが、皆仲良くしてくれるかの」

ユーリの隣に移動した学園長がユーリの事情を説明し、皆が元氣よく「ハッ！」と言う。……英雄の息子を手籠めにしようとするやつはいなさそうだな。表向きはだけど。

「さてユーリ君、何か言いたいことはあるかね？なければこのまま実力テストをしたいのじゃが」

「そうですね……、とりあえずひとつ言ってもいいですか」

「構わんよ。へんてこなネタを言うつもりなら止めるかの？」

フォッフォッフォと笑いちよつとした冗談を言いながら、一步後ろに下がってユーリに道をあげる。それに一礼をしてから背中の手を回した状態で前にでてしゃべり始める。

「皆さん、此度私の弟が修行のために教師をすることになりましたが、英雄の息子だからといって甘やかすことなく、厳しく接し、教師としての仕事を十二分にできるようにご指導のほどをお願いします」

その言葉を聞いて、教師陣の顔は真剣な表情になるが、目はどこか微笑ましいものを見る目をしている。彼らからしてみたら、弟のことを思ってる兄だと映っているのかもしれない。まあ俺もああいう考えはいいと思う。何でもかんでも甘やかすと、善悪の判断つかなくなるしね。

「ああ、それともうひとつ」

しかし、ユーリは今さっき思い出したという感じで、左手の人差し指を上げながら、陽気な笑顔で微笑む。今度はなんだろうと注目する先生たちに向かって、一言。

「もし、ネギにむちゃくちな『正義』を吹き込んだり、妙なことをさせようとしたら……………、殺しますよ？」

にべもなく、それが当然であるとばかりに言っただけだ。しかも

ほんのりとだが殺気も放ちつつ。その一言に魔法先生たちは息を呑む。過激派の人たちは「なに言ってるんだこいつ？」みたいな目で見てるけど。……てかあいつはネギのことになると妙にブラコンになってないか？前世じゃ俺のことをあんなだけ馬鹿にしておいて……。

「正治、目付きが鋭くなってるぞ」

つと、いかんいかん……。化け物おれが英雄ユーリの息子を睨んだら何を言われるかわかったもんじゃないからな。だけど、納得いかないものは納得いかないだよ。

「そ、そうかのう。君がネギ君を大切に思っておるのは分かったから……、いいかげん殺気を放つのはやめてくれんかの？」

「おお、それはすみませんでした。つい」

学園長が冷や汗をかきながらユーリに言い、それをわざとらしく頭に手をおいて舌を出しながら謝るユーリ。……だからそういうのをやめろ。妙に似合ってるからム力つくんだよ。

「クツクツク、なかなか面白いことをやるじゃないか、ナギの息子は」

「そりゃナギバカの血をひいていますからね。このぐらいやるでしょう」

そのチート師弟。楽しんでんじゃないよ。

「まったく……。それでは気分を変えて、そろそろ実力審査を行いたいのが……。誰がよいかの？」

そう言って皆を見る学園長。さっきの殺気（ギャグじゃないぞ？）のせいで妙な空気が流れているせいか、それとも英雄の息子とおいそれと戦うのは引けるのか、誰も立候補をしようとしない。できることなら俺が立候補したいけど……、過激派は確実に反対するだろうな。なんて思っていたら、ルーカスさんが手を挙げた。それに俺や多くの魔法先生が驚く。

……なに考えてるんだろうかこの銀髪ケチャップFFマニアは？とか毒づいていたが、次の一言がさらに波紋をよぶ。

「斉藤正治を指名する」

。。。。

。。。。。。

。。。。。。、はっ？俺？マジで？

「ば、バカを言え！？他の者ならまだしも、なぜよりもよって斉藤正治なのだ！？」

突然のことで呆けてしまった俺を放って、過激派の魔法先生が反論してくる。

「誰も立候補しないなら、推薦で選んでもいいじゃないか？何か正治ではいけないころでもあるのかな？」

「ぐっ……」

ルーカスさんの言葉に過激派の魔法先生は口を閉じてしまう。もうちょと言われると思ってただけど……、ルーカスさんの影響力ってとんでもないな……。でも、どうして俺を選んだんだ？

「ルーカスさん、どうして俺を……？」

質問すると、ルーカスさんは指で頭をトントンと叩く。……『念話しろ』と？

《なんですか一体？なんで念話なんですか？》

《いや何、こうしたほうが話しやすいだろうと思って》

なんのことだよ？

《お前、ユーリのやつに言いたいことあるだろ？》

《言いたいこと……ですか？》

《そ。例えば、『どうして殺したんだバカヤロー！』とか、な》

《……またえらく直接に言いやがるな。いくら前世のことを話したからって、そこまであっさり言うか？そりゃ、あいつのせいでこうなったのは確かだけどさ……。今更どうしようもないしよ……》

《まあそうかもしれんがな……、今のうちに『兄弟喧嘩』でもしておけ。あとでそれをぶり返して面倒事に発展するよりは、今のうちに過去に一区切りつけていたほうがいいだろ》

兄弟喧嘩……か……。そっぴや前世で最後にやったのっていつだったけ？いつからか相手にするのも面倒になってたからな……。

.....

《……了解しましたよ。師匠命令ってことでやってやりますよ》

《素直じゃないねえ。かつこつけんなよ?》

やかましいよこの人は。まあ……、せっかくだからやりたいようにやらせてもらいますか。

side ユーリ

オレが変なことしたせいかなだれも立候補しないなと思っていたら、ルーカスが手をあげたかと思ったら、なぜか正治を指名してきた。魔法先生が反対をしようとしたけどルーカスが一言言つと黙り、そのまま正治と戦うということになった。

そういえば、途中なにやら念話のようなものをしているように見えたけど、何を話してたんだ?まさかオレの必勝法とかじゃないだろうな?……それはないな。オレが授かった『能力』のことを話してないからどうしようもないはずだし……。

「おいユーリ。さっさと準備しろ」

つと、いつの間にやら正治のやつはもう広場の中央に行ってたみたいだ。手にはいつ出したのか、日本刀を持っている。そういえば

神鳴流を習ってるって言ってたっけ？そりゃ気をつけたほうがいいな。すぐに中央に移動し、正治と向かい合うように立つ。いつでも対処できるように相手を注視する。

オレの魔法の発動体は指輪だから杖を落とされて魔法が使えないとか無様なことはないけど、注意はしすぎてもいいぐらいだからなまあ今感じるこいつの気の量は普通よりは多いけど、決して突出してるわけじゃなさそうだから、大丈夫かな……。

「そういえばさユーリよ。お前が俺を殺さなけりゃさ、刹那や木乃香、ルーカスさんに千草さんなんかに出会えなかったんだよな？それを考えるとさ、お前にはある意味では感謝しなきゃいけないんだよな？」

？ いきなりなんだ？

「でもさ、前の世界の親には悪いことをしちゃったよな。親より先に死んじまったんだから」

「……………」

親、か……。オレにとってはあんまり、いい思い出はないけどなオレが捻くれる前からあんまり構ってくれなかったし……。でも、確かに親不孝なことをしたかな……。

「だからさ『兄貴』……、大人しくボコられる」

—— シャリン。

あいつが言葉を発したと同時に、背後から鞘走りの音が聞こえる。悪寒を感じたオレはすぐさま体を屈める。その瞬間オレが今までいた場所に何かが通り過ぎる。すぐさま【瞬動】を使って前方に移動してオレがいた場所に目を向ける。そこには右手に刀を、左手に鞘を持った正治が射殺さんというほどの目つきをして俺を睨み立っていた。

こいつ、いきなり何しやがるんだよ！？てか学園長の合図とかは！？

「おい正治！まだ始まりの合図も言っていないだ——！？」

文句を言うために叫ぼうとするが、しかし正治はお構いなしと言わんばかりにこっちに急接近して上段から刀を振るってくる。いきなりのことで困惑するもそれを横に飛ぶことで回避するが、刀は真ん中あたりでその動きを変えて下からオレのほうに向かってくる。なんだよこの燕返しもどき！？ええい！！

「山河慟哭——！」

そう叫ぶと、右手に青い刀身に流れる川のような文様が刻まれた片刃の大太刀が現れる。それをこちらに向かつてくる刀を防ぐように構える。ギインという音とともに正治の刀は手から離れ後ろに弾け飛ぶ。それを好機と見てすぐさま山河慟哭で切りかかるが、正治は後ろに大きく跳躍することで避け、空中に飛んでいた刀を手にしてから着地し、中段に構える。ただその目はオレが取り出した大太刀を見据えていた。

「山河慟哭……。それが転生時に授かったやつか」

「おおそうだよ。なかなかかつこいい武器だと思わないか？」

少しおちゃらけながら答える。オレが転生時にもらった5つの能力のうちの一つで、ゲームの『新鬼武者』の主人公の初期装備だ。あのゲームが好きだったオレはついこれを買えないかと言ったところ、大丈夫だということで購入したのだ。……まあこの外国人女性の見た目でこの刀は微妙かもしれないけど。ちなみに同作品の武器をほかにも何個か貰っていたりする。

「っで、それはいいとして。いきなりどうして攻撃するんだよお前は。ひょっとしてあれか？前世の恨み晴らしますってか？」

勝負する前の言ってたことからなんとなくそれっぽうだけど、最初あった時ならわかるけど、最近では以前はあり得ないほど仲良くしてると思ってたんだけど……。

「そういうことだな。まあ師匠に言われたからってのもあるけどさ……、せつかくだからよ、久々に『兄弟喧嘩』でもしようや」

『兄弟喧嘩』、ねえ……。そういやガキの頃はよくやってたな。オレが劣等感抱き始めてからはそんなことも無くなったけど。

「けど、それも悪くないねえ。……ああでもだからって泣くのは勘弁な。ウザイから」

可愛い女の子とかネギならまだしも、こんなやつは涙なんか誰も見たくない。オレは絶対嫌だね。

「けっ、ほざいてるバカ兄貴め」

心底ウザイって顔でほざいてくる正治。うん、あの顔はイラつく。

「ハハハ、それはこっちのセリフだクソ弟よ。浄化剣！」

どこか卒塔婆を思わせる赤い剣——浄化剣を左手に出現させて、接近して山河慟哭とともに正治に攻撃を仕掛ける。浄化剣で横薙ぎを繰り出すと刀で受け流されるがすぐさま山河慟哭で袈裟懸けをするように切りかかる。しかしそれは少し前と同じように後方に跳躍することで避けられてしまう。が！西洋魔術師のオレに距離は関係ない！

「【魔法の射手！！光の100矢！！】」

呪文を詠唱すると光を帯びた弾丸とも言える破壊属性を持った【魔法の射手】が100本ほど正治に襲い掛かる。父と母な並外れた人だからか、生まれつきの膨大な魔力を込めた魔法だ。さすがにこれには正治も顔を一瞬だけ歪めるが、すぐに刀を使って一つずつ迎撃していく。……まああの程度でどうにかなるとは思ってなかったけど、時間稼ぎぐらいはできるな。

「【アイン・ツヴァイ・ドライ 来たれ雷精風の精】」

山河慟哭を地面に刺してから、右手に自身の魔力を最大限に貯めてオレが使える最大級の魔法を唱える。この間も魔法の射手を正治に操り向かわせる。オレは魔法の才が低かったから、使う魔法を少なくしてそれを重点的に鍛えたからな。特に魔法の射手のコントロールは10年以上訓練してるから誘導性はばっちりだ。

まあ、正直面倒くさいったらありやしないんだが、こうでもしないとゆっくり唱えられないしな。……と、なんか魔法の射手があと20ちよいしかなないじゃないか。やっぱり神鳴流は厄介だな。さっ

さとケリつけるか……。

「【雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐……、雷の暴風！！！】」

呪文を唱え終え魔法の名を言う。ちよつとだけ上に上げた右手から尋常じゃないほど強烈な旋風が稲妻とともに、辺りに突風を巻き起こしながら直線状に放たれる。正治もさすがに気づいたが、しかし回避をする暇もなく【雷の暴風】が飲み込む。それで勢いが止まるわけでもなく、そのまま空に向かって突き進んでいく。途中パリーンとなにかを割るような音がしたケド……、気のせいだよな？

「ユ、ユーリくんよ何をやっておるんじゃ！？結界が壊れてしもうたではないか！？」

気のせいじゃなかったみたいだ。……まああれだ。英雄と女王の血を受け継いでるとはいえ、オレ如きに破られる結界を張るほうが悪いということだ。

しかし、それでもやりすぎたかな？正治がいるところなんて魔法の余波で土煙とかひどくて見えないし、魔法関係者がみんな大口開けて呆けてるし。広場の地面がひどいことになってるし……、これってオレが修理費を持つとかなないよな？そして正治はどうなったん……。

——ゾワッ。

(……！？なんだ！？)

土煙の中から、異常な量の気が発せられる。最初に正治が発して

いた気をずっと超えている。……どうなってるんだ？抑えていたにしても妙に上がりがおかしい。というかあれだけのことを言っておいて手加減するような奴じゃないし……。

何が起こったのかと思考していたら、土煙の中から、何かが3つほどこつちに向かってくるのが見えた。気とかを発せず、速度的にはそこまでないので2つをよけて1つを手で掴み取る。

(……矢？)

掴み取ったのはなんてことのない矢だった。矢尻の部分には毒物のようなものを塗っているようにも思えない。……まあオレにそんなもん『効かない』けど。でも、あいつ弓矢なんて持ってたか？どこか不可解だなと思いつつ土煙のほうを向くと、すでに煙は晴れており、正治の姿が見えた。

右手と左手に箆手のような物をつけ、バカにならないほどの気を纏わせた弓矢を構えて。

「【雷風矢^{らいふうじ}】……てねっ！！」

掛け声とともに気を纏った一矢がこちらに向かつて放たれる。ただし先程の矢とは違い、強烈な突風と雷を発しながらミサイルの如く迫ってくる。その姿はまるで【雷の暴風】を思わせる一撃だ。……なんて余裕つばくしてる場合じゃないだろ！？

「【絶対防壁^{オールガード}！！】」

オレの眼前に七色に光る壁が現れる。それに合わせるかのように

矢が壁にぶつかる。最初は壁を通して振動が伝わり、足元の地面が崩れながら揺れるが、しばらくすると矢の勢いは弱まり、そしてついに矢は力を無くしてポトリと地面に落ちる。

オレが授かった能力の一つ、【絶対防壁^{オルガード}】。まあイメージとしてはATフィールドもどきと思ってくれればいい。前方にのみだがほとんどの攻撃を防ぐことができるし、効力は弱まるけど最大で100mまで展開できるから重宝している。コレのおかげで今まで生きていったといってもいい。

それはいいとして。あれだけの気を放つなんてむちゃくちゃだな……。まああんだだけ気を使っただから疲れているだろうな多分。

「疲れてるわけないだろ」

「あ、そうなの……、へっ？」

我ながら間抜けな声を出したのと、なぜか他人事のように思えたのもつかの間、左手に持った薄く赤みがあった巨大な西洋剣を、右手にそれに似た西洋剣を持った正治が、懐に入り込んで左手の剣を縦に一閃してきていた。……。あれ、この2つって『鬼武者』の炎龍剣と炎蛇剣ばくない？

「つて、うおっと!？」

つい剣に注意がいつてしまい、やばいと脳が危険信号を発した時には無意識に山河慟哭を手にとって後ろに跳んでいたが、完全に回避できずにスーツを通り越して原の肉をわずかに切られる。痛みが生じるものの、このぐらいの怪我はよく負っていたので耐えることが出来た。

しかし相手は距離を詰めようとせず、すぐさま右手に持っていた剣を横に振るう。本来なら無意味に見える攻撃だが、剣は炎を纏

いながら鞭のようにこつちに『伸びてきた』。それを山河慟哭と淨化剣で使って地面に叩きつけるように薙ぎ払う。剣はそのまま地面に激突するも、すぐに持つ主のところに戻るように縮んで最初の大きさになる。

……今ので確証した。こいつ、オレと同じく『鬼武者』の武器貰ってやがる。よくみると箆手なんて『鬼武者3』の主人公2人が装備してる鬼の箆手じゃないか。でもあれは幻魔の魂を封印する役割の物のはずなんだが……。多分何かしらこの世界に合わせた能力になってるんだろうな……。ひよっとすると【雷の暴風】の直撃喰らって無事なのはアレのせいかもしれない。

「驚異的な再生能力に鬼の武器、それから鬼の箆手……、ずいぶんとふざけた能力だな」

「そつちこそ、あの防御壁は無しだろうが。【雷の暴風】の魔力吸収できた分をあの一矢に込めたのに防ぐなんてどうなんだよ」

ああ、やっぱりあの気の上昇はそういうことね。てか魔力吸収って、なんだよその魔術師殺しの能力は？もちろんデメリットもあるんだろうけど、それはないわ。

「ズルい能力だなそれ。これってあれか？『チート乙ww』って笑うところ？てかさ、【雷風矢^{らいふうし}】ってなんなのさ？明らかに前が考えた技名だよな？もしかしてそういうのに憧れてたの？」

実は気になってたんだよな。いくらこの世界がファンタジーだからって、あんな風に技名叫ぶなんてさ。前世じゃそういうのに対して「こいつら恥ずかしくないの？」って言ってたのにね。

正治はオレの指摘が図星だったのか、言われて考えたからなのかわからないが、頬を赤く染めている。……マジでそうなの？これは

……、いびるチャンス！！

「あつれ〜、まさかの図星？いい年してそれはないよ〜？いやマジで恥ずかしいよね〜？これは所謂『厨二病乙ww』とか言うところ？いやはや凄いですね正治さんは。前世からじゃ考えられませんよまったく。さすがは私より才能のあったお方。頭の中もいろんな意味で私の一つ上をいっておいしましたね〜。元兄としては歓迎の言葉を送るべき？それともプギヤーとか言うべき？ねえねえどうしたほうがいいかな、正治くううん」

えっ、言い過ぎじゃないかって？いいじゃん、前世の分もこみで色々と言ったてさ。いや別に楽しんでるわけじゃないよ？

「……………ずいぶんと舐めたこと言うじゃねえか、クズやろうが」

さすがに言い過ぎたのか、今にも怒り心頭になりそうな、般若も裸足で逃げるぐらいの形相を浮かべる正治。これは、言い過ぎたかな？

「あ、ああ正治よ。確かにちよつと言いすぎたとは思っけど、これはちよつとした冗談——」

「だいたい、どうしてお前がそんな偉そうに俺にギヤアギヤア物言えるんだよ。たいした努力もしないくせに、俺に嫉妬して何かあるたびに馬鹿にして来たり高圧的な態度で接してきて、あげく俺のことを殺すようなクズのくせに、どの口がそれだけのことをほざくんだ？」

や、やばい……、本格的に怒ってるよ……。あそこまで言うべきじゃなかった。

「ああでも、俺を殺したあと天罰の如くガラスに刺さって死んだんだっけか？ずいぶんと愉快な死に方だよなあ？まあそのおかげで、この物語の主人公の兄として転生できたんだろうけど。まあお前のことだから、どうせ『ハーレムやるぞ！』とかそんなくだらない目的のために生きてるんだろ？そんでネギ少年が邪魔になったら見捨てるんだろ？実は才能溢れるネギ少年が嫌いなんだろ？そういう奴だもんなお前はさあ」

「……………今、なんて言った、このやろうは？誰が、誰を見捨てるって？」

「おい正治……。お前さ、ちょっといい気になりすぎじゃないか……？」

「おや？事実じゃなかったんですか、それは失礼」

「そつだよ、『今は』事実じゃないさ。…………だからこそ、むかつくんだよ！」

せつかく、『あのこと』を気にすることなく、あいつと接するこ
とが出来るようになってきたのに……、こいつはよおー！

「もう『兄弟喧嘩』で済ませるかよ……。もう一度ぶつ殺してやる
ー！」

「ハッ！戯言は死んだ人間のような目をしてから言えってのクソ兄
貴がー！」

「それはこっちのセリフだ、カス弟がああ！！！」

side
ルーカス

正治とユーリ。あの二人が前世で兄弟で、ユーリが正治を殺したというのは聞いていた。そんな二人がこの世界で再び出会ったというのは驚いた。そして意外と仲良さげに接していることにも。ただ被害者と加害者の関係が変わるわけではないから、今のうちにでもそのことで喧嘩でもしておけば、後でそのことが原因で問題を起こすよりもいいだろうなんて考えたのだが……。

「オレの苦勞も知らないでよくも言ったもんだな！さっきの言葉を取り消しやがれ！！」

「前世でお前という男を知ってる奴なら口そろえてそう言うわ！！そんな風に思われるお前が悪いんだよ！！」

「小さい頃から誰にも構ってもらえなかった人間の気持ちがお前に分かるかよ！！」

「だから捻くれましたって？それはアホのやることだよ！！そんなことで構ってもらえるなんて思うなんて浅はかすぎるんだよ！！」

「苦勞を知らなかったお前がいうことか！！いつもちやほやされて好きなことできた奴がよお！！」

「それは努力したからに決まってるからだろうが！才能に頼って努力しなかったお前とは違うんだよ！！」

大声で互いのしり合いながら、両手に持った剣を次々と打ち合っていく。その余波で地面は抉れ、クレーターのようなものは出来、階段はボツボコになっていた。一言でいえば被害が甚大だ。

「失敗したかな、これは」

「何の話だ。……というより、あいつらはなんの話をしているんだ？前世とか訳分からん」

ワタシの隣にいるエヴァンジェリンが試合――もはや死合ともいえるが――を楽しそうに見ながらも、納得のいかないといった表情をしている。あの二人の関係を知らない、そういう反応になりますよね。

「あ、あの、ルーカスさん」

そこへタカミチが困惑気味にワタシの近くに寄ってくる。

「どうした？」

「いえ、その……、あれはそろそろ止めたほうがいいですよ？実

力はよく分かりましたし。……………それに、広場の修理費が……………」

あいつらの様子より広場の修理費を気にするのか？……………いや、気になるか。一般人もここを利用するしな。

「だったら止めればいいじゃないか。ワタシに相談せんでもいいだろう？」

「そうなんですけど……………、あの二人がどういう関係かは知りませんが、言ってることがことのせいで止めるべきかどうか躊躇するんですよ。あと、あの闘いを止めるのは、他の魔法使いの人たちだと荷が重そうですし……………」

ふむ……………、まあそれも一理あるがな。いくら原因がワタシにあるとはいえ、あの喧嘩を止めるとなると少々勇気がいるな。

そもそもあの二人の剣戟、互いに持つてるのは大きめの剣なのに、それを両手に持ちながらも、（ワタシ以外にとって）目にも留まらぬ速さで斬りあっているのだ。ただでさえ止めにくい雰囲気なのに、あれではただの魔法関係者では近づいただけで吹き飛んでしまう。

現に実力者を除いた奴らはみなあの気迫に圧倒されて動けずじまいだ。動けるものでも、止めるタイミングが見つからず、手をこまねいている状態だ。

「……………しょうがない。ワタシがなんとかしよう」

こんなことになったのは私のせいだからな。

「学園長。今からあの二人止めるが、許可を願いたい」

「ぬっ、そうか。すまぬなルーカスくん。ワシでも止めにくくてな」

実力行使すればどうにでもなるだろうが。とは言わず、頭を軽く下げて、すぐさま臨戦体勢に入る。右腕を引き、拳に魔力を貯めていく。いまだに戦いをしている二人に狙いを定め、深呼吸をする。そしてある程度貯まったところで……、拳を正拳突き of 要領で動かし、魔力を放つ！！

「【疑似・豪殺居合拳！！】」

後ろでタカミチが「ちょっ！？」とかいった様な気がするがあえて無視をする。拳からは30mもの太さはあるのかという魔力の塊が放出される。魔力によるものか、眩いばかりの光を放ちながら正治とユーリへと向かっていく。二人はそんな状況であっても気づくことなく剣戟を続け、

ドオオオオン！！！！

「「ギヤアアアアアア！！！！？？？」」

そのまま【疑似・豪殺居合拳】の餌食となり、叫び声をあげながら上空へと高く舞い上がる。それからヒュルヒュルという擬音がつきそうな感じで空中を落下し、「グギヤ！？」となんと情けない悲鳴を上げて地面に叩きつけられる。また【疑似・豪殺居合拳】の影響で直撃した中心部には目測7mほどの深さのクレーターができ、そこを中心にひび割れが起きていた。

さすがガトー直伝の技だ。素晴らしい威力だ。……別に実際に教

わったわけでもないし、そもそも本物の【豪殺居合拳】とは物が違うがな。というか思いつきでやっただけだし。……いかな、これじゃあラカンのバカと同じじゃないか。

「ま、いいか」

「……いいわけあるかあああ！……！」

むっ、なぜ皆してそう叫ぶ？何か気にいらないことでもあったか？

——その後、あの一撃により気絶した正治はワタシが背負い、ユーリはタカミチが今泊まっているホテルまで送ることになった。二人の怪我については、正治は能力により傷一つなかったが、2日は気絶した。ユーリは腕のいい治療魔法使いを呼んで、なんとか次の日には職場に復帰した。

ただ、この一件により、二人が喋る時は前に比べて口が悪くなった。……ワタシ的には良かれと思ったんだが、裏目に出たな……。情けないものだ……。

そして、後日ワタシのところに、広場の修理費の一部を代替するようにという請求書が送られてきた。しかも結構な額をだ。それを千草に見られ、2ヶ月の小遣いの制限と、3週間『夜のおやつ』を抜きにされてしまった。

第14話　兄弟喧嘩　ぶつかり合って（後書き）

決着のつけ方が思いつかず、部外者に頼りました。……ひでえ話だよ本当。

途中から転生者の性格がおかしくなってるし、過激派と穏健派二ついるか？なんて思うし……。と考えてしまいますけど、ここから話が派生するかも、と願望をもってしまった自分が悪いよね。

……いつになったら図書館島に行けるかが不安です……。

第15話　夢とかネギとか　あと幽霊とか　（前書き）

この作品のネギとアスナの関係はそこそこ良好です。理由はネギが魔法制御できるので脱がされておらず、そもそも日常生活であんまり迷惑かけてないからです。ですのでその点はご注意ください。

あと幽霊というのはもちろんあの子ですよ？決して悪霊とかじゃありませんよ？

それではどうぞ。

第15話　夢とかネギとか　あと幽霊とか

満天の星空に半月が浮かぶ。民家など一つもない草原にある1mほどの岩に10歳にも満たない姿のツインテールの少女が座っていた。身に纏う雰囲気はどこか凜としており、しかし表情にはこれといった感情は浮かんでおらず、ジッと空を見上げていた。

「おい姫子ちゃん、飯できたぞ」

そんな女の子を呼ぶ男の声が聞こえる。女の子が後ろを振り返ると、白のローブに杖を持った赤毛の青年が手を振りながら近づいてきたきた。さらに後ろでは数人の男たちがシートに座って鍋を囲っていた。少女は岩から降りて、とことと青年に歩み寄る。近くまで来て青年の顔をじつと見る。青年はそんな少女にニカツと笑い、その手を繋いで男たちのところへと向かう。

「待たせた〜。それじゃ、姫子ちゃんが来たところでさっそく飯を――」

「遅いぞナ■。おかげで肉が無くなった」

腹減ったと言いたげな顔をしていた赤毛の青年に、黒コートの銀髪青年が手に持っている箸に掴んでいるよく煮えた肉を意地悪い顔をしながら見せびらかす。

「ナツ！？てめえ肉は残してろって言っただろぅが！！それよこせ！！」

「ハッハッハ、いやですとも」

「ふっざけんな〜!!」

銀髪の青年の態度に苛立った赤毛の青年が箸を持って、肉を奪い去ろうとするが銀髪の青年は空いてる手に箸を持ってそれを防ぐ。それでも負けじと赤毛の青年はすぐさま箸を動かすが、銀髪の青年もそれに合わせて箸を動かしてそれを妨害する。二人の目が合い、火花が飛び散る。そしてありえない速度で箸での攻防を始める。

「……まだ肉はあるんだがな。どうするガ■ウ？」

「放っておけ。いつものことじゃないか」

そんな二人を、眼鏡をかけた東洋系の若い男と同じく眼鏡をかけた煙草を吸っているスーツを着た中年の男は呆れた顔で見る。しかし青年二人の攻防はどんどん激しくなっていく。

「いいかげんに渡しやがれえ!!【雷の暴風!!】」

「それがどうしたさ!!【闇の吹雪!!】」

「って、何をしているお前らああ!!??」

「おっ、勝負でもするのか？なら俺も混ぜろおお!!」

「■カンも混ぜるなああ!!」

「やれやれ、バグ3人は相変わらずですね。……ほう、ポン酢とはなかなかいいものですね」

「ア■！？何をのんきに食事してるんだ！？止めるの手伝えー！」

「え、詠■さん、落ち着いてください！」

とんでもない魔力を放ちながら戦闘を始めた二人のところへ乱入しようとする長髪の筋肉質な大男。それを無視して食事を進める中性的な顔をローブですっぽりと覆った男。そんな者たちに叫び声を上げる東洋系の男。その男を落ち着かせようとする、10台半ばほどの少年。

戦闘の余波のせいで、地形が変わったり、突風が吹きすさんだりしているのだが、そんな中でも少女は表情を変えることなくただジッとその光景を眺めていた。

ただ、身に纏う雰囲気、どこか楽しそうなものへと変わっていた。

side アスナ

「……なんだっただろう、今の夢」

夜中に目が覚めて、上半身を起こす。部屋の中が暗くて寝起きだからか、前がぼやけて見える。けど今はそんなことはどうでもいい。さっきまで私が見ていた夢が気になった。

さっきの夢の中の女の子、どこか私に似てるような気がするのよね。ただ私にはあんな場所にいた記憶がないから、なんとも言えないけど。

それに、一緒にいた人たちって誰なんだろう？赤毛の人とどこかネギに似てたし、銀髪の人なんか若い頃のルーカスさんって感じなのよね。眼鏡の渋いおじ様は高畑先生に似てたなあ。あとは見たこと無いけど……、誰だろう？肝心の名前があんまり聞こえなかったからなあ。

でも、私自身はまったく身に覚えが無いはずなのに、とっても懐かしい気分になったのよね……。やっぱり私に関係あることなのかな？

「ルーカスさんに聞いてみれば何か分かったりして……、んっ？」

視界がやっと回復すると、ベッドの向こう側にあるロフトに電気がついているのに気づいた。今ロフトは居候であるネギの部屋みたいなものとなっている。そっちに目をやると、スタンドの電気をつけて、本を何冊か重ねて何かを書き取りしているパジャマを着たネギの後姿が見える。

こんな時間になにをやってるんだろうと思って、気づかれないようにゆっくりと近づく。よっぽど夢中になっているのか、背後まで近づいてもこつちを向く気配はない。

そつと後ろから覗いてみると、真剣な表情で英語とは違う見たこと無い文字で書かれた本を読みながら、これまた見たこと無い文字で用紙に書き取りをしている。文字以外にも漫画に出てくるような魔方阵が書かれていたりする。

魔法使いの勉強かなにかかしら？てかこれを見たのが私じゃなくこのかだったらどうするのよ。……まったく。

「頑張ってるわねネギ坊主」

「ええ、村の皆のためですから……て、アスナさモゴツ!？」

「バカ、声大きい!」

少し遅れて私がいることに驚いて大声を出そうとするネギの口を手で塞いで小声で注意する。このかが起きたらどうするのよこいつは。

「す、すみません……。でも、なんでアスナさん起きてるんですか？」

「なんだか目が覚めちゃったのよ。そういうあんたはこんな時間に何やってるの？」

「ちょっとした調べ物です。普段は先生の仕事で時間がありませんから」

ふ〜ん、ちゃんと先生の仕事はしてるのね。確かに先生って遅くまで仕事をしたりするから魔法に関してはどうしてもこんな時間になっちゃうのかしらね。

「そうなんだ。でも、こんな時間までやってると寝不足で仕事するはめになるんだから、ちゃんと寝なさいよ」

「うっ、は、はい……」

そうそう、子供は素直でいなくちゃね。これが聞き分けの無い迷惑ばかりかけるガキだったら無視してるかもしれないけど、こいつは年のわりに真面目だから助かるわ。……そういえば。

「あんたさつきさ、『村の皆のため』とか言ってたけど、どういう意味なの？」

「えっ……。それは……。あれですよ。お世話になった村の人たちに恩返しできればいいなと思ひまして」

言つて照れるように笑うネギ。……。でもなんだろう、どこか釈然としない笑顔ね。無理してるって言つか、ごまかしてるっていうか……。だからって私が無理に聞いてもいいことか分からないし……。無難に答えたほうがいいのか。

「そつか。じゃあその村の人たちを心配させないようにしなさいよ」

「……。分かりました」

やっぱり釈然としないけど、今はしょうがないか。……。しっかし、起きちゃったからか眠気とかこないわね。ちよつと散歩にでも出ようかな。

「それじゃ悪いんだけど、ちよつと散歩に出掛けてくるわね。もしこのかが起きて私のこと聞いてきたらお願いね」

「出掛けるんですか？夜は危ないですから気をつけてくださいね」

「はいはい、分かつてるわよ」

そう言つて筆笥から動きやすそうな服を選んで着替え始める。本当なら深夜に出掛けるのは校則違反なんだけどねと思ひながら。

その後ろで、ネギが泣きそうな顔をして俯いていたことには気づけなかった。

街灯で照らされた道をブラブラと当ても無く歩く。いつもは人通りの多い道も今日は私しかいないから、どこか新鮮な気分だ。そうしてブラブラと歩いていくと、コンビニが見えてくる。車や自転車がほとんどないからお客さんはほとんどいないんだろう。ちょうどいいや、ちょっと立ち読みしていいかな。

「おろ、アスナちゃんじゃないの？どうしたこんな時間に」

ふと聞き知った声で名前を呼ばれてそっちを向けば、青で統一されたジャージ姿のユーリが立っていた。……見た目が美人な外国人女性だからか、妙な違和感がある。

「ちょっと眠れなくてね。そっちこそどうしたのユーリ、そんな格好で」

「これ？ちょっと訓練してたのよ。……いつか正治をぶちのめすためにな」

そう言ってどす黒いオーラを出しながら正治さんへの恨み言を吐く。

ああ……、そういえばそんなこともあったんだっけ。前にユーリの怪我が増えていて、理由を聞いたら正治さんと戦ってこうなったって言ってたのよね。その時のユーリの不機嫌さは半端無かったわね。

……よくよく考えると、正治さんが魔法関係者だって言ってるよ。うなもんだけど、良かったのかな。てか、あの二人の関係って謎だらけなのよね。……まあいいか別に。それよりも……。

「……その隣にいる女の子は誰？」

指を刺した先には、腰まで伸びた白い髪にセーラー服を着た女の子がユーリの周りを行ったり来たりしていた。実はちよつと前からいるのには気づいたんだけど。ただし、セーラー服は昔の麻帆良女子中のだし、どこかぼんやりとした感じね。

「えっ……、アスナちゃん、見えるの？」

……。こいつは私をなんだと思ってるの？ 見えてるのに見えてないなんて言うのはおかしいでしょうが。

「ほ、本当ですか！？ 私のこと見えるんですか！？ 今日はいいと続きです……！！」

しかし女の子は私の一言がよほど嬉しかったのか、キャアキャア言いながら私の周りを『飛んでいる』。

……。

……。

……。飛んでいる？

よく目を凝らして女の子を見る。まだ喜んでいる女の子の体は宙を浮いており、そして何より足が『無い』。詳しく言えば、下半身が煙のような一つのものになっている。

こ、これってまさか……幽霊？……。

「きゃ……」

「「きゃ？」」「

「キヤアアアア！！！」

つい叫んじゃったのは、きっと悪くないはずよね？ね？

「うう……、やっぱり怖がられました……」

「まあまあ、元気だしなよさよちゃん。アスナちゃんも悪気はなかったんだって」

「クツ、何もいえない……！」

深夜の公園で、私はユーリと幽霊の女の子の相坂さよちゃんと一緒にベンチに座っていて、ユーリはさよちゃんを慰めているところだ。でも私は悪くないもん。幽霊見たら叫ぶのは当たり前じゃない。

……やっぱり罪悪感が沸いてくる……、ハア。まあ魔法使いがいるんだから幽霊がいても不思議じゃないわよね。

「と、ところでさ！さよちゃんとはどこで知り合ったの？」

そんな私の気分を変えるためにさよちゃんのことを質問する。

「んつとな、少し前に寄ったコンビニで偶然目が合ってたね——」

まあそれからさよちゃんのことと出会ったことを話してくれた。

さよちゃんはこの麻帆良に約60年はいるという自縛霊で、なんと私たち2・Aのクラスメイトだそうだ（次の日にネギに名簿見せてもらったらちゃんと顔写真が載っていた）。

普段は麻帆良女子中にいるらしいけど、（幽霊なのに）怖がりだから夜は（自縛霊だけど）コンビニやファミレスに行って時間を過ごしているらしい。

それで今日の深夜の訓練の帰りにユーリが寄ったコンビニにいたさよちゃんと目が合って、声をかけたことが出会いだそうだ。さよちゃんは今まで誰にも気づいてもらえなかったそうなので、声をかけてくれたユーリが神様に見えたとか。

そのまま涙目で愚痴を始めそうになったから、どうせだったら街を歩きながら話そうということになって、その途中で私に出会ったらしい。

「じゃあ、ユーリとの出会いはさよちゃんにとっては、まさに幸運ってことね」

「はい！こうしてお話できる人がいてくれるのは嬉しいです！しかも神楽坂さんも私のことが見えてるようですし、今日は最高の日で

す！」

私の言葉に屈託の無い笑顔で笑いかけてくるさよちゃん。とっても癒される笑顔ね。

「しっかし、まさかアスナちゃんにも見えるとはな……。どうしてなんだ？」

「そんなこと言われても、心当たりなんてないわよ」

「ふむ……。そうか」

靈感があるなんてことはないはずんだけど。あの変な夢を見たからとじゃないだろうし。なんでだろう。

「ところでさよちゃんは、これからどうするの？見える人が出てきたわけけど」

「私ですか？こうしてお話できれば良いですけど、ユーリ先生は何がありますか？」

「そうだな、今は準備できないけど、依り代みたいなを用意してやりたいと思ってるんだよ」

「「依り代？」」

何それ？

「言葉の意味としては、神霊が寄りつくもの。つまり憑依する物だな。オレはできれば成長できる肉体みたいなものがないんだが、駄

目なら藁人形でも使おうかと」

藁人形って怖っ！中身さよちゃんでも見た目藁人形が動くとか怖いわよ！！さよちゃんもちよつと引いてるし！

「……そんなに引かないでよ。それでも真剣に考えてるんだぞ？」

「あうっ、すみません……。でも、どうしてそこまでしてくれるんですか？」

「あつ、それは私も気になってたんだ」

いくらこいつが女の子が大好きとはいえ、初対面に近い幽霊のために依り代だっけ？そういうのまで用意するって、どういうことなんだろう？

「ん〜、気まぐれ？」

「「理由が軽い！？」」

もつとこう、「彼女を一目見て助けたいと思った」とか「一人ぼっちはいやだろ？」とか、そういう答えを期待してたのに！？

「いやね、なんかこう、『彼女に肉体を！これはテンプレだから！』という電波がピピピ〜と受信されたのよ」

「どんな電波よ！？そんなもん受信するんじゃないわよ！！」

「へ、変な電波を受けたら体に悪いんですよ！？体は大事にしましょうよ！？」

「さよちゃん、突っ込むところそこじゃないわよ!!」

「ハッハッハ、アスナちゃん下ネタですか？」

「どこらへんが!？」

やっぱり、こういうギャグ展開になるの!？

Side ユーリ

「またなさよちゃん。明日学校で」

「はい先生! 神楽坂さんもまた明日!」

「うん、またね〜!」

別れの挨拶をして、（幽霊に体調もくそもないだろうけど）元気に手を振りながら去っていくさよちゃん。オレやアスナちゃんが帰る場所までは来れないからしょうがない。むしろここまで行動できたのが奇跡だと思う。

ちなみに言っておくが、さっきの依り代の件に関しては真面目に

考えているんだぞ？オレの身勝手だけでも。電波云々はつい口に出してしまったネタだからね。

「さてと、オレはホテルに戻るけど、アスナちゃんはどうするの？
よければ一緒にいこうか」

「へーきへーき。私一人でも十分だから」

それは言ってる。気も魔力も使えない一般人程度なら返り討ちにできるだろうし。オレとしては送りつつも茂みに連れ込んでチヨメチヨメ……、いや、冗談だからね？僕はそんな変態じゃないよ？ホントダヨ？

「ところで、さよちゃんんだけど」

「んっ、あの子がどうした？」

「依り代とか準備するって言ってたけど、それって魔法を使ってってことよね？てことはさよちゃんは魔法に関わらせるの？」

……ほう。2-Aのバカレンジャーと呼ばれているくせに、なかなか考えてるじゃないか。これが『原作』が変わった影響かな、なんて。

「まあそうなる可能性は高いな。一応記憶を消すという選択肢もあるけどね」

それでもオレはあの子を魔法に関わらせることになるだろう。そもそも幽霊である以上、魔法関係者に気づかれれば排除される可能性も十分にある。実際『原作』でも危うく龍宮真名と桜咲刹那に除

霊されそうになってたし。なら『英雄の息子』が彼女を保護すれば、迂闊に手を出されることはなくなる筈だ。

さらに依り代を用意してそれに憑かせたとしても、彼女の戸籍とか住む場所とかも確保しなきゃいけないから記憶を消すことは難しく、オレがどうにかすることになり、そうなるをやっぱり魔法に関わる可能性が高いから、魔法を教えることになるだろう。

……もつとも、結局はオレのエゴだけだね。奇麗事をほざいて平和な場所にいた女の子を危険地帯に巻き込む。オレが嫌う一方的な正義となんら変わらない。というか、『これから』のための戦力をそろえるためにとか思ってる時点で最低野郎だけど。

「ユーリ？」

と、いかんいかん。つい考え込んでしまった。アスナちゃんがどうしたのって顔で見てくるよ。

「……とにかくだ。さよちゃんが魔法に関わるかどうかは彼女次第でことで。そういうわけだからここでお別れだ」

「えっ？……あつ、ホントだ。もう寮の近くだ。それじゃあ私帰るわね――！」

手をビシッとあげて、そのまま女子寮のある道へと走っていくアスナちゃん。オレはそれに手を振りながら完全に姿が見えなくなるまで見送る。そうして数十秒後にはアスナちゃんの姿は見えなくなった。

「しかし、これからどうなるかね？」

ついポツリと呟く。

早い段階でさよちゃんとは話しておこうとは思っていたからいいけど、まさかアスナちゃんが見ることができるとは予想外だった。ひよっとするとオレということで、さよちゃんの気配が濃くなったから見えたなんて可能性もあるけど、『原作』と違う以上、油断は禁物だな。……ルーカスが大战時代に介入している時点で不安要素バリバリだけど。

あとはさよちゃんの依り代か。人体練成的なもので肉体を作ったりすれば生身の体は手に入るけど、あいにくオレはそういうの苦手だったりする。ほかの依り代も何が良いかは判断しづらいし……。でも作ってやるといった以上はやらないとな。

「こういう時は、やっぱりあのお方に相談かな？名目は家庭訪問でいいかな？」

手を貸してくれるかな、あのロリータ子猫ちゃん。

第15話　夢とかネギとか　あと幽霊とか（後書き）

ユーリがさよを見れたのは、転生者補正という名のご都合主義ということです（オイ）。

アスナが見れたのは謎です。ユーリがいるせいかもしれませんが、それでもないかもしれない……。つまり大人の事情です（マテ）。

そしてうちのネギくんは原作とは違いますから、このままいつてもアンチされることは少ないです。それを期待してる方はごめんなさい。

ありがとうございました。

第16話、テストへ向けて 図書館島騒動 ？、（前書き）

やっとこさ図書館島編です。でも何個かに分けるとうことになってしまった。……かけるかなと不安だったりするのは、きのせいじゃないと思う。

それではどうぞ。

第16話　テストへ向けて　図書館島騒動　？

「というわけで、ぜひとも手伝ってください」

「断る」

「即答するなよロンリーロリ子ちゃん」

「なんだそのふざけたあだ名は！？あれか、私に人が寄らないからとかそういうことか！？」

「マスター落ち着いてください。マスターには私がいますから。……撮影係として」

「茶々丸それはどういう意味だ！？……ハッ！ルーカスだな！？奴に誑かされたな！？そうなんだな！？」

部屋のいたるところに様々な人形が置いてある部屋、というかエヴァンジェリン邸でユーリは相坂さよの依り代の件をエヴァンジェリンと机をはさんで対話をしていた。

「まったく……。それで、なぜ私があのお幽霊のための依り代をどうにかしなければいかんのだ。第一、よくもまあノコノコと私のところに来れたものだ。喧嘩を売っているとみたが？」

優雅に紅茶を飲みながらも、ユーリを見据えながら重圧をかける。長い年月によって積み上げられたソレに、ユーリは冷や汗をかきながらもハハハと笑う。

「確かにあなたに得はありませんね。それじゃあ、対価を払うってことでどうですか？」

「ほう、一体何を支払ってくれるのだ？つまらんものなら即刻つまみ出すぞ」

「そうですね……」

あごに手を当てすこしだけ間を置いてから、言葉を続ける。

「呪いの解除のためのオレとネギの血の提供、サウザント・マスタ―の情報、それから、オレのあなたへの従属ですかね」

side ユーリ

ロンリーロリ子とお話しをした数日後、オレは2-Aの教室へ授業のために向かっていった。その途中で他の教室を覗いてみると、ノートに書き取りしていたり、単語帳のようなものを読んでいたたりしている。そういうば、もう学期末テストの時期だっけ？そうなるそろそろ図書館イベントが起こるわけか……、あれ？ドツヂボー！ル対決は？……別にいいか。

これから大変だなあといいながら教室の前まで着くと、ネギが妙な顔をしながら、一枚の手紙を見ていた。あれは……、最終課題

のことが書いてある手紙かな。

「ようネギ、そんな顔してどうした？」

「あ、兄さん。実は学園長が僕に課題だつてことでこれを……」

そういつて手紙をこっちに差し出す。それを受け取って中身を確認すると、予想通り『期末テストで2 - A最下位脱出で正式に先生』というものだった。

「これはまた、実に先生らしい課題だな」

「……でもさ、これならドラゴン退治のほうはまだ気楽だよ」

それはないって。ドラゴンめっちゃ強いよ？オレ戦ったことあるけど、マジで死にそうになったのよ？でも、その気持ちは分からないでもないな。何せ2 - Aには成績が学年トップクラスが3人いるとはいえ、成績の悪い生徒がずば抜けて多い。特にバカレンジャーとまで呼ばれる5人組はダントツの悪さだからな。一名ほど本当は頭良いのいるけど。ぶっちゃけ、一つ順位上げるのも苦労するだろうな。……ここは励ましとかないとな。

「確かに今の2 - Aでは時間的にも厳しいだろうけどさ、そこをなんとかするのが教師の仕事だろ？オレも出来る限りのフォローはするからよ」

「……そうだね。ここであきらめちゃだめだよな。ありがとう兄さん！よ……し、頑張るぞ……！」

うんうん、人間マイナスになるべきじゃないね。あきらめたらそ

ここで試合終了なんだから。

この後？もちろん英単語野球拳をやる羽目になったよ？見事にバカレンジャーが脱がされてたね。……えっ、なぜ止めないって？見たかったからだよ。外国人だから野球拳のルール知らないで済ませられたし。ハッハッハ。

あ、さよちゃん待って、ペンを目に刺そうとしないで！……ごめ………！！

side 正治

深夜に自室で高校の内容を確認していたら、木乃香から電話がかかってきた。

ちなみに俺はすでに中学は卒業しているので、期末テストとかはなく、空いた時間に高校の予習をしているのだ。

それはともかく
閑話休題。

「はいこちら、幻魔株式会社の正治でございます」

『兄ちゃん何その挨拶？そんなにハンマでグシャッ！されたいん？』

怖いこと言うな！電話越しなのに妙なプレッシャー感じるんだけど！？

「ま、まあ落ち着けなさいなお嬢様。……それで、こんな遅くにどうしたんだ？何か聞きたいことでもあるのか？」

『実は今な、図書館島におるんやけど、今すぐ来てくれへん？』

図書館島？なんでこんな時間にあんな場所へ……、いや、ちょっと待てよ。確か『原作』でそんなイベントがあったような……。てことは、バカレンジャーと木乃香、それにネギ少年が図書館島の底でしばらく過ごすはめになるんだっけ？また面倒なことを。ここは断固阻止だな。

「木乃香。何をするかは知らんが、もし危ないことをするつもりなら俺は——」

「せつちゃんもおるけど、どないする？」

なん……だと……！？

「待ってる、今すぐ待ってる。10分以内にそっち行く。それまで待ってる」

『分かったえ。ほな急いでな』

ピッ！

……。なんで刹那が一緒なんだよ！？あいつはこのイベントいないはずだろ！？確実に俺という存在のせいだけだよね！！で

も、これはこれでちょうどいい。あいつと一緒にならネギ少年たちが地底に落ちるということを阻止できるかもしれないし、それに……、ちよつとは壁を無くしたいしな。

さて、さつさと着替えていきますか。

side 刹那

今日も鍛錬のためにと出かけようとしたとき、木乃香お嬢様に拉致同然につかまり、図書館島の秘密の入り口といわれる場所にいる私とお嬢様以外にもアスナさんたち2-Aのバカレンジャーに、宮崎さんと早乙女さん、ネギ先生も一緒だ。

なんでも、期末で最下位のクラスは解散させられ、特に成績の悪かった人は小学生からやり直しという噂があるらしく、それを阻止するために読めば頭がよくなるという『魔法の本』を探しに行くとのことだ。

……どう考えても、デマ以外の何物でもないと思うのですが。学園長とはいえ、そんな横暴が許されるなどありえないですし。そうなる誰かが意図的に噂を広めたことになるのですだ、なんのメリットが？それにネギ先生がいるのはなぜ？パジャマなことから寝るときに連れてこられたのでしょうか。

「ほな急いできてな」

しばし考え込んでいたら、お嬢様がどこかに電話をしていたらしく、話し終えて携帯をしまっていた。

「どうなさったのですかお嬢様。誰に電話を？」

「うん、セイ兄ちゃんに電話しようたんよ。10分したらこっち来るって」

……えっ？にいさまが、来る？

「し、失礼します！！」

「え、ちょっとせつちゃん！？どうして帰ろうとするん！？」

逃げようとした私に抱きついて止めようとするお嬢様。お、お願いですから帰らせてください！まだにいさまと一緒にいれるほどの実力を手に入れてない以上、にいさまと一緒にいるのは——！

「おゝい刹那、木乃香ゝゝ。お待ちせゝゝ」

聞き慣れた声が聞こえ、そっちに顔を向けると、いつもの赤いジヤンパーに黒のジーンズの格好のにいさまがこっちに歩いてきていた。って、電話してまだ2分も経ってないはずですけど！速すぎやしませんか！？

「遅いで兄ちゃん。もうちょっとでせつちゃんが逃げそうになっただえ？」

「ホントか？それは悪いな。……それで、刹那」

「ハ、ハイ……」

うう、どうしよう。にいさまがこっちをじっと見ている。前なら無条件で嬉しかったのですが、悪魔の一件でにいさまを死なせそうになってから、どうしても一緒にいることが億劫になってしまふ。……やはり私が『忌み子』だから、にいさまがあのような目にあっってしまったのでは……？

「その、なんだ……、えつとだな……」

……？どうしたのだろう。どこか恥ずかしそうに目線を泳がせて……。

「つまり、なんだ……。あのこと「あれ、正治さんじゃん？どうしてここにいるの？」……」

意を決して話しかけようとした時に、アスナさんが正治さんの存在に気づいて声をかけてきた。……その時、一瞬だけにいさまが落胆とか怒りとかが入り混じった顔でアスナさんを見たのを見逃さなかった。

そんなにいさまだが、すぐに笑顔でアスナさんに挨拶をする。他の人にもいさまに気づいて次々と話しかけていく。にいさまは私のほうに顔を向けて、口だけ動かして語りかけてくる。

（『あとで話の続きを』……ですか）

一体なんなんでしょうか……？

図書館島。明治の中ごろe t c e t c……。つまり島にある馬鹿でかい図書館だ。……説明省くなって？ごめん、さすがに面倒くさいので却下します。

そんな図書館島にあるといわれる『魔法の本』を探して地下にもぐっていく俺たち（本屋ちゃんと早乙女除く）。そういえばネギ少年は『原作』と同じく魔法を封印したらしい。なんでも明日菜にお説教くらって、その戒めのためとのこと。その説教した本人は魔法に頼ろうとしてるけどね。

進んでいくごとに様々なトラップがあるのだが、しかし身体能力の高いバカレンジャーに刹那、さらには俺がいるので、トラップが全部形無しとなっている。それでも一応魔法を使う盗人の妨害用でもあったりするのに。

俺は、その途中で刹那と話せばいいのになぁと思っているのだが、いざ行動しようとする誰かが話しかけてきたり邪魔が入ったりして、話しかけないでいる。チラチラと目はあっているから余計に歯がゆい。

でまあ、そんなこんなで『魔法の本』の安置室までたどり着いたわけなんです……。。

『第5問、「ERASER」』

「い、いれいさー？」

「E・レーザー、じゃなくて？」

「そ、それはいいからはやく動いてよ〜」

「さ、さすがにきつくなってきたアル」

「これはこれで柔軟性を鍛えられるでござるよ……イタタ！」

「ギャグを言っている場合じゃないだ……、あ、足が！？」

現在進行形で英単語TWISTERをやっているところでございます。メンバーは俺と木乃香とネギ少年を除いたメンバー、つまりバカレンジャーと刹那だ。

俺としたことがうつかりこれの存在を忘れており、見事に全員罠にはまって、『魔法の本』を守護するゴーレムが『本』を欲しくばとか言つて、ツイスターをやらされる羽目になった。とはいえ木乃香やネギ少年が一応手伝つてることもあって、意外と順調っぽそうだ。

つというか、ゴーレムの声が明らかに学園長なんだが、そこらへんはどうなの？ 刹那も木乃香も明日菜もネギ少年も疑問に持つてないし。そもそも、安全は保障されているとはいえ、女子中学生にこんなことさせてもいいのか？ お前の長い頭は飾りか？ と散々に文句を言いたいが、今はあえて無視するしかない。

……そういうお前はなにやってるんだって？ 俺はというとな。

「木乃香さん、まだ目隠し取っちゃだめなんですか？」

目に布を巻かれて何も見えなくなっている。気配探知でどこに誰がいるかはわかるんだけどね。これはなんとかしてほしいな。

「セイ兄ちゃん、そんなに女の子の下着見たいん？もしそうなら……、修正せなな？」

ですよね。みんなスカートでツイスターやってるから見えるんだよね。そりやしょうがないか。だから木乃香、お願いだから黒いオーラをぶつけないで！見えないから余計に怖いんですよ！？」

『最後の問題じゃ、「DISH」の日本語訳は？』

っと、どうやらもう最後の問題までいったようだな。

「えっ、ディッシュ……？」

「ホラ、食べるやつ！食器の……」

「メインディッシュとかゆーやる？」

ネギ少年、木乃香さん、それほとんど答えだと思っんですが？……今更すぎるけどね！

「わかった！『おさら』ね！！」

「『おさら』、OK！！」

おし、どうやらバカレンジャー諸君は理解したようだな。いろいろとあったがなんとか……あれっ？そういえばなにかあったよう……？

「お！」

「「さ！！」」

……………ハッ！！しまった忘れてた！？

「「「ら——」「」」

「ストオオオオプツ！！！」

腹の底から声を出して止まるように言う。気配から察するとみんな突然の大声に動きが止まったようだ。俺は急いで目隠しをとり、状況を確認する。

すると予想通り、明日菜とまき絵ちゃん、それから刹那が『ら』ではなく『る』に触れそうになっていた。……どうやら免れたようだ。『原作』でこういう失敗があるのをすっかり忘れていたから焦ったわ。というか刹那、お前まで何触れようとしてるんだよ？鍛錬にかまけすぎたんじゃないのか？……俺のせいだと思うとホント申し訳なくなるな。

とりあえず今は置いて、注意しとかないと。

「お前らよく見てみる。『おさら』じゃなくて『おさる』になりそうになってるぞ？」

「えっ……、ああホントだ！？アスナなにやってるのー！？」

「ま、まきちゃんだって触りそうになってるじゃない！？それと刹那さんもそうだし！！！」

「えっ、あの、その……、すみません……」

落ち込むな刹那。俺はお前を応援しているぞ。だから俺との壁を無くしてくれ。

「それじゃ今度こそ……、らー!!」

気を取り直した明日菜が『ら』に足を伸ばして踏む。それと同時にどこからかピロピロリーンとかいう気が抜けそうな音が流れてくる。

『う、うむ……。よくぞわしの問題に答えたの。合格じゃ』

どうやらさっきのは合格の音楽だったらしい。ゴーレムの一言にみんなキヤア〜!と大喜びする。まあ最下位になって学年解散とかが防げるわけだから喜ぶわな。そんなことはないのに。

『それでは……、次の問題に言ってみようか——』

「ぬわぁにをほざいとるんじゃこのくそジジイ!!!」

なんかアホなことを言い出した学園長の側頭部に『気』を込めた蹴りをお見舞いして、そのままツイスターの横にある隙間に落とす。なにやら「ふおお!？」とか騒いでいるが知ったこっちゃない。……あのじいさん、問題間違えるまで続けるつもりだったのか!??どんだけ地底に落としたいんだよ!?

「せ、正治さんて、意外と怖いんだね」

「私もこのかの付き合いでそこそこ会ってるけど、あれはおっかな

いわね」

「兄ちゃんたまにああなるんよ」

「いや、それにしてもすごい蹴リアルな。今度勝負したいネ！」

「それは同感でござるな。同年代の男性であれほどの実力者はあまりいないでござるからな」

「み、皆さん。そんな離れた場所でひそひそ話さなくても……」

いつの間にか皆さん俺から距離とって何か話しているんですけど！？なんで隅で話す必要があるの！？俺、信用ないのかな！？

「あ、あの、正治さん。なんだか悲しいオーラが出てますよ？大丈夫ですか？」

……ネギ少年よ、君は本当にいい子だ。てか、そんなオーラ出たの？……失敬。つま、なんにせよこれでこの件は終わりだな。多分あの本は幻術を使ったやつだろうから、持ち帰ることはできないだろう。まあこれに懲りたらバカレンジャーたちもちゃんと勉強すると思うし、最下位にさえならなきゃいいんだから、どうにでも――。

ドンドンドン――！

そんな気持ちをあざ笑うかのごとく、部屋に銃声が響く。そして俺たちが乗っているツイスターの盤に衝撃が走ったかと思うと、盤

は粉々に砕け散ってしまった。

「なっ！？なななな、なんなの一体～～！！！？」

「キヤアアア！！！？」

「なんで砕けるアルカ～～！！！？」

「いや～、大変でござるな～」

「とても大変じゃなさそうだ！？」

「あわわ～～！！た、助けて～～！！！！」

「いや～～ん！！」

盤が割れたことにより、みんな暗闇へと続く穴へと落ちていく。迂闊だったとしか言いようがない。もし警戒をし続けていればなんとかあったかもしれないのに、気を緩めたせいで、結局は『原作』と同じように落ちる羽目になってしまった。そもそも、あの銃声はなんなんだ！？いくら学園長でも、ここまでするのか！？

そんな奇立ちもむなしく、俺はただ、下へと落ちていくことしかできなかった……。

side ???

……やつちまったな。いくらなんでもあれは無いよな。今更ながら後悔の渦に飲み込まれてしまったよ。まあ、こうでもしなきゃ地底に落ちてくれなかったから、しょうがないんだけどね。

というか、正治のバカがいなきゃ、こんなことしなくて済んだんだと激しく思いたい。……現実逃避ですけどね。

まあこれで、多少のイレギュラーがいるけれども、『原作』に近い展開になったな。本当ならネギにこういうことさせるのはどうかと思うけれども、こうやって無理やりにも修正しておかないと、ネギを守りづらくなるしな。

……いや、この考えは所詮、オレの自己満足だな。ただ自分が動きやすくするためにやってるんだから。こうやって考えると、正義を妄信する魔法使いと大差ないな、オレ。

「……まあそれがどうしたってんだ。所詮人間は自己満足で動く俗物さ。なら、オレは自分のやりたいようにやるだけだ、てね」

さて、2・Aの担任として、皆にはどういう風に伝えるべきかな。言い訳100個ぐらい考えとくか。

第16話、テストへ向けて 図書館島騒動 ？（後書き）

最後に出て来た人物が誰だか、バレバレすぎて、???にした意味がないと言わないでくださいね。ひょっとして新キャラ！？て思わせてみたいじゃないですか！？（オイ

次回、正治と刹那が加わった地底図書室でのお話となります。一応ここで二人の壁を薄くしていこうとは思っております。

ではまた。

第17話　テストへ向けて　図書館島騒動　？（前書き）

図書館島その2でございます。

今回も無理やり展開ですが、そんなのでもよければ、どうぞお楽しみください。

あと、鬼武者からアレ、出しちゃいました。

第17話 テストへ向けて 図書館島騒動 ？

チャプ…チャプ…と、近くで水が揺れる音が聞こえてくる。

(……………水の音……………か?)

それを聞いた正治はゆっくりと目を開けてうつ伏せになっていた体を起こす。

(俺、何が……。なんで気を失って……………)

朦朧としている頭を動かしながら、なぜ気を失ったのかを思い出そうとする。しばらくあれこれと思考して、ハッと思いつく。

(そうだ。確か『魔法の本』を探して図書館島に侵入して、見つけて試練(?)もクリアしたら、銃声が鳴ったと思ったら足場が崩れて……………って、みんなは!?)

そこでやっと一緒に行動していたバカレンジャーと木乃香、刹那ネギを思い出して辺りを見回すと、8人全員すぐ近くに倒れていた。全員気を失っているらしいが怪我もなく無事なことにホッと安堵のため息を漏らす。おそらくしばらくは目を覚まさないだろうと考え、その間に自分たちがいる場所を確認するためにさらに周りを見渡せば、巨大な木々が生い茂り、なぜか本棚が水の中に浸かっていたりしており、さらに壁が光っていたりする。その光景はまさに壮大であるが、正治はこの光景に心当たりがあった。

「地底図書室……………だな。『原作』でもとんでもない場所ってのは分かってたけど……………、これ、維持費いくらなんだ?それとも魔法によ

るものだからお金いらないのか？」

どこかずれた発言をしながら、地底図書室の凄さを肌で感じていく。しばらく眺めていると、後ろでくぐもった声が聞こえてきたので振り返ると、気を失っていた8人が目を覚まして起き上がった。

「よお、起きたかお前ら」

「ふえ……。あれ、正治さん、私たち落ちたんじゃ……。って、ここどこなの……!!??」

正治は起きた皆に声をかける。それに明日菜も答えようとするが、自分たちのいる場所を確認して、叫ぶ。ほかの人たちもそれに合わせてキヤアキヤアと騒ぎ始める。

「こ、ここは幻の地底図書室!？」

「地底図書室? なんやそれ夕映?」

「地底なのにあたかい光に満ちて数々の貴重品にあふれた、本好きにとつてはまさに楽園という幻の図書館。……ただし、この図書室を見て……。生きて帰ったものはいないとか」

憧れの場所に来れたからか、目をキラキラさせながら地底図書室の説明をしていた夕映だが、後半を暗い雰囲気ですごく目を光らせて不安をあおるようなことを言う。それを聞いたまき絵やくーふえたちはまたも慌て始める。

それを遠巻きに見ながら、正治は苦笑いをしていた。なぜなら彼は脱出手段を知っており、さらに裏で学園長が暗躍しているのを知

っているので、心配など一切ないからだ。なので、これからのことを考え始める。

（さてどうするか。滝の裏に脱出用の非常口があるけど、いきなりそこに行くのはさすがに怪しまれるから、探していて偶然見つけたってことにするべきだな。学園長には悪いけど、さすがにこれはやりすぎだしな。となるとまずはネギ少年に……あれ？）

そこで、ずっとネギが静かなことに気づいた正治はネギの様子を確かめると、皆より少し離れた場所でこっちに背を向けて立っているのだが、正治の目には周囲に暗い雲を漂わせているように見える。

「……どうしたネギ少年。なにか問題で——」

気になったので、近寄って肩に手を置いて、どうしたのかと尋ねようとした。が。

「僕のせいで皆を危険に巻き込んだじゃった僕がもつとしつかりしていればなんとかなったかもしれないのにそもそも僕が止められていればこんなことにならなかったのにこれじゃ教師とか以前に人間失格僕駄目人間屑人間の風上にも置けないどうしようもない馬鹿な子供でのるまでスケベでいつも兄さんに頼っちゃうだらしない人間で村の人たちも救えない屑で僕はいなくなつたほうがいい存在で……」

燃え尽きたように真っ白になった姿で、ぶつぶつと自分を罵っていた。今にも自殺するんじゃないかという雰囲気醸し出している。あまりにも追い詰められたような姿に、正治は何も言えずに呆然と立ち尽くすことしかできないでいた。

何がどうしたこうなつたと、頭の中で原因を徹底的に探りながら

も、なんとか元気付けなければと言葉を詮索していると、正治の隣に刹那がやってきた。励ますためにきたのかと顔をうかがえば、こちらにも今にも死にそうな顔をしていて、ぎよっとしてしまう。

「あ、あの……刹那……さん？」

「そうですね……。もっと警戒していればこんなことにならなかつたんですよ……」

恐る恐る声をかけてみても刹那は上の空で、ネギを非難するようなことを言う。まさかネギ少年を罵倒するのかと思ってしまったが、刹那はそんなことは考えていなかった。

「私が……私がもっと警戒していれば兄さまもお嬢様もこんな危険な目に合わずに……！！ウガアアア！！！！ 楓……！！介錯頼む……！！」

「あいあい、男爵イモでござるな」

「なんで男爵イモアルか？」

「あんたたちギャグやってる場合！？ 刹那さんもなにやってるのよ……！！？」

自分のミスで正治や木乃香を危険にさらしたと感じた刹那は、どこから出したのか白装束に身をまとって、小刀を手にして切腹しようとし、楓もどこからか取り出した男爵イモを両手に持ってそばで構え、それに突っ込みを入れるくゝふえと明日菜。

地底の隅にまで響きそうな声を出しながら騒いでいる少女たちと、天に向かって手を伸ばして乾いた笑いをし始めたネギを見ながら、

正治はフツとやさしく笑みを浮かべて。

「てめえら、ちったあ落ち着けやあああ！！！」

怒りを込めた叫びを放った。

side ユーリ

アスナ、まき絵、夕映、くゝふえ、楓のバカレンジャーと木乃香に刹那、さらにネギ（と正治）が行方不明となってしまったということが発覚し、麻帆良学園の教員たちや学園長が集まって会議を開き対策などを話し合おうとするが、学園長は情報の齟齬があつて行方不明などないと言つて、教員たちを押さえこんだ。納得のいかない教員たちは抗議するも、学園長はどこ吹く風といった感じで進めていき、結局会議は終わってしまった。

……これ、学園長が仕込んだことだつて知られたら暴動が起きるよな。押さえ込まれた教員の多くは魔法に関係のない一般人で、学園長はネギを立派な魔法使いとしたいために彼らを押さえ込んだのだ。

魔法使いの事情を一般教員たちをも巻き込んで推し進める。本来なら許されちゃいけないことだが、オレも間接的に手を貸している

から、強く言い出せない。……やっぱりアレはやめておいたほうが良かったな。せめて事が終わったら新田先生を含んだ一般教員の方にお詫びの品でも渡しておくか。

その後、魔法先生だけ集めて事の真相を話したのだが、ガンドルフィーニ先生や刀子先生を筆頭に皆が恐ろしい剣幕で学園長に抗議していたのは驚いたな。

『教育者を馬鹿にしないでください!!』

ホントにすさまじいプレッシャーだった。今にも殺し合いが起きるんじゃないかと冷や汗かいたよ。それを直に浴びてた学園長なんて顔真つ青にしてたしな。

オレは魔法先生たちって学園長に従うだけと思ってたけど、魔法先生たちも教育者なんだなと思えた場面でもある。……おかげで罪悪感で胃が痛いなのって……。

結局、ちゃんと無事に彼女たちを保護するということを条件に、今回は学園長の独断専行は見逃された。帰り際に「次はありませんよ?」と言っていたから、次やったら確実に反乱起こされるな学園長。まあ、オレも含めて自業自得ってことで――。

「いつまで現実逃避をしている、ユーリよ?」

「シタクナルニキマツテルジャナイデスカ」

いきなりわけがわからないような状況にいるが、とりあえず説明さ

せてもらおう。

会議を終えた後、オレはどうせなのでさよちゃんにでも会いに行こうとしたのだが、突然麻袋を頭にかぶらされ、担ぎ上げられたかと思うと、凄い速さで移動された。何事かと頭が混乱しているうちに、何か座らされて麻袋を外されると、テーブルを挟んだ対面にルーカスさんが『笑顔』で座っていた。

『笑顔』といえば聞こえはいいが、実際には目は笑ってないし睨まれているし殺気を放ってるし、さらに背後には千草さんがこれまた『いい笑顔』でこつちを睨んでいるし、さらにテーブルを囲むように佇む烏族が6体ほど睨んでくるので……。

おっかないにもほどがあるって。前後左右からドギツイ殺気を放たれてるんだよ？オレこれでもいろんな場所で戦ってきたけど、これほど本能が逃げると叫ぶ状況はなかったぞ。……オレの人生終了させるつもりか！？

「ソ、ソレデ、オレハナゼココニ？」

「なに、木乃香、刹那、正治の行方不明にお前が関わっているんじゃないかと思つてな」

What!?!? なんかにばれてますけど!?!?

「ニヤニヤニヤ、ニヤニユエソノヨウナコトヲ……?」

まずい、これは非常にまずいぞ!?!?てんぱり過ぎて言葉が片言になつてる上に噛んでしまつてる!?!?どうしてそういう確信をついた答えを出してくるのこの人は!?!?

「ユーリはん、あんた魔法関係者の顔合わせでネギくん到手え出し

「たら殺す、みたいなことを言ったらいいな」

後ろから千草さんがそう言うってくる。いや確かに近いことを言っていたよ。オレにとってネギは大切な弟だからな。それがどうしたんだよ？

「そのネギくんが木乃香お嬢様たちと同時期に行方不明なつた。やのにどういふわけか落ち着いとるあんたがおかしゅう思えてな。せやからなんか知つとるかと思つて拉致つたんよ」

……そうきたか。確かにオレの今までの発言を考えれば、ネギが行方不明になったのに慌てないなんてアリエナイからな。もしオレが図書館島の件を知らなかったらネギを探すことを最優先しただらうしな。

「それで、お前は何かを知っているのかな？こちらとしても、木乃香や刹那を危険な目にあわせたくないんだがね。で、どうなのかな？」

正治はいいのかよ、と内心突っ込みながらも、答えるべきかどうか迷う。言ってしまうえばオレや学園長の人生が終了しそудもん。

よし、ここはひとつ一世一代の大芝居を――。

「嘘ついたら、殺すぞ？」

「何から何まで白状しますので、お許しくださいませえ……！」

——結局、オレは今回の図書館島の件のことを全部話してしまった。だつてさ、剣とか刀とかをいろんな角度から喉に突きつけたんだよ。しゃべらないほうがおかしいって。

っで、白状し終えると。

「さっさと連れ戻せええええ！！！！」

と全身から殺気を放ちながら怒鳴られて、すぐさま図書館島に行方不明者たちを迎えに行くことになった。そうしなきゃ今すぐ命狩られてた、絶対。そしてオレ、小物街道まっしぐらだよ。

そっいうわけだから学園長……………、短い人生でしたね。

side 正治

地底図書室に落っこちて早一日。俺たちはまだこんな場所にいる。滝の裏にあると思っていた外へつながる非常口が見つけれなかったからだ。一応壁もたたいて空間がないか確認してみたが、何の反応もなかった。おそらく魔法が何かで隠蔽されているんだろう。派手にぶっ壊すわけにはいかないのがイライラする……。

おかげでこの地底図書室で過ごす羽目になってしまった。面倒としかいえないこの状況にため息が出てしまう。

ネギ少年とバカレンジャー+αズはテスト勉強をしている最中だ。あれから立ち直ったネギ少年が出口を探すのもいいけど、ちょっとは勉強したほうがいいということで勉強することになったのだ。気

楽といえば気楽だけど。幸いにも（学園長の手により）参考書や筆記用具といった必要なものはあるので何とかなっている。俺はその手伝いをやっている。……ちなみに普段より勉強に力入っているのが悔しいとネギ少年は愚痴をこぼしていたりする。

まあおそらくはタイミングよく学園長が操るゴーレムが現れて、魔法を使ってさも自然に出口を見つけさせるだろうけどね。……出れたら絶対にぶん殴ってやる。実力権力ともに格上だろうが容赦なしだこんちくしょう。

それによくよく考えたらユーリの野郎も一枚噛んでるよコレ。あいつも『原作』の展開は知ってるはずだから、止める気があつたらこんなことになってないだろう。……よし、あいつも殺ろう。とりあえず鬼武者化して全戦術殻と全神鳴流の技を叩き込んで徹底的に痛みつけて……。

「……正治さんどうしたんですか。怖い顔して」

つと、いかんいかん。近くにネギ少年がいるんじゃないか。年上として落ち着かねば。

「ごめんごめん。どうもここが不可思議な場所だから考え込んでね」

「やっぱりそう思いますか。こんな場所で水にも浸ってるのに本はまったく傷んでないですし、キッチンに食材にトイレまで完備してありますし。やっぱり魔法関係なんでしょうか」

「十中八九そうだろうね。でなきゃおかしすぎるにも程があるって」

それにしあって、ここって必要なかと疑いたくなるけどね。誰がこんな場所使ったっての。仮に貴重本を隠すためでも、ちゃんとした保管場所にでもやっつけてんだよ。麻帆良はこついうところ

ろは微妙だと思う。

「まあ今はそんなことを考えてもしょうがないけどね。それじゃ、出口を探しにいくのか」

「ハイ！がんばりますー！」

うんうん、素直でよろしい。大人びていてもやっぱりまだ数えて十歳だから、こういうところは子供っぽくていいね。このまま誠実な大人に育ってほしいものだ。

そんなネギ少年と出口を探そうとちょっと歩くと、なにやら「キヤッキヤ」と楽しげな声が聞こえる。声からしてまき絵ちゃん、くふえ、楓の3人だろう。……あいつら、この状況でよくもまあ楽しめるね。元から精神が図太いのか麻帆良のせいなのか……。しかし、遊ぶのもいいが、できれば勉強をしろつての。なんて思いながらその3人のいる場所に行ってみる。……行ってしまったわけだ。

そこでは3人が水浴びをしていました。もちろん、服なんざ着ちゃいない。横にいるネギ少年は「えっ」と言って固まり、俺も即座に目をそらす。

……よし。叫ばれる前に逃げ——！！

「近衛アツタクwith魔鉄槌——！！！！！」

ドシコ——ン

「ウボアアアアアア!？」

お前どこから出てきたの……!?!?!と叫ぶ前に俺は頭に衝撃を受けて、空高く舞い上がってあさつての方向へ吹き飛ばされた。

そのとき目にしたのは、背丈以上のハンマーを担いでこつちを睨んでいる元癒し系アイドル(?)の般若だった……。

side 刹那

「……ふう………」

私たちが勉強をしていた場所から離れた場所で、私は勉強の疲れと汗を流すために水浴びをしていた。もちろん服は脱いでいる。ただ、夕風はすぐに取れる場所に置いている。いつ何時襲撃があってもいいようにだ。

「しかし、こんな場所に来ても勉強をする羽目になるとは………」

確かにテストのために勉強するのはいいのだが、この状況になつてまでするのはどうかと思います。……決して、バカレンジャーと呼ばれている人たちに小テスト形式の問題で点数負けたからとかじゃありませんよ? ホントデスヨ?

だが、果たしてそんなことをしていて良いのだろうか。早く脱出手段を見つけてここから出ることにしようが先決ではないのだろうか。いや、そもそも私がもっと注意していれば皆さんを危険な目には……！

「……………アアアア！！！！」

……………？何ですかこの叫び声は？

ふと聞こえてきた叫び声に反応して上を見上げてみると、何かが高速でこちらに向かってくるのが視認できました。速すぎて姿まで確認できませんが、大きさは人と大差ない。

敵襲か？そう思いましたが、しかし向かってくる物体からは敵意のようなものを感じない。一応夕凧を手に取り鞘から抜いていつでも迎撃できるように構える。

物体はなお叫び声をあげながら私の目の前に振ってきた。大きな水しぶきを上げ波を揺らした物体はしばらく姿を見せないでいる。それに油断することなく警戒する。そして波がまた大きく揺らいだかと思うと、それは勢いよく立ち上がって叫んだ。

「木乃香……！お前は俺を殺すつもりかあ！？ていうかそのハンマーどっから取り出したああ！！」

……………あれ？この声は……………兄さま？

注意深く確認する。首筋ほどまで伸ばした白髪に白い肌、赤いジヤンパー姿。間違いなく兄さまだ。なぜ、兄さまが叫び声をあげながら飛んでくるのですか？

「に、兄さま。いったいどうしたのですか？」

おそらくお嬢様に対して起こっている兄さまに恐る恐る声を掛ける。

「あつ、誰だ…… って、なんだ刹那……… か………」

こちらに反応して振り向いた兄さまだが、私の姿を見たたん顔を真っ赤にして固まった。兄さまの視線がこっちを見て固まっていることに違和感を覚え、どうしたのかち自分の体に視線を移す。そして、今の自分の格好を思い出す。

一糸纏わぬ、生まれたままの状態。つまり、『裸』。

「キ……、キヤアアアア……！！！」

「うおっ！？ ちょ、刹那さん待って……… ！？」

気づいたときには、あらん限りの力を振り絞って、気を込めた刀を振るっていた。周りの岩や水とともに兄さまの腕が飛んでいるように見えるのは、きっと目の錯覚だ。

side 正治

「申し訳ありません兄さま！！兄さまにあのような行動をとってしまつて！！」

「い、いや。あれは俺が悪かった。凝視していた俺が悪かったから……」

ハハハと元気もへつたくれもない乾いた笑いをしながら俺の目の前で土下座をする刹那（もちろん服着てる）に言う。ある意味原因は木乃香にあるし、さっきのあれは事故に近いが、それでも裸を凝視するなぞ最低な行為だ。それを考えると刹那は一切悪くない。悪いのは刹那の裸を見てしまった俺だ。……一瞬、綺麗な体だなとか思つちまつたのもあるんだけどね。でも、腕を斬るのはやめてほしいな。再生能力がなかったらどうするつもりだよ。

そんな俺たちは近くの岩場にいる。見渡せばテスト勉強をしていた砂浜？が見えるから、大して遠くなわけじゃなさそうだ。

「……まあ、しかしあれだな。こうして二人きりで話すのは久しぶりかもな」

「えっ……あつと……。そうですね……」

さっきまで必死で土下座をしていたのに、一言いったら口を閉ざされてしまった。悪魔事件後の最初のころに比べたらいくらか話せるようになったとはいえ、やっぱりまだ引きずっているんだろうか。刹那俺の能力知ってるんだから気にすることないはずなんだが……、ヤラレ方が衝撃過ぎたせいかな。ただ、このまま沈黙されていつまでも壁をなくせないのは俺自身が嫌なので、とりあえず何かしら話

しかけさせてもらいます。

「刹那さ、いい加減あのことは忘れたっていいんだぞ？俺は気にしてないんだし」

「しかし！私が介入さえしなければあのようにならずに済んだですよ！？」

アレ？これ、間違っただかな？……間違ってるよな。なんで初っ端にこのこと言っちゃうんだよ俺！？

……ええい！言っちゃったもんはしょうがない！ならここらで気が済むまで話せばいいんだ！！多分！

「大丈夫だつて。俺は再生能力なんて変態的な能力持つてるんだよ？あれで死にはしないって」

「そうは言いますが！もしあの攻撃で心臓を完全に壊されていたら死んでいたんですよ！？兄さまが自分でそうおっしゃっていたのをお忘れですか！？」

……アア~~~~！！そういえばそうだった！！心臓が完全に破壊されたら処置施さないと死ぬんだった！今の今までのすっかり忘れてた！！それだったらあそこまで取り乱すのも追い詰められるのも理解できるわ！！って、俺がコレを忘れてどうするよ！？

「私なんかが！『忌み子』である私なんかが兄さまに関わらなければ、あんなことには……！！」

感情をあらわに声を荒げて目から涙を流しながら、自身を罵る刹那。体は小刻みに震えており、その震えを押さえるかのように体を

抱くように腕を回している。その姿は普段からは想像できないほどに弱いものだ。

……だけどな。

「そんなこと、二度と言うな」

「ですが！」

「そんなふざけたもんで、人生左右されるわけがないだろうが！！何が『忌み子』だ？そんなの烏族が勝手に決めたもんだろうが！！そんなわけのわからんもんで俺が危険に会うなんて理屈なんぞ、あつてたまるか！！」

「しかし、実際に兄さまは命を落としそうになったじゃないですか！！」

ええい！！お前は どうして そういうことを言うんだ！？

「この世界にいる以上、命を危険にさらすなんてこと当たり前だろうが！たまたま自分がいたってだけでそうやって悲観的な考えになるな！！お前のことを想っている人たちが悲しくなるだろうが！！」

「でも……、でも……！！」

感情のままに言いたいことを叫ぶ俺だが、いまだに泣いている刹那は言葉が詰まりながらも頑なに否定しようとする。……こいつ、ここまで頑固だったか！？

このままじゃ埒が明かないと思い、泣いている刹那をこっちに抱き寄せる。慣れないことだから力加減は分からないが、自分なりにやさしく背中をポンポンと叩きながら落ち着かせようとする。

「……そんなに自分を責めるなよ。それじゃ、あの時守った意味がないじゃないか」

「でも、そのせいで、兄さましばらく目え覚まさへんかったんよ！このままいなくなつてまうかと……。うち、守られてばっかなのに……。なんも恩返しできんで……。！」

言葉がいつの間にか幼少の頃のようになつてるのも気にせず、大泣きしながらそんなことを言う。前にルーカスさんから刹那が力不足なことを悩んでるって聞いてたけど、ずっとこんなことを思ってたのか？

「恩返しなら十分してもらつてるぞ？少なくとも、俺がこうしてられるのはお前がいるからだ。お前と一緒にいるのは楽しいからな。だから自分を卑下するな」

最初の出会いでやさしくしたのは同情という感情があつたからかもしれない。でも、次第にそんなの関係なしにこいつと一緒にいるのが楽しくなつてきた。ちよつとしたことで一喜一憂するその姿は『禁忌』とか『忌み子』なんてふざけた物など跳ね除けるほど温かくなるものだ。……まあ、この頃は『妹』として見てるんだけどね。だつていうのに、その本人が自分のことを罵るなんて俺は許せない。そんなことを、刹那の口から言わせたくない。

……あつ、そうだ。

「なあ刹那。今度からさ、俺と一緒に修行しないか？」

「えっ……？でも……」

「足を引つ張りたくないと言っなよ？一人でするより、二人でのほうが互いにいい刺激になると俺は思っんだ。ま、例えお前が拒否しても俺は無理やり参加するけどな」

最後のセリフはストーカーのようにも聞こえるぞと言っなよ。それに一緒に修行すれば相手の戦い方とかも分かつてさ、一緒に戦うときに互いをカバーするのに役立つたりしないかなと思ってるんだよ。最近の刹那の戦い方が変わってる可能性だってるしね。本音は俺が刹那と一緒に行動するためにっただけだ。

「えっと……その……、うち……」

しかし刹那はどうも歯切れが悪い。どうしても迷っのか。まあ混乱してるからかもしれないけど。

「別に急がなくてもいいからさ。ひとまずここから出られたらいいから、返事くれよな」

まだあせらずにゆっくり考えてからでいいと言っつと、刹那はコクツと頷いてくれた。

……良かったあ。否定されたらどうしようかと思っつたよ。でも、これで刹那との壁も薄くなっつたかな。長かつたようで短かつた気がするけど、これでひと段落ついたな。このまま、昔のような仲に戻れるかな——。

ドオオオオン！！！！

そう思った矢先、遠くから図書室全体を揺らすような轟音が響いてきた。

「えっ！？な、何！？」

今までのことで疲れていた刹那は突然のことに狼狽するも、すぐに夕凧を手を持つ。このあたりはさすがというべきか。だけど……。

「今の音……、木乃香たちがいるほうか？」

轟音がした方向は確か俺が木乃香に吹き飛ばされた場所のはずだが……、何があった？というかこんな爆発音がするようなことってあったか？

急いで気配を探してみると、木乃香とネギ少年、バカレンジャーが一箇所に固まっていた。これはいいとして、なぜかユーリと思わしき気配も存在していて、そしてなにより、その周りを囲むように百以上の何かがいるのだ。気配からたいした存在じゃないのは分かるが……、一体なんだ？こんなこと『原作』にはないはずだぞ？転生者が介入したせいにしたってコレは一体……？

「兄さま、この気配は一体……！？」

どうやら刹那も調子を取り戻して気配探知を行ってあの状況を把握したようだ。顔は泣いたからか目が赤くなっているが、それでも

仕事の顔になっていた。

「わからん。たいしたことはなさそうだけど……、とにかく急ぐ。嫌な予感がする……！」

すぐさま打刀・明智拵を出して、木乃香たちのところへと向かう。

……なにが起こってるんだ？

side ユーリ

ルーカス・千草夫妻に命令されて図書館島まで来たオレは、せっかくなので『原作』で脱出用に使ったエレベーターを使って螺旋階段まで移動し、その後飛び降りて一気に下まで到達し地底図書室にたどり着いた。

つで、扉を開けたさきではちょうどネギと右腕にまき絵ちゃんを捕まえたゴーレム（学園長操作）がにらみ合いをしている最中だった。これはまたタイミングの悪い時と思ったが、命が惜しいのでさっさと終わらせようと出て行こうとして――。

ドオオオオオン……！！

突然、近くの地面から何かが大量に飛び出して上空に飛んでいく。それにより轟音が図書室全体を響く。ネギたちとゴーレムも突然のことに困惑しているようで、その隙に拘束がゆるくなったのかまき絵ちゃんが脱出していた。

それを喜ぶネギたちだが、飛び出してきた何かが、こちらに殺気を向けていることを感じ、さらにネギたちを取り囲もうとしているのを察知して、急いでネギたちの近くへと移動する。

「ネギ！お前ら！」

「……兄さん（ユーリ先生）！？」「……」

『フオツ！？ユーリ君、何をしておるのじゃ！？』

オレが現れたことに皆が驚いているが、オレはそんなことお構いなしに右手に山河慟哭を出現させる。

「兄さんなんでここに！？どうして剣を……！？」

「せ、先生、今どっからその剣だしたの？」

「話しは後だ！……来るぞ！」

オレの雰囲気や一言にネギや武芸者たちは何かを感じ取ったのか、急いで臨戦体勢にはいる。ゴーレム（学園長）もオレの雰囲気からオレたちの背を守るように構える。そして、大量の何かがオレたちを囲むようにその姿を現した。

——その姿を見て、オレは自分の目を疑った。

「な、なんアルかアレ!？」

「なんか刀っぽいの持つてるよ!？」

「ちよちよちよ、なによこれ!?!なんでこんなのが図書館島にいるの!？」

「あれは、人?それとも魔物？」

「なんや、骸骨みたいで、気味が悪いで……」

「あの姿……まるで時代劇みたいでゴザルな」

「不気味にもほどがあるです」

『なんじゃ、この者たちは……!?!妖怪ともどこか違う……!?!』

皆が目の前に現れた存在に、恐れを抱いたり慎重に観察したりしている。だが、オレにはそんなのどうだってよかった。

「なんでだよ……?」

「ここはさ、ネギまの世界だよな？赤松健さんが書いた漫画をモチーフにした、今オレが生きてる世界のはずだよな？」

「そのはずなのに……、なんでてめえらが出て来るんだよ？」

そんなオレの疑問などお構い無しに、周りにいる奴らはおおよそ人間とは思えない声で雄たけびを上げる。

——日本の足軽兵を思わせる、しかしかぶった笠から覗かせる顔は骸骨がむき出しとなっている姿。『前世のオレ』にとつて懐かしいものであり、『今のオレ』にとつて、最大級のイレギュラー。

「ここはてめえらのいるべき世界じゃないだろうが……、そうだろうが——！」

——『幻魔』さんよお！？

第17話、テストへ向けて 図書館島騒動 ？（後書き）

話をいろいろと構築したりなんだりしていつて、ついつい出したくなってきた幻魔さんたち。これを機にたびたび幻魔さんが登場しちゃいます。ちなみに、正治&ユーリのライバルも……。

正治と刹那のお話し。かなり無理矢理感たっぷりな出来になりました。ただ自分は二人を仲直りさせたかったんです！やっぱり自分に不仲を書き続けるとか無理でした！！すみません！！

そんな作品ですが、次も期待してくれる人がいてくれることを願っています。それではまたお会いしましょう。

第18話 〽テストへ向けて 図書館島騒動 〽 (前書き)

更新です。

こんな中でも楽しんでくれると幸いです。

ではどうぞ。

第18話 テストへ向けて 図書館島騒動 ？

「……ぬかった。在庫がたいしてない」

「あちゃっ、またかいな。仕込みとかどないしょ」

麻帆良の人気店のひとつパンタシアの店員であるルーカスと千草は、店に出している和菓子に使用する材料の在庫の確認をしていた。

「今ある在庫でなんとかするしかないだろうな」

「そうどすよな。……やっぱし、もうちょいアルバイトを雇うか式でも使つて人増やしたほうがええかな」

千草は頭をひねって今後のことを考える。パンタシアはルーカスと千草、それに正治と1人2人ほどの人間で動いているのだが、そこそ人気があるので全員が店中を動き回るし、さらにルーカスに至っては麻帆良の関係でいなくなることがあるのでかなり忙しい。なのでたまに在庫の確認し忘れなんてことがあるのだ。……もともとこの店がここまで人気になるとは思ってた二人の甘さもあるのだが。

「かもしれんな。いい加減少人数で仕事というのも忙し………むっ？」

千草の案もしょうがないと思ったルーカスだが、そのとき何かの気配を感じ取り、その気配のするほうに顔を向ける。

「どないしたんルーはん。……侵入者かいな？」

「…………いや、なんでもない。おそらく気のせいだろう」

ルーカスの行動に『裏』のことかと勘ぐった千草だが、ルーカスは気配が微弱なことからそこらの獣かもしれないとし、思い違いだろうと考える。

それに一言「そうですか」と言ってから、千草は在庫の数を細かく確認しながらどのくらいの量の和菓子が作れるかと思考する。その横でルーカスは先ほどの気配に関して考えていた。

（気配からある程度いるのはわかったが、正確な数がわからなかったからどうともいえないな。侵入者なら麻帆良の魔法関係者、特にエヴァンジェリン師匠がさっさと気づくはずだが……）

ふむつと、あごに手を持っていつて撫でながら考える。

（あの気配、どこかで感じたような……………）

そして彼はまた気配のしたほうへと視線を移す。店内にいたので壁しか見えないのだが。

——その視線のずっとさきには、図書館島があった。

side ユーリ

「「「「 ア、ア、アアッ！！！！」」」」

俺たちの周りを包囲している化け物たちが一斉に吼える。その異様な光景にまき絵ちゃんや夕映ちゃん、木乃香ちゃんといった子たちは身を震わせておびえる。オレやネギ、楓やくゝふえ、それにアスナちゃんも震えながら3人を庇うように構える。さらにゴーレム（学園長）も一緒にいる。

（だけど……、それにしても、これってどういうことだよ？）

目の前の化け物、『幻魔』にオレは困惑するしていた。何故ならこいつらはオレが前世でやっていたゲームの『鬼武者』というシリーズに登場する敵であり、本来この世界にいるはずのない存在なのだ。もちろん、姿形は一緒にの妖怪とかならまだ納得いくが、先ほどのゴーレム（学園長操作）の発言から妖怪と違う存在らしい。そうなるこちらは本当に……。

いや、それはありえない！！いくら転生者イレギュラーがいる世界で、オレや正治が『鬼武者』の力を授かったからといっても、こんなことがあり得るのか！？いくらなんでもそんなふざけたことがあるとは思えない。思いたくもない！！

……いや待て、落ち着けオレ。あつてほしくない現実が現れたからって取り乱すんじゃない。今はそれよりも優先することがあるだろう。

「ネギ、長瀬、くゝふえ。滝の裏に外へつながるエレベーターがあ

るから、みんなを連れて脱出しろ」

とにかく、ここにいるこいつらを逃がさないと。目の前にいる幻魔は刀足軽というオレの知ってる限りじゃ大して強くはないはずだが、囲まれている上に百近い数がいるとなると、今は何故か襲ってこないからいいけど、戦闘になったら全員を守りつつ敵を全滅させるなんて難しい。なら滝の裏にある非常口までなんとか行かせて、それから足軽が入り口に入らないように死守をすればなんとかなるはず……だと思う。

「で、でも兄さん！まだ正治さんと刹那さんが！？」

えっ？……そっぴゃあいつらどこにいやがるんだ！？なんで木乃香ちゃんやんの護衛2人がこんな時にいないんだよ！？あのバカはなにしているんだよ！？

「それなら心配無用！！」

すると正治の声が聞こえたと思うと、足軽の大群を飛び越えて正治と刹那が現れて俺の両隣に着地してきた。その手にはそれぞれ打刀・明智拵と野太刀の夕凧を構えている。ついでに服とかも持ってきている。

「お前ら、一体なにしてたんだよ！？こんな一大事に！？」

「そりゃ悪かったな！……で、なんているはずのないこいつらがここにいるんだよ！？」

オレの叫びに刀を正眼に構えながらも答え、また幻魔について訪ねて来る正治。心なしかその顔は焦りの表情が見えている。やっぱ

り幻魔がいることに驚きを感じてるからだろう。

「オレが知ってるわけないだろう！それに今はそんなこと言ってる場合じゃないぞ？」

「……同感だな。刹那！悪いんだが木乃香たちの護衛を頼む！俺はこいつらの足止めしておく！！」

「承知！！」

正治が刹那に指示をし、それに答えて刹那ちゃんも両手で夕風構え切っ先を上にして手首を顔の横に並べて臨戦態勢に入る。

「ネギ、これを使い！」

「えっ？これって……？」

その間にオレはネギに腰に挿していたものを渡す。

「えっ？えっ？それって銃！？なんでそんなの先生持ってるの！？」

まき絵ちゃんがあり得ないって顔でオレが渡したものを見る。オレが渡したのは見た目こそ自動拳銃。しかしその実態は魔法弾を撃ち出す魔法道具である。マジック・アイテムこのときのネギは魔法を封印しているからもしもの時に持ってきていたけど、まさか使うことになるとは思わなかったよ。

「使い方は分かるな。威力は『矢』の半分程度で弾数50発と火力不足だが、護身用には十分なはずだ。なんとかしろよ」

「……うん！わかったよ兄さん！」

ほかの連中が「や？」とか「50発ってそんなにあるわけ」とか言ってるが、ネギはすぐさま理解して魔法銃の安全装置をはずして足軽たちに銃口を向ける。

とりあえず、これで態勢は整ったといっているかな。あとは非常口までの道を確保するだけだな。

「正治と刹那！滝までの道を作れ！！」

「おうっ！！」

オレの言葉に答えた2人は、気を高めて滝の方向にいる足軽たちに向かっていく。それにあわせるかのように今まで襲ってこなかった足軽たちも声を上げて刀を上振り上げた状態でこっちに向かってくる。オレは山河慟哭を正眼に構えて奴らと対峙する。

「なんでお前らがいるかはこの際無視してやるから……、さっさとくたばれ！！」

一足飛びで足軽たちに接近し、山河慟哭を横に振るう。巨大な大太刀が数対の足軽の体を切り裂くと奴らの体が砂のように消え去った。それに少しばかり驚いているとほかの足軽が刀を振り下ろしてきたが、その動きは緩慢で後ろに下がることで容易に回避できた。やっぱりこいつらは大して強くないのか。

「『百花繚乱！！』」

後ろでは正治と刹那が神鳴流の奥義を使って足軽たちを吹き飛ばして滝までの道を確保していた。『裏』の秘匿はとつい考えてしま

ったが、この状況で秘匿もくそもないか。

その出来た道をみんなが走り抜けていく。途中で足軽たちが襲い掛かってくるも神鳴流剣士2人に加えて、ネギが銃を、楓が分身を使いクナイを投げて奴らを足止めし、くゝふえが拳法を駆使して投げ飛ばしたりと善戦しているので今のところ被害はない。………でも逃げる最中に服を着るな！お前ら緊張感ないだろ！

愚痴りたいこともあるが今はどうでもよく、オレも【瞬動】を使ってみんなの近くに移動し、山河慟哭をふるって奴らが近づけないようにする。その間にも奴らはどんどんこちらに押し寄せてくるが。

『ぬうつうつー！』

ゴーレムがタックルをかまして多数の足軽をボーリングのように倒していく。足軽たちはゴーレムに果敢立ち向かっていくがゴーレムの豪腕に薙ぎ払われ、たとえ近づけて刀を振るったとしても石造ゆえの頑丈な体に傷をつけることが出来ずに攻めあぐねていた。

だが、敵をそれなりに倒しているにも関わらず、足軽たちの数が減っている様子がない。むしろどんどん増えているようにも思える。……増援が近くにいるのか？とにかく急がないと。

「あつ、あれが出口！？」

そうして足軽たちをなんとか退けつつようやく非常口までたどり着いた。周りに幻魔がないのありがたい。

「入ったら螺旋階段があつて一番上にエレベーターがあるから、それで外に出られるからさっさと行け！！」

「あんたはどうするのよ！？」

「ユーリは俺と一緒に入り口の死守だ。お前らには刹那と一緒にいくから安心しろ」

説明をして脱出を促すと、アスナちゃんが心配してなのかオレがどうするかを聞いてきて、それに正治が答える。まあこれが妥当なところかな。

「死守って、あんなにたくさんいるのに危ないわよ！？2人ともバカはやめなさい！！」

オレたちのやろうとしてることが無謀に思えたんだろう。目を吊り上げて怒鳴り始める。そうやって他人を心配するのはいいことだけど、今回は事態が事態なんだよ。

「あのねアスナちゃん。あの程度オレたちには大したことはないし、そもそも『こっち』はこのぐらいあっても不思議じゃないんだよ？それにあいつらが後ろから迫ってくるなんて嫌でしょ？」

こいつらの存在やこの数は少々アレだけど、『裏』は命の危険ぐらい当たり前。それはいいとしても、こちらとしても一応自分の生徒を死なせるわけにはいかんのだしな。

「そういうわけだから、さっさと行ってくれと嬉しいな。……でことで正治、てめえも気張れよ」

「ハッ。言われなくてもやってやるよ。刹那も木乃香たちのことを頼むな」

「分かりました。……死なないでくださいね」

「当たり前だよ。そうそう死んでたまるか」

そういつて正治は皆にサムズアップをする。オレも皆に笑顔で手を振る。それを見てネギが決心した顔で皆を引っ張っていく。……アスナちゃんかなにやら悔しそうな顔をしてたけど、大丈夫かな。

全員が入り口に入って進んでいくのを確認してから、左手に浄化剣を取り出してだらつと切っ先を地面に向ける。隣では正治が左手に鬼の箒手を装備し、明智拵から雷斬刀へと持ち替えていた。

「さてと、本当ならお前と共闘つてのはあんまりんだけど、状況が状況だから文句言っなよ？」

「分かってる。ここで喧嘩するほど俺はバカじゃない。ちょっと嫌いな奴でも必要とあらば共闘するのは普通だろ？」

さすがにそこら辺のことは分かってるか。まあ師事されてるのがルーカスさんてことを考えるとこのぐらいいは言うか。そう考えている間にも、入り口にはどんどん足軽たちが集まってきている。俺たちに近づくことなく様子見をしながら左右に動く。

……しかし、本当はこういう状況でこういうことと思ってしまふのもなんだけど、ちょっと楽しいと思ってるオレがいる。なにせ幻魔と思わしき化け物を対峙する『鬼武者』の力を授かったオレたち……。まるで鬼武者のキャラになったみたいで楽しいんだよね。不謹慎かもしれないけど、せっかくだから、思う存分やらせてもらいますか……!!

「それじゃまあ、いっちょリアル鬼武者でもしてやるか……!!」

「遊びでやってんじゃないぞ！バ力は休み休み言え……!!」

「おお嬉しい!!」

軽口を叩いてから、大太刀を地面に引き摺るようにしながら足輕たちへと向かっていった。

side 刹那

兄さまたちが入り口を死守するために残ったあと、私たちは言われたとおりに螺旋階段を駆け上がったっていつてるのだが……。

「『下の図のXの値を示せ』!？」

「『used to』の意味を答えよ』ですか……」

「『足利義満と足利義政が建てた寺院は?』ってこの2人誰!？」

何故か途中に問題の書いた壁があり、それを解かねば先に進めない仕組みになっているのです。問題の難易度自体は中学生レベルなのですが、いかんせん数が多いので非常に面倒です。出来ることから叩き切ってやりたいですが、今更とはいえ『裏』の秘匿の関係で目立つのは……。

「ちょっと刹那さんも参加してよ!!!早く脱出しないとユーリや正

治さんに迷惑がかかるわよ!？」

アスナさんにそう言われてハツとし、急いで私も問題に参加する。確かにこんなことで足を止めるのは下で入り口を守ってくれている二人に悪いですね。上を見上げるとまだまだ先は長そうですが、とにかく急がないと。

「なあせつちゃん」

そこへ木乃香お嬢様が緊張した面持ちでこちらに声をかけてきた。

「どうしましたお嬢様？」

「セイ兄ちゃん、大丈夫なんかな？あんな怖そうなお化けがいつばいおったのに……」

……そうか。お嬢様は『裏』のことは知らないんだった。さつきまでのことで忘れていた。兄さまがあの手の化け物を相手にしてきたことさえ知らないのだ。ここはお嬢様を不安がらせてはいけいけな。

「大丈夫ですよお嬢様。兄さまはお強いですから、あの程度敵にもなりません。心配せずとも無事に帰ってきてくれますよ」

精一杯の笑顔を向けてお嬢様に笑いかける。まだ不安そうな顔をするも、それでも幾分か緊張が解けたのか顔に笑顔が戻ってコクツと頷いてくれた。良かった……。

「なら、兄ちゃんを信用せなな。……ところで、こんなときになんやけどもうひとつ聞いてもええ？」

「？　なんででしょうか？」

「ちよつと目が赤いけど、それどないしたん？」

ああ、そのことでしたか。あの時は恥ずかしながら兄さまに抱きついて大泣きしてしまつたんですね。……いろいろな言つてしまいましたが、言つた後はどこかがスッキリしたな。ひよつとすると言い合つたことで心の中にあつた鬱憤が晴れたのかもしれないね。そのせいでまた兄さまに迷惑をかけてしまいました……。あのようなことを言われた以上は私もちゃんと兄さまに歩み寄りないといけませんね。

さて、お嬢様にはなんと言いましようか。さすがにこのことを言うのはいろんな意味でまずいですから。

「これはですね、ちよつと勉強のしすぎで充血しただけですよ。気にしないでください」

「……………あんまし勉強しとらんかつたのに？」

グツ！それを言わないでくださいお嬢様！

「そついやセイ兄ちゃんと一緒に現れたけど、兄ちゃんとなんかあつたん？　いつんまのに兄ちゃんのことあんまし避けとらんし」

な、なんでそういうことは鋭いんですか？

「…あ。ひよつとして、兄ちゃんに泣かされたん？　もしくは押し倒されたん？」

「そんなことはありません！ちょっと私が兄さまに泣きついてしまっ
…………ハッ！？」

失言をしたと思ったときにはすでに遅く、この場にいる全員が動きを止めて、ある者は顔を赤めて、ある者はおもちゃを見つけたかのような顔をして私を見ていた。

「そっか」。私たちが大変な目にあってる時にそういうことがあったんだ」

「青春アルな」

「刹那が泣くとは珍しい。ぜひ見たかったでござる」

「み、皆さん！？」

つい声を荒げると、皆して「分かってる分かってる」といった微笑ましい表情をしてくる。

あれっ？なんでこんなことに？おかしい、何かがおかしい！？

私は、何を間違えたんだ！？

キュピーン！

「ハッ！脱出してる奴らが緊張感もへったくれもないことをしてる！！」

「お前もバカ言ってるんじゃないか！！」

「うるせいトウモロコシ！！」

「髪の毛が金色っただけでそれはないだろうが、この若白髪！！」

「貴様あ！！それは俺のような体質のヤツと白髪頭の人を侮辱してるんだぞ！今すぐ謝罪しやがれ！！」

『2人ともどうでもよいから戦ってくれんかのう！？』

つとそうだった！ついつい変な電波を受信してそれでユーリと喧嘩してる場合じゃなかった！！

ゴーレム（学園長操作）に言われて雷斬刀に気を込めて【戦術殻・雷】を密集している足軽たちに放つ。雷が周囲に響き渡り、雷光が足軽たちを飲み込んで消滅させる。

「でえええい！！」

ユーリは二振りの大太刀を勢いよく振るい、時に独楽のように回転しながら足軽を切り裂いていく。近づく足軽たちも次々と大太刀の餌食となっていき消滅していく。そこにさらにゴーレムが体当たりやパンチを繰り出していく。質量の違いから防御しても防げずに足軽たちは碎け散っていく。……碎けるときに血は飛び散るけどすぐに消えるのはちょっと不思議だな。

「これで……、終わり!!」

そうやって敵を駆逐していき、最後の一体を切り伏せる。目に見える範囲では幻魔は見当たらないがどこかに隠れているかもしれないので警戒を解かず周囲を見渡し、入り口に陣取る。しばらくじつと構えるが、どうやら本当になくなったのか一向に現れる気配はない。俺も一応気配探知を試みるがやはりいないみたいだ。

「…………ハア……。つつかれた〜」

敵がいなくなったことが分かってか、ユーリはドサツと地面に座り込んで深く息をついた。俺も息を整えて雷斬刀をしまつて地面に座りこんだ。

「ったく、あいつらただけいるんだよ。最初百ぐらいだと思ったのに、三百いただろ？」

「確かにな」

最初は俺も百ぐらいと思っていたが、意外と数をそろえていたらしく全滅させるのにそこそこの時間がかかった。もしこれが足軽なんて下級の雑魚じゃなくて中級クラスの幻魔だったらと思うとゾッとする。

「……それで、これは一体どういうことですか学園長。あれもあなたが用意したもので？」

そういつて訝しい目をしてゴーレムこと学園長に話しかける（実際はどこかで操作してるだろうけど）。そもそも図書館島の魔法の

本についてはこいつがネギ少年の課題のために仕組んだことだ。まさかと思っていたけど、幻魔を用意したのも…………。

『い、いやいや。それはないからの。わしとてあれは想定外じゃよ』

しかし学園長^{ゴレム}は手と首を横に振って否定する。…………まあそうだとは思ってたけど。

「でも、アレはなんなんですか学園長？ここにそう簡単に侵入されるなんてあり得るんですか？」

『それは無いはずなんじゃがな。図書館島には悪魔や妖怪の類を退ける結界を張っておるからあのようなものに侵入されるはずはないのじゃが…………』

ふうむ…………。それだとしたらどうやって侵入したんだ？不審者が麻帆良に侵入すれば結界が反応するはずだし、あいつらが自力でここまでこれると思えないし…………。そもそも幻魔がいること自体がおかしいことなんだが。これが歴史の歪みってやつなのか…………？

『ともかく、今回の件はわしらの方でも調査せねばな。……………最悪、わし学園長じゃなくなるかも』

「むしろやめたほうが平和が訪れるかも」

『ふおっ！？正治くんやそのようなむごいことは言わんでくれるか！？』

いや事実だから。麻帆良で起こる最初の厄介事はだいたいあんたのせいだからな、ぬらりひょんよ。

「……あのさ、いいかげんオレたち帰っていいですか？あいつらのことが心配なんで」

『……………う、うむそうじゃな。本当にすまなんだな2人とも』

ユーリの一言で俺はそういえばそうだなと思い出して立ち上がり、最後に学園長に文句を言ってから入り口のほうへと歩き出した。

「正治。今回のこと、どう思う？」

螺旋階段を上がる最中、ユーリが真剣な顔で声をかけてきた。

「幻魔のことか？」

「それ以外になにがあるよ？」

それもそうだな。そうだな……………。

「これから確実に俺たちの知らないことが起こる可能性が高くなっただってことだな」

「……………そうかい。そりゃくそつたれなことだ」

心底うんざりといった表情で頭を抱えて悩みだすユーリ。だがそれは俺も同じだ。

俺は少ないとはいえ、前世でこの世界の歴史を漫画という形で知っている。だからこそ魔法の本やクラス解散の噂の元が学園長の仕事というのも分かっていた。

しかし、この世界には俺やユーリといった転生者のせいで本来と違う歴史に変わっている。たとえばネギ少年が素の身体能力が高かったり、木乃香と刹那が仲良かったり（実際漫画を思い出すと2人は今の時期は一緒に行動していないしな）といったぐあいだ。

そうして俺たちの知っている歴史と違うことが起こっているのに、幻魔という俺たちと同等のイレギュラーの出現。もはや俺たちの知ってる歴史なんてあてにならないと考えたほうがいいのかもしれないと思わせる。

「……………これじゃあ修正なんてしないほうが……………」

……………修正？

「なんの話だ？」

「……………てめえに話すことなんざねえよ」

なんだか変なことをを言っていたのでたずねて見たが、答える義理はないと鼻を鳴らして言って、口を閉ざす。……………なんか企んでたりしたのか？やっぱり油断しないほうがいいかもしれない……………。

そういえば幻魔のことだけど、足軽兵って確か幻魔以外の生物（主に人間とか）を素体にして造られた『造魔』ってやつだったような……………。となると造魔を造り出す技術があるってことか？そうだとしたらこれからも厄介な造魔を造られる羽目になるんじゃない……………。

「雲行きが怪しいな……………」

これからの混沌とした未来を思い、少し鬱になるかもと落ち込みながら、階段を上っていく。

side ???

……さすがにあの程度じゃ無理か。まあそれもそうよね。相手が相手だもの、あんな雑魚で勝てるなんてあり得ないもの。

まあ、おかげやあいつらの実力はわかったんだけどね。もうちょっと強いと思ってたけど、あれなら強めの幻魔を数匹送ればなんともなるわね。

でも、あれって本当に『転生者』なのかしらね。にしては弱すぎじゃない？もうちょつと無茶苦茶な能力引っさげてきてると思ったけど。『あの男』と比べると本当に弱っちそうね。……いや、あれと比べちゃいけないか。あれはもはや規格外だもの。

まあいいかしら。さてと、それじゃあ誰かにばれるまえに退散でしますか。そろそろ結界が壊されたのを知られそうだし。

「それじゃあね『転生者』のお2人さん。今度会うときは……、殺してあげるから」

黒一色の剣の切っ先を白髪しろがみの男と金髪きんがみの男に向けて、聞こえるはずのない挨拶あいさつをしてから私はその場から立ち去った。

第18話、テストへ向けて 図書館島騒動 ？（後書き）

幻魔との戦闘。予想よりも短くなっちゃった……。まあ彼らはこれからのための存在だからどうでもいいんですけどね！！（ひどいですか？）

途中の刹那サイドの緊張感のなさですが、漫画も重要な場面でも気の抜けた場面があるのでそれをまねてみました！……まねる必要あったかなと今さら後悔したりする。

そして最後の謎キャラさん。この人は本作品の敵側主要キャラになる予定です。

ここからは多少のネタバレ含んでいます。

具体的に言えば無表情な彼と仮面の下イケメンなあいつと組んでいる。こいつの正体は修学旅行のさいに明かされます。そして幻魔の存在理由も……？

では。

第19話 騒動の後 動き始める者 (前書き)

今回のお話で原作の図書館島のことは終わりです。ちょっと終わりがたがアレですけど。

短く簡単に書いてみたつもりです。ではどうぞ。

第19話　騒動の後　動き始める者

麻帆良女子中学にある学園長室に3人の男がいた。学園長の近衛近右衛門、高畑・T・タカミチ、ルーカス・クランケットは今回起こった図書館島の件について話し合っていた。

「……図書館島に侵入を許した上に、危うく一般生徒を危険に晒すとは、さすがだなじいさん」

「ルーカス殿、そう言わんでくれるかの。こちらとて予想外じゃったんじゃから」

ルーカスの嫌味に苦々しく顔をしかめる学園長。事実、学園長が勝手な行動をとったために一般人が命の危険にあっていたのでそういわれてもしかたないのだが。

「しかしですね学園長。もしあの時ユーリ君や正治君、刹那君がいなければどうなっていたか……。とにかく今後は勝手な行動は控えてください」

そこへタカミチも苦言を申してくるので、学園長は黙るしかなかったてしまう。

「ま、とりあえず今回はいいとして。その侵入してきた化け物というのはどういったものだ？」

「おおそうじゃった。あれはわしも見たことがなかったからの、魔法世界におったルーカス殿やタカミチ君ならひよっと思っとな。魔法先生の会議の前に正体が分かればいいんじゃないが……」

そういつて近くにあったパソコンを操作し、魔法を使って作り出した映像記録から地底図書室での出来事を映し出す。地面からあふれ出す敵やそれと対峙する正治たちと映像が移り変わっていき、最後の敵を倒したところで映像は止まった。

「どうじゃろうか。わしは妖怪か何かの類が変異したものと考えておるのじゃが……、どうした二人とも？」

何か分かったことがないだろうかと訊ねようとした学園長だが、そのルーカスとタカミチは驚きで顔色を変えていた。

「ルーカスさん。こいつらは、まさか……………」

「似たものだと思いたいが……。もしこれが本物なら……………」

どうやらこの敵に心当たりがあるのか、真剣な表情で映像の敵をにらみつけていた。

「二人とも、この化け物を知っておるのか？」

「……ええ、よく知ってるよ。なにせ……………」

そこで少し間をおいてから、ルーカスは言葉を続ける。

「秘密結社『コスモエンテレケイア完全なる世界』の幹部が使役していた化け物なのだからな」

side ユーリ

図書館島より脱出した次の日の期末テスト当日。バカレンジャー + α は徹夜で勉強をし、その結果寝坊したために遅刻してしまったが無事にテストを受けれた。その間に新田先生に聞いたが、遅刻組は学校に迷惑をかけたことでそれ相応のお叱りを受けることになるらしい。……オレのせいですまない皆。

あと、図書館島での幻魔襲撃に関してだが、魔法関係者以外はテストが終わったあとに呼び出してオレ自身の手で幻魔に関しての記憶は消させてもらった。記憶をいじくるのに抵抗があったけど、さすがにアレは覚えてもらうのは困るからな。まあそういうことで彼女たちは記憶の中では『魔法の本を探して図書館島に行き、そこでゴーレムに会ったり地底図書室に落ちてそこで勉強して最後に図書館関係者に助け出された』ということになっている。ただアスナちゃんにはやっぱりというべきか効かなかったのが痛かったかな。変な影響でなきやいいけど。

そういえば、図書館島に張ってあったはずの結界の一部が破壊されていたらしい。おそらくそこから幻魔を侵入させたんだろうな。……でも麻帆良に侵入してなおかつ結界を破壊って、どんな手練だ

よ……。

そんなこんなでテストは終わって成績発表の日となり、オレとネギ、2 - Aの生徒全員が発表の場に集まってるのだが……。

『なんとなんと第1位は最下位でお馴染みだったはずの2年A組！平均点81・0点！！まさかの大穴だああ！！』

1位になっちゃった……あれっ、でもこいつで確か学園長が遅刻組の採点をしてそれが遅れて最初2 - Aは最下位つてことに……いや、今回の図書館島のことを考えるとそんな暇はないか。

「うつそ〜！！！？これって本当なの！？」

「や、やりましたよ皆さん！僕たち1位ですって！！」

信じられないといった顔でなんども画面を見直すアスナちゃんと2 - Aのメンバーと、その横でおおはしゃぎするネギ。

「じゃあこれでネギ君は私たちの担任続けれるんだね！？」

「そうアルね！よかたネ、ネギ坊主！」

「ハイ！ありがとうございます皆さん！！」

「よし、そんじゃネギ先生を胴上げだ〜!!」

「『『『』 おおおお!!!!』』』」

1位になったからかそれともネギが正式に先生になれることからなのか、テンションがあがりっぱなしの2-Aの生徒たちはネギを胴上げ始めた。オレとしては人がたくさんいるので迷惑だと思うんだが、周りの生徒は特に気にせず、むしろその健闘を称えていた。さすがは麻帆良の生徒ってことかな。

《いいな〜。私も一緒に騒ぎたいな〜》

オレの隣でふよふよ浮いていたさよちゃんが指を口にくわえて羨ましそうに2-Aの生徒たちを眺める。

「ごめんねさよちゃん。せめて修学旅行までには依り代間に合わせるから」

なんだか可愛そうなので小声でそう言うとさよちゃんは《本当ですか!? キヤアア!》と悲鳴を上げながら空を勢いよく飛ぶ。実際ロリーロリ子ちゃんが渋々ながらも協力してくれているおかげでさよちゃんの体に似せた依り代が半分ほど出来上がっている。この調子なら修学旅行には間に合うだろうとロリ子ちゃんも言っていたので、多分大丈夫だろう。

問題として体が拒絶反応を起こさないかとか、依り代に魂を入れた瞬間に記憶の欠落が起きないかとかあるのだが、そこら辺は運任せになるのでどうしようもない。とにかく急いで完成させるだけだな。……そういえばまだ『裏』のこと話してなかったな。今度ロリ子ちゃんの所へ連れてって説明したほうがいいかな。

……ただ、これ以外にも考えなきゃいけないことがあるんだけどな。

幻魔について、どうしてアレがこの世界に存在しているのかが分からないとせつかくの『原作知識』が形無しになっちゃうからな。

一応、この世界が『鬼武者』の世界観と繋がっているとか、『転生者』の存在による影響とかあれこれと考察してみたけど、どれも怪しくて分からないんだよな。第一、幻魔があれだけとは思えない中級の幻魔や、最悪高等幻魔と呼ばれる強力な奴らも敵として現れるかもしれない。

考えても嫌になるな……。出来ることなら二度とオレたちの前に現れないでほしいよ。

「ユーリ先生！そんなところで突っ立ってないで一緒にネギ君胴上げしようよ！」

つと、なんだか御呼ばれしちゃったな。……まあうだうだ悩んでみようがない。今は楽しんでおくか。

「おお今行く！！」

余談だがバカレンジャーと刹那ちゃんの平均点は、アスナちゃん73点、まき絵ちゃん65点、くーふえちゃん68点、楓ちゃん61点、夕映ちゃん64点、刹那ちゃん70点だった。

「訓練の時間を増やす、ですか？」

「そうだ」

パンタシアで仕事の休憩中に、ルーカスさんにそんなことを言われた。

「お前が戦った化け物があるだろ。アレが少々厄介な存在なんだよ。ルーカスさん、俺が幻魔と戦ったの知ってるのか。というより、その言い方だと幻魔のことを知ってるんだろうか？」

「アレがなんなのか、知ってるんですか？」

もしものことを考えて幻魔という名前を伏せながら、聞いてみる。

「ワタシの間違いでなければ、アレは『コスモエンテレケイア完全なる世界』に所属していた幹部が使役したいた『幻魔』と呼ばれる化け物のはずだ」

「ナツ……！？」

なんだよそれ！？確か『コスモエンテレケイア完全なる世界』って話に聞いた限りじゃ、20年前の魔法世界の大戦を裏で操ってたとかっていうんだかたんでもない組織だろ！？その幹部が幻魔を使役してたって……！てかあいつらやっぱり幻魔って呼ぶのかよ！？

「ワタシとしても考えたくないが、今回のことは『完全なる世界』
がこの麻帆良に介入してきたということになる。だから麻帆良の警
備を強化しなければならなくなった。そこでお前も訓練の時間を増
やしてより強くなってもらおうと思う」

「確かにそれなりに必要かもしれないけど、俺だって学校のことと
があるからどこまで時間が取れるか……」

「そのあたりはちゃんとカバーをしておく。そういうわけだから頼
むな」

……これはしょうがないのかもしれないな。相手が大物である以
上、かなり強力な存在が攻めてくる可能性だって十分にあるんだか
ら。となると今以上のレベルアップはしておいたほうがいいな。今
の俺でどこまで戦えるか不安だしな。

「分かった。そういうことならよろしく頼む。あと、刹那も一緒に
訓練したいと思うんだけど、いいですか？」

どうせなら刹那と一緒にやってもいいな。一人より二人のほうが
はかどるだろうし。

「別にかまわんが……、刹那と仲直りできたのか？」

「とりあえずはそうだと信じたいな。……そういうわけだから、刹
那に説明していてもいいかな？」

「……ま、いいだろう。その代わり千草にはちゃんと話をつけてお
け」

「了解です」

そんじゃま、刹那に電話でもしますか。

side ルーカス

……ふむ、いつの間にあいつら仲直りしていたとはな。図書館島のことは文句を言いたくなることが多いが、そこだけはじいさんに感謝するべきだな。

しかし幻魔が出てきたとなると……、おそらく『あいつ』が今回のことを引き起こしたんだろうな。となると『あいつ』の目的はやはり……。

「そんなことはさせんがな。とにかく、正治の強さをあげねばな」

少なくとも今の1・5倍は強くしたいな。でなければ『人形』どころか高等幻魔などと呼ばれていた存在にも殺される可能性は高い。……ついでだからユーリの奴も鍛えてやるか。『あいつ』の目的にはユーリも標的にされるだろうしな。

さて、そうと決まれば訓練場所だが……、困ったときの師匠マスター頼

みでいいか。ちょうどよくダイオラマ魔法球を持っていたはずだ。
うん、我ながらよいアイディアだ。ハッハッハ。

side ???

……うん、今度送る幻魔は『量産オズリック』と『マーセラス』
、どっちがいいかしら。いや、あえて『ブレインスタン』もいいか
もしれないわね。蜂の巣になる『転生者』のカスども……ああ、最
高じゃない。

でも『ブレインスタン』は破損するといちいち修復の手間が、『
オズリック』は食費が掛かるから……、『マーセラス』かしらね。
でもこいつはまだまだ調整中だし、ならいつそ一体ずつ差し向ける
のもありかしら？ 悩むわね〜。

まあ『転生者』がぶつ殺せればそれでいいか。……さうで、それ
じゃあさっさと完成させようかしら。私のかわいい息子たち♪

第19話 騒動の後 動き始める者 (後書き)

これから幻魔がちらほら攻めてきます。場所や時間帯はいろいろです。

そして本来なら図書館島の次はエヴァ編ですが、はっきり言います。

ネギとエヴァ戦いません。これはずっと前から決めてました。原因はもちろんユースリってことで。

そうなるとアスナの仮契約がなくなるなんてことになりますが、そこからへんも大体は考えてますので。

ではまた。

第20話　訓練と息抜き　不安の影（前書き）

これを見ている皆さん、お久しぶりです。

3ヶ月近く経ってやっとの更新です。

書かなかった理由は一応学校が忙しかったからですが、それなりに書ける時間も十分にあったことを考えると、作者の不手際のせいです。

こんな小説でも楽しみにしている方々へ、深くお詫び申し上げます。

……さて、そういうわけで久々に書いたのですが、かなり変な展開になっていますが、そこは原作と違うということで（オイッ）。

それでは、どうぞ。

第20話　訓練と息抜き　不安の影

「……………やっぱりうまくいかないわね」

天井にある一つの巨大な電球に照らされパソコンや紙に埋め尽くされた部屋で、色という色が何一つついていない透明なセミロングの髪にモデル顔負けのプロポーションに、黒色のノースリーブのセーターと同じく黒のロングスカートをはいた女性が椅子に座ってパソコンの画面を睨みつけていた。

「まったく、そりや高等幻魔を創る材料がへボいからとはいえ、もうちょっとマシなものが創れないかしら」

やれやれとため息をついて腰をひねり始めると、部屋の扉が開いて身体をすっぽりと覆ったローブに顔を仮面で隠した人物が入ってくるのが見えた。

見た目からするとかなり怪しいのだが、女性は「あら」と言って椅子を回して入ってきた人物に目をやる。

「デユナミスじゃないの。あんたがここに来るとは珍しいわね」

「ああ。少しお前に用事かな」

名前を呼ばれた存在、デユナミスは椅子を一つ引き寄せて、向かい合うように座る。

「単刀直入に言う。何故、麻帆良に幻魔を送った？」

「……………フェイトの奴ね、告げ口したの。黙ってねって言ったのに」

言われた内容に女性は苦々しい顔をして、おそらく自分のしたことを喋ったであろう無愛想な『人形』を頭の中で罵る。それを見ているデユナミスは（外からは仮面で見えないが）顔をしかめてため息をつく。

「なぜあのような軽率な行為を犯した？我らの行動や計画に支障を来たすことをするのはあれほどやめろと――」

「ハイハイすみません。ただね、現在麻帆良にあのナギの息子がいるって話でしょ？だからちよっと調べてみたかっただけよ」

「……それが本当の理由とは思えないが、勝手な行動は控えてもらいたいな」

「分かってるわよ。信じられないなら今ここで抱かれてやっても良いわよ？」

――まあ、どっちも嘘だけど。

心の中でそう呟きながら、からかうように体を強調させる。

「バカを言う時間があるならもつと別のことに使え。……では失礼する」

女性の冗談にまったく動じず、席を立ってまっすぐ扉のほうへ歩いていく。女性は面白くなさそうな顔をするが、まじめな表情になって再びパソコンと向き合う。が、何か思いついたのまた振り返って退室しようとするデユナミス呼び止める。

「そつえばさ、あの『人形』ってまだ数があつたわよね」

「……？ 半分ほどしか完成していないものを含めて5つほどあるが、それがどうした？」

「それはちょうど良いわ。あれを素体に使えばかなり出来のいいのが造れるわね。……フフッ。フフッ」

無邪気な笑みを浮かべながら女性の笑いが部屋に木霊する。

side 正治

月日というのは早いものである。あの図書館島での幻魔の事件から1ヶ月と少しが経った。あの事件の影響で麻帆良の結界の探知能力をより強力なものへと変えたり、警備の時間の増加のために忙しくなったりといろいろとあった。

そんな中でも時間というのは進んでいき、進学やら新社会人とか、とにかく出会いとか始まりの季節ともいえる4月へと変わった。

刹那な木乃香たちは中学3年となり、ネギ少年やユーリの奴は引き続き彼らの担任副担任として一緒に学校生活をする。千草さんはアルバイトを雇ったための呼び込みのチラシを呼び出した式神たちとともに作っている。（なんでか全部毛筆で書いてる。陰陽師だから？）

俺は麻帆良のある男子高校へと進学して、クラスメイトと会話を
して友人関係を作って、そして今現在――。

「【斬岩剣！】【斬鉄閃！！】【百烈桜花ズワアアン！！！】」

「甘い」

季節は春だつてのになぜか夏を思わせる砂浜でルーカスさんに神
鳴流の奥義を叩き込んでいます。鬼武者化して気を全力全開にしな
がら。しかしルーカスさんは涼しい顔で手にしたナイフでこっちの
攻撃を全部受け流してく。

「【プラクテ ビギ・ナル 氷の精霊30頭 魔法の射手 連弾・
氷の30矢】」

後ろに下がって距離を置いたルーカスさんが高速で魔法詠唱をす
ると、魔力が籠められているのか一つ一つが1m近い大きさのツラ
ラのような氷柱がこっちに向かって放たれる。それをなんとか回避
し避けなければ鬼の箒手で吸収しながらルーカスさんへと向かっ
ていく。

相手の攻撃をすべて無力化したと同時に【瞬動】でこちらの間合
いに入って、鬼武者真剣に先ほど吸収した分の魔力を籠めて逆袈裟
を放つも、わずかに体をそらすことで難なく回避される。

しかしこの程度よけられるのはわかっていたので、動きを止めず
に【瞬動】を発動して体当たりをかますように突撃する。無茶な方
法であるが、容易に攻撃を当てられないルーカスさん相手にはこのぐ
らいしなければ一撃入れるかわからないからだ。

右肩を前に突き出し、全体重を乗せてルーカスさんの胸めがけて

突撃――。

「カウンターだぞ、と」

しようとするも、どこか軽いノリの言葉を吐きながら顔面に正拳を食らわされ、その勢いによるものなのかその場で一回転してから背中を地面に強く打ち付けてしまう。

「それは手としては言いえないが、生憎ワタシには通じんよ」

倒れた俺を見下ろしながらそう言うルーカスさん。1メートルあるかないかの距離からの【瞬動】による攻撃に普通に対処できるのかアリアかよ？正直へこたれるんだが、まだあきらめるのはごめんだよ――！！

「【決戦奥義！ 真・雷光剣――！】」

「ムッ？」

ありつただけの『気』を籠めた剣を倒れた体勢のまま地面に振るい、強大な威力の雷が綺麗な砂浜を広範囲にわたって破壊していく。その技を放った俺はそれに巻き込まれてしまい服や体のあちこちを焼かれるも、再生能力によってすぐさまヤケドや傷は元通りになっていく。

俺の能力ならばそうそう死ぬことはないはずと思ってやってみた零距离からの攻撃だけど……、どうなった？攻撃による砂煙でルーカスさんの様子がよく見えない。というかさっきの攻撃の時に気を使いすぎたからか体がとてもダルイ。せめて傷のひとつでもあつてほしい。

そう願いながらダルイ体をなんとか立たせながら、煙が晴れるの

を待っていると、煙の中から風が吹いてきた。それが煙を吹き飛ばすと、そこからは傷ひとつなく余裕綽々とした態度でたっているルーカスさんがいた。

「……まったく、いくら能力の恩恵があるとはいえ、あまり無茶をするな」

「無傷でいわれると妙に腹が立つな」

「あの程度で倒れるほどやわではないからな」

こっちの必死の攻撃をあの程度呼ばわりですかい。

「まあそう睨むな。とりあえずいったん休憩にして、しばらくしてから訓練再開だ」

「了解です」

戦闘の影響で倦怠感の漂う体をなんとか立ち上がらせて、歩き出したルーカスさんの後についていく。歩く先には馬鹿でかい円筒状の塔のようなものが聳え立っている。

その塔の壁についている階段を先ほどの戦闘の反省点なんかを話しつつ上っていき、一番上の中央に頂点がピラミッド型をした柱（エジプトのオベリスクのような物）がある広場にたどりつく。奥のほうにはちょっとしたテラスも見える。

「何度も思うけど、ここがあのミニチュアとは思えないな」

「魔法道具のなかでもそれなりの品物だからな。ワタシだって最初は驚いたさ」

それもそうかと思いこの場所、ダイオラ魔法球（またの名を別荘）に感心する。エヴァンジェリンさんのうちにあった魔法道具で、ルーカスさんが修行のために使用許可を得たらしい。

最初見たときはボトルシップのようなのに瓶詰めされた建物のミニチュアかと思って近づいたら、いつの間にかその中にいた上、中で一日過ごしても外では一時間しか経たないと言われたときは、魔法なんでもありかよって思ったよ。まあおかげで修行ははかどってるんだけど。

ちなみにどこか無理やりな都合主義なきもしない仲直りを果たした刹那ともここで一緒に修行をしている。まあ今日は用事でないが。というわけかたまにユーリの奴も顔を出しやがるけど。

——ドドドドド……。

んっ？この音は……。

音のしたほうを振り向くと怒りの表情を浮かべた別荘の持ち主のエヴァンジェリンさん（麻帆良の制服に白衣と眼鏡着用）が土もないのに土煙（？）を巻き上げながらこっちに向かつて猛ダッシュしてきた。その後ろではメイド服姿の茶々丸さんがゆっくりと歩いてきている。

「また派手にやったなルーカス……！！！」

「ぬっ！？マスター少し落ち着けバブツ！？」

なにやら言おうとしていたルーカスさんを無視し、某仮面のヒーローを髣髴とさせるとび蹴りをルーカスさんの顔面めがけて食らわせる。その一撃を見事に貰ったルーカスさんは少しばかり宙を舞った後えびぞりの状態で地面を滑っていき倒れ付す。

「まったく！貴様はもう少し静かにできんのか！研究に集中できんし、別荘の修理も面倒なんだぞ！？」

「あゝ、さっきの振動のことなら、俺のせいだと思うんですけど」

「弟子の責任は師匠の責任だ。………という理不尽な建前のもとに研究で溜まるストレスを発散しているから気にするな」

「いやだめでしょソレ？と言ったらたぶん睨んでくるので黙っておく。」

「で、研究って言いますけど、いつたいなにやってるんですか？教えてくれないんですか？」

実はちよつと気になっている。修行のためこの別荘を使わせてもらつうようになってから、エヴァンジェリンさんがこの別荘で何かしらの実験みたいなのをしているは分かつたんだが、内容まで教えてくれない。何度聞いても「別に関係ないだろう」と言うだけだ。

まあでも、こつちとしても、白衣とか眼鏡とかして科学者っぽい格好するエヴァンジェリンさんが、大人の真似する子供みたいで可愛らしいものがあるので別段問題ないからいいけどね。

「何度も言うがお前は知らんでもいい。どうしても気になるんなら不死者の他愛ない暇つぶしとでも思っている」

そういわれるとむしろ知りたくなるんだけどなあ。

「マスターそんなに恥ずかしがらなくても「そういうわけじゃない！」「——でも正治さんもあんまりしつこく聞くのは失礼ですよ」

さらに後ろで静かに控えていた茶々丸さんもエヴァンジェリンさんの言うことを肯定する。

うっっん、これは黙らなきゃいけないことなのかそれとも本当にいうほどのものでもないのか……。

「仮にマスターが永遠のムチムチボインでアダルティな大人の女性になるための秘薬を作っていたらどうするのですか？」

・・・。

・・・。。

・・・。。。。。。はいつ？

「茶々丸、もつとましな例えはないのか？あとその言葉はなんだ？」

「？以前に超さんが使っておりましたから言ってみたのですが」

ムチムチボインでアダルティなエヴァンジェリンサン・・・・・・・・・・・・・？

「超は何がしたいんだ……。頼むから二度と使うな。これはマスターとして命令——」

「——あなたは、あなたはなに考えてるんですか！？」

「…………貴様も貴様でなんだ？人の喋っている途中で叫ぶな」

「なんだとはなんだ！！あなたは自分がなにしようとしているかわ

かつてるんですか！？まさかエヴァンジェリンさんが、そんな馬鹿げたことを考えていたなんて！俺はあなたに失望した！！」

俺のそ知らぬところでそのようなことを計画していたなんて、父ちゃん悲しいぞ！

「ちよつと待て。まさかと思うが茶々丸の言ったことを信じているわけじゃ」

「そもそもエヴァンジェリンさんからロリをとつたら存在価値がなくなるでしょうが！！多分皆が大好きなのは、永遠のロリ体系で弄りがいがあつて600歳（笑）なのに子供なエヴァンジェリンさんなんだよ！普通に大人な魅力に溢れたエヴァンジェリンさんなんてエヴァンジェリンさんじゃない！！そんなのただのアダルトなエロ要因だよ！！（18禁ツス）や（自主規制ヨン）な目に合わされるだけの存在だよ！！そんなのつてひどすぎるよ！？」

そうだと思いません！？ 少なくとも俺はそう思う！！

「ひどいのは貴様の頭の中身のほうだ！！どうして大人な体についてだけでそこまでケチつけられるのだ！？そんなんだから周りからロリコンのレッテル貼られるんだぞ！？」

失敬な！俺はただ自分の意見を述べただけだったのにロリコンとはあんまりだぞ！ついでに言うと俺は小さな女の子は愛でても性的な目では見ないぞ、多分！

「マスターよ、正治の言うことは正しい」

「！ ルーカスさん！？」

いつの間にか再起動していたルーカスさんが、頭から血を流しながらも俺の肩に手をおきながら小さく微笑む。

「確かにコイツは少々言いすぎなところがあります。……しかし、事実マスターはロリコンな体系であるからこそ輝いているのです。麻帆良の『裏』でも知る人ぞ知る非公式ファンクラブ【エヴァちゃんを愛でよう会】がその証拠とも言えよう」

「「ファンクラブ!?!」」

いつの間にそのようなものが!?

「ああ。ほれ証拠だ」

そういつてポケットから一枚のカードを見せる。ふちが金色な黒色のカードで赤文字で【エヴァちゃんを愛でよう会】と書かれた下に『会員NO.67 ルーカス・克蘭ケット』と名前があり、右下のあたりにデフォルメされた猫耳エヴァさんが描かれている。

「い、いつの間にこんなものが……」

「マスターが来て数年後らしい。幼女趣味ロリコンという素敵ゴ趣味を持った人々によって創設されたのだ」

「どこらへんが素敵なんだ!?!」

「なんだか面白そうだったからつい入会してしまった。そのときに特典でマスターの盗さ……プロマイドをもらった」

えっ、なにそれ、すごくほしい。

「欲しがるな！あと今、『盗撮』って言おうとしただろ！？」

「たまに携帯に会員による『エヴァンジェリンの日々』という題名のストーリーカー日記（写真つき）が送られてくる。ちなみに先週の内容はゲームのレアキャラを倒せて舞い上がったとか」

「ソレは私が家にいたときの様子ではないか！？完全に犯罪じゃないか！？」

「ちなみにタカミチとはある事情より会員？2だったりする」

「タカミチ！？！？」

「最近の入会すると『1/1スケールエヴァたん着せ替え人形』が手に入る」

「なんてもの作つとるんだああ！！！！」

「1/1スケールの人形……………ああ、ダッチワ——」

「それ以上言うなああ！！！！」

ええええ？

「そんな残念そうな顔をするな！？貴様もう少しまじめだと思っていたのに！？」

「いや、なぜかエヴァンジェリンさんの時はこうするべきという電

波がピピピと受信されるんです」

「受信するでない！！おいルーカス、そのファンクラブ今すぐ潰せ！！もしくは創った馬鹿者をここに連れ出せ！私自ら制裁を加えてやる！！これは師匠命令だ！！」

「悪いがそれは出来はしません。そんなことをすればアル——じやなかった、会長のクウネルさんに迷惑がかかります。……………学園長も裏で面白がってるし（ボソッ）」

「ちょっと待て。なにやら最後に聞き捨てならないものが聞こえたのだが？ あと『アル』という言葉にも思い当たる節があるのだが？」

「……………さあ正治、修行を再開しようか。どうせこれから今度は弓矢を使った訓練でも行おう」

「おい、まさかあの胡散臭い笑みのロリコン嫌味変態が麻帆良^{ここ}にいるのか！？どうなんだ！？」

「……………ああっ、正治すまんが自主トレでもやっていてくれ。ワタシはしばらく走ってくる」

「あ、おいコラ逃げるな答える師匠の命令を聞かんか——！！」

なにやら問い詰めるエヴァンジェリンさんから逃げるためか、赤い服のヒゲの配管工（あの人の場合むしろ竜騎士か？）も脱帽する見事なジャンプをして塔から飛び降りる。それを追うような形でエヴァンジェリンさんも飛び降りる。塔は結構な高さがあるのだが、あの二人なら大丈夫だろう。

しかし、エヴァンジェリンさんはやっぱりいい人だ。こっちがボケたらちゃんとツツコミを入れてくれるんだから。やはりあの人は一目見たときからああいう人だと思っていたよ。

「まあそれはいいとして……、茶々丸さんは何やっているの？」

あのやり取りに入らなかった茶々丸さんを見ると、なにやらパソコンのキーボードをすごい速さで打っている。

「これですか？マスターの観察日記ですが？」

「なんでまたそんなのを？」

「マスターの素晴らしさを知ってもらうために日記をつける。それが会員？32である私の仕事ですから」

茶々丸さん、あなたもですか。そしてあなたが日記をつけてたのね。本当は止めたほうがいいんだけど、俺一人の判断で果たして止めていいものか……。一応放置ってことでいいかな？エヴァンジェリンさん以外に実害があるわけじゃないし。

あつ、そういや今の時期って、『原作』ではエヴァンジェリンさんがネギ少年と楽しいこと（性的な意味じゃないよ？）をやる頃だっけ？まあそれだったら今頃麻帆良に吸血鬼の噂が流れているはずで、俺の耳にはそんな噂は聞こえていないから、おそらくやらないんだろうけど。

その代わりに別の事件が起きちゃいました。なんてことはあつてほしくないけど……。この前の幻魔襲撃事件を考えると警戒しないわけにはいかない。

今度の学園都市全体でのメンテナンス（麻帆良の電力を用いた結

界等の調整を行うためのものらしい、ルーカスさん情報より）の関係で、いつもより侵入しやすいから、その時を狙って何か仕掛けてくるとも考えられるからな。あっちの狙いが何かは知らないけど、要注意しなきゃ。

「まあその時はその時かな。ひとまずは……、茶々丸さん、入会の仕方教えてプリーズ」

面白そうだからファンクラブに登録だ！！

N O s i d e

「くそつ、学園長はなぜ私たちの言い分を聞いてくだらないのだ！？」

麻帆良のとある場所の一室で、魔法関係者である40代ほどの男が苛立った様子でタバコを吸っていた。

この男はエヴァンジェリンや正治と言った人ならざるモノから傭兵もの排除を訴えている過激派（当人たちはその呼び名を嫌っている）と呼ばれる存在である。

そんな彼がどうして苛立っているのは、エヴァンジェリンたちの排除を幾度も学園長に進言しているものの、大して聞き入られずにいるためである。

「吸血鬼や化け物のガキなどをこの麻帆良に放置しておくなど……。あれでも【立派な魔法使い^{マギステル・マギ}】の一員なのか!？」

今まで吸っていたタバコを灰皿に放り込み、新しいタバコを取り出して吸い始める。

「しかも最近では、私たちの言い分を支持する者が減っていくばかり……」

また、この最近では過激派の中でもエヴァンジェリン等を許容してもいいのではないかと言い始めるものが出始めたために、同じ派閥同士でも分裂が起き始めている。それが彼の苛立ちを助長させる。

「こうなれば英雄の息子であるネギ・スプリングフィールドを抱き込めば、あるいはどうにかなるかもしれないが、そうになると邪魔になるのはユーリ・スプリングフィールド……」

英雄^{ネギ}の息子を仲間にして、彼にエヴァンジェリンたちの排除を訴えさせれば、将来の英雄候補としての立場から自分たちの派閥は盛り返せる可能性は十分にある。

しかし、ユーリ・スプリングフィールドは「ネギに妙なことをさせたら殺す」と宣言している。態度からおそらく本気であろう。つまりネギをこちら側に引き込むためにはユーリをどうにかしなければならぬのだ。

だが彼にはユーリをどうにかするような権限も無ければ、後方担当の魔法使いである自分ではユーリを実力で打ち負かすこともできない。ゆえにどうしようでもできずにいるのだ。

「せめて、奴の弱みにでも付け込むことができればいいのだが、ス

プリングフィールドのプライベートの情報の多くは規制がかかっている。一体どうすれば……………」

「——なら、いいことを教えましょうか？」

「!?!? だ、誰だ!?!」

自分以外いないはずの部屋から突然聞こえてきた女の声に男はとっさに身構えてあたりを警戒する。

「そんなに慌てないでほしいわね。今姿を現すから」

少し呆れたような声が聞こえたかと思うと、男の目の前に何の前触れも無く、瞬間移動したかのように黒いローブで体を覆った人物が現れた。

黒いローブで口元以外が隠れてしまっているが、胸の辺りが出っ張るように膨らんでいるのでおそらく声の主の女だろうと男は判断した。

「き、貴様、い、一体何者だ!?! いつの間にこの部屋に侵入したんだ!?!」

男は懐から20センチほどの木の杖を取り出して、いつでも魔法を唱えられるように女に杖を向ける。だが男の体が小刻みに揺れて

いることから、男が動揺しているのがわかる。

「そんなに怯えないで。私はユーリ・スプリングフィールド、正確には彼らの母親に関する情報を持ってきたのよ。それとあの化け物たちを殺すための『力』もね」

「……………それは、本当、なのか？」

女の発した言葉に男は目を見開く。

英雄であるナギの伴侶でスプリングフィールド兄弟の母親の情報は、どういうわけか他の情報と比べても情報規制が厳しく、謎に包まれている。男も何度も調べてみたが何をどうしても調べることができないでいた情報。それをこの女は知っていると云うのだ。驚かないほうが無理だ。

だから、女の持っているという情報について興味を示してしまう。

「ええ、本当です。とびっきりの情報を……、ね？」

だから、背後で三つの目を持った化け物が自身を狙っていることに、最後まで気づけなかった。

第20話　訓練と息抜き　不安の影（後書き）

エヴァさんのファンクラブはこの後もちよくちよく出す予定です。ひよっとすると番外編でクラブ誕生秘話を書くかもしれません。ちなみに会長は皆さんご存知かと思われませんが、あの変態紳士（？）さんです。だからタカミチも無理やりいるんですよ。

そして『完全なる世界』の彼女にはひとつ事件を起こしてもらいます。ぶっちゃけエヴァさんのお話の埋め合わせですけど。

それでは、ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

番外編？～アルベール・カモミールについて～（前書き）

！番外編の注意点！

このお話は第19話から第20話のぐらいの時期のものです。

カモを出すためのお話ですので、結構無理やりです。

カモには鉄拳制裁刑務所GO！がいい、と思う人には不快かもしれませんが。

オチ担当エヴァンジェリンさん。

以上の点を踏まえて本文をお読みください。ではどうぞ。

番外編？～アルベール・カモミールについて～

「ここがネギの兄貴のいる麻帆良か……。元気にしてるかな兄貴」

麻帆良のある公園のベンチ。ひっそりとしたそこに、一匹の白いオコジヨがいた。ただし、煙草を咥えて喋っているというなんとも奇怪な光景である。

「ま、なんだ。ここであくとしていのもなんだし、早く会いに行くと思いますか」

ヨツと背伸びをする感じで体を伸ばし、どこからともなくだした山高帽をかぶって歩き出す。小動物でありながらどこか渋さが漂う光景である。

「早くネギの兄貴に会って……。無罪放免になって！ウハウハな人生を送るツスよ～～！！そっぴや兄貴のところは女の子ってたくさんいるツスカね～～？」

……。訂正。どうにも教育的に駄目そうなオコジヨであった。

本日オレは、ロンリーロリ子の住処のコテージにさよちゃんと一緒に来ていた。理由は頼んでおいたさよちゃんの依り代となる体の完成度と、さよちゃんに『裏』、つまり魔法の事に関しての勉強をするためだ。

そのはずだったのだが、今オレはロリ子ちゃんと机をはさんで睨み合っていた。ロリ子ちゃんの後ろにはメイド服の茶々丸が控え、オレの後ろではさよちゃんがオロオロしている。

「いやだからさロリ（ギロツ）、じゃなくてエヴァンジェリンさん。約束はちゃんと果たすっていったはずですけど？」

「確かに、ナギの奴が生きているかもしれないという情報は貰い、登校地獄なんて馬鹿げた呪いを解くために奴の血縁である貴様の血をいただいている。」

……が、肝心のネギのぼうやの方の血はどうなっている？ 見た目から考えても、ぼうやはナギの血を色濃く受け継いでいる。その血を吸えばおそらくは呪いも解けるはず。

だというのに、貴様はことある毎に『まだネギと話していない』とか『まだ時期じゃない』とか言っては誤魔化そうとしていないか？ それは私の奴隷として使われる、ということに違反していないかな？

正直私も暇だったから手伝ってやったのだが……、いい加減にぼうやの血を渡さなければ、依り代を破壊したうえに坊やを人前ではいえないような目に合わせるぞ？」

そう言い、目を細めてこちらを睨み付けて脅迫してくる口（ギロツ）、エヴァさん。……背中やら額からすげえ汗が出てくるからやめてほしいです。それと従属するだけで奴隷になったつもりないんですけど？

しかしまいったな……。本当はネギの血を渡す気なんてないんだけどな。というかこの約束のことさえネギは知らないし。エヴァさんなら、なんだかんだ言っで見逃してもらえらると思っってたんだけど、さすがに甘かったかな？

「あ、あのー、エヴァンジェリンさん……」

「ん？なんだ存在感の薄い幽霊よ？」

と、ここでどういうわけかさよちゃんが控えめにエヴァさんに話しかけた。しかしその言い方はあんまりだろ？ほら、さよちゃんめげちゃったじゃないの。

幽霊だから触れることはできないけど、頭を撫でる動作をして慰める。一応それで元気がでたのか、さよちゃんはおずおずとしながら言った。

「ひ、人前で言えないことって、どんなことですか？」

えっ、そこですか？自分の依り代に関してじゃないんですか？

「……どうして私の周りにいる奴らはこういうボケが好きなんだ？いいか幽霊、それは言葉の綾みたいなもので——」

「まずネギ先生を押し倒し、服を一枚一枚脱がせます。そのとき写真撮ることをお忘れなく。そこに『この写真をばら撒かれたくなかったら言うことを聞け』と脅して、危ない雰囲気のホテルに連れ去り無垢な子供の血と精力を……」

「茶々丸少し黙っていてくれないか！？お前が出てくると話がややこしくなる——」

「あ、あわわわ。エヴァンジェリンさんって大人なんですね〜」

「大人じゃなくて犯罪だよこれは！私はそんなことしないからな！？あれは全部茶々丸の妄想だからな！？よい子は真似するな！！」

……これは、オレも参加すべきところなのか？

「しなくていい！！まったく、ちよつとは真面目に話が………んっ？」

平然とオレの心を読んだエヴァさんが、苛立ちと呆れを混ぜたような顔を突如真剣な顔に変える。

「どうなさいました、マスター？」

「いやなに、どうやら侵入者だ。大した者ではなさそうだが……。おいユーリ。今日のところは見逃すが、これから契約を違うようならば、本当にぼつやを襲うからな。覚悟をしておけ」

そう言っつてフンツと鼻を鳴らして、茶々丸を連れて外へと出て行く。……オレ等がまだ残っているのに家を後にするのはどうかと思うよ？

「あ、あのユーリさん。これからどうするんですか？」

「そうだなあ、いくらエヴァさんが女子供を殺しはしないって言うても、このままじゃネギに何しでかわからないし……。とりあえずネギに事情を話しておくか」

「そうですね。でも、ネギ先生、ユーリ先生のこと嫌いにならなきゃ良いですけど………」

「…………嫌いに、か。」

「だったら、ずっと昔に愛想つかされてるだろうな」

「？ 何の話ですか？」

「いやいやなんでもない。っで、オレはネギのところに行くけど、さよちゃんはどうする？」

「あつ、私もついていきます。兄弟だからもしかするとネギ先生にも見えるかもしれませんが、それにアスナさんとも話したいです！」

「あい分かった。それじゃあ行きましょうか」

そういうわけで、ネギたちがいるであろう女子寮目指して歩いて
いたのだが……。

（……先生、あそこにいるサングラスにコートを羽織った白いイタチさんはなんなんでしょうか？）

（いや、オレに聞かれても）

商店街の通りの店の間の隙間に、妙な格好をしたイタチのような動物がいた。なにやら辺りを警戒しているようだけど、オレ等が見ていることには気づいていないらしい。ちなみにさよちゃんとの会話はさすがに普通の人のいる場所なので、小声で話している。

しかし、あのイタチもどき、どこかで見たことあるような……………？

「チクシヨウ、まさか都市部に入った瞬間に魔法使いに見つかるとは思わなかったぜ。このままじゃネギの兄貴に会おう前に捕まっちゃう……………」

（しゃ、喋った！？イタチさんが喋りましたよ先生！あれってひょっとして未確認生物ですか！？）

（幽霊なさちゃんがそれを言うか）

だけど、『ネギの兄貴』ってどういうことだ？あのイタチもどきはネギのことを知っているのか？

と思っているとイタチもどきがこっちに視線を向けた。…………あつ、固まった。

固まったイタチもどきに手を振ると、体中から滝のように汗を流し始めた。なかなか芸達者だな。

「……………う、うおおおおー！！？」

そして、人目もはばからずに叫び猛ダッシュで商店街を突き抜けていき、目の前から姿を消していった。

（な、なんだったんでしょね今の？）

（さあ。・・・でも、どっかで見たことあるんだよな、あのイタチもどき）

なんだったつけ？確かあんな感じのがいたような気がしないことも……。

・・・。

・・・。

・・・。

あつ。

（淫獣力モじゃねえか今の！？）

やっと思い出した！オコジョ妖精のアルベール・カモミールだよ！！下着ドロの！！

（い、いんじゅう……？それより、先生あのイタチさん知ってるんですか？）

（知ってるも何も、女性の下着を盗んでそれを寢床にするなんて男として羨ま、ゲフンゲフン、最低な性犯罪者だよ！？）

（……………先生、今、ヘンナコトイイマセンデシタ？）

（い、嫌だなさよさん、そんな事ありませんよ？だから艶消しの目で睨まないでプリーズ）

なんだろう、最近さよちゃんが妙に怖いんですが。先生はどこで教育間違えたんだろうか？

（それよりも！早くあの淫獣をとっ捕まえようではないか！放置すれば確実に事件を起こすに違いない！！）

先ほどの発言を誤魔化すようにそう言って、カモが走っていったであろう道をたどっていくことにした。

s i d e ネギ

麻帆良で僕のお気に入りの場所である噴水広場で、僕はある考え事をしていた。

（最近、エヴァンジェリンさんに睨まれている気がする……………）

そう、僕のクラスの生徒のエヴァンジェリンさんのことだ。

最初赴任してきた頃は品定めをするように僕を見ていたが、1ヶ月もしたら無くなったので、10歳で教師している僕に興味があっただけなんだろうなと思っていた。

けど最近また視線を感じるようになった。なんというか、苛々を募らせた視線を背中越しにビシビシと向けてくる。たまに振り向く

とプイツとそつぽを向かれてしまう。

（単に僕の思い違いかもしれないけど、それでも、何かエヴァンジェリンさんに失礼なことでもしたかな？）

そう思っで自分の授業やHRを思い返してみても、特にこれといっでないような気がすると思うんだけどなあ。

……ひよっとして、エヴァンジェリンさんの出席率が低いから、もうちよつと出てくださいねって授業中に言っただからかな？それが原因で目をつけられた？やっぱりああいうことは本人にだけ伝えるべきだったんだろうか。

（うっくん、この場合はどうしたらいいんだろう？直接本人に聞くべきなのかな？それともほかの先生に相談するべきなのかな？

……相談といえば、タカミチがエヴァンジェリンさんのところに『困ったことがあったら相談しなさい』って書いてあったけど……、そのエヴァンジェリンさんに困らされているのにはどうすればいいの？）

うんうんと頭をひねるも、簡単に答えはでそうにない。……教育って本当に難しいよ。

「……………ふう、ここまで来れば安心だぜ」

……？なんだろ、今の声？

「まさか俺っちが喋っているところを見られるとは思わなかったぜ。でも、あの兄ちゃんあんまり驚いてなかったのを見ると、ひよつと

して魔法使いだっただのか？」

キヨロキヨロと辺りを見ると、一匹のオコジヨが噴水に腰掛けて額の汗をぬぐっていた。

あれっ、でもこのオコジヨってもしかして……。

「ひょっとして、カモ君？」

僕が声をかけると、体をビクツと震わせてオコジヨはゆっくりとこつちに顔を向ける。そして僕の姿を見ると目を見開いて僕を凝視する。

「ま、まさか、ネギの兄貴ツスカ？」

うん、やつぱり、昔ウエールズで罾にかかっていたのを助けてあげた、あのカモ君だった。

「あ、兄貴……！お久しぶり——！！」

「あつ待つて。喋るのストップ。魔法の秘匿のことを考えようよ」

感極まったのか涙を流しながら飛びつこうとしたカモ君を捕まえて口を塞ぐ。僕としても久しぶりに会えたことはうれしいけど、魔法関係者じゃない人も普通に行き交う場所では喋るのはやめてほしい。

そうなるとここじゃなんだし、場所を移したほうがいいかな。……そうだ、久しぶりにあつたついでにエヴァンジェリンさんのこと、相談してみようかな？

「とにかく、場所を移して——」

「へいそのネギ！！ちょっと待った~~~~！！！！」

side ユーリ

カモを探すために商店街を抜けて走ると、噴水広場でカモを手につかんでいるネギがいたので呼び止めて近くの茂みに入り、人払いの結界を発動させてからカモを縛り上げて尋問することにした。（あと、ネギにそれとなくさよちゃんが見えるかどうか尋ねてみたが、反応の薄さからどうも見えないらしい。残念）

「いや確かに俺っちがやったことは犯罪ですぜ！？でもそれは妹のための行動であって、決してヤラシイことのために盗んだわけじゃないんツスよ！？」

「ホザケよこのエロオコジヨ！そんな言い訳が通用するとも思っているのかこの野郎！大方ネギの使い魔みたいな立場になって無罪放免になるうとも思ってたんだろう！！あと下着で寝床とか羨ましいぞデメエ！！」

「兄さん、本音が漏れてるよ」

あれっ、マジで？

（ユーリセンセイ？）

ビクウ！！なんか急に寒気が！？

「と、とにかく！理由はどうあれ、性犯罪者を野放しにはできないんだよ！わかったか！」

「そ、そんな殺生なこと言わずにどうかここに置いて下せえ！！俺っち一匹いれば、念話妨害にオコジョフラッシュ、パンツの匂いによる索敵、豊富な知識と参謀能力、さらに『バックタイオー仮契約』をいつでもできたりと、至れり尽くせりですぜ！？」

「カモ君、自分を売りたいのは分かるけど、パンツのところで台無しだよ」

「いやいやいやいやいや、ネギの兄貴！！俺っちからパンツのことを取ったらただの素晴らしいオコジョ妖精になっちゃうじゃないッスか！俺っちといえばパンツっすから！」

「自分のことを変態と言っているとおんなじだろ、それは」

「それは気にしないでくださいよ！？とにかく、どうか俺っちのこととは見逃してここに匿ってくださいえよ！故郷の妹のためにも！！」

今更故郷の妹と言われても説得力がないのだが。

……いや、でも、こいつがいれば、ネギの手助けになるかもしれない……。実際『原作』じゃなんだかんだで活躍しているし。なにかあれば囹にでも使えばいいか……。

「…………二度と下着ドロなんてやらない。魔法の秘匿について逸脱した行動をしない。ってことを守れるなら、どうにかするが」

「！？ ほ、本当ですかあ！？」

「ああ。まあ、お前がやった罪に関してはとやかく言われるだろうが、それは甘んじて受け入れるよ」

「おお！あ、ありがとうございやす旦那！！」

なんだかキラキラとした目でオレを見ながら土下座をするカモ。正直オレの身勝手が入っているからそういう目で見られるときつい。まあ、変態行動させ起こさなきゃ、こいつはちよつと意地汚いオコジヨ程度なんだし、ネギ辺りにでも監視させときゃなんとかなるか？

「じゃっ、そういうわけだから、ちよつくら学園長のところにもいきますか」

……まあそういうわけで、オコジヨ妖精アルベール・カモミールを学園長のところに連れて行った。

それからは、学園長がいろいろと小言をいったり、ウェールズとの協議の結果罰金刑100万円になったり（カモがムンクになっていたのが印象的だった）、ネギのところで住まうことになったり（

アスナちゃんにはカモのことは教えておいた)して、カモはネギの使い魔として認められた。

ただし、下着ドロとかその手のことをすると電流が流れる素敵な魔法の首輪つきだ。「オコジヨ虐待だ〜〜!!」と叫んでいたが、自業自得だろとしかいいようがない。

……………そういえば、なんだか忘れてる気がするんだよね……………。
なんだっけか？

「ぼっや〜〜!! 貴様の血は何色だああ!!……!!」

「ギャアアアア!!…!!エヴァエヴァヴァ、エヴァンジェリンさんやめてええええ!!……!!」

「ああ、マスターったらあんなに楽しそうに……」

……………あつ。

番外編？～アルベール・カモミールについて～（後書き）

原作読み返して、カモがいることでおきた問題は多いが、それでもネギパーティ参謀（？）として結構がんばってね？と思って書いたお話です

まあ本音は『バックティオー仮契約』を手軽にするための要因がほしかっただけだったりして。テヘ。

さすがに無罪放免はあれだったので罰金刑ってことで罰を与えてみました。オコジョにとって10万で大金といっていることから考えると100万の罰金はかなりの痛手でしょう。

ただ、ギャグで困ったらエヴァさん頼みな気がしてきたので、そろそろそれを脱却したいです……。

あと、ユーリがどんどん変態キャラになっていつてるような……。そうでないと思……わなくてもいいか。

このような番外編を読んでくださり、ありがとうございます。ではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4884t/>

ネギま～鬼の力を持って～

2011年11月17日18時24分発行